福岡市埋蔵文化財調査報告書第424集

入部（いるべ） V

1995

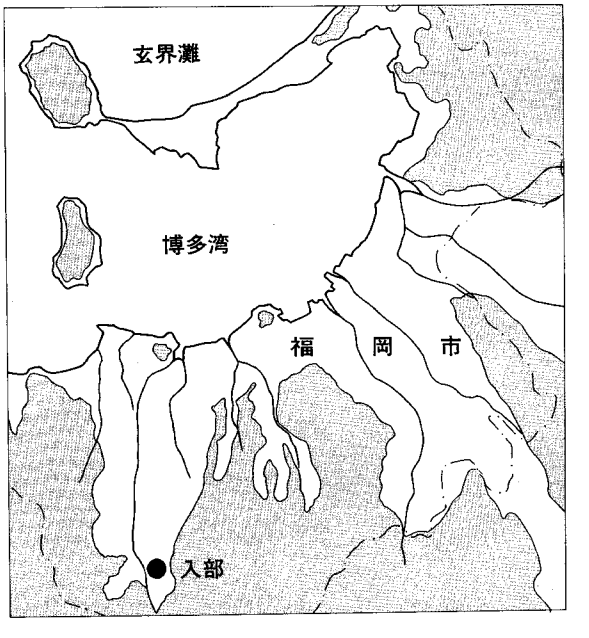
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化調査報告書　第424集

IRU　　BE

入　部　V

1992年度調査概要
1993年度調査概要
清末遺跡群第3次調査報告



1995

福岡市教育委員会

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して広がる福岡市には、豊かな自然と先人によって育まれてきた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現代に生きる我々の重要な務めです。しかし近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。

本書は昭和62年度から実施されてきた早良区入部地区の県営圃場整備事業に伴う発掘調査のうち、平成４、５年度の調査概要と平成３年度の清末遺跡群第３次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対しまして、心からの謝意を表します。

平成７年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　尾　花　　剛

例　　言

1　本書は、福岡市教育委員会が福岡市早良区東入部地内で県営圃場整備に伴い実施した発掘調査のうち、1992年度調査概要、1993年度調査概要、および清末遺跡群第３次調査の成果を報告するものである。

1　東入部での県営圃場整備に伴う発掘調査の報告としては以下の４冊が刊行されている。本書はこれを引き継ぎ、５冊目にあたることから書名を『入部Ｖ』とした。この入部という地名は遺跡名を示すものではない。

『入部Ｉ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集　1990
『入部II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集　1991
『入部III』福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集　1992
『入部IV』福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集　1993

1　清末遺跡群の現場実測は濱石哲也、長家伸、林田憲三、英豪之、黒田和生が行い、他に作業員の方々の協力を得た。現場写真は濱石、長家が撮影した。空中・航空写真は有限会社空中写真企画(檀睦夫）による。

1　清末遺跡群出土遺物の実測は縄文時代の石器を池崎譲二、他を濱石、英、黒田が行った。遺物写真は濱石が撮影した。

1　清末遺跡群第３次調査に関する遺構・遺物の表記については19頁の４－２の末尾に記した。

1　本書に関わる製図には濱石、池崎、英、野村智栄があたった。

1　本書の作成には他に緒方まきよ、亀井律子、占野典子、樋口久子、芳野貴子が関わった。

1　本書に用いた方位は磁北である。

1　本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

1　本書の作成作業の一部は国庫補助を受けて行った。また作成事業は埋蔵文化財課（課長　折尾学、第１係長　横山邦継、第２係長　山崎純男、庶務　内野保基）が担当した。

1　本書の執筆は「４－３縄文時代の遺構と遺物」のうち石器の項を池崎、他はすべて濱石が行った。

1　本書の編集は濱石が行った。

本文目次

1　はじめに……9
2　1992年度の調査概要……13
2－1　調査組織……13
2－2　調査経過……13
3　1993年度の調査概要……15
3－1　調査組織……15
3－2　調査経過……15
4　清末遺跡群第3次調査報告……17
4－1　遺跡の立地と歴史的環境……17
4－2　調査の経過と概要……18
4－3　縄文時代の遺構と遺物……21
4－3－1　埋甕……21
4－3－2　包含層（8・9トレンチ）……22
4－3－3　その他の出土遺物……37
4－4　古墳時代の遺構と遺物……45
4－4－1　竪穴住居……45
4－4－2　土坑……64
4－4－3　溝……66
4－4－4　その他の出土遺物……71
4－5　中世の遺構と遺物……73
4－5－1　掘立柱建物……73
4－5－2　井戸……80
4－5－3　土坑……83
4－5－4　溝……91
4－5－5　環濠……95
4－5－6　祭祀ピット……100
4－5－7　ピット出土遺物……102
4－5－8　その他の出土遺物……104
4－6　近世以降の遺構……105
4－7　清末遺跡群第3次調査まとめ……110

図版目次

図版１　１　入部圃場整備事業地と早良平野（南上空から）
　　２　東入部遺跡群第７次調査48区弥生時代集落（上空から）
図版２　１　東入部遺跡群第３次調査42区古墳時代集落（上空から）
　　２　東入部遺跡群第７次調査45区古墳時代・中世集落（南上空から）
図版３　１　清末遺跡群第３次調査　全景（北から）
　　２　清末遺跡群第３次調査　全景（南から）
図版４　１　清末遺跡群第３次調査　北地区（北から）
　　２　清末遺跡群第３次調査　東北地区（西から）
図版５　１　清末遺跡群第３次調査　西北地区（東から）
　　２　清末遺跡群第３次調査　中央地区（東南から）
図版６　１　清末遺跡群第３次調査　南地区（北東から）
　　２　清末遺跡群第３次調査　東南地区（北から）
図版７　１　清末遺跡群第３次調査　0018埋甕（西から）
　　２　清末遺跡群第３次調査　８トレンチ遺物出土状況（北から）
図版８　１　清末遺跡群第３次調査　0001竪穴住居（西から）
　　２　清末遺跡群第３次調査　0002竪穴住居（北から）
図版９　１　清末遺跡群第３次調査　0003竪穴住居（西から）
　　２　清末遺跡群第３次調査　0067竪穴住居（西から）
図版10　１　清末遺跡群第３次調査　0068竪穴住居（北から）
　　２　清末遺跡群第３次調査　0069・0070竪穴住居（西北から）
図版11　１　清末遺跡群第３次調査　0071竪穴住居遺物出土状況（西から）
　　２　清末遺跡群第３次調査　0071竪穴住居（北から）
図版12　１　清末遺跡群第３次調査　0072竪穴住居（南から）
　　２　清末遺跡群第３次調査　0054溝土層断面（北から）
図版13　１　清末遺跡群第３次調査　0101溝土層断面（南から）
　　２　清末遺跡群第３次調査　0102溝土層断面（南から）
図版14　１　清末遺跡群第３次調査　0103溝土層断面（南から）
　　２　清末遺跡群第３次調査　0104溝土層断面（南から）
図版15　１　清末遺跡群第３次調査　0004掘立柱建物（北から）
　　２　清末遺跡群第３次調査　0005掘立柱建物（南から）
図版16　１　清末遺跡群第３次調査　0026掘立柱建物（北から）
　　２　清末遺跡群第３次調査　0025掘立柱建物（北から）
図版17　１　清末遺跡群第３次調査　0073掘立柱建物（北から）
　　２　清末遺跡群第３次調査　0108掘立柱建物（北から）
図版18　１　清末遺跡群第３次調査　0110掘立柱建物（北から）
　　２　清末遺跡群第３次調査　0007井戸（西から）
図版19　１　清末遺跡群第３次調査　0017井戸（南から）

2　清末遺跡群第３次調査　0041井戸（東から）
図版20　1　清末遺跡群第３次調査　0062土坑（南から）
2　清末遺跡群第３次調査　0008土坑（西から）
図版21　1　清末遺跡群第３次調査　0011土坑（西から）
2　清末遺跡群第３次調査　0014・0015・0016土坑（南から）
図版22　1　清末遺跡群第３次調査　0022土坑（西から）
2　清末遺跡群第３次調査　0043・0044・0045土坑（北から）
図版23　1　清末遺跡群第３次調査　0065・0066土坑（南から）
2　清末遺跡群第３次調査　0074土坑（南から）
図版24　1　清末遺跡群第３次調査　0050環濠（南から）
2　清末遺跡群第３次調査　0050環濠５トレンチ土層断面（東から）
図版25　1　清末遺跡群第３次調査　0047祭祀ピット（南から）
2　清末遺跡群第３次調査　0049祭祀ピット（西から）
図版26　1　清末遺跡群第３次調査　中央地区江戸時代遺構（北から）
2　清末遺跡群第３次調査　0019・0020溝南辺（西から）
図版27　1　清末遺跡群第３次調査　0019・0020・0089土層断面（北から）
2　清末遺跡群第３次調査　0024土層断面（東から）
図版28　清末遺跡群第３次調査　出土遺物１
図版29　清末遺跡群第３次調査　出土遺物２
図版30　清末遺跡群第３次調査　出土遺物３
図版31　清末遺跡群第３次調査　出土遺物４
図版32　清末遺跡群第３次調査　出土遺物５
図版33　清末遺跡群第３次調査　出土遺物６
図版34　清末遺跡群第３次調査　出土遺物７
図版35　清末遺跡群第３次調査　出土遺物８
図版36　清末遺跡群第３次調査　出土遺物９
図版37　清末遺跡群第３次調査　出土遺物10
図版38　清末遺跡群第３次調査　出土遺物11

挿図目次

1図　入部圃場整備事業地の位置と早良平野の遺跡……11
2図　入部圃場整備年次別事業地と周辺の遺跡群……12
3図　東入部遺跡群および清末遺跡群3次調査地点……(折込)
4図　清末遺跡群調査地点……17
5図　縄文時代遺構配置略図……20
6図　埋甕遺構実測図……21
7図　埋甕実測図……22
8図　8・9トレンチ配置図および8トレンチ北壁土層断面図……23
9図　8トレンチ出土土器実測図1……24
10図　8トレンチ出土土器実測図2……26
11図　8トレンチ出土土器実測図3……27
12図　8トレンチ出土土器実測図4……28
13図　8トレンチ出土土器実測図5……29
14図　8トレンチ出土土器実測図6……30
15図　8トレンチ出土土器実測図7……31
16図　8トレンチ出土土器実測図8……32
17図　9トレンチ出土土器実測図……33
18図　8トレンチ出土石器実測図1……34
19図　8トレンチ出土石器実測図2……36
20図　その他の出土土器実測図1……38
21図　その他の出土土器実測図2……39
22図　その他の出土土器実測図3……40
23図　その他の出土石器実測図1……41
24図　その他の出土石器実測図2……42
25図　古墳時代遺構配置略図……44
26図　0001・0002竪穴住居実測図……45
27図　0001・0002竪穴住居出土遺物実測図……46
28図　0003竪穴住居実測図……48
29図　0003竪穴住居出土遺物実測図1……49
30図　0003竪穴住居出土遺物実測図2……50
31図　0067・0068・0072竪穴住居実測図……53
32図　0067竪穴住居出土遺物実測図……54
33図　0068・0069竪穴住居出土遺物実測図……55
34図　0069・0070・0071竪穴住居実測図……57
35図　0071竪穴住居出土遺物実測図1……58
36図　0071竪穴住居出土遺物実測図2……59
37図　0071竪穴住居出土遺物実測図3……60

38図　0071竪穴住居出土遺物実測図４……61
39図　0071竪穴住居出土遺物実測図５……62
40図　0071竪穴住居出土遺物実測図６……63
41図　0119・0137・0138・0139・0141・0142・0143・0145土坑実測図……65
42図　0009・0101・0102・0103・0104溝土層断面実測図……67
43図　0054・0057・0058・0135・0136・0140溝土層断面実測図……68
44図　0137土坑、0009・0057・0140溝出土遺物実測図……70
45図　その他の出土遺物実測図……71
46図　中世遺構配置略図……72
47図　0004・0005・0147掘立柱建物実測図……74
48図　0025・0026・0027・0085掘立柱建物実測図……75
49図　0073・0108・0109掘立柱建物実測図……77
50図　0110・0148掘立柱建物実測図……78
51図　0004・0005・0026・0027・0073・0085・0108・0109掘立柱建物出土遺物実測図……79
52図　0007・0017・0041井戸実測図……81
53図　0007・0041井戸出土遺物実測図……82
54図　0062・0144・0146土坑実測図……84
55図　0008・0011・0013・0014・0015・0016・0022・0023・0033・0036・0037・0040・0118土坑実測図……85
56図　0043・0044・0045・0046・0065・0066・0074・0088・0091・0097・0098・0125・0126土坑実測図……88
57図　0008・0023・0033・0036・0037・0040・0043・0044・0062・0065・0066・0126土坑出土遺物実測図
……89
58図　0012・0051・0053・0056・0059・0060・0061溝土層断面実測図……92
59図　0051・0076溝出土遺物実測図……93
60図　0050環濠トレンチ配置図……96
61図　0050環濠トレンチ土層断面実測図および環濠全体図……97
62図　0050環濠および１・４・７トレンチ出土遺物実測図……99
63図　0047・0049祭祀ピット実測図……100
64図　0047・0048・0049祭祀ピット出土遺物実測図……100
65図　0157・0347・0380・0381・0387・0391・0393・0404・0405・0406・0411・0433・0480・0561
ピット出土遺物実測図……101
66図　その他の出土遺物実測図……103
67図　江戸時代遺構配置略図……105
68図　0006・0010・0019・0020溝、0089・0116土坑土層断面実測図……106
69図　0024・0089土坑実測図……107

表目次

1表　入部地区圃場整備事業地内発掘調査年度別一覧……9
2表　東入部遺跡群調査一覧……10
3表　清末遺跡群第3次調査遺構一覧1 ……114
4表　清末遺跡群第3次調査遺構一覧2 ……115
5表　清末遺跡群第3次調査遺構一覧3 ……116
6表　清末遺跡群第3次調査遺構一覧4 ……117
7表　清末遺跡群第3次調査遺構一覧5 ……118
8表　清末遺跡群第3次調査遺構一覧6 ……119
9表　清末遺跡群第3次調査遺構一覧7 ……120

付　図

清末遺跡群第3次調査遺構配置図

1　はじめに

福岡市の西南部に広がる早良平野は、東の福岡平野と西の糸島平野と山塊・丘陵をもって隔てられ、その中央には背振山地に源を発する室見川が北流して博多湾にそそぐ。この地域はもとの早良郡に属し、奈良時代には文献にその名が見られる。明治時代以降部分的に福岡市に編入されはじめ、1975年には郡全体が福岡市となった。これと前後する頃から、宅地造成をはじめとする大規模な開発がこの地域で進行し始めた。福岡藩士で、儒者、博物学者、教育者として全国に名を成した貝原益軒（1630～1714年）が「北に海ありて、三方に高山あり。広平の地に、村里多く、水田多し。中に早良川流るゝ故に、山林河海そなはりて、薪材ともしからず。魚、塩多し。河水多けれ共、滞なくして、水旱の患稀也」（『筑前国続風土記』1703年）と記した早良郡は、以後20年間の都市化の波に押され急激にその姿を変えてきた。

この益軒の文は「されとも平田は肥饒ならすして、種植豊ならす」と続く。住み良い環境の割には、田畑の収穫は豊富でなかったことが知られる。この文から約300年後の1985年（昭和60年）、福岡市早良区大字重留および東入部一帯の県営圃場整備事業計画が、福岡県農林事務所などから福岡市教育委員会埋蔵文化財課（当時文化課）に示された。それは約100ヘクタールの耕地を対象に、1987年度から８ヶ年にわたって圃場整備を行うという大規模な事業計画であった。

埋蔵文化財課で事業計画地内の遺跡を確認したところ、重留、四箇船石、四箇古川、四箇東、清末、岩本、安通、東入部の８遺跡群と拝塚古墳があることが明らかになった（『福岡市文化財分布地図（西部１）』福岡市教育委員会、1979年）。しかもこれらの遺跡群は、旧河川部分を除き事業地のほぼ全域に密着するような状態で分布していた。その時点で発掘調査を行っていたのは、四箇東遺跡群と清末遺跡群のほんの一部にしかすぎず、遺跡群の全域が事業地内に含まれる重留、岩本、東入部遺跡群の内容については分布調査の資料以外まったく情報がなかった。

そこで埋蔵文化財課は1986年３月に事業地内の遺跡群と拝塚古墳を試掘調査し、その性格・範囲などの把握を試みた。試掘調査の結果、各遺跡群では溝、柱穴などを、また拝塚古墳では周溝と葺石を検出した。出土遺物からすると、弥生時代と中世を主体としたかなり密度の濃い遺跡群が、事業地のほぼ全域に広がっていることが改めて確認された。

埋蔵文化財課ではこの試掘調査の結果などをもとに事業者と協議をもち、翌年度から工事が遺構に及ぶ箇所について発掘調査で対応することとした。実際の発掘調査は1988年１月に開始し、以後今年度まで８ヶ年にわたって調査を継続してしてきた（１表）。

次数	調査年度	事業面積	調査対象面積	本調査期間	調査対象遺跡群
1	1987(昭和62)	5.0ha	12,500m²	1988.1.6～1988.3.31	四箇東
2	1988(〃 63)	15.2ha	15,000m²	1988.6.21～1989.4.7	重留・拝塚古墳
3	1989(平成1)	15.9ha	16,200m²	1989.8.1～1990.3.26	重留(2次)・岩本・四箇船石
4	1990(〃 2)	15.2ha	22,294m²	1990.7.18～1991.3.8	清末(2次)・岩本(2次)・四箇船石(2次)・東入部・四箇古川
5	1991(〃 3)	21.7ha	34,381m²	1991.5.13～1992.3.5	清末(3次)・東入部(2次)・安通
6	1992(〃 4)	14.0ha	13,832m²	1992.5.20～1993.1.31	東入部(3次)
7	1993(〃 5)	6.0ha	17,000m²	1993.5.1～1994.2.28	東入部(7次)
8	1994(〃 6)	1.3ha	4,997m²	1994.7.7～1994.11.25	東入部(10次)

１表　入部地区圃場整備事業地内発掘調査年度別一覧

発掘調査は事業面積が多くなった1988年度以降、次の手順を踏んで行っている。まずその年度の事業地全域の試掘調査を行い、遺跡の範囲、性格、遺構面までの深度などを確認する。本来ならば前年度に試掘調査を行い、調査対象地を確定することが望ましいのであるが、事業地一帯は裏作でキャベツ栽培を行なっており試掘が無理な状態であった。この試掘結果に基き、遺跡範囲内の新設の構造物（用水路・排水路・道路）についてはすべて本調査、削りが遺構面に達する田面、あるいは表土（耕作土）直下が即遺構面となる田面については基本的に本調査を行うこととした。ただし田面に関しては事業者と田面高の見直しなど設計変更をはかり、調査対象面積を最小にする方針をとってきた。これは広大な面積の圃場整備事業に対し、埋蔵文化財側の体制、調査期間、費用などの点からすべてに対応することが困難であるからである。この調整を待たず、発掘調査は構造物部分から開始し、その後調整のできない田面の調査に移った。そのような処置をとっても、年度末近くまで工事と競合しながら発掘調査をする状況が続いた。

なお調整、および調査を円滑に行うため、事業者と設計や工事方法の変更についての協議事項を取り決めている。この協議事項についてはこれまでの報告(『入部II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集、1991年）で詳述されているのでここでは割愛する。

また圃場整備を機として、この地区で主に道路建設に伴う発掘調査が増加する傾向にある。1994年度予定される分まで含め、本書で触れる東入部遺跡群についてその調査一覧を２表に示しておく。

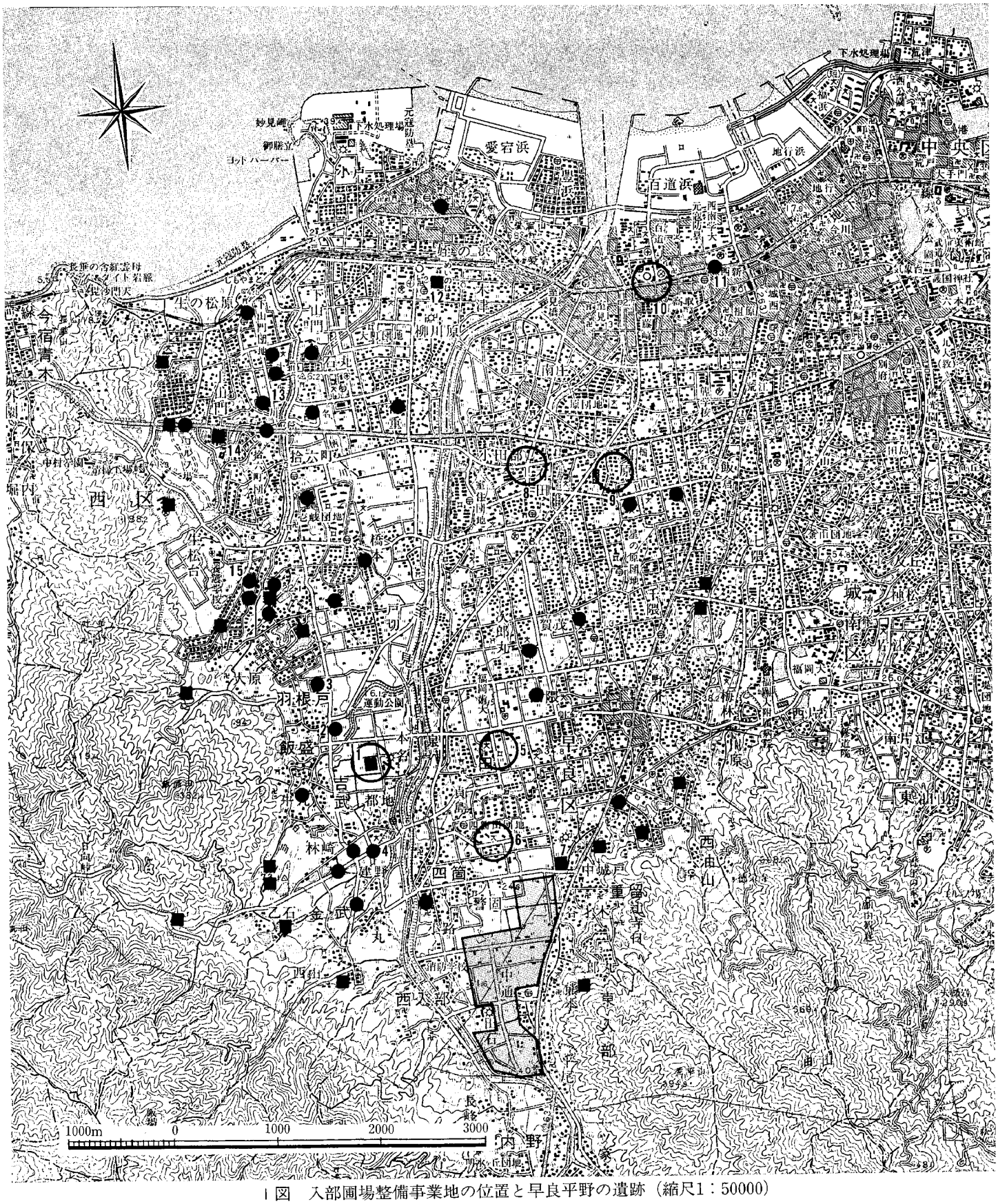
本書では、1992年度・1993年度の発掘調査概要と、1991年度に調査した清末遺跡群３次調査についての本報告を行う。

これまで圃場整備地内の発掘調査を無事継続できたのは、いつも調査に従事していただいている多くの作業員の方々のご協力と、県農林事務所、市農業土木課、鍋山弥三理事長をはじめとする改良区の方々のご指導のたまものである。心から感謝したい。

次数	調査番号	調査面積	期間	遺跡略号	調査地点	調査原因	報告
1次	9074	5,453m²	(1990.7.18～1991.3.8)	HGI-1	東入部1943他	圃場整備	
2次	9165	16,271m²	(1991.5.13～1992.3.5)	HGI-2	東入部1378他	〃	
3次	9216	13,832m²	1992.5.20～1993.1.31	HGI-3	東入部1274他	〃	
4次	9208	1,319m²	1992.5.6～1992.8.10	HGI-4	東入部329-18他	公民館建設等	381集1994*
5次	9226	351m²	1992.7.21～1992.8.20	HGI-5	東入部329-1他	下水道工事等	382集1994**
6次	9227	380m²	1992.8.9～1992.9.4	HGI-6	東入部390-7他	道路拡幅	383集1994***
7次	9312	17,000m²	1993.5.1～1994.2.28	HGI-7	東入部1172他	圃場整備	
8次	9348	175m²	1993.11.9～1993.11.26	HGI-8	東入部329-21他	道路拡幅	
9次	9418	145m²	1994.5.25～1994.6.28	HGI-9	東入部336-2他	〃	
10次	9427	5,003m²	1994.7.7～1994.11.25	HGI-10	東入部1098-2他	圃場整備	

＊　『東入部遺跡群１』福岡市埋蔵文化財調査報告書第381集 1994
＊＊　『東入部遺跡群２』福岡市埋蔵文化財調査報告書第382集 1994
＊＊＊　『東入部遺跡群３』福岡市埋蔵文化財調査報告書第383集 1994

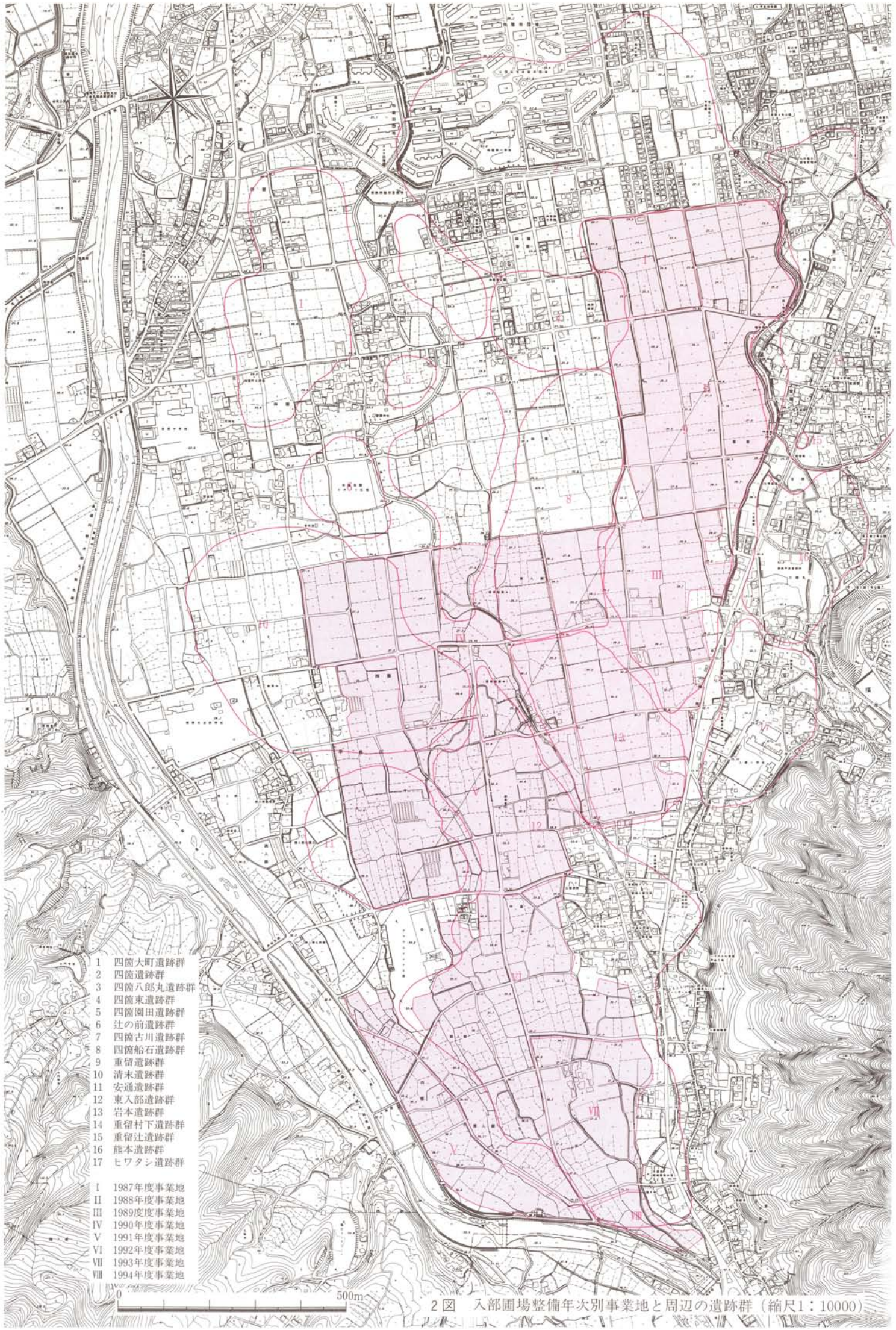
２表　東入部遺跡群調査一覧



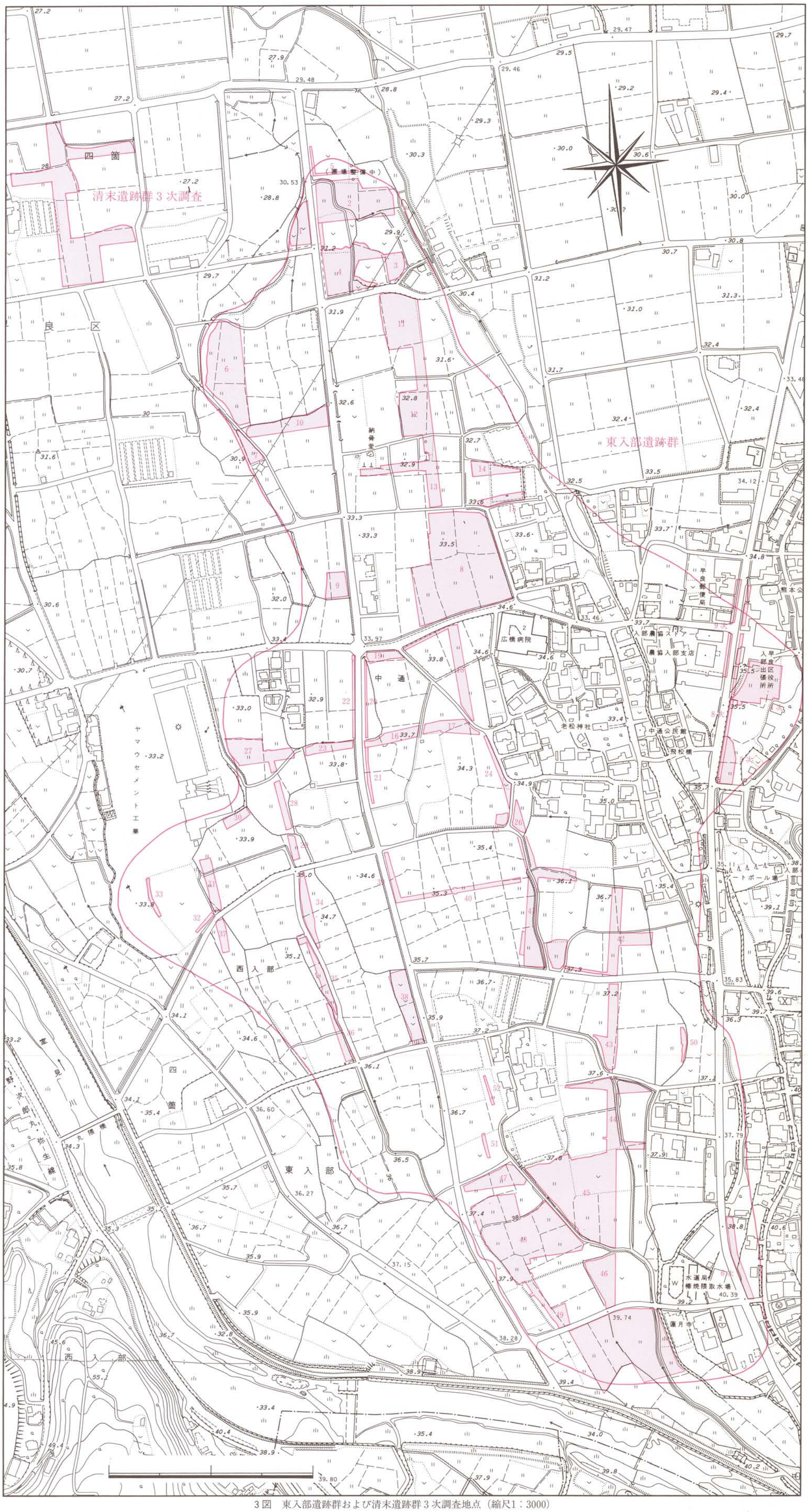
1図　入部圃場整備事業地の位置と早良平野の遺跡（縮尺1：50000）

1	吉武遺跡群	6	四箇遺跡群	11	西新町遺跡
2	大田遺跡	7	拝塚古墳	12	五島山古墳
3	羽根戸遺跡	8	有田遺跡群	13	拾六町ツイジ遺跡
4	都地遺跡	9	原遺跡群	14	宮ノ前遺跡
5	田村遺跡群	10	藤崎遺跡群	15	野方中原遺跡

（○遺跡群
●遺跡
■古墳
アミ部が圃場整備事業地）



2図　入部圃場整備年次別事業地と周辺の遺跡群（縮尺1：10000）



3図　東入部遺跡群および清末遺跡群３次調査地点（縮尺1：3000）

2　1992年度の調査概要

2－1　調査組織

事業主体（入部地区圃場整備）
　福岡県農林事務所農地整備鉱害課
　福岡市農林水産局農業振興部農業土木課
　福岡市入部土地改良区
調査主体
　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
　　課長　　折尾学
　　第１係長　飛高憲雄
　　第２係長　塩屋勝利
　　庶務　　中山昭則
　　調査担当　濱石哲也　長家　伸　榎本義嗣　屋山　洋
　　調査補助　英　豪之　黒田和生

2－2　調査経過

1992年度の入部地区圃場整備は前年度の南側、大字東入部の140,000㎡を対象に事業が施工されることになっていた。事業地一帯のほとんどが東入部遺跡群に含まれ、とくに北側部分では前年のその第３次調査で確認した弥生時代の墓地、集落の南への広がりが予想された。また遺跡群が室見川の流れる西側へどのくらい広がるのかも確認したいことの一つであった。

なお、1992年度は一つの遺跡群での調査であり、次に述べる試掘調査（詳細分布調査）から本調査まで一貫した調査とみなし、東入部遺跡群第３次調査（遺跡調査番号9216、遺跡略号HGI－３）とした。県営入部地区圃場整備事業に伴う調査としては第６次となる（１表参照）。

試掘調査

対象地内の遺跡の分布範囲、遺構の時代と性格、遺構面までの深さ、埋蔵状況などを把握し、事前に事業計画との調整を図るため、国庫補助を受けて４月13日から５月29日まで圃場整備地内遺跡詳細分布調査を行った。

調査には重機（バックホー）を用い、地形を考慮して東西方向（一部南北方向）の幅1.5mのトレンチを115本掘削した。総調査面積3,381㎡。各トレンチは作業員を使って清掃し、その後写真撮影、土層の略測を行い、また遺構の分布も記録した。

その結果、室見川に近い対象地南から西南部では遺構の検出はなく、出土遺物もほとんど見られなかった。それ以外の所では粗密の差はあるものの全体に遺構があり、遺物も出土した。とくに対象地北側では予想されたように遺構の密度が濃い状況があった。しかし前年度の弥生時代集落・墓地の南側への広がりはほとんど確認できなかった。また対象地内には北流する古河川、あるいは谷が数筋あり、それに挟まれた低位段丘に主に遺構が分布していた。遺構は縄文時代から江戸時代に及び、古墳時代の集落、中世の集落・墓地が数地点にわたって広がることが判明した。

本調査

先に述べたように、1992年度の調査は東入部遺跡群の第３次調査である。圃場整備地の調査では発掘地が分散するため、同一遺跡群内で便宜的に区名を通して付けている。東入部遺跡群の場合、１次調査が１～５区、２次調査が６～15区で、３次調査は16～42区である。区が増加したのは、田面部分の遺構面が深く、事業者側との調整でほとんど調査を必要としなくなり、現道などに断ち切られる構造物部分がその対象となったためである。３図で示したように、調査区は所々が途切れた帯状に事業地内に広がる。

本調査は５月20日、前年度の南側にあたる16区の表土剝ぎから開始した。以下地区をまとめて、概要を記す。

16～21区は前年度の弥生時代集落、墓地の出土を予想した地点であったが、19区で１基の小児棺が出土したにとどまり、他は縄文時代包含層、奈良時代竪穴住居、土坑、中世掘立柱建物、土坑、土壙墓などを確認した。20・21区では遺構はほとんど確認できなかった。

22・23区では中世の掘立柱建物１棟、土壙墓１基、他に土坑、溝などを確認した。遺構の密度は薄かった。

24～26区では奈良時代の竪穴住居、土坑、近世以降の石組遺構などが主で、26区では中世の鍛冶炉も検出した。

27～30区のうち、27区は掘立柱建物、土坑、溝などからなる中世集落を確認した。他の区は河川の流路になり、遺構は見られなかった。

31～33・37区は今次の調査では最も西側にあたる。先の区との間には河川が入るが、予想に反して竪穴住居、土坑、溝、ピットなど奈良時代から中世にかけての遺構がみられた。ただ37区に遺構はなかった。

34～36区のうち、34区は大半が河川の氾濫原となり、遺構、遺物の出土はほとんどなかった。35・36区では古墳時代後期の集落を確認した。竪穴住居20基以上を検出したが、集落そのものはさらに西に広がる。他に中世の掘立柱建物も重複していた。

38区では北北西に走る古墳時代後期の大溝を中心とした調査となった。この溝は７次調査でも確認された。

39・40区は河川とその西肩にあたり、39区と40区西側では、掘立柱建物などを検出した。

41区は中央に西北方向の谷が入り、北側では中世の掘立柱建物、土坑など、南側では古墳時代末の竪穴住居、掘立柱建物と中世の掘立柱建物などを検出した。また縄文時代の包含層があり、一部トレンチ調査を行った（図版２－１）。

42区は大半が南北に走る河川の流路に占められていたが、西肩部分では製鉄関係の遺構が、また東側部分では多数のピットがみられ、中世の集落の存在が予想された。

以上、16区から42区までの調査を完了したのは1993年１月31日であった。調査面積13,832㎡。出土した遺物は縄文時代から近世におよび、その量はコンテナ115箱であった。

今次の調査では、前年度密度の濃かった弥生時代の墓地、集落は皆無に近かった。古墳時代後期の集落は、この遺跡群で始めての検出であり、３地点で確認した。古代から中世の集落は６地点あり、大小規模に差はあるものの、遺跡群のほぼ全域に広がることが判明した。

3　1993年度の調査概要

3－1　調査組織

事業主体（入部地区圃場整備）
　福岡県農林事務所農地整備鉱害課
　福岡市農林水産局農業振興部農業土木課
　福岡市入部土地改良区
調査主体
　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
　　課長　　折尾学
　　第１係長　横山邦継
　　第２係長　山崎純男
　　庶務　　中山昭則
　　調査担当　濱石哲也　榎本義嗣
　　調査補助　英　豪之　黒田和生

3－2　調査経過

1993年度の入部地区圃場整備は前年度の東南側、大字東入部の60,000m²を対象に事業が施工されることになっていた。事業地はほとんど東入部遺跡群に含まれ、前年度の調査結果からみても、事業地内での古代～中世を中心とした遺跡の広がりが十分予想された。

なお、1992年度も一つの遺跡群での調査であり、次に述べる試掘調査（詳細分布調査）から本調査まで一貫した調査とみなし、東入部遺跡群第７次調査（遺跡調査番号9312、遺跡略号HGI－７）とした。東入部遺跡群では最近調査が増え、1994年度で10次に及んでいる（２表参照）。また県営入部地区圃場整備事業に伴う調査としては第７次となる（１表参照）。

試掘調査

対象地内の遺跡の分布範囲、遺構の時代と性格、遺構面までの深さ、埋蔵状況などを把握し、事前に事業計画との調整を図るため、国庫補助を受けて５月１日から５月15日まで圃場整備地内遺跡詳細分布調査を行った。

調査には重機（バックホー）を用い、ビニールハウス、野菜栽培地を除いたほぼ全田面に、地形を考慮して東西方向の幅1.5mのトレンチを26本掘削した。総調査面積1,755m²。各トレンチは作業員を使って清掃し、その後写真撮影、土層の略測を行い、また遺構の分布も記録した。

その結果、室見川に近い対象地西南部を除いた地域で遺構を確認した。遺構としては土坑、溝、それに多数のピットがあり、弥生時代から江戸時代にいたる遺物が出土した。主体は予想通り古代から中世で、比較的大規模な集落が営まれた可能性が高くなった。とくに対象地北側では古代の遺構が、南側では中世の遺構が集中していた。南北方向の古河川、浅い谷部もあり、遺物を多量に包含することから調査範囲に入れた。

本調査

先に述べたように、1993年度の調査は東入部遺跡群の第７次調査である。圃場整備地内の東入部遺跡群の調査としては４次になり、地区は３次調査の16～42区を引き継ぎ43～52区とした。今次の調査地は田面部分の遺構面が浅く、また事業地の南に近く、水の引き入れ関係から事業者側との調整がほとんどできなかった。そのため、事業地南側を中心に広範囲で田面部分の調査を余儀なくされた。

本調査は５月17日、前年度の42区の南側にあたる43区の表土剝ぎから開始した。以下地区をまとめて、概要を記す。

43区は調査区西側を南北に走る河川があり、３次調査の42区に続く。東側の台地部分にはピット、土坑、溝、製鉄関連遺構などがみられた。中世を主体としているが、一部の遺構は奈良時代に遡るものがある。

44区は北側部分に、中世の掘立柱建物、土坑、溝などが集中していた。南側には遺構はほとんどなく、45区との間の遺構空白地帯となっていた。

45区は田面部分の広範囲な調査となった。東側には北北西方向に走る大溝が、また中央部分には46区から真北方向に進む溝を確認した。この中央の溝の西側では５棟以上の掘立柱建物と７基の竪穴住居などからなる古墳時代末の集落を、また全区にわたって掘立柱建物を中心とした中世の集落を検出した。東側の大溝の肩では製鉄関連遺構も見つかった（図版２－２）。

46区も掘立柱建物の中世集落で、あわせて北側で一部は鍛冶炉と考えられる製鉄関連遺構を多数検出した。48区、47区を抜け、３次調査の38区に続く大溝もこの区の南側に端を発していることが判明した。

47区では西側部分で弥生時代の竪穴住居と土坑を、また中世の掘立柱建物群を検出した。また東側部分では大溝を調査した。

48区では掘立柱建物13棟、竪穴住居７基、それに土坑などから構成される弥生前期から中期の予想もしなかった集落を確認した（図版１－２）。竪穴住居には大小があり、小から大への変遷が辿れた。掘立柱建物は梁間１間の細長い倉庫タイプと、３間×４間の住居タイプに分かれる。後者が大型の竪穴住居の後に築かれていることから、小形竪穴→大型竪穴→３×４間建物と集落内の住居の変遷を辿ることができた。梁間１間の建物は北部九州で縄文晩期末から出現しており、一部は竪穴住居に、一部は３×４間の建物に付属するものであろう。この区ではまた中世の掘立柱建物や土坑を中心とした集落も重なっていた。土壙墓もあり、輸入陶磁器とともに和鏡が副葬されていた。

49区は南端部分で、ピットなどを検出したが、まとまった遺構はなかった。

50～52区は構造物を対象とした部分的な調査で、いずれの地区にも中世の遺構の広がりを確認した。

以上のような成果を得て、調査は２月28日に終了した。調査面積17,000㎡。出土した遺物は縄文時代から近世におよび、その量はコンテナ157箱であった。

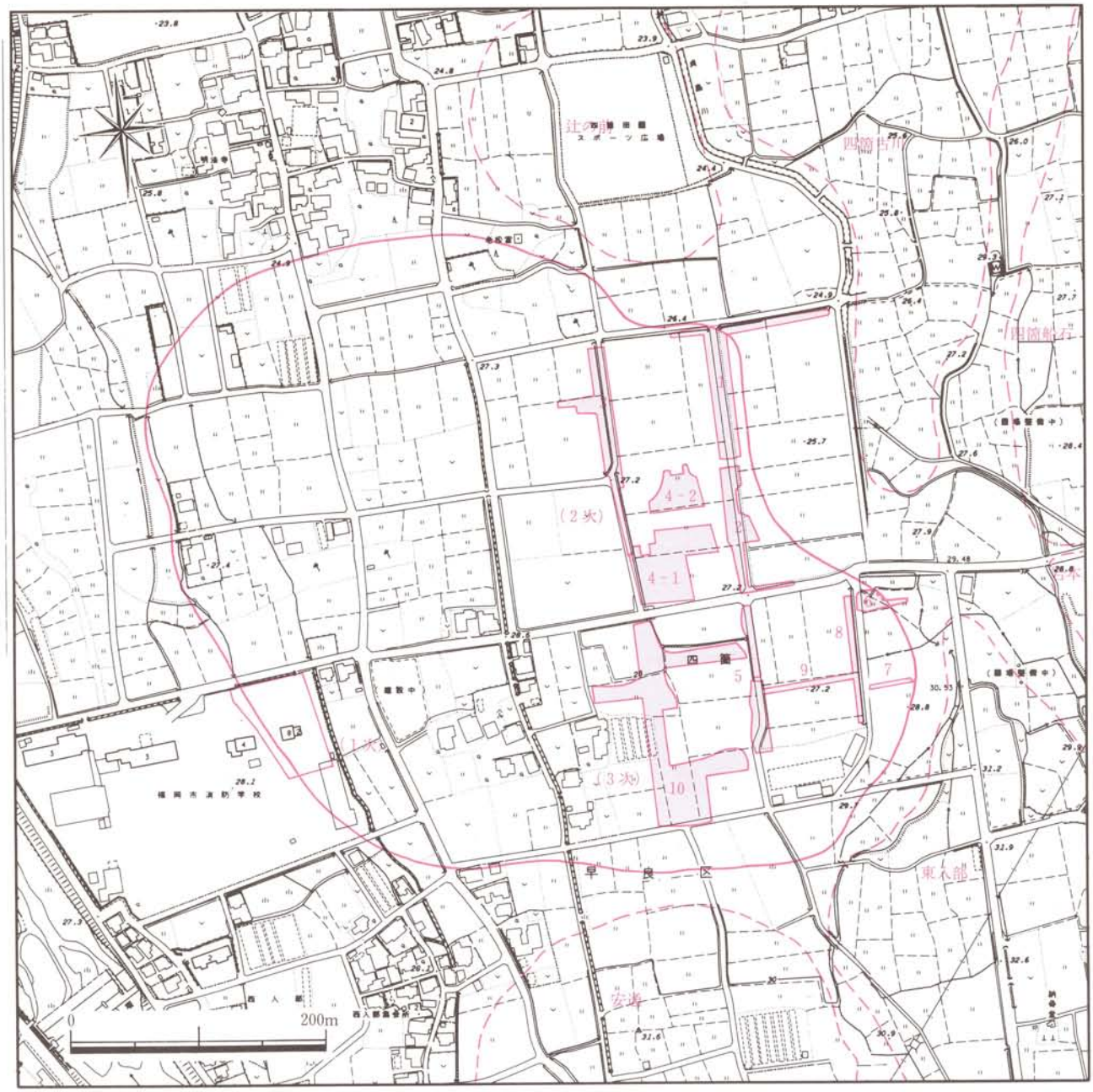
なお、1994年度の圃場整備地内の調査はこの南側で行われ(東入部遺跡群第10次調査)、古代から中世の集落などを確認し、また唐三彩が出土するなど注目を集めている。

4　清末遺跡群第３次調査報告

４－１　遺跡の立地と歴史的環境

県営入部地区圃場整備事業は、福岡市の西南に広がる早良平野の南部、油山（標高592m）山麓とその西を流れる室見川との間に広がる水田地帯で行われた。この早良平野およびそれを取り囲む山陵には、旧石器時代から近世にいたる様々な遺跡群が濃密に分布している（１図）。1970年代後半以降の福岡市の著しい都市化はこの一帯にも波及し、激しい土地開発に伴う遺跡の発掘調査も相当の件数に及んでいる。

本事業地は東西約1200m、南北約2200mにわたり、その総面積は100ヘクタールにも及ぶ。このなか



４図　清末遺跡群調査地点（縮尺1：5000）

には１章で触れたように、重留、四箇船石、四箇古川、四箇東、清末、岩本、安通、東入部の８遺跡群と拝塚古墳が知られており、事業の進行に伴い拝塚古墳も含めすべての遺跡群が発掘調査の対象となった（１表）。その結果は福岡市埋蔵文化財調査報告書として順次発表してきているが、東入部遺跡群などまだ整理の端についていない遺跡群もある。

今回報告する清末遺跡群は、事業地内の遺跡群のなかでは油山山塊から最も西に離れ、南北に延びる低位段丘とその周囲の沖積地を占地する。東西約460m、南北約480mの広大な遺跡群で、西は室見川となるが、東側の北から南にかけては四箇大町、辻の前、四箇古川、四箇船石、岩本、東入部、安通の各遺跡群が、川や浅い谷を隔てて分布する（４図）。清末遺跡群の標高は27.0～30.0mで、北と西に向い低くなる。遺跡の範囲に含まれる地域には清末、七ツ瀬、五反間、久保田、ケゴシ、ケガイ、政留、井ノ元、細溝、ナガオサなどの小字あり、このうち一番南にあたる清末という一小字名を遺跡名として採用している。今回の調査地点の現行行政地名は福岡市早良区大字東入部2000他（字清末）で、国土地理院発行の５万分の１地図「福岡」の南から4.2cm、西から15.2cm付近にあたる。

清末遺跡群の発掘調査は今回で３次となる。第１次調査は1977年、福岡市消防学校建設に伴い、遺跡群の西端部分で行われた。調査面積は約5000m²、調査期間は10月25日から翌年の３月２日の約４ヶ月に及んでる。検出された遺構は２間×２間の総柱建物４棟、竪穴住居２基、南南西から北北西に延びる溝などで、出土遺物から５世紀後半から６世紀の古墳時代に比定されている。なお遺構の広がるのは学校北東部の校舎建設予定地であったが、計画が変更され遺跡は調査後運動場の下に残された。

第２次調査は1990年にこの圃場整備事業に伴い行ったもので、遺跡群の東側部分を対象とした。道路、用・排水溝部分と一部削平される水田面部分あわせて10044m²を１～９区に分け調査した。調査には７月18日から12月28日までの約５ヶ月半の期間を要した。縄文時代から江戸時代にいたる遺構や遺物を検出したが、中心となるのは古墳時代の集落と、12世紀から14世紀の中世の集落および環濠居館であった。古墳時代の集落はそれぞれ100m前後離れた１、５、６区にみられ、竪穴住居１～３基からなる小規模なものであった。中世の遺構はほぼ全地区にわたっており、その核となるのが４区であった。ここでは12世紀中頃の大型建物群、12世紀後半から14世紀初頭の調査区を南北に抜ける大溝とその東側の掘立柱建物群、さらに大溝埋没後14世紀前半頃に築かれた環濠をもつ居館まで約２世紀にわたり居住の場としての利用を行っていた。また大溝は早良平野の条里地割と一致し、この地の条里制成立時期、集落と水田開発の関係などについてに大きな手がかりを与えた（『入部III』福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集 1992）。

今回の第３次調査は第２次調査の翌年度に、４区の南側、５区の西側の地区で行った。遺跡群としては南側部分にあたる。

４－２　調査の経過と概要

第３次調査は1992年１月末までに重機による表土剝ぎを済ませ、２月４日から遺構検出を行い、その後北から順次遺構を掘り下げた。同時に実測のための杭打ちを行い、掘り下げが済んだ地区から20分の1の遺構図を作成し、またレベル入れを続けた。幸い天気にも恵まれ、また作業員の方々のご協力のせいもあって、２月末にはほぼ調査を終えることができた。器材の撤収などすべての現場業務が終了したのは３月５日であった。発掘調査面積は10067m²であった。

1991年度の圃場整備地内の遺跡調査は主任文化財主事濱石哲也、文化財主事池田祐司・長家伸・榎本義嗣が担当し、うち清末遺跡群の調査はおもに濱石、長家が従事した。

発掘調査は新設道路、用・排水溝および削りが遺構に達する田面で行った。このうち田面の大半は試掘調査結果より遺構面が深く、直接調査の必要がなかったが、竪穴住居、土坑、ピットなどの遺構は掘りあげた。調査区を縦断する溝や縄文時代の包含層については一部トレンチ（８・９トレンチ）を開けるにとどめた。溝の場合、付図の全体図中に網をかけた部分が未掘の場所にあたる。なお、先の発掘調査の条件にはあてはまらないが、第２次調査４区の居館の環濠南端を探るため、事業者の了解を得て東北側に７本のトレンチ（１～７トレンチ）を設定した。

開田の際の削平が進んでおり、北側を中心に遺構の残存状態は良くなかった。検出したのは縄文時代から近世におよぶ遺構・遺物である。

縄文時代は後期の包含層、２基の埋甕があり、遺構はなかったものの晩期後半期の遺物も見られる。

弥生時代は前期と中期の遺物が若干出土したにとどまる。

古墳時代は前期の集落を２地点で確認し、あわせて９基の竪穴住居を調査した。住居内からは多くの土師器が出土した。また溝には後期のものがある。

鎌倉時代を中心とした中世には調査区のほぼ全域で集落が営まれている。掘立柱建物、井戸、土坑などからなり、南北に走る大溝が中央を縦断し、前年度の大溝（SD0060）と接続する。またトレンチ調査で居館を囲む溝の南側部分を確認し、居館の規模が溝の内側で南北75m、東西35m、面積にして約2600㎡、800坪弱であったことが判明した。井戸を中心に土師器、輸入陶磁器などが出土した。

江戸時代は周溝をめぐらす集落の一部を検出した。その内側で井戸や一部建物礎石を確認したが、大半は調査区外にかかり、全容は解明できなかった。周溝からは多量の国産陶磁器類が出土した。

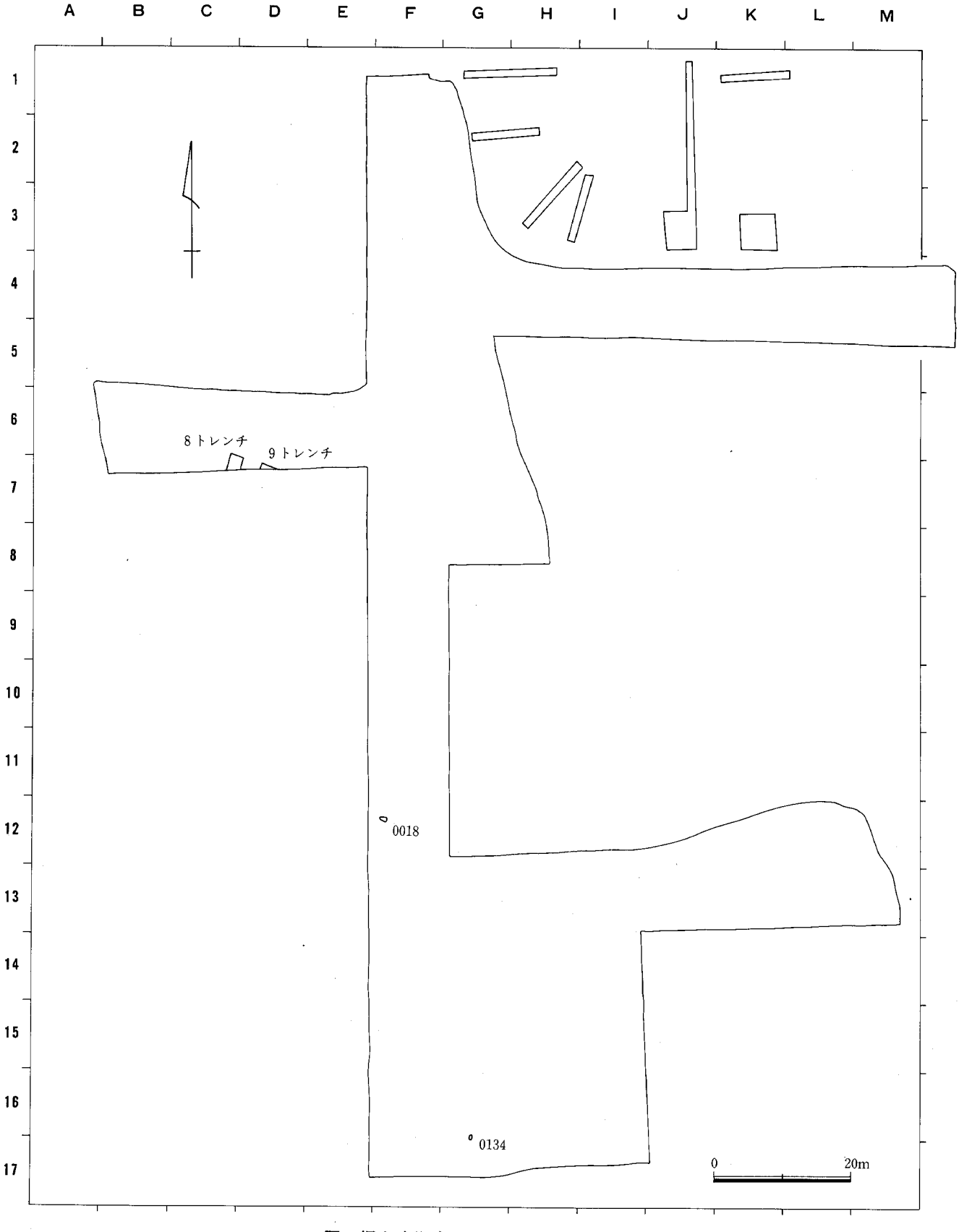
なお今回の調査報告にあたって、以下のように統一を計った。

遺構の番号は４桁の数字で表し、埋甕、竪穴住居、溝、掘立柱建物、井戸、土坑、祭祀ピットなどおもな遺構には0001～0157までを、竪穴住居・掘立柱建物の柱穴や遺物を出土したピットは0167～0630をあてた（一部欠番あり）。例えば、0004掘立柱建物の場合、それを構成する柱穴は0306～0315である。これらの遺構の一覧は３～９表に掲げた。これはほぼ現場の取り上げ番号を踏襲している。

遺物は001からの３桁の数字で表した。601～649は石器、石製品、801は金属製品を示す。

調査区には10m方眼を設け、東西方向を西からABC・・、南北方向を北から１２３・・とし、各10m方眼をA－１、B－２のように呼ぶ。各遺構の位置はこの方眼名称で示す。ただし大きく地区をとらえる場合は、調査区の形に応じ、おおよそF-1～7を北地区、H～L-4区を東北地区、A～E-6区を西北地区、F-8～12を中央地区、F・G-13～17区を南地区、H～M-12～17を東南地区と称する。

以下、縄文時代から遺構・遺物の詳細について観察を行う。



5図　縄文時代遺構配置略図（縮尺1：800）

4－3　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は0018、0134の2基の埋甕だけで、ともに南地区で検出した。また西北地区のC･D－7区を中心に遺物の出土が著しかったため、2本のトレンチ（8トレンチ、9トレンチ）を設け、出土状況の把握に努めた結果、縄文時代後期の包含層を確認した。しかし、遺物が集中する包含層そのものが破壊の対象になっていないことと、時間的制約などからこの2トレンチ以上の調査は今後に託することとした。

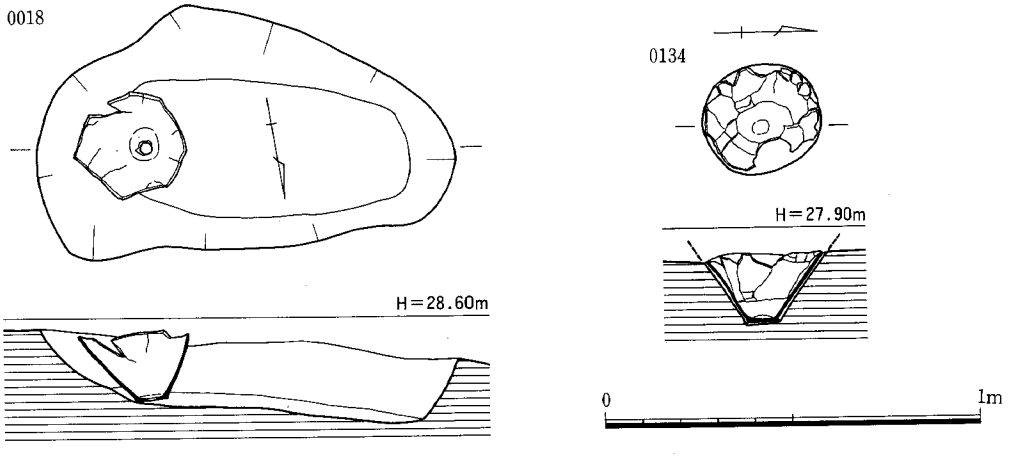
以下、埋甕、包含層（8・9トレンチとその出土遺物）、その他の遺物（後世の遺構や表土から出土した遺物）の順で報告を行う。なおその他の遺物中には若干の弥生時代前期の遺物も編集の都合上あわせて掲載した。

4－3－1　埋甕

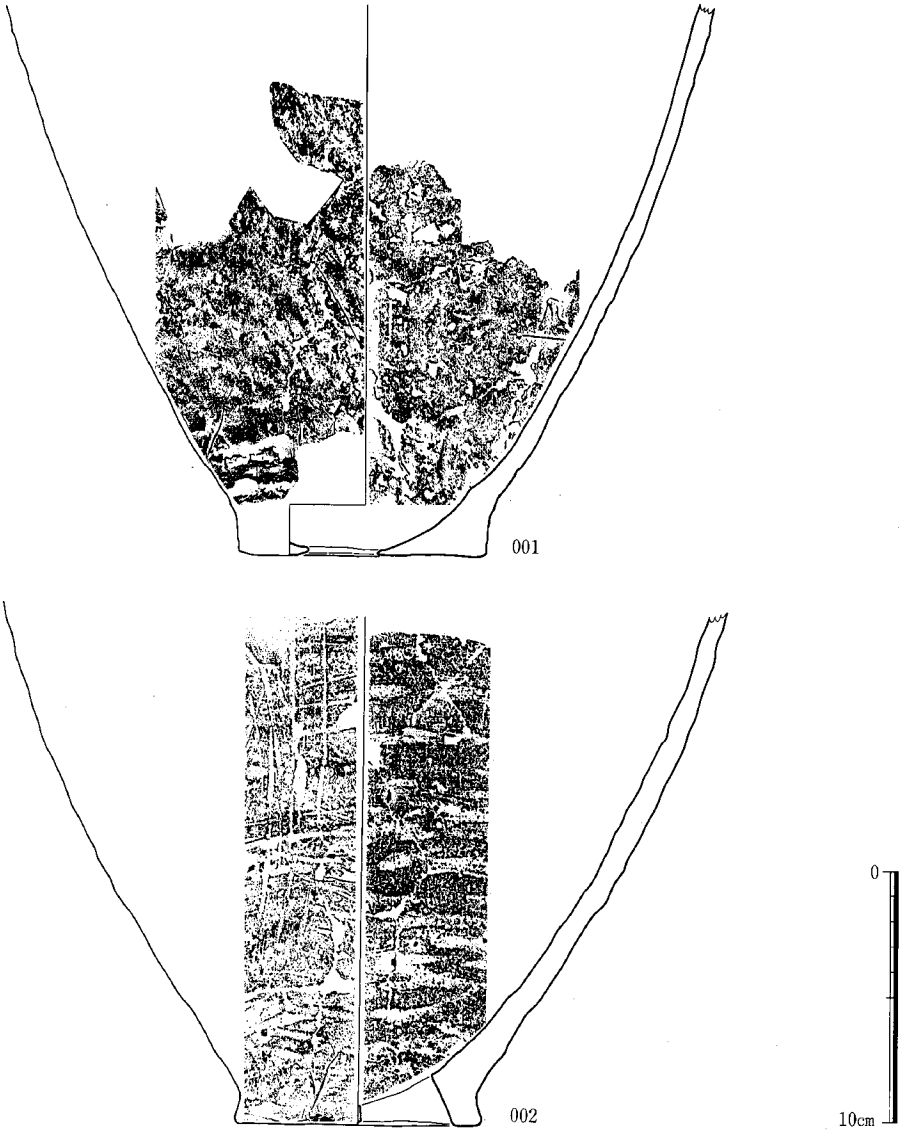
0018埋甕（6図、図版7-1）

F－12区の表土直下で検出した。当初、土器の胴部が輪切りにされた状態で見えていたため、周囲を精査したところ、東西長1.11m、南北幅0.65mの不整長方形の土坑を確認した。この土坑は最も深いところで深さ25cmをはかり、底面は西側に傾斜している。坑内覆土は暗灰色砂質土である。甕（鉢）はこの土坑の東端に、約6度東に傾き埋置してあった。甕内覆土は暗褐色土である。底部から約20cmの高さに胴部まで残存するが、先に述べたように、上面は開田により削平されている。甕底部には穿孔を施す。

出土遺物（7図001）　粗製の深鉢である。底部は接合の具合いが悪く、正確にはつかみがたいが、外への張り出しは小さく、図示したように直立気味である。外面調整は条痕というより、粗い板ナデの上に疎らな擦痕を施したものといえる。内面は板ナデで、丁寧さに欠ける。そのため内外面とも器表の凹凸が著しく、また米粒大のくぼみがほぼ全体に認められる。胎土は白色粒などが混じるが、しまりがない。外面は褐色～黒褐色、内面はくすんだ黄褐色を呈する。また外面には煤が付着する。胴器壁に比べ底部のそれは薄く、その中央に焼成後外からの穿孔を行っている。残高21.8cm。



6図　埋甕遺構実測図（縮尺1：20）



7図　埋甕実測図（縮尺1：3）

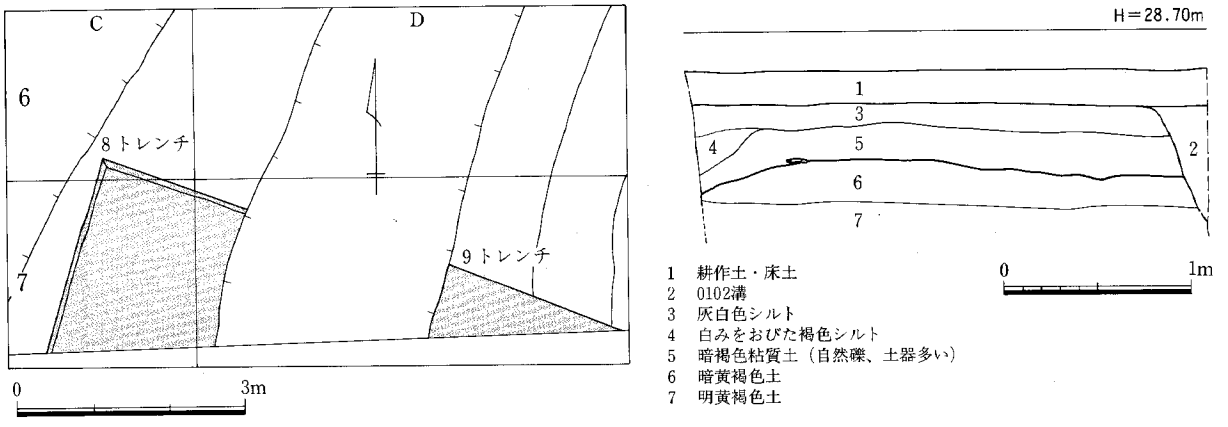
0134埋甕（6図）

G－16区の表土直下で検出した。0018埋甕同様、胴が輪切りにされて残っていた。周囲を精査したが土坑の広がりはなく、甕が入るいっぱいの穴にほぼ垂直に（正置）据えられたものと考えられる。底部には穿孔を施す。

出土遺物（7図002）　粗製の深鉢である。底径9.8cm、底部の張りは先の001に比べ大きい。調整は外面が横の条痕で、そのうえに格子状にヘラの沈線を施すが、規則性をもつものではない。内面は比較的丁寧な板の横ナデである。しかし内外面とも輪積みによる凹凸が痕跡的に見られる。胎土には白色粒を大量に含むほか、金雲母も混じる。外面は主に赤褐色、内面は暗褐色や灰黒色を呈する。外面上部には煤が、内面には炭化物が付着する。残高20.5cm。

4－3－2　包含層（8・9トレンチ）

C・D－6・7区の0101・0102・0103溝（古墳時代）を調査する際、溝の覆土のみならず溝の地山となる



8図　8・9トレンチ配置図および8トレンチ北壁土層断面図（縮尺1：100、1：40）

べき壁面からもまとまって縄文土器の出土が見られた。この周辺の発掘は削られる田面のためのものであったが、遺構検出面が予想した削り面より深く、表土を剥いだものの、調査そのものは遺構の一部掘削に止める予定であった。縄文土器の調査にあたっても、時間的な制約もあり、最も土器の出土が多く見られた部分にトレンチを開けることで対応をはかることとし、0103溝と0102溝の間の南端部分に8トレンチを、またその東の0102溝東壁から0101溝にかけて9トレンチを設定した（8図）。

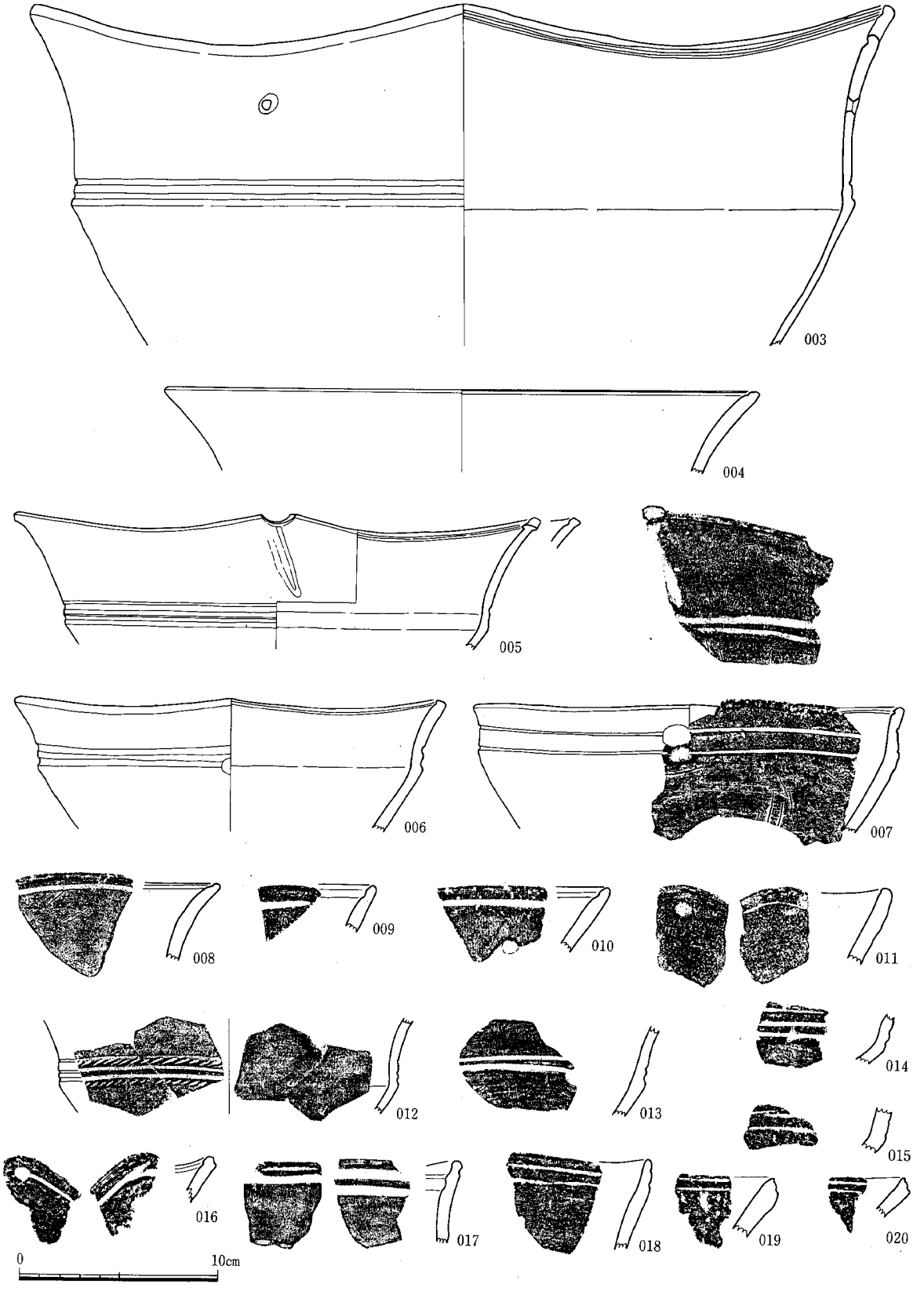
両トレンチとも土層の堆積は同じで、8トレンチを例にとれば、約20cmの耕作土および床土（1層）の下に厚さ15cmの灰白色シルト層（3層）がある。この3層の上面が古墳時代以降の遺構検出面となり、また層の中には若干の縄文土器も含んでいる。その下には厚さ20cmほどの暗褐色粘質土層（5層）があり、多量の縄文土器、石器それに人頭大の自然礫が出土した。この層はほぼ水平だが、西側が傾斜気味になる。5層の下は漸移層である厚さ25cmの暗黄褐色土（6層）、さらに明黄褐色土（7層）となるが、両層とも遺物は認められない。また6層の上面で5層からの遺構の切り込みも認められなかった（図版7-2）。

以上の状況から、5層は縄文時代の遺物包含層であろうと判断した。この層は今回の調査地点のほぼ全域に広がっており、調査区南側では3層が削られ、この5層が直接縄文時代から江戸時代までの遺構検出面となっている。前項でみた埋甕が表土直下で検出されたのもこの事情によるものである。しかし、約20m東の0009溝の壁面で確認できるこの層には土器の出土はほとんど見られず、遺物の集中する場所が限られていることが分かる。土器は大きな破片が多く、ローリングも受けていない。両トレンチで出土した遺物は、土器がコンテナ5箱、石器類が標本箱2に及んだ。

出土土器（9～17図003～151）

出土した土器に完形ややそれに近いものはなく、口縁や底部の破片を中心に151点を実測し図示した。胴部片には大きな破片もみられたが、図化は行っていない。また図化した土器も破片であるため、口径や傾きに不確実なものも多いと考えられる。以下精製土器と粗製土器に分けて観察する。なおここで扱うのは出土量の多かった8トレンチの土器で、9トレンチの出土土器は17図に示し、必要に応じて説明を加えた。

精製土器（9・10図003～042）003～015は胴部から口頸部が立ち上がって外反し、口縁端部内面に1条、胴部外面の屈曲部上に2～3条の沈線を施すのを特徴とする浅鉢である。容量的には003の口径44cm、004・005の口径30cm前後、006・007の口径22cm前後のものに分けられる。口縁部は波状口縁（003・



9図　8トレンチ出土土器実測図1（縮尺1：3）

005～007・011）と直口縁があり、波状の振幅が小さいものを入れれば前者の数が多い。口頸部は比較的長めと短めがあり、器の容量が大きくなると口頸部が長くなる。内外面の沈線の他、凹点を施すも

の（005・006・007・011・013）があり、多くは外面沈線間に行うが、005は波状口縁頂部の口唇に、011はその口縁下に施す。また005の凹点下には溝状のくぼみがある。012の沈線部分には羽状文がある。沈線にも007のように間が開き、それぞれに凹点を施すなど相違がみられる。003と010には焼成後の穿孔がある。いずれも丁寧な横方向のヘラ磨きを内外面とも行う、胎土には白色粒を多量に含み、赤色粒、金雲母が若干混じるものもある。焼成は良好、茶褐色～黒褐色を呈するものが大半である。ただ009・011・013は赤褐色、014は黄褐色で、また013の胎土には白色粒とともに赤色粒が多く、黒色粒、金雲母も混じる。焼きもきわめて良い。009は焼きがあまい。010の胎土は粗く、器表には小穴が多い。

016・017は口縁内外面に沈線をもつ鉢である。016は波状口縁の頂部下の沈線の上に凹点を施す。017は内面に２条、外面に１条の沈線をめぐらす。内面の沈線は凹線風である。また残存下端部にも沈線が認められる。016の胎土には白色粒が多く、金雲母も混じる。灰黒色。017は微細な赤色粒、白色粒、金雲母を含んだ比較的精良なもので、焼成もきわめて良く、明黄褐色を呈する。横方向のヘラ磨きも丁寧である。

018～020は口縁外面あるいは端面に沈線をもつ鉢である。018は口縁が短く直立し端部は波状となる。直立部分に２条の沈線を入れる。019・020はわずかに肥厚した口縁端面に細い２条の沈線を入れる。９トレンチの138は口縁端部が短く立ち、その外面に１条の沈線をめぐらせる。018は白色粒を含む胎土で、焼成あまい。黒褐色。019・020は白色粒、金雲母の多い胎土で、黄褐色～褐色を呈する。

021～024は口縁が頸部から立ち上がり、いわゆる口縁帯を作る深鉢。021は口縁が外反気味で、端部は波状となる。口縁には凹線文と凹点を組合せ施す。022も同様のタイプだが頸部の反転が大きく、口縁は短い。凹線文と凹点を組合せる。024もこれに似る。023は口縁が内傾し、端正な口縁端を作る。口縁には３条の凹線を施す。いずれも横方向のヘラ磨きを行い、とくに022～024の磨きは丁寧である。胎土には白色粒、金雲母が多く、焼成良好、021が暗褐色、他は赤褐色に近い。

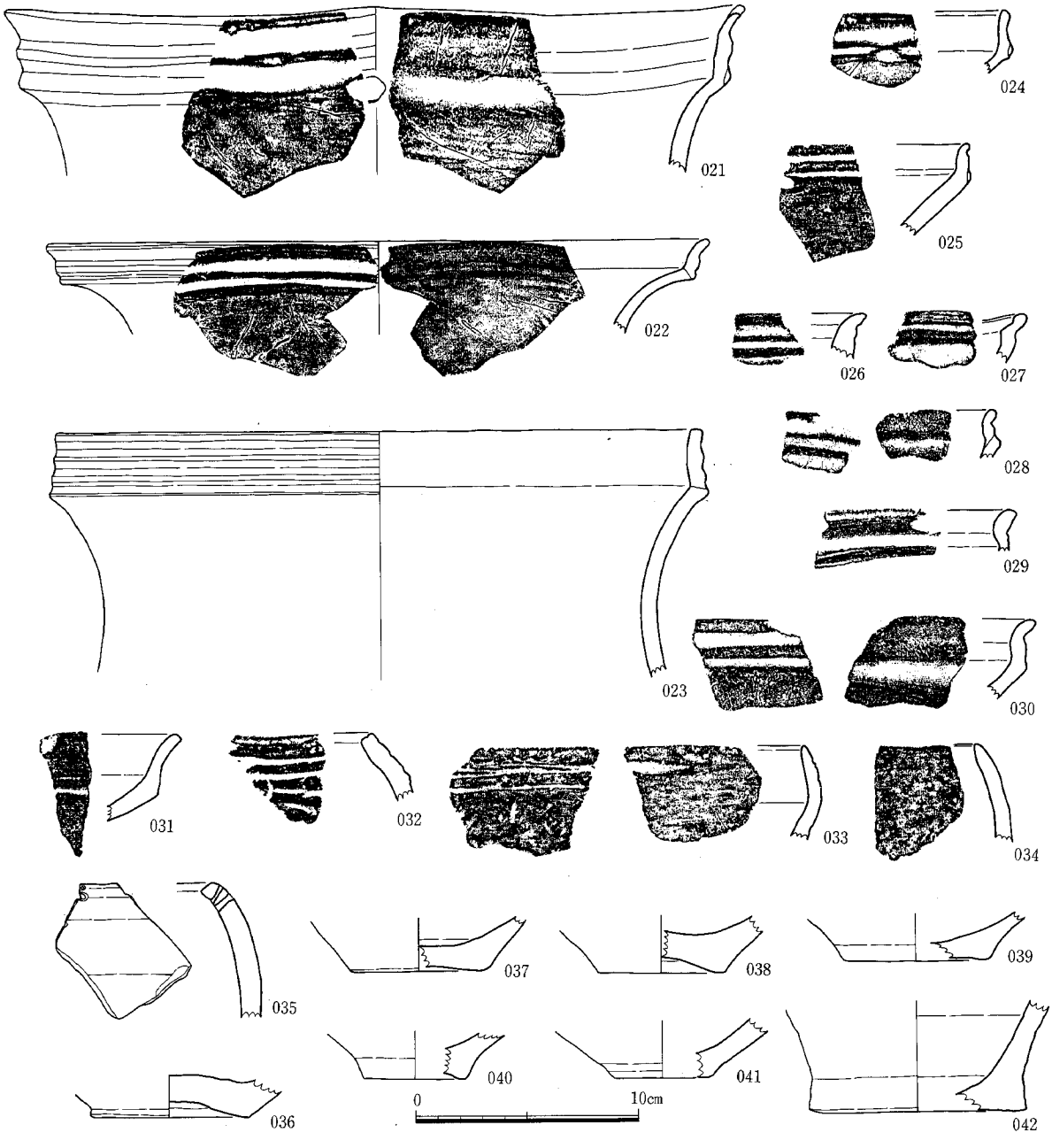
025～031は口縁が直立あるいは外反する浅鉢である。025の口縁は直立し、沈線と凹点を組み合わせる。026・029・030は口縁が外反し、外面に沈線、凹線を施すもので、029には凹点もある。031は同様の形態だが文様をもたないものである。027は口縁が短く外反し、端部が丸くなる。晩期土器の混入したものであろう。いずれも横方向のヘラ磨きで、025・027は磨きが丁寧である。胎土には白色粒、金雲母を含み、025には赤色粒も混じる。025・026はおもに赤褐色、他は灰黒色を呈する。

032～035は口縁が丸みをもって内傾する鉢である。いずれも横方向のヘラ磨きで仕上げる。032は沈線による文様を施す。胎土には白色粒、金雲母を含み、焼きあまく、暗褐色を呈する。033は外面に２条の浅い沈線をめぐらす。胎土が粗く、器表には小孔が多い。暗褐色。034・035は素面で、また厚みのある035の口縁直下には３ヶ所穿孔がある。胎土には白色粒が混じり、焼成良好、暗黄褐色を呈する。

036～042は精製土器の底部で、036は二段の上げ底、037～040は上げ底、041・042は平底となる。

粗製土器（11～16図043～133）　粗製土器は条痕の有無、さらに条痕をもつものは外面の条痕の違いなどを中心に区別した。粗製土器の中には胎土に植物を混和材としていれたため、焼成時にそれが焼け失せ、器表のみならず器壁まであばた状に小穴があくものが見られる。そのため土器が軽く、脆い。口縁部片では044・048・063が、底部では098・107・112がそれに相当する。

043～085の口縁～胴部片と15図の底部は条痕をもつ粗製深鉢である。いずれも胎土にも白色粒が多く、他に赤色粒、黒色粒、金雲母を含み、焼成があまく、赤褐色系の色調を呈するなどおおむね一致が見られる。外面には煤が、内面に炭化物が付着するものもある。



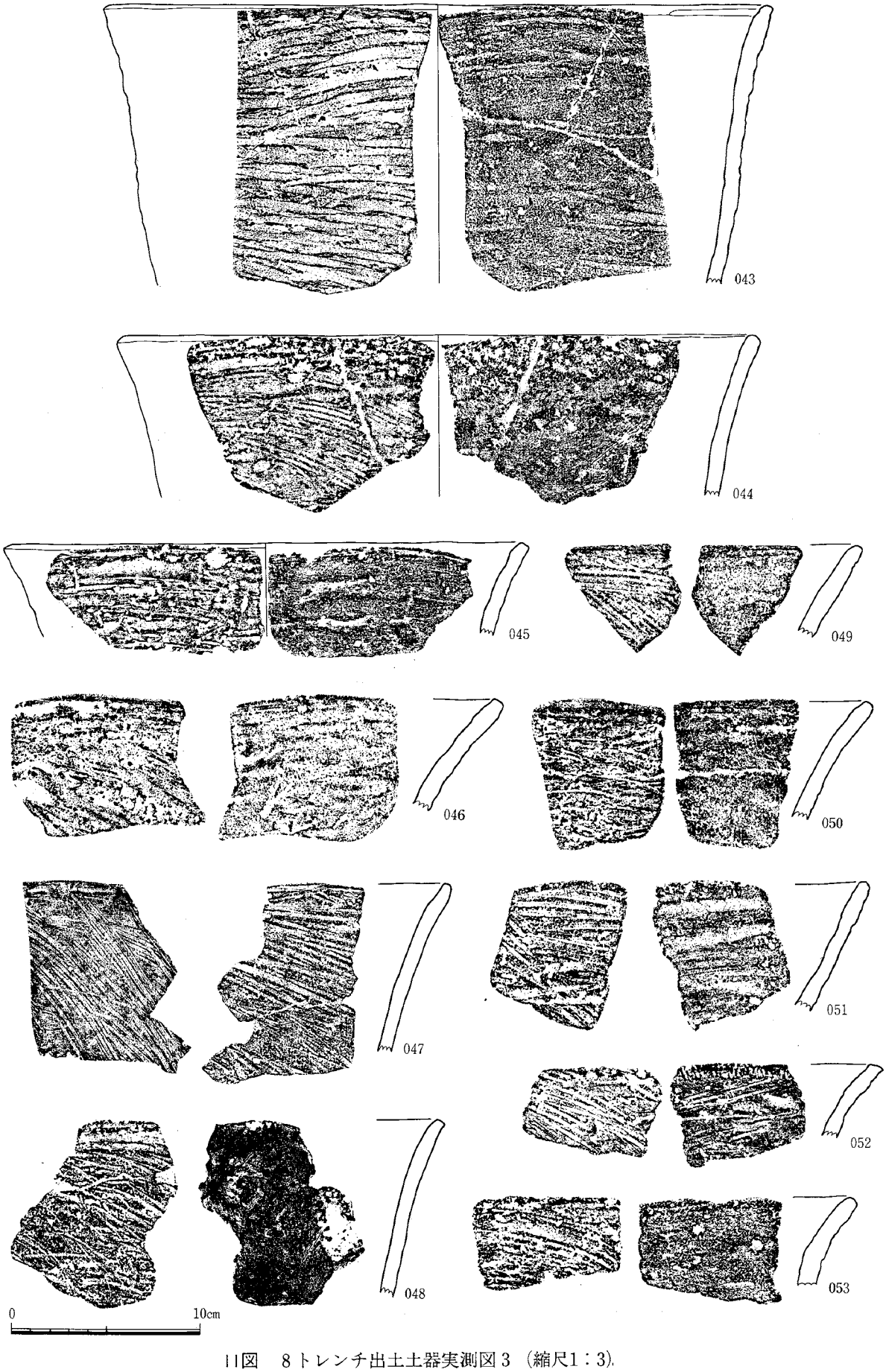
10図　8トレンチ出土土器実測図2（縮尺1：3）

043～062は口縁が外傾し、端部が面を作る深鉢で、外面には比較的細い横あるいは斜めの条痕を施すものである。058・062は口縁が屈曲するものである。内面調整は外面と同様の条痕、板状の幅広い条痕、ナデなど違いがある。043・044は口径35cm前後、045は口径28cm前後となる。

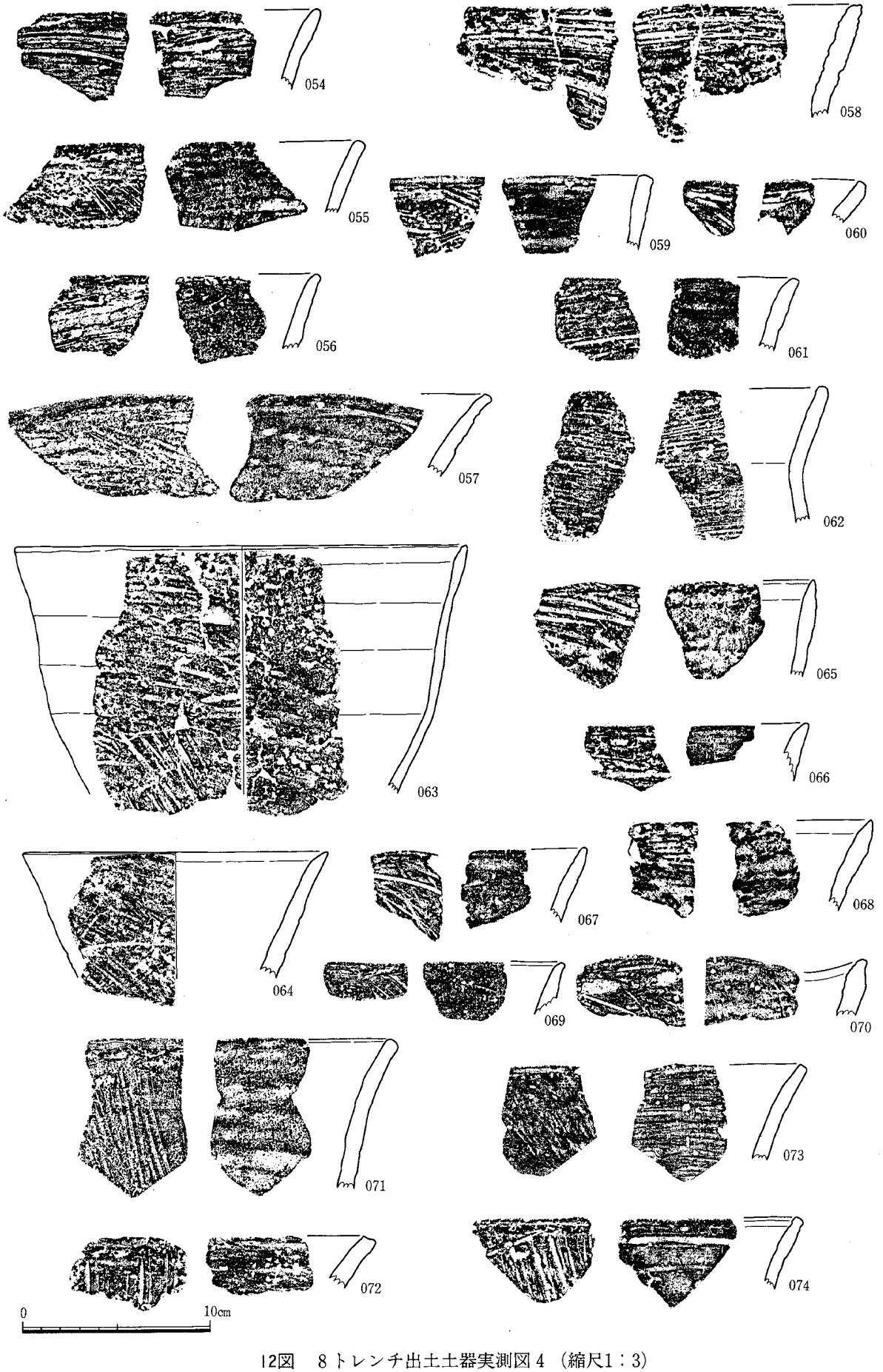
12図の071～074も基本的には043の類と同じ深鉢である。ただ条痕の方向が縦に近い。74の口縁内面には沈線がめぐる。この類の焼成は良好である。

13図の075～085は外面を幅広い条痕で調整するもので、形態および内面調整は043の類と変わるところがない。080は口縁が肥厚し端部は尖り気味になる。9トレンチの151も似たような器形となる。

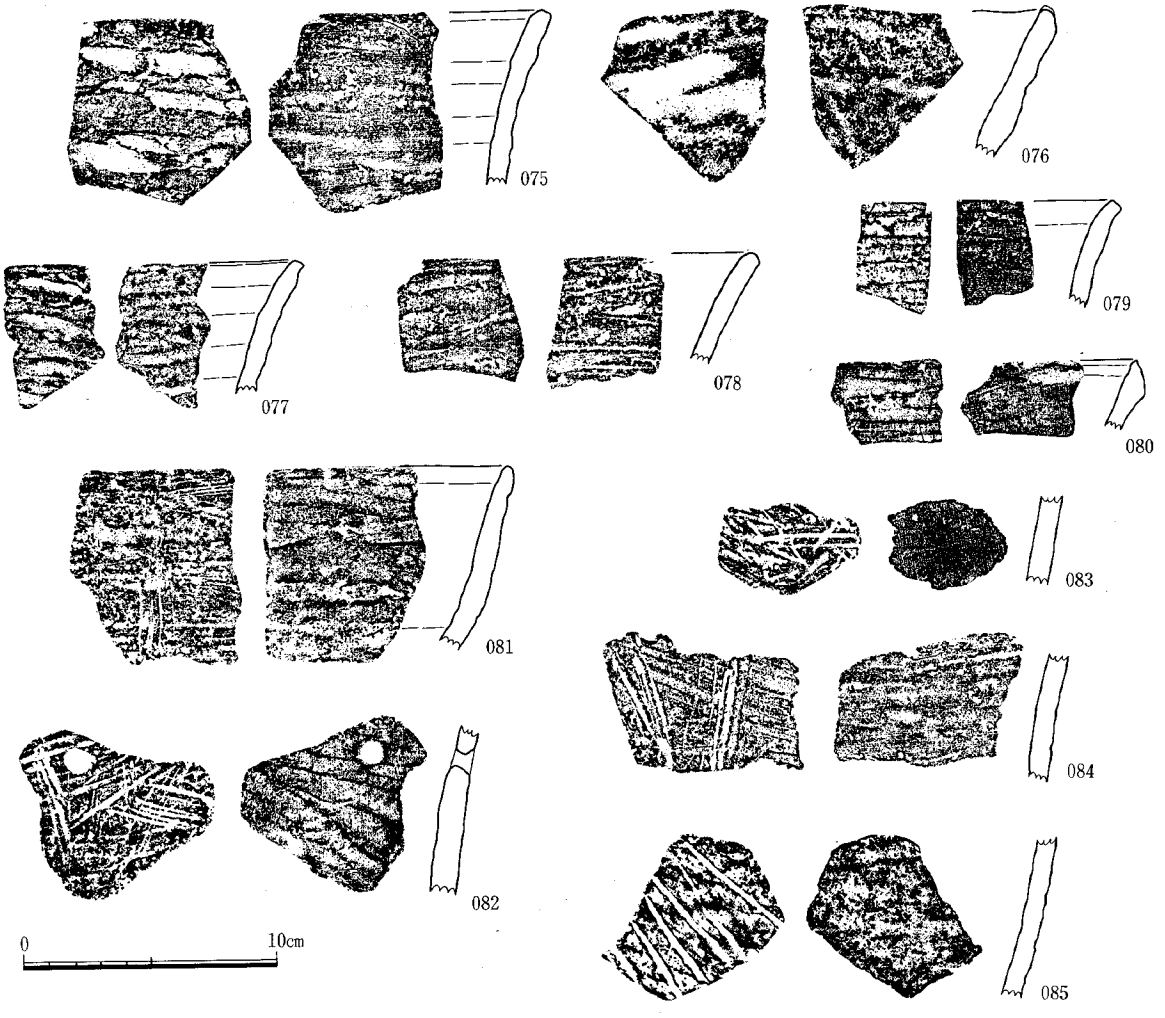
図が前後するが12図の063～070は043類と調整は変わらないが、端部が尖り気味になる鉢で、063は口径24.5cm、064のように径17cm程度の小型品もある。



11図　8トレンチ出土土器実測図3（縮尺1：3）



12図　8トレンチ出土土器実測図4（縮尺1：3）



13図　8トレンチ出土土器実測図5（縮尺1：3）

13図の081～085は条痕の上に条痕の原体で、文様風に線を描くものである。085は沈線とでも云える強いタッチの線である。082は穿孔をもつ。

14図は条痕がなく、ヘラナデなどで仕上げた粗製土器を示した。いずれも白色粒を多量に含んだ胎土で、焼きはあまく、暗褐色を呈するものが多い。

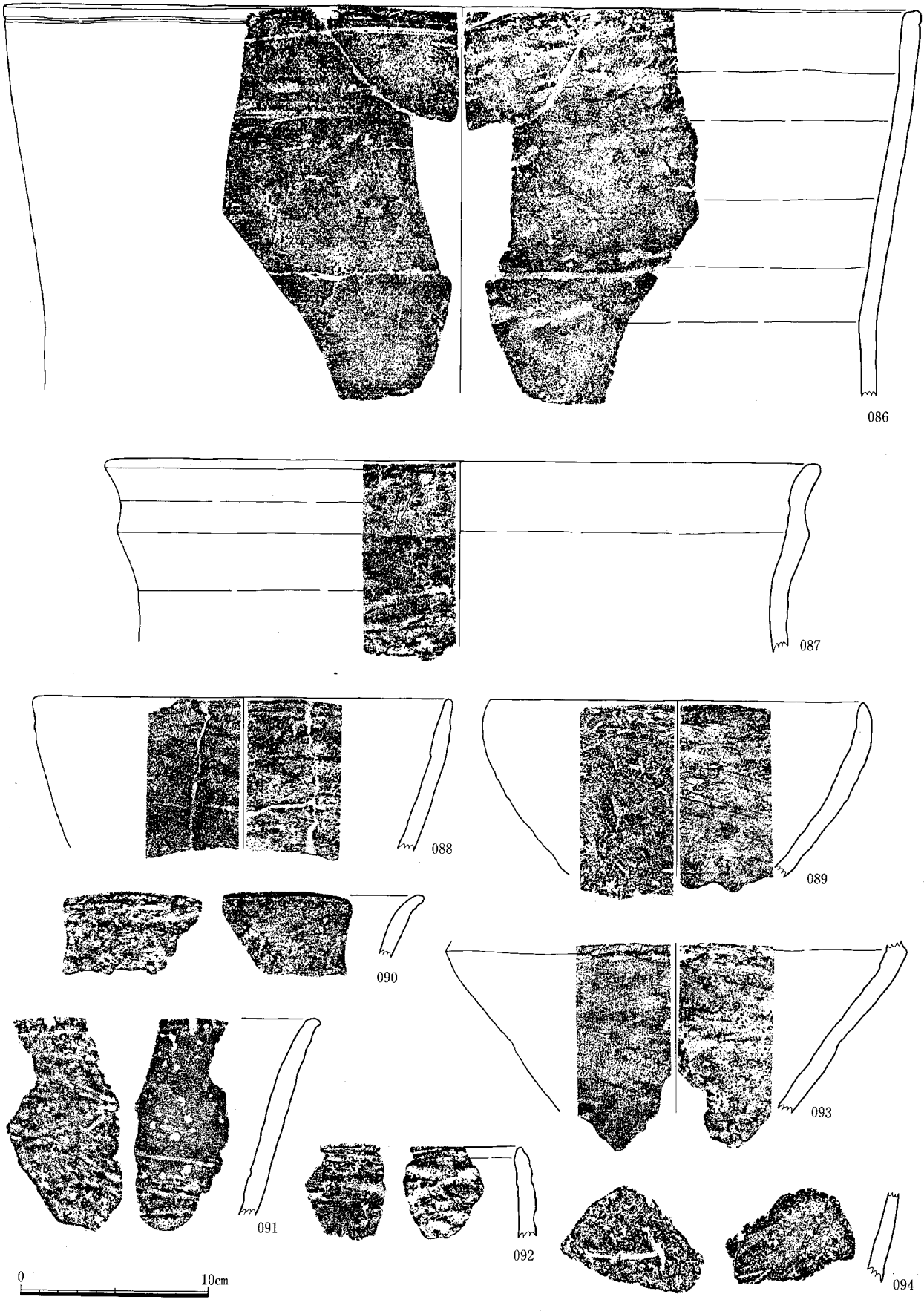
086は口縁がわずかに傾くだけの寸胴の深鉢で、口縁直下の外面には沈線を施す。口径50cmの大型品である。087は口縁が内湾気味に立つ。端部は反転し、丸くおさめる。口径38.6cm。088は外傾する口縁、089はわずかに内傾する口縁で、ともに端部は尖り気味におさめる。口径は20cm前後、090・091は外傾する口縁で、端部は引出し気味となる。092の口縁は内傾する。093・094は胴部片である。

15・16図には粗製土器の胴下半部から底部を載せた。15図は外面に条痕を施すもので、底部端まで行うものが多い。底部はわずかに上げ底か、平底である。16図の110～116は底部端が張り出すものだが、量的には少ない。128の底部には穿孔がある。

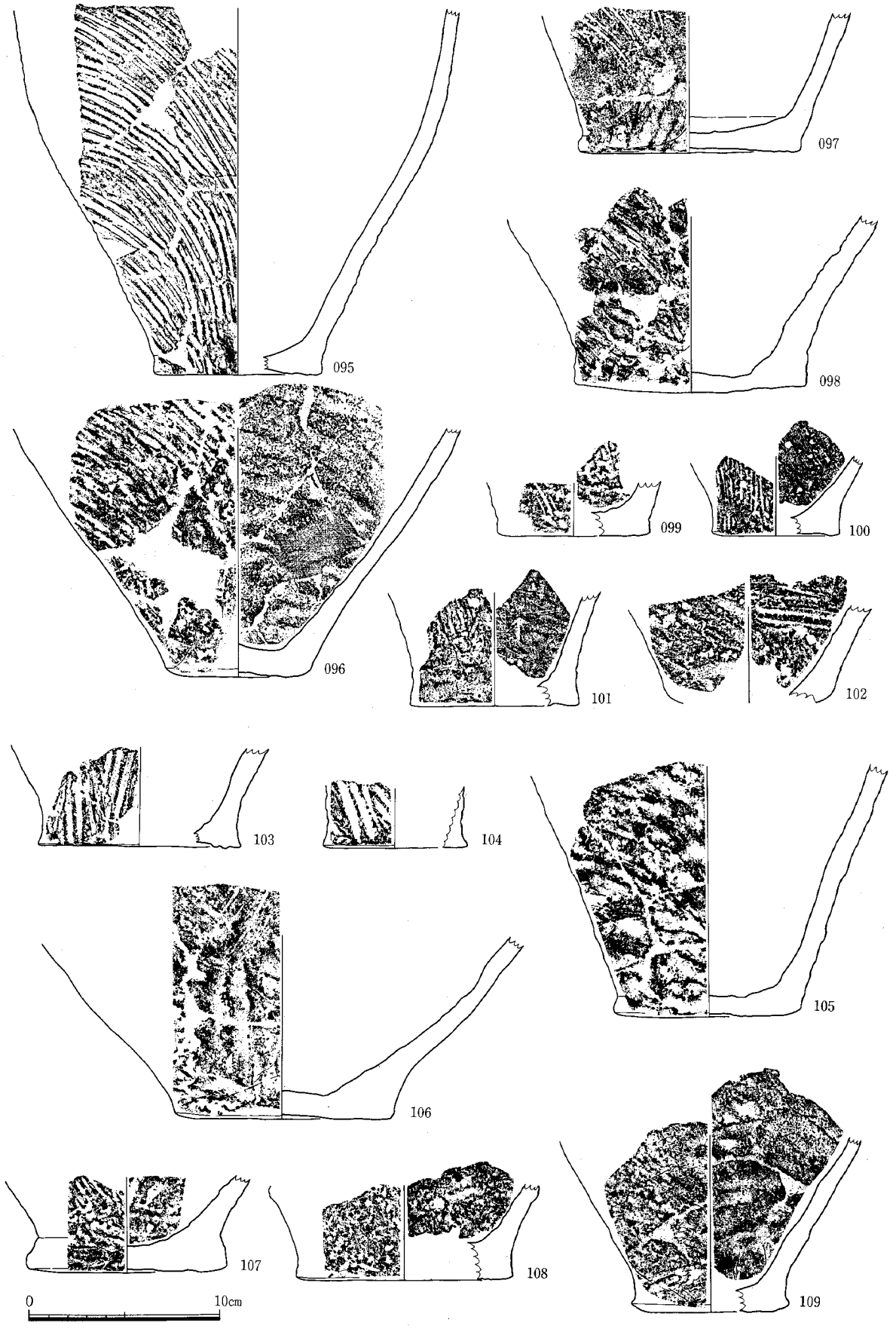
出土土製品（16図134～137）

134は粗製土器を打ち欠いて再利用した土製円盤である。径5.0cm、厚さ1.1cm。胎土には砂粒がきわめて多い。黄褐色。

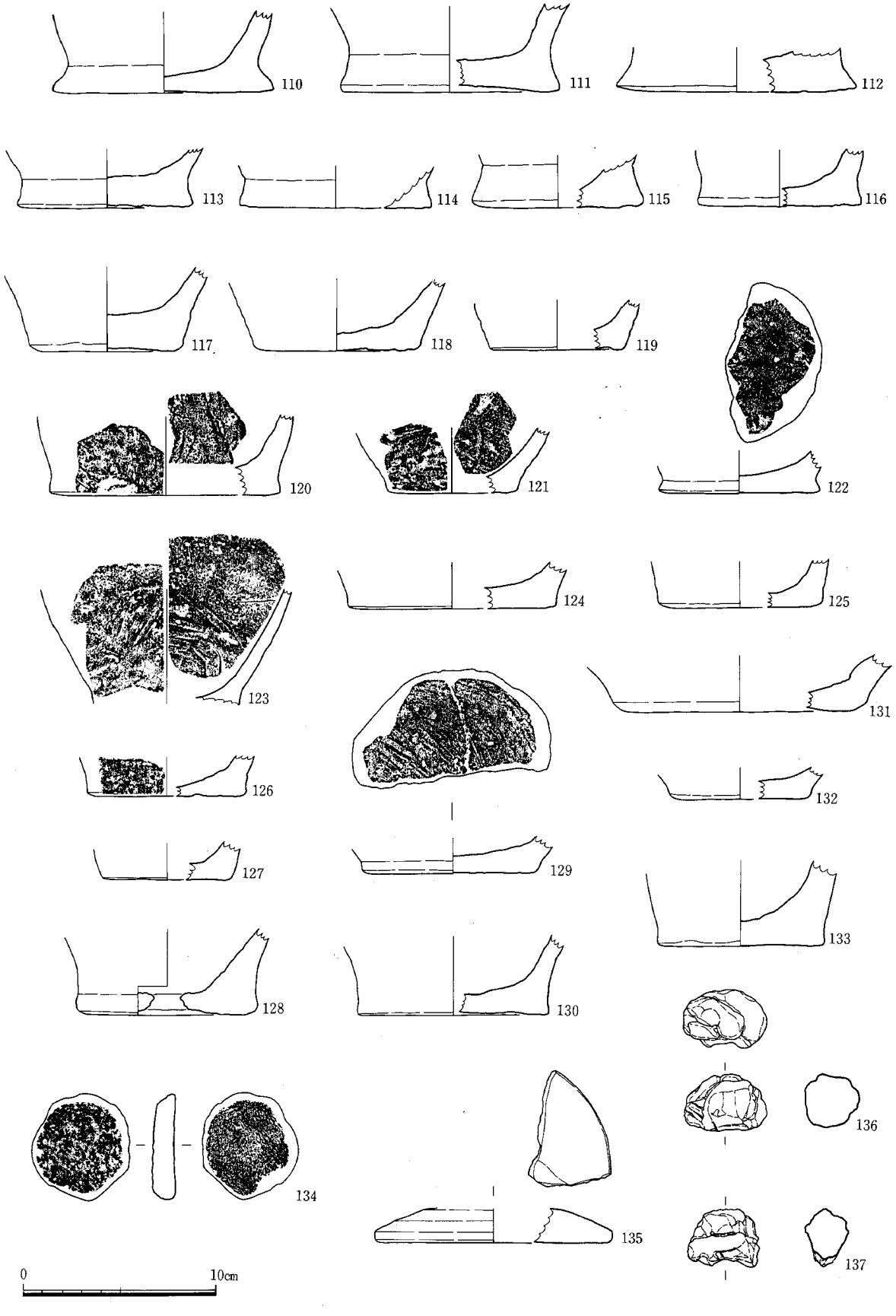
135は円盤形土製品。復元径12.4cm、厚さ1.8cm。胎土には白色粒などを多く含み、焼成良好、おも



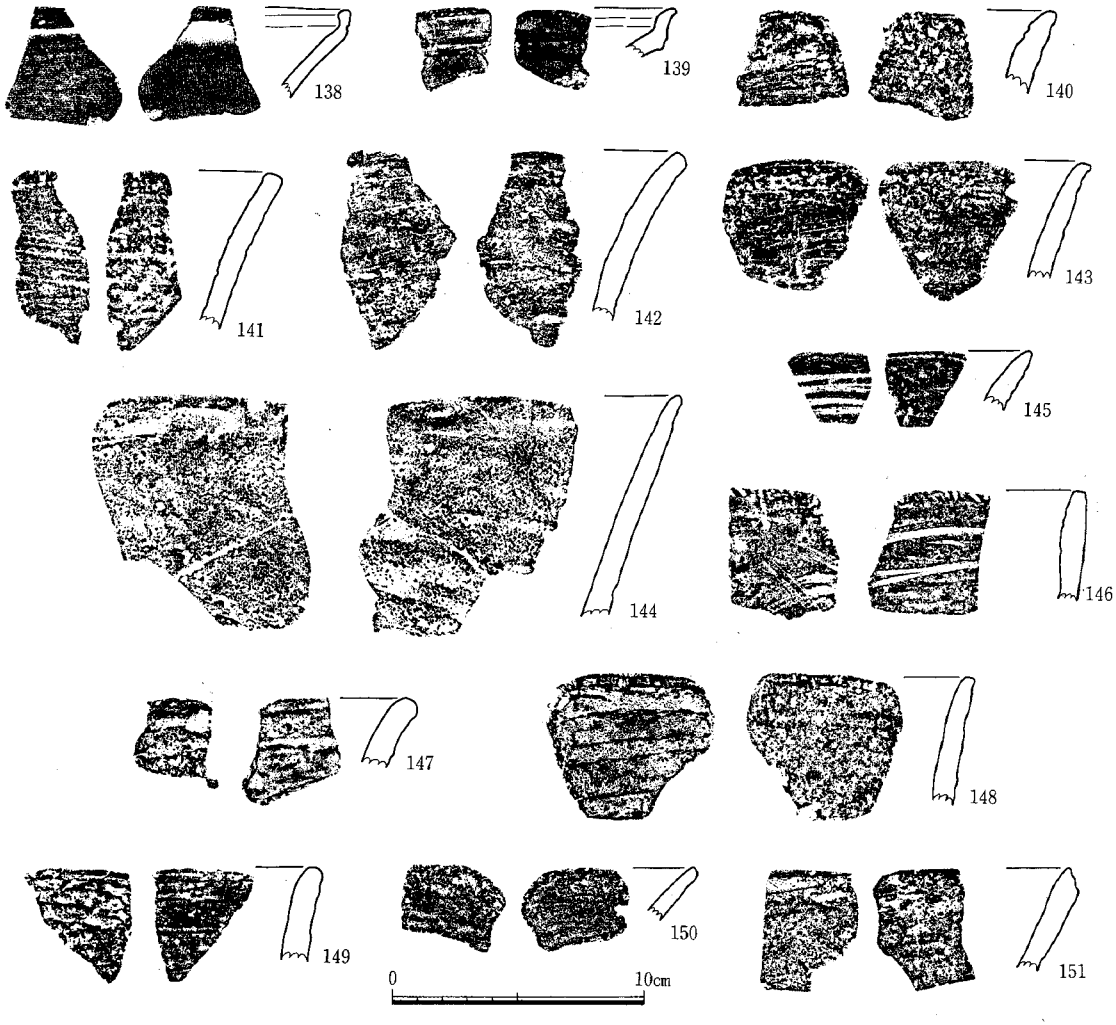
14図　8トレンチ出土土器実測図6（縮尺1：3）



15図　8トレンチ出土土器実測図7（縮尺1：3）



16図　8トレンチ出土土器実測図8（縮尺1：3）



17図　9トレンチ出土土器実測図（縮尺1：3）

に赤褐色を呈する。

136・137は粘土をこねて丸め、焼きあげたものか。136は紐状の粘土を丸め、一部は押しつぶし、何かの形を作り出そうとしたかのようにも見える。ともに胎土には白色粒を多く混じえ、赤褐色を呈する。

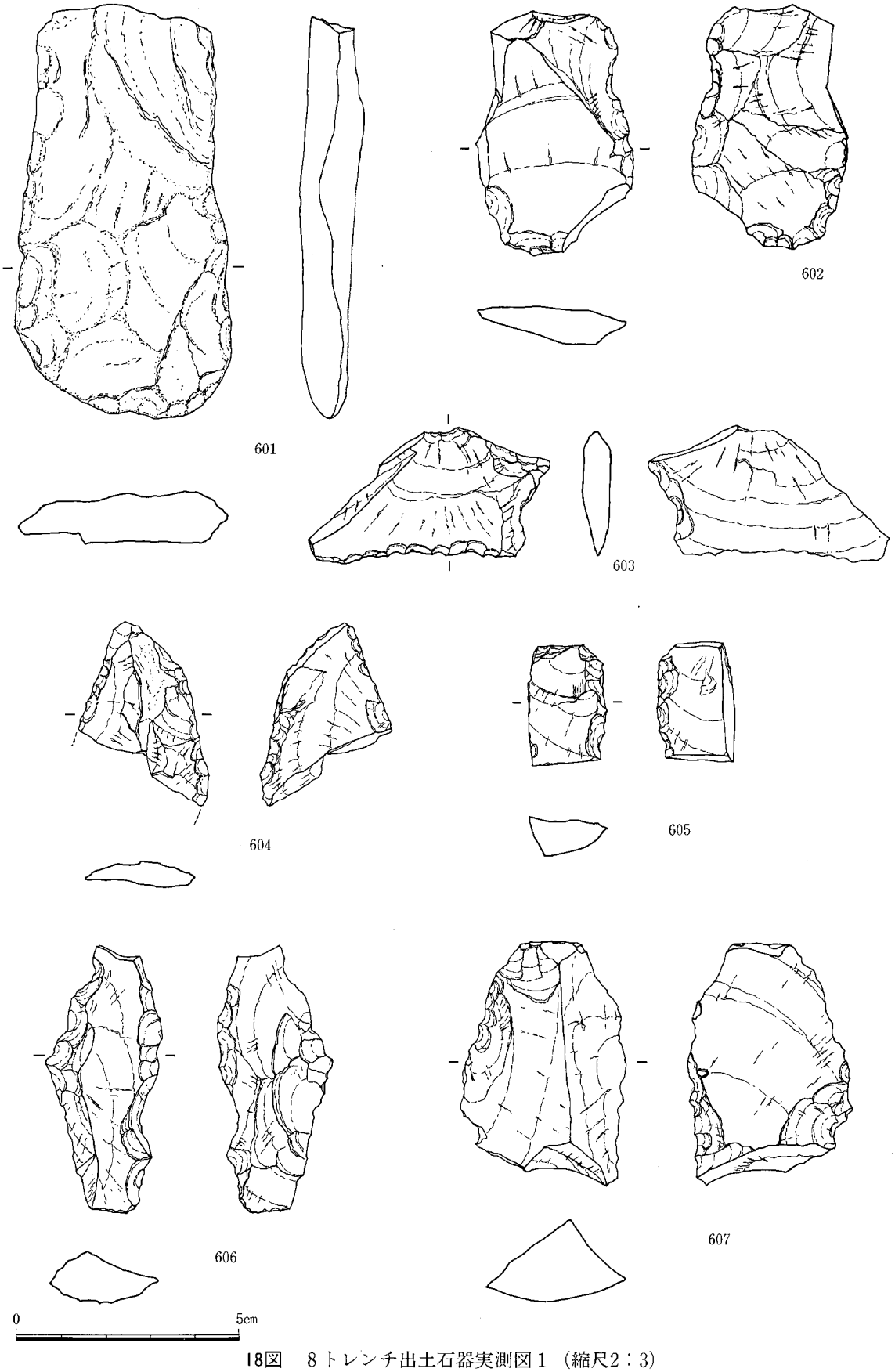
出土石器(18・19図)

縄文時代後期～晩期を中心とした石器が出土しているが、石斧、石鏃など定型的な石器のほか、剥片石器、剥片など不定型な石器が多い。また、旧石器、弥生時代に属する可能性のある石器も少量見られる。以下、主要な石器について簡単に説明する。なお、604・605・620は9トレンチ出土、以外はいずれも8トレンチ出土である。

601は玄武岩製の扁平な打製石斧である。全体に丁寧な剥離を施し整形しているが、表面は風化と使用により磨耗し、稜線は明確でない。刃部も使用により磨耗している。

602は質の粗いサヌカイトの剥片を素材にしたスクレイパーである。下端に片刃の、一側辺に両刃の刃部を作り出している。

603はサヌカイトの横長剥片を素材にしたスクレイパーである。下端に主要剥離面からの加工を加え、片刃の刃部をつくりだしている。また、側縁の一部にもノッチ状の加工を加えている。



18図　8トレンチ出土石器実測図1（縮尺2：3）

604は質の粗いサヌカイトの横長剥片を素材にしたスクレイパーである。右側縁を大きく剥離して整形し、両刃の刃部を作り出している。他の側縁は主要剥離面側からの小さな加工を施し、片刃の刃部を作り出しており、また、主要剥離面側に使用痕と考えられる微細な剥離が見られる。下端は折損しており全体の形状は不明であるが、周辺では磨製石鏃(639)など弥生時代前期の石器も出土しており、同時期の石鎌の欠損品の可能性も考えられる。

605は分厚いサヌカイトの剥片を分割して素材としたスクレイパーである。薄い側の側縁部に加工を加え、両刃の刃部を作り出している。

606はサヌカイトの横長剥片を素材とした石器で、両側縁に主要剥離面側から大きな加工を加え、細長く整形する。また、裏面の打瘤も除去し、全体に薄く整形されている。形態的には旧石器時代の三稜尖頭器に類似するが、先端部が欠失しており、尖頭部があったかどうか明確でない。周辺では当該期の遺物の出土例は少ないが、三稜尖頭器は通例単独で出土することも多く、この資料もそのような例であろうか。

607は断面三角形の分厚いサヌカイトの剥片を素材にしたスクレイパーである。主要剥離面の打面側両側に加工を施し、基部を整形している。片側側面に片刃の刃部を作り出している。

608は黒曜石の薄い縦長剥片を素材にして、主要剥離面側の基部と先端部に加工を加え、剥片の反りをより直になるように調整している。両側縁は使用によると考えられる微細な刃こぼれが観察できる。剥片鏃の可能性も考えられるが、ナイフ的用途も考えられる。

609は黒曜石の縦長剥片である。背面には自然面が多く残っている。一側縁には両面に小さな加工を施し、両刃の刃部を作り出し、他の側縁には使用によると思われる微細な刃こぼれが観察できる。

610は黒曜石の縦長剥片である。両側縁、打面に自然面が残されている。石材はやや粗質で脈が走っている。また、主要剥離面の打面寄りには二つの打瘤が残されている。主要剥離面と背面の剥離の方向は逆になっている。両側縁には使用による微細な刃こぼれが観察できる。

611は黒曜石の分厚い縦長剥片である。打瘤部分を折り取っている。石材には脈が走っており、やや粗質である。背面の剥離の方向は一定していない。一側縁にやや粗い使用痕が、また先端部には微細な使用痕が残されている。

612は黒曜石の縦長剥片である。背面の一部に自然面を残し、石材には脈が入っている。剥片の端部は折り取っている。両側縁には微細な使用痕が残されている。

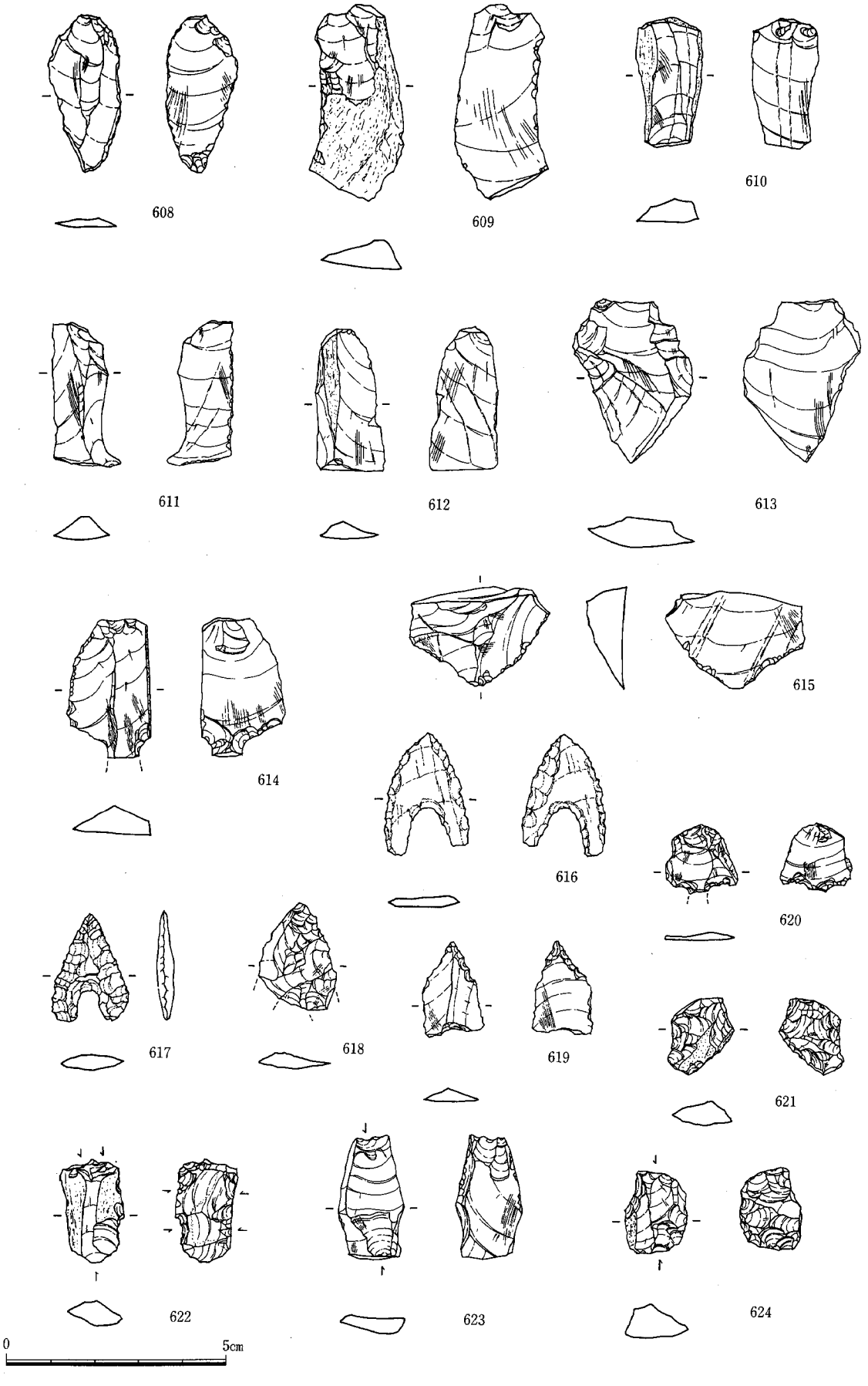
613はやや肉厚で幅の広い黒曜石の剥片である。石材には一部脈が観察される。背面の剥離には階段状の稚拙な剥離が見える。両側縁に微細な使用痕が残されている。

614はやや厚い黒曜石の縦長剥片を素材にしたもので、両側縁からノッチをいれ、剥片の先端部を折り取ったものである。このような技法は620のような剥片鏃未成品にも見ることができ、剥片鏃製作に一般的なものであったと思われる。この資料には片側の側縁に微細な使用痕が残されておりナイフ的な用途にも供されたものであろう。

615は分厚い黒曜石の剥片の先端部を素材としたもので、石材には脈が残されている。スクレイパー的な用途に供されたものと思われ、端部には刃こぼれが見られる。

616は薄いサヌカイトの剥片を素材とした剥片鏃で、表裏ともに主要剥離面が大部分残されている。両側縁から丁寧な剥離を施し、全体を整形し、刃部は鋸歯状に作り出し、下端部に抉りをいれることによって脚を作り出している。

617は灰色の黒曜石を素材とした打製石鏃である。表裏全体を丁寧に剥離し整形している。表面は全体に薄い風化膜でおおわれている。刃部は鋸歯状で、側面観はジグザグを呈している。



19図　8トレンチ出土石器実測図2（縮尺2：3）

618は薄い黒曜石の剝片を素材にした打製石鏃の未成品である。幅の広い剝離でほぼ全体を整形しているが、表面の一部には素材の主要剝離面が残されている。右の脚は二次的に折れているが、左側の脚は、右斜め上方からの整形のための剝離が脚までおよび、結果的に欠失している。失敗作であるが実際の使用にはさほど影響はなかったものと思われる。

619は灰色透明の黒曜石の薄い剝片を素材とした剝片鏃である。背面の稜線の位置を尖端部とし、丁寧に整形をおこなっているが、側縁部は素材のままである。また、下端にわずかな抉りをいれ、脚を作り出している。

620は黒曜石の薄い剝片を素材にした剝片鏃の未成品である。614と同様に両側から抉りが入れられ、下半部が折り取られている。打瘤の脇から背面にかけて整形を目的とした剝離が見られるが、全体には及んでいない。

621は黒曜石の分厚い剝片を素材とした打製石鏃の未成品である。背面の一部に自然面が残されているが、整形のための剝離はほぼ全面に及んでいる。しかし、上半が整形作業の過程で折損し、製品化をあきらめたものであろう。

622は黒曜石製のいわゆる楔形石器である。背面の一部に自然面が残されている。上下、左右の相対する方からの剝離が見られるのが特徴的である。

623は黒曜石製の楔形石器で上下両側からの剝離が見られる。

624は黒曜石の分厚い素材を使用した楔形石器で、上下両側からの剝離が見られる。裏面は縁辺からの剝離が全体をおおっている。

4－3－3　その他の出土遺物

出土土器（20～22図）

20図152～161は精製土器である。

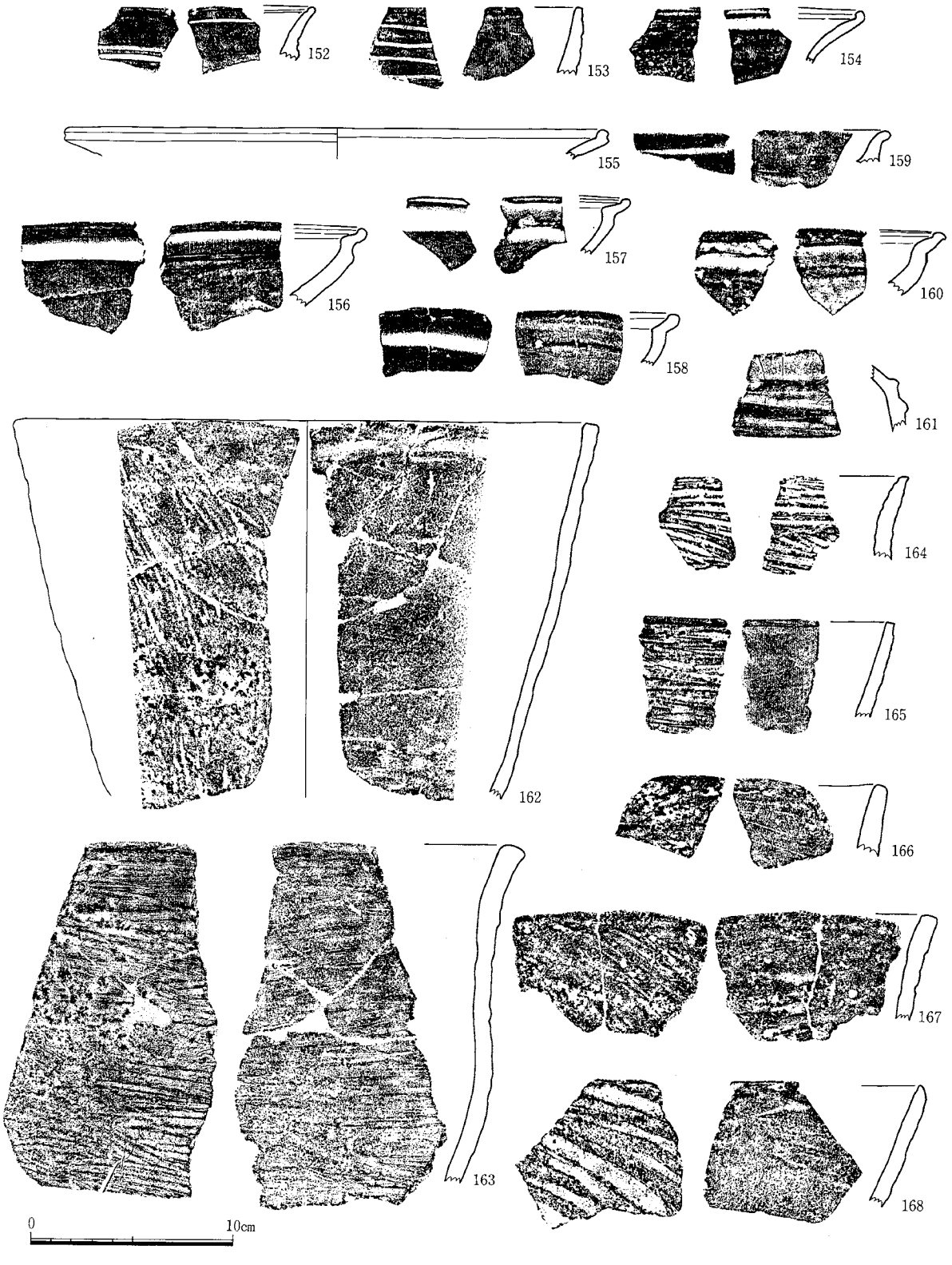
152は口縁端内面に1条、胴屈曲部に2条の沈線をめぐらす浅鉢。153は口縁帯に沈線を施す深鉢。ともに8トレンチに類がある。154・155は大きく外反する口縁の端部が丸く立ち上がる鉢である。156～160は晩期後半の浅鉢で、丁寧なヘラ磨きを行う。焼成良好、黒～黒褐色を呈するものが多い。161は注口土器の肩部片であろうか。丸みをおびた突帯が2条めぐり、凹点も施す。胎土には白色粒が多く、灰黒色を呈する。焼きはあまい。後期。

162～170は粗製土器である。

162～168は内外面に条痕を施す。条痕の施文方法、口縁端部の作りは様々である。162は口縁が胴部から直線的に開く。口径29.3cm。163は胴上部が屈曲し、口縁が外傾する。いずれも外面に煤が付着し、また暗褐色を呈するものが多い。

21図の169～171は口縁部が直立する深鉢である。外面はやや粗いタッチのヘラナデ調整を行う。170の外面は条痕に見えないこともない。いずれの胎土にも白色粒が多く、暗褐～灰黒色を呈する。171の焼きは良い。

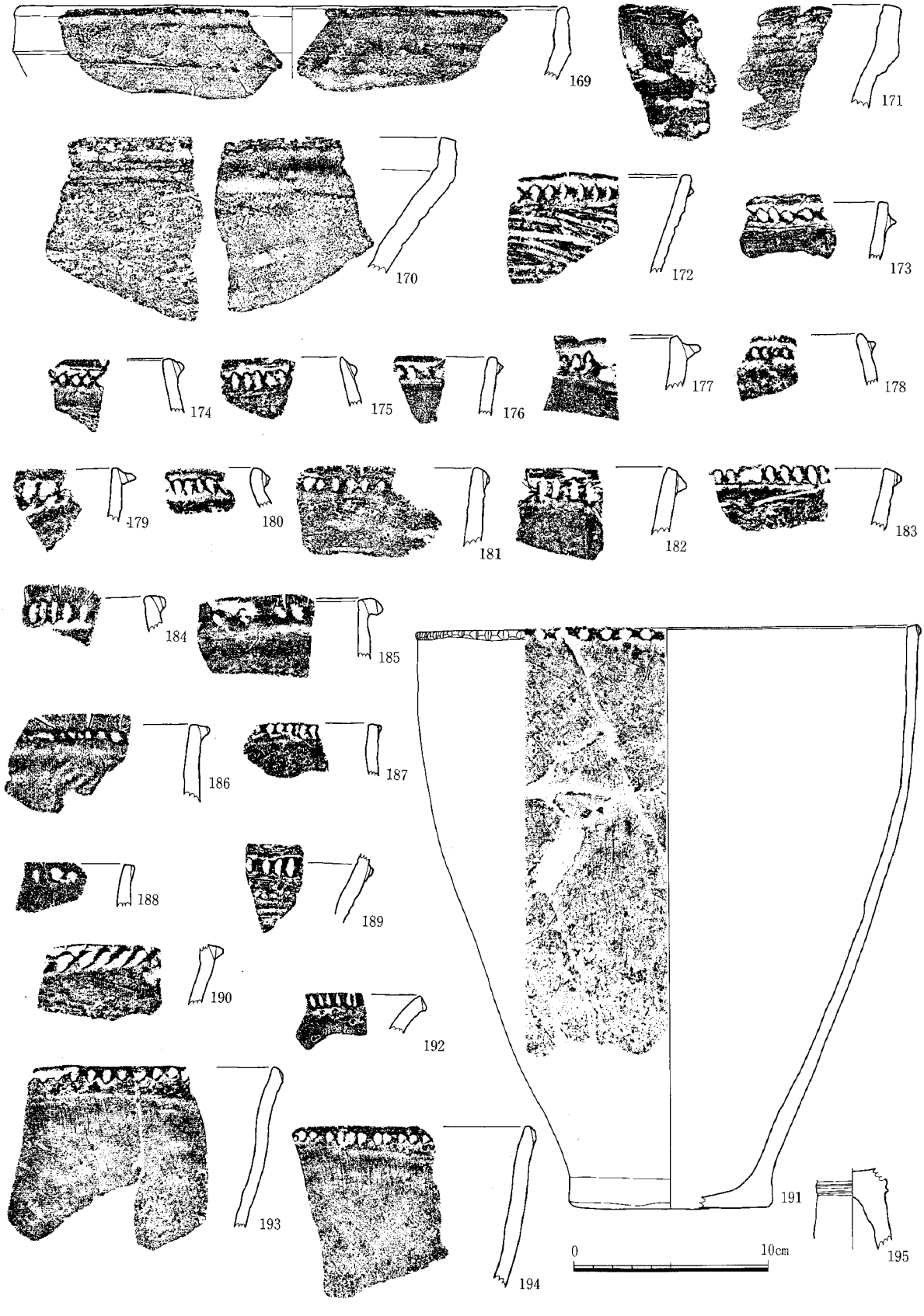
172～191は刻目突帯文土器である。口縁端から下がって突帯を設けるもの(172～178)、口縁端に斜めに突帯を設けるもの（179～183)、口縁端に水平に突帯を設けるもの（184～186)、口縁端に直接刻目を入れるもの（187・188・191）がある。189・190は胴部の刻目突帯部分である。外面には条痕をほどこすが、ナデで仕上げているものも多い。胎土には砂粒を加えるが、先の粗製土器ほど多くなく、色調も黄褐色のものが多い。191は口径26.2cm、器高29.8cmをはかる。外面には煤が付着し、その下半



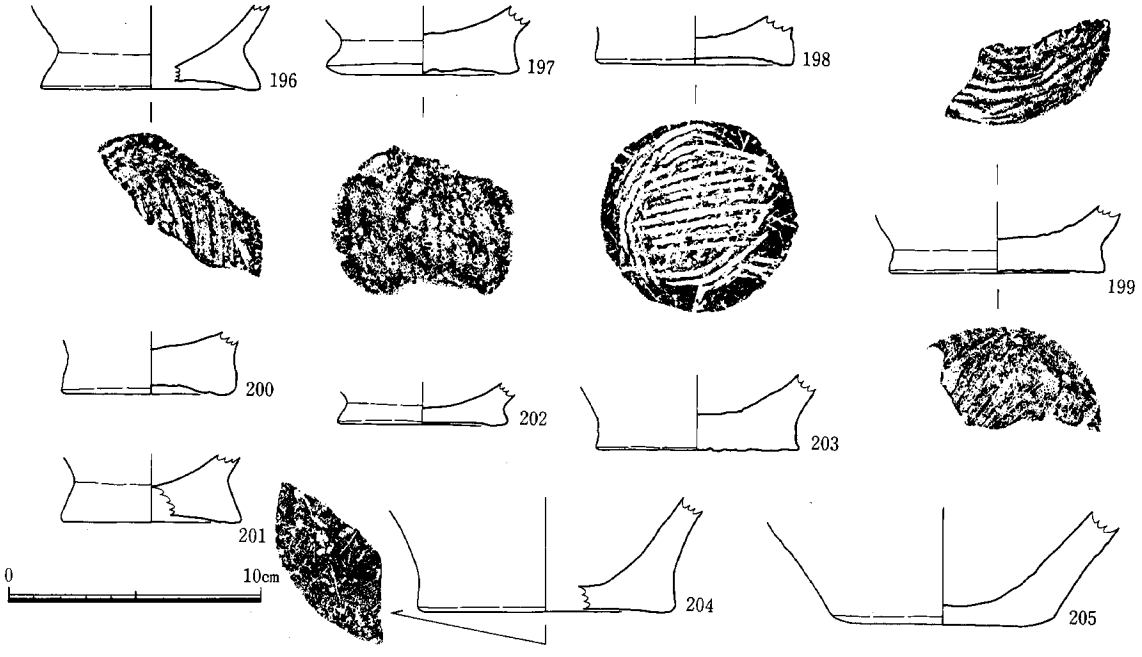
20図　その他の出土土器実測図１（縮尺1：3）

は摩滅が著しい。暗褐色～赤褐色を呈する。

192～195は弥生土器である。191～194は、如意形口縁の端部に刻目を施す板付Ⅰ式の甕である。残



21図　その他の出土土器実測図２（縮尺1：3）



22図　その他の出土土器実測図３（縮尺1：3）

存部はナデ調整を行う。195は高杯で、杯部との境に２条の突帯をめぐらす。胎土には白色粒が多く、赤褐色を呈する。全体に摩滅が著しい。前期。

22図は底部で、196～202は刻目突帯文土器に伴うものであろう。底部端は張り、上げ底をなすものも多い。203～205は弥生土器の底部である。

出土石器(23・24図)

その他の石器も、８・９トレンチと同様縄文時代後～晩期を中心に見られる。定型的な石器は少なく、黒曜石、サヌカイトの定型的でない剥片石器が多い。また、一部弥生時代の石器も見られる。以下、主たる石器について簡単に説明する。

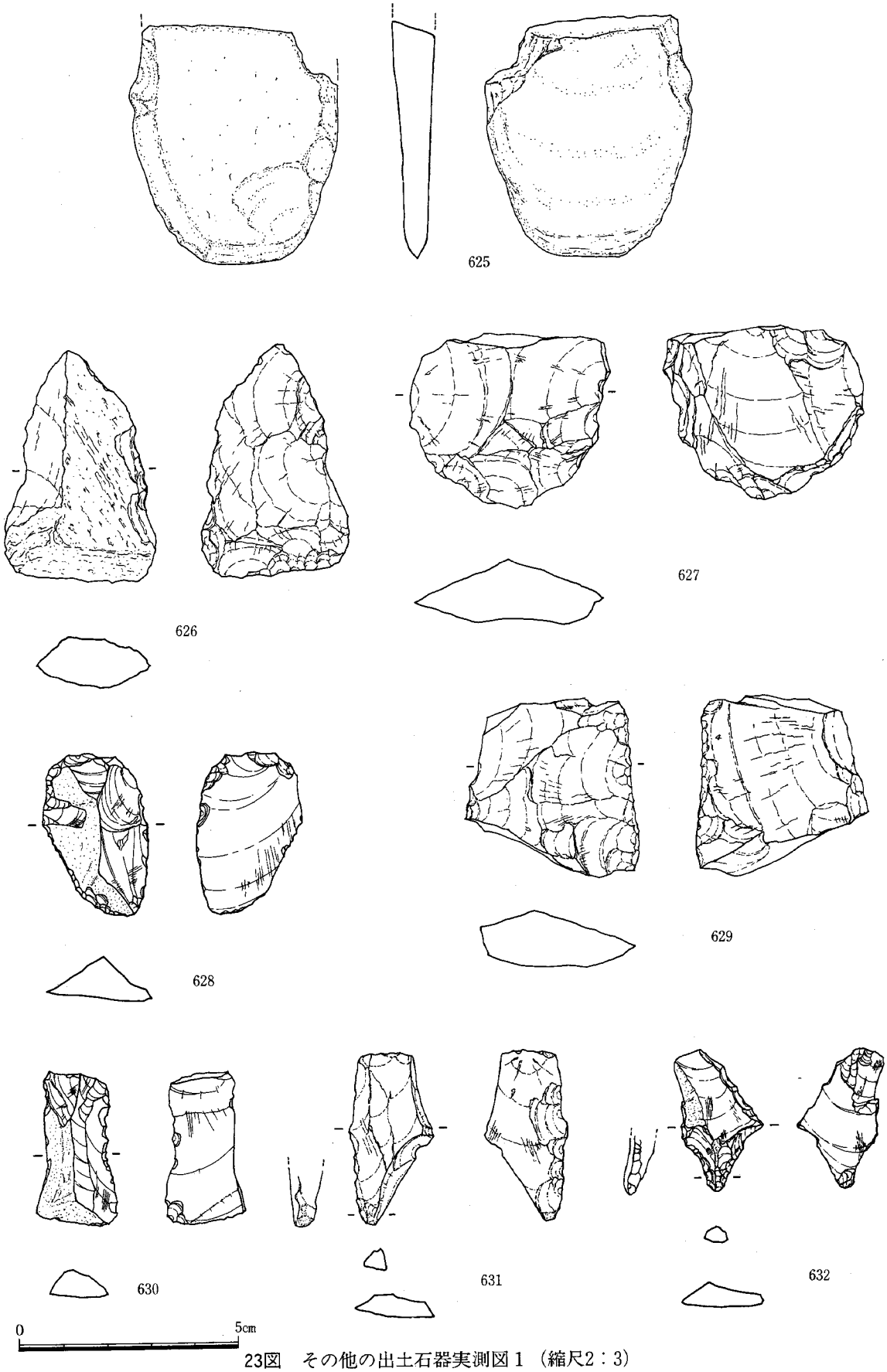
625は輝石安山岩製の打製石斧である。大型の縦長剥片に簡単な加工を加え整形しているが、表面は風化が激しく、剥離痕は明確ではない。基部は欠損している。刃部は意図的なものか、あるいは使用の結果によるものかわからないが、磨製石斧のように磨耗している。0140出土。

626は質の粗いサヌカイトの分厚い剥片に加工を加えたものである。背面には自然面が広く残されている。側縁および下面にスクレイパー様の加工が見られるが、裏面の一部に大きな剥離面も観察でき、横長剥片を取るための石核かもしれない。0076出土。

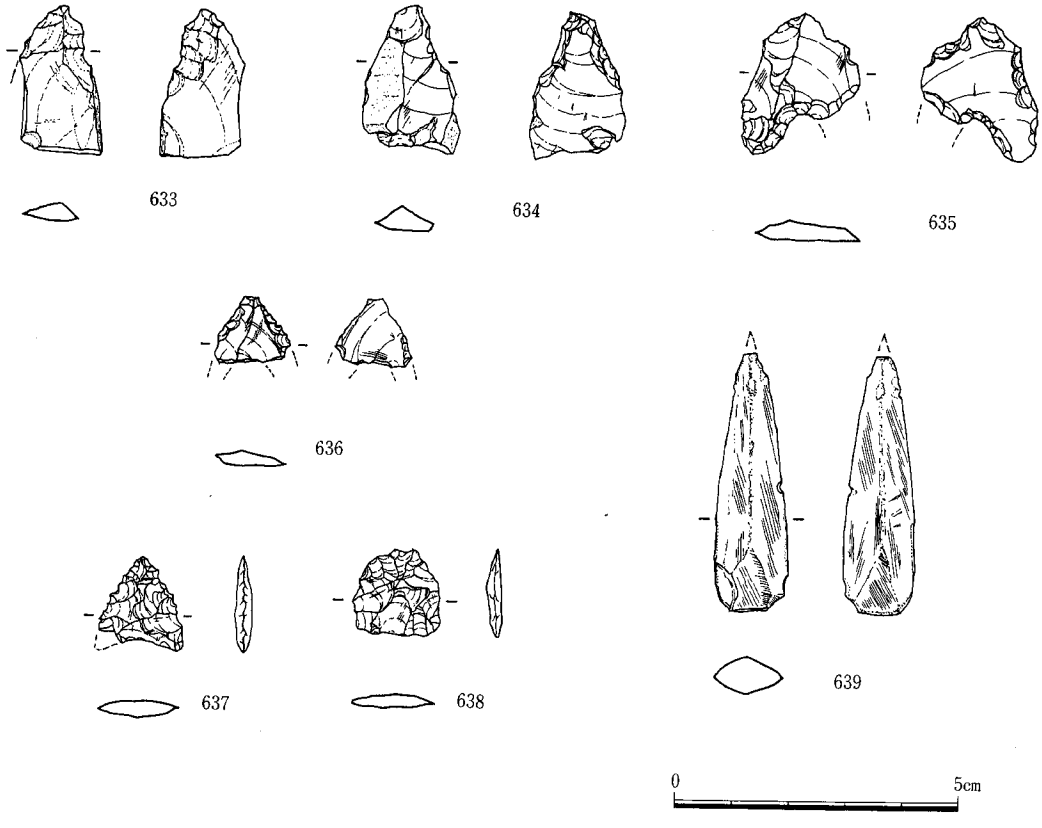
627は半円形をしたサヌカイトの表裏全面に大小の剥離が残されている。側縁部の比較的小振りの剥離にはスクレイパーの刃部を作り出す意図も感じられるが、表裏の大きな剥離は整形のためというより、剥片の剥離が目的と思われる。0140出土。

628は良質の黒曜石の縦長剥片に加工を施したものである。背面には自然面が一部残る。主要剥離面の打瘤は意図的に除去され、剥片の反りを修正している。側縁の一部には微細な加工が施され、他の側縁には細かい使用痕が残されている。0127出土。

629はやや大型のサヌカイトの横長剥片を素材としたもので、裏面には主要剥離面が残され上下両端部を欠く。片側側縁に上下両面に丁寧な加工が施され両刃の刃部を作り出したスクレイパーである。



23図　その他の出土石器実測図１（縮尺2：3）



24図　その他の出土石器実測図２（縮尺2：3）

0066出土。

630は黒曜石のやや分厚い縦長剥片を素材とした剥片石器である。背面には自然面が多く残っており、脈が見られる。打瘤の膨らみ部分を除去し剥片の反りを修正している。一側縁に使用痕と思われる微細な剥離がみられる。遺構検出面出土。

631はサヌカイトの縦長剥片を素材にしたドリルである。素材を斜めに折り尖端部を作り、裏面にやや浅く加工を加え全体を整形している。尖端部は穿孔にともなう回転運動で強く磨耗している。遺構検出面出土。

632は黒曜石の縦長剥片を素材にしたドリルである。主要剥離面の打瘤は二次的に除去されている。斜めに数回の粗い加工を加えて尖端部を作り出し、両側に微細な加工を施し断面を円形に近くしている。また、尖端部は穿孔にともなう回転運動による微細な刃こぼれが観察できる。基部側面には刃潰しの加工が施されている。遺構検出面出土。

633はサヌカイトの薄い横長剥片を素材にした剥片鏃の未成品である。剥片端部の厚い側縁を表裏両面剥離し、もう一側は背面のみを剥離し尖端部を作り出している。製作途中左側面を折損し、製品化しなかったものであろう。0076出土。

634は黒曜石の縦長剥片を素材にした剥片鏃の未成品である。背面には自然面が多く残り、下端にはまた粗質の部分が認められる。このため尖端部のみを作り出してみただけで、製品化しなかったものであろう。0022出土。

635は薄い黒曜石の縦長剥片を分割して素材とした剥片鏃である。主要剥離面と背面の一部にわずかに加工を加えるだけで整形し、下部に抉りを入れることによって脚を作り出している。しかし、脚の

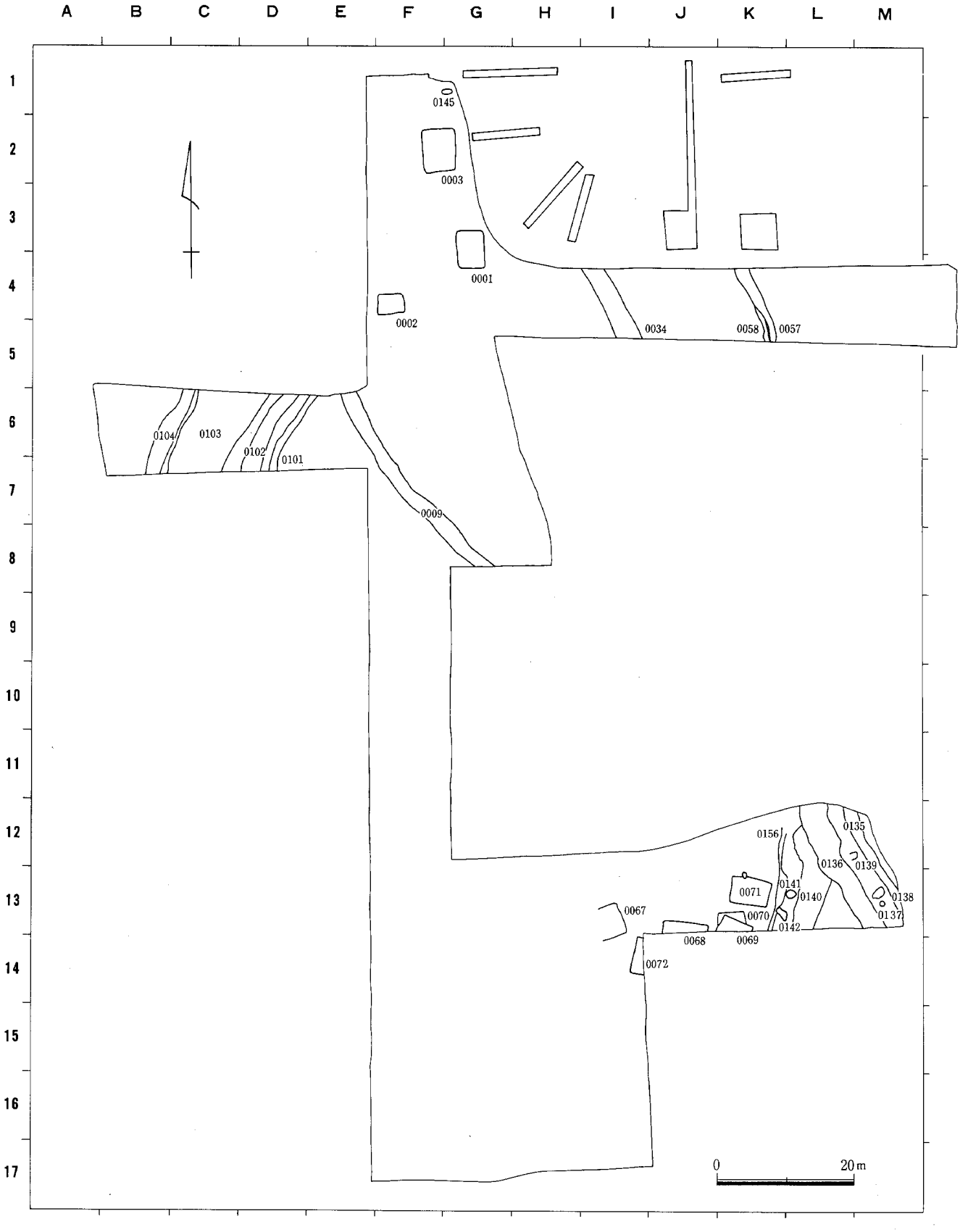
片側は二次的に折損している。0012出土。

636は不定型の黒曜石剥片を素材にした剥片鏃である。背面のみに加工を加え整形をしているが、尖端部は欠失している。また、下端から抉りを入れ脚を作り出しているが、折損している。0091出土。

637は黒曜石の打製石鏃である。表裏全面に丁寧な整形剥離を加え、刃部にはさらに細かな鋸歯状の加工を行なっている。断面は整ったレンズ状を呈し、刃部側面観はジグザクを呈す。下端に浅いアーチ状の抉りを入れ脚を作り出しているが、片側は欠損している。0006出土。

638は黒曜石製の打製石鏃である。表裏両面に浅く幅広の整形剥離を施しているが、全体にずんぐりとして、先端部は尖っていない。また、脚部も作り出していない。0012出土。

639は粘板岩製の大陸系磨製石鏃である。断面形はやや丸みをもった菱形で、稜線は鈍い。表面は風化しているが、長軸のやや左斜め方向に研磨痕が残されている。無茎であるが、着柄のため基部の表裏を斜めに削りだしている。弥生時代前期末頃に所属するものである。0065出土。



25図　古墳時代遺構配置略図（縮尺1：800）

4－4　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構としては竪穴住居９基、土坑８基、溝12条がある(25図)。竪穴住居は北と南に分かれ、土坑は南の住居群に近接するものが多い。溝は住居を避けるように西北、あるいは北北東に走る。平行して走る溝が多い。溝は0009溝を除き直接破壊の対象とならなかったため、トレンチを開け、土層を確認するにとどめた。

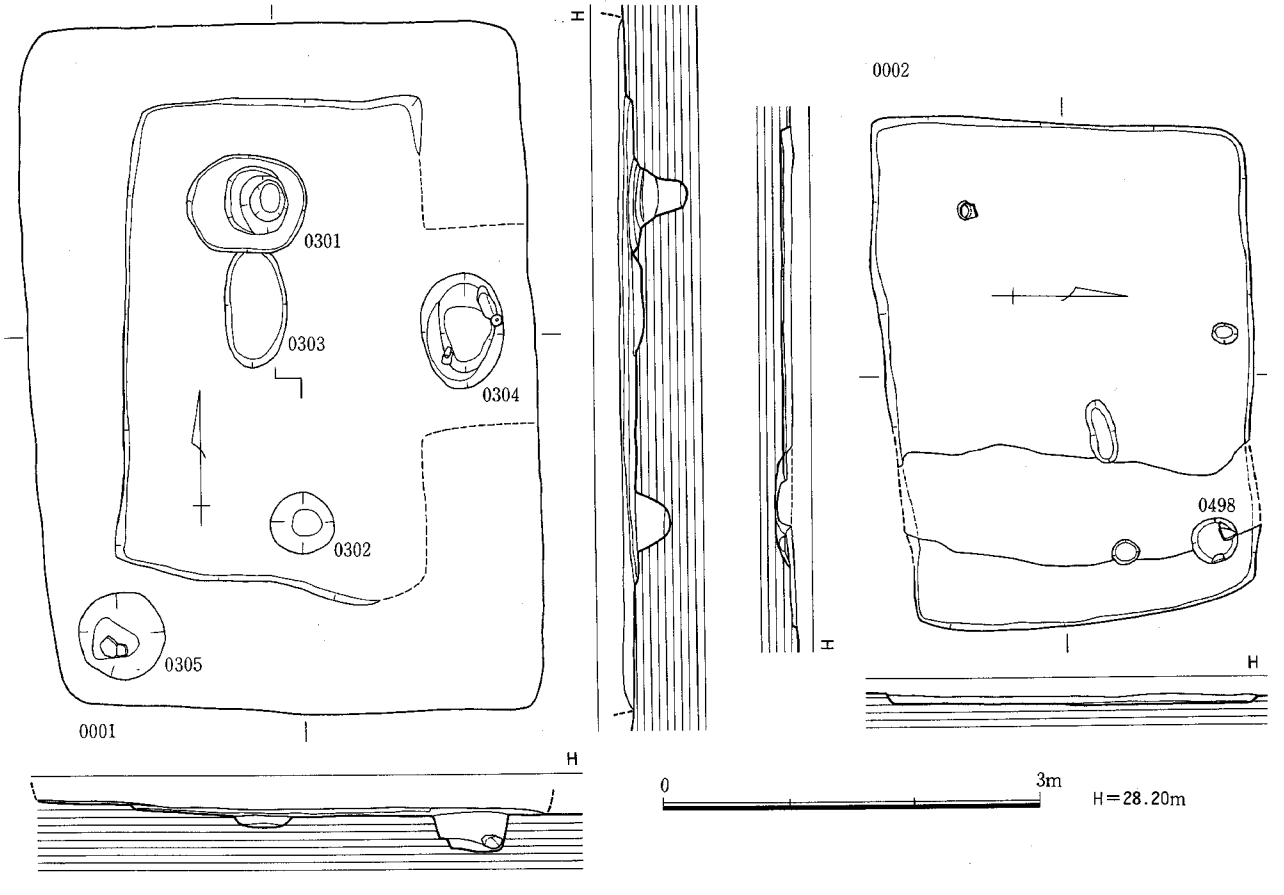
4－4－1　竪穴住居

発掘調査区内で検出した竪穴住居は９基あり、90～100m離れた北地区と東南地区とに分かれる。北地区は0001・0002・0003の３基、また東南地区は0067・0068・0069・0070・0071・0072の６基からなる。北地区の住居間は7～8m離れているが、東南地区の住居間には切り合いが見られ、また切り合わない住居の間も2～3mと近接する。住居の遺存状態は良くなく、周壁をわずかに残すものがほとんどである。

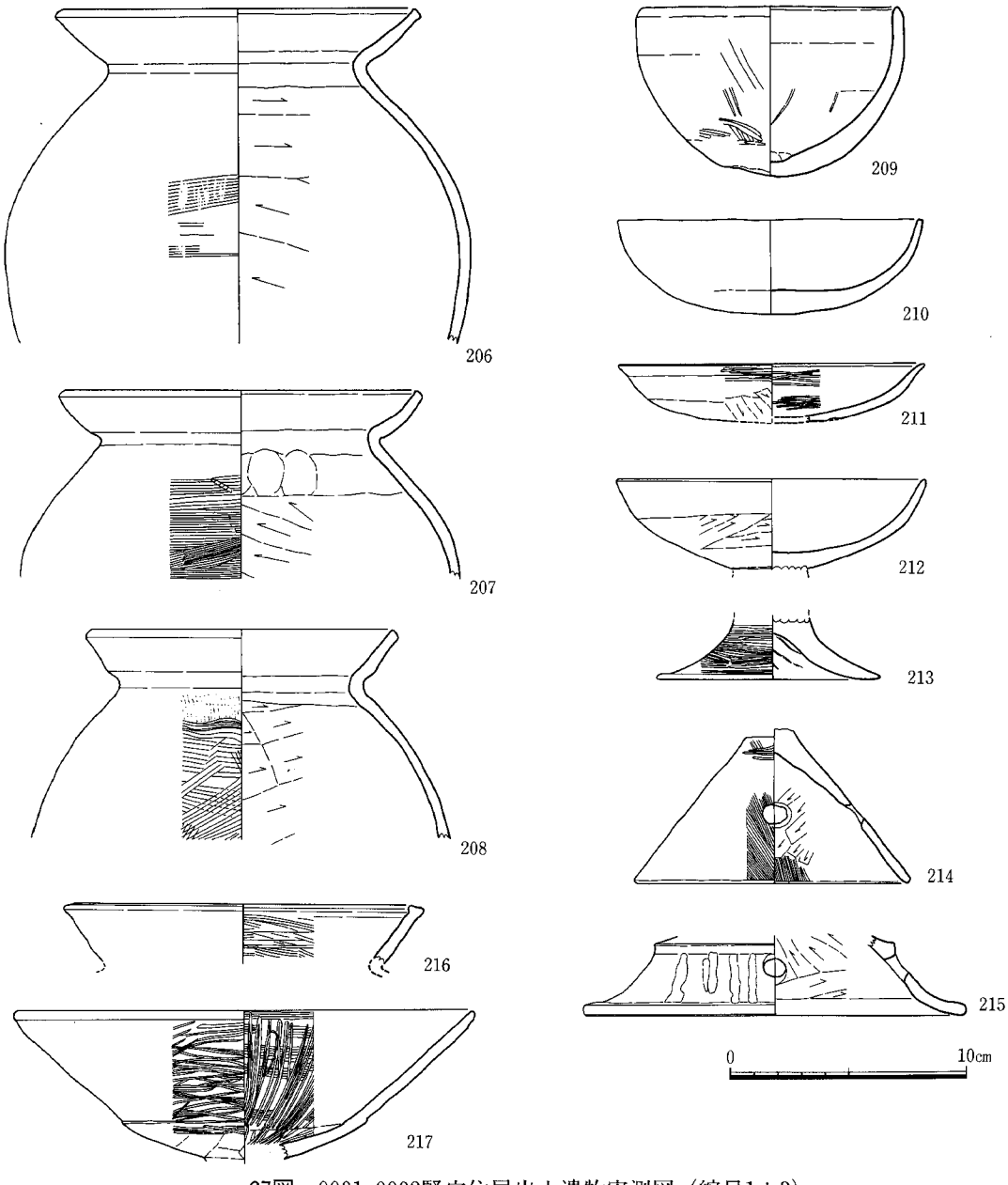
北地区

0001竪穴住居（26図、図版8-1）

G－３・４区。南北長5.45m、東西幅4.05mの長方形の平面を呈し、四隅は若干丸みをおびる。周壁



26図　0001・0002竪穴住居実測図（縮尺1：60）



27図　0001・0002竪穴住居出土遺物実測図（縮尺1：3）

下の四面に幅60～100cmの地山削り出しのベット状遺構を設けるが、削平が著しく周壁そのものはほとんど残らず、地山上の汚れでベット状遺構が確認できるにとどまる。とくに住居東側は削平が大きく、床面がかろうじて残る状態である。検出面から床面までの深さは西側で4cm程度、覆土は黒色土である。床面には２本の主柱穴（0301・0302)、炉（0303)、屋内土坑（0304）がある。主柱穴は炉を挟み約2mの間隔をもつが、柱筋は住居の長軸から西にずれる。北柱穴（0301）は平面95×76cmの楕円形を呈し、段を作って底に至る。深さは45cm。柱穴の形態と炉を一部破壊する状態から、住居廃棄時に柱を抜き去った可能性がある。南柱穴（0302）は径50cm、深さ30cmをはかる。炉は床面中央やや西北よりに設け、北柱穴と接する。長さ100cm弱、幅50cmの南北に長い楕円形で、深さは13cm。炉内覆土は暗褐色土に炭・焼土が混じる。屋内土坑は東周壁中央下のやや北寄りに設け、南北長93cm、東西幅65cmの楕円形状プランを呈する。南北のベット状遺構に挟まれるが、その端部は削平で確認できない。深さ32cm、坑内には段が付く。覆土は灰褐色。西南隅のベット状遺構には径65cm、深さ29cmのピット（0305）

がある。

出土遺物（27図206～215）　遺物は屋内土坑、0305ピットなどから出土した。実測したのはすべて土師器である。

206～208は布留系の甕である。206・207は復元口径15.3cm前後、胴部の張りが大きく、口縁部はわずかに内湾しつつ外傾する。端部は横ナデで比較的端正に仕上げ、内面には浅い稜ができる。とくに206はその傾向が強い。内面の篦削りは206が頸部下近くまで、207は肩部近くまで下がる。外面はともに刷毛目調整で、206はその上に横ナデ調整を、また207は肩部に櫛状工具による列点文を施す。208は復元口径13.2cm、胴の張りは小さく、頸部はナデて大きくくぼむ。口縁部は直線的に外傾するが、先の２個体に比べるとその開きは小さい。端部は丸くおさめる。内面の削りは頸部下近くまで行い、外面はやや粗い刷毛目を縦から横そして斜めに行い、その肩部には２本１単位の波状文を２周めぐらす。206～208いずれの胎土にも多量の白色粒と若干の金雲母、あわせて207と208には赤色粒が混じる。色調は206・207が黄褐色、208が淡赤褐色を呈する。208の口縁には黒斑らしき跡がある。

209は口径10.7cm、器高7.1cmの椀。半球形で、口縁端部はやや内傾し、丸くおさめる。外面下半がヘラナデ、内底の一部に指押えを行う他は、ナデもしくは横ナデで仕上げるが、調整が不十分で、器表にはひびや凹凸がみられる。胎土はほぼ精良、焼成良好、くすんだ赤褐色を呈する。

210・211は鉢である。210は丸い底部から口縁部が直立気味に開くもので、口径12.8cm、器高4.0cm。内面はナデもしくは横ナデ、外底はヘラナデ、その上部は横ナデで仕上げるが、表面のしまりが悪く縦のひびやあばたが著しい。まれに白色粒が入った精良な胎土で、焼成良好、赤褐色を呈する。外底には黒斑がある。211は復元口径12.9cm、器高2.5cmの浅い鉢で、口縁部は薄く外に引き出す。内面及び外面上半部はヘラ研磨、下半はヘラ削りをそのまま残す。胎土には微砂粒を入れ、焼成良好、赤褐色を呈する。外面には口縁から底部にいたる黒斑がある。

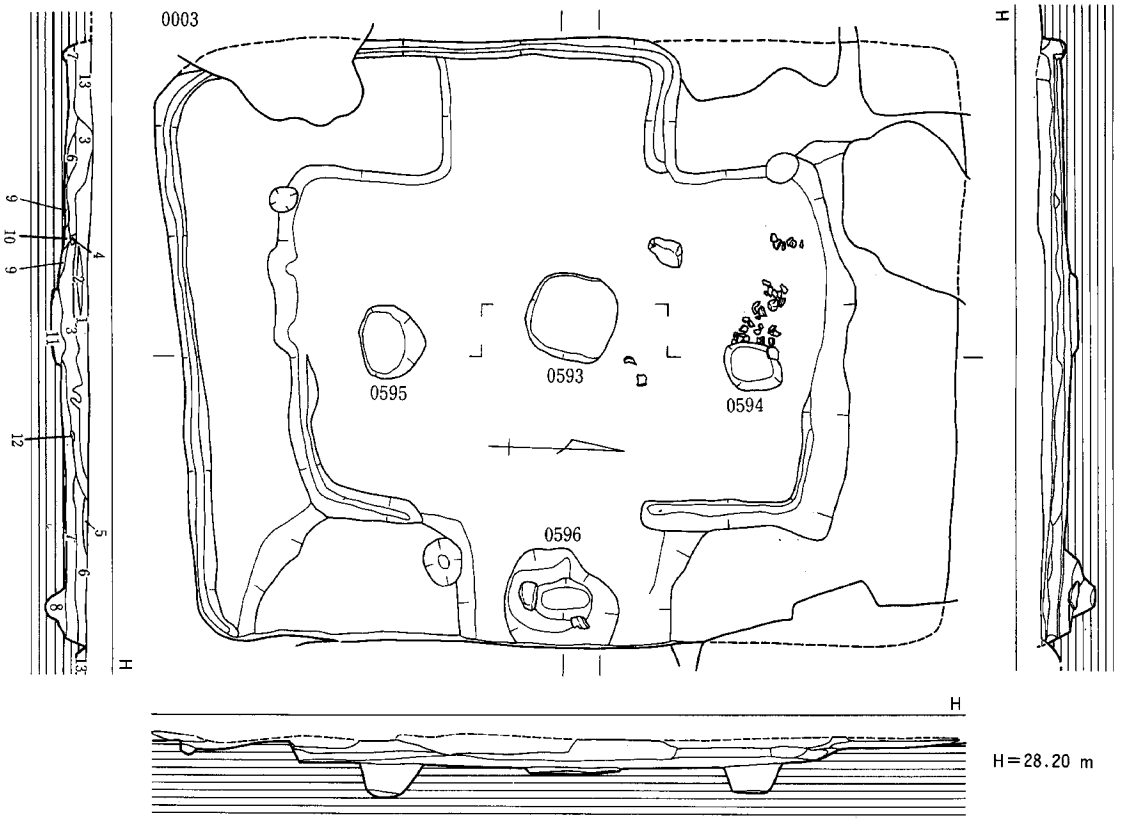
212は口径13.0cmの高杯杯部。210の鉢とほぼ同様の器形である。外面中位にヘラ削りを残す他はヘラ研磨で仕上げる。胎土は精良で、白色微粒、金雲母とともに赤色粒の混じりがきわめて多い。焼成良好、明赤褐色を呈する。口縁内面に黒斑がある。全体に摩滅している。213は高杯脚部であろうか。直接は接合しないが、中実の筒部を介して、212と接合する可能性もある。外面は横方向の連続するヘラ研磨を行う。裾部分にはそれ以前の縦刷毛目が部分的に残る。内面は横ナデで、上部には絞り痕がある。胎土は精良、微細な白色粒、赤色粒、金雲母が混じる。焼成良好、赤褐色を呈する。

214は器台脚部。薄手の端正な作りで、中位に焼成前の円形透かしを設ける。外面は細かい刷毛目、内面はヘラ削りの後横ナデで仕上げているようである。全体に摩滅が進んでいる。胎土は精良、焼成良好、赤褐色から赤みをおびた黄褐色を呈する。

215は鼓形器台。側面に焼成前の円形透かしを設ける。内面は丁寧なヘラ削り、他は横ナデ調整で、外面にはさらに縦方向の暗文風のヘラ磨きを加える。胎土には白色粒、赤色粒、金雲母が多く混じり、焼成良好、黄褐色から褐色を呈する。若干摩滅しているが、全体に薄手で、シャープな仕上げとなっている。

0002竪穴住居（26図、図版8-2）

Ｆ－４区。東西長4.06m、南北幅3.04mの長方形プランをもつ住居で、北側両隅が丸みをおび、北周壁長は3.60mと短くなる。東周壁に沿って近代溝が切り込み、住居を破壊している。検出面から深さ5～8cmで床面に達する。床面の東北隅には径35cm、深さ32cmのピット（0498）と、中央やや東北寄りに長さ50cm、幅20cm、深さ5cmの浅い楕円形土坑がある。この住居に伴う遺構であるが、炉あるいは主



1　黄みをおびた暗灰褐色砂質土
2　灰黒色砂質土
3　黒褐色土
4　灰褐色砂質土ブロック
5　暗褐色土
6　灰褐色土
7　灰褐色土に黄色土ブロック混じる
8　灰褐色土（6・7にくらべしまりがよい）
9　汚れた黄色土
10　褐色土ブロック
11　汚れた黄色土に黒褐色・炭混じる
12　黄色土ブロック
13　青灰色砂質土

0　3m

28図　0003竪穴住居実測図（縮尺1：60）

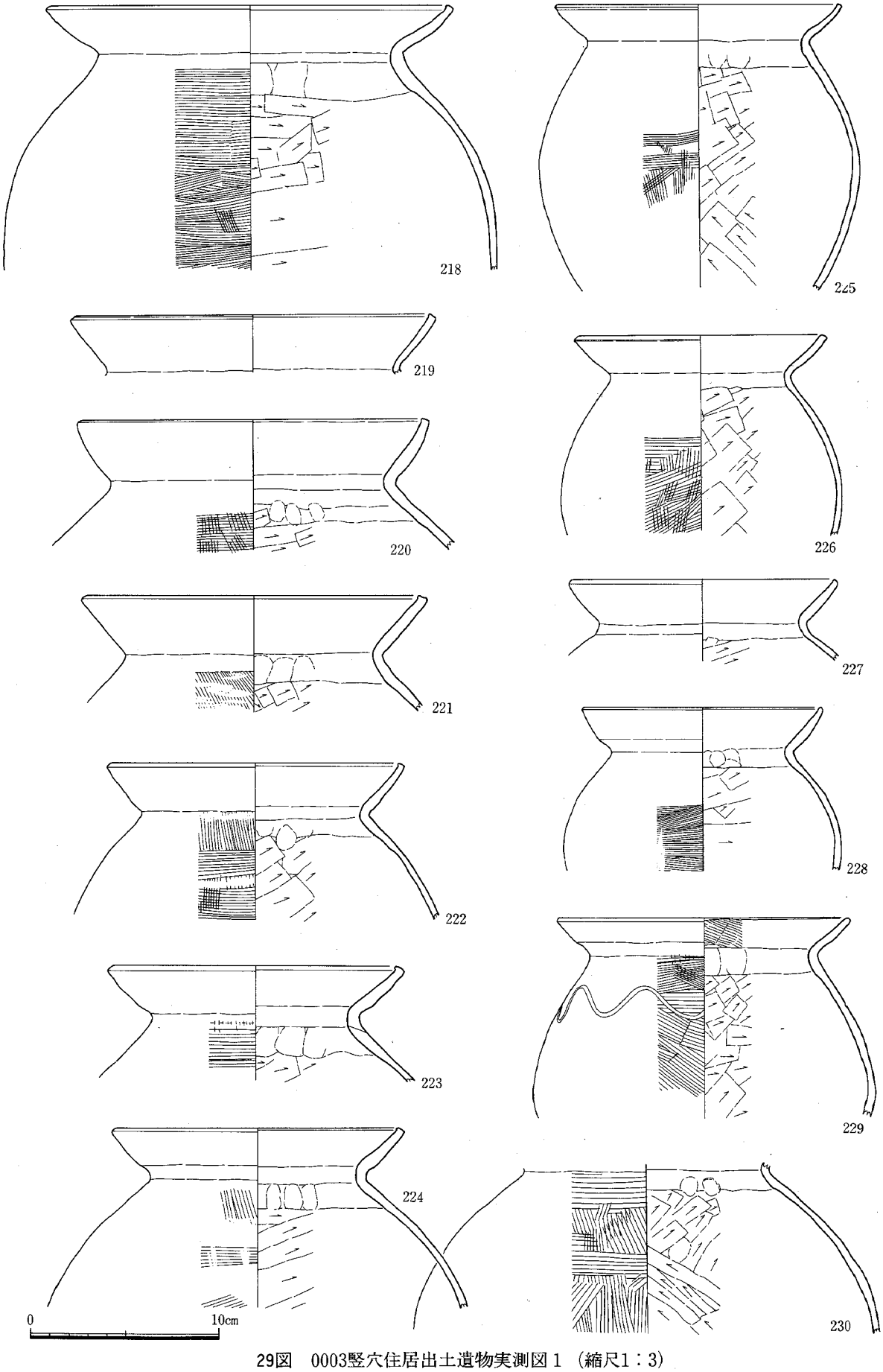
柱穴とは考えられない。覆土は締まった茶褐色土で、地山の汚れた黄褐色土が混じる。住居の規模から見て、周囲に地山削り出しのベット状遺構を設けていた可能性もある。

出土遺物（27図216・217）　床面西南隅からは土師器壺片が床面に密着して出土したが、摩滅が著しく、実測には及ばなかった。実測したのはともに0498ピット出土の土師器である。

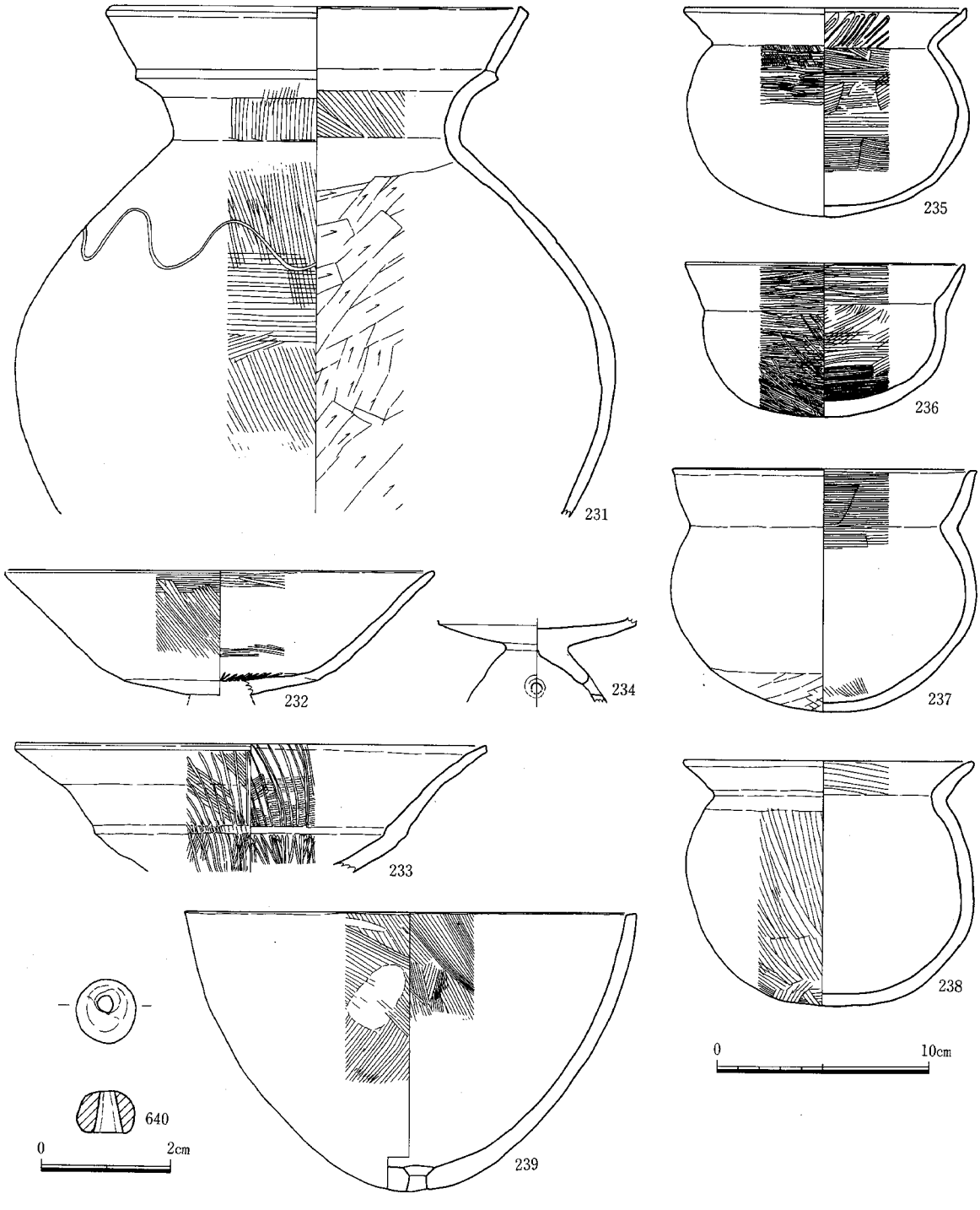
216は布留系甕口縁片。傾きは直線的で、端部は内側につまみ出す。内面は刷毛目調整を行う。白色粒、金雲母の混じった胎土で、黄褐色を呈する。口径15.1cm。217は口径19.3cmの高杯杯部。底部との境は段を作り、口縁部が大きく開く。内面は横刷毛目の後縦のヘラ研磨、外面は横のヘラ研磨で仕上げる。胎土は精良で、白色粒、赤色粒と金雲母が少量混じる。焼成良好、赤褐色を呈する。口縁内側には黒斑がある。薄手で端正な作りの高杯である。

0003竪穴住居（28図、図版9-1）

F・G－2区。周壁周囲を中心に耕田で著しく破壊を受け、周壁はほとんど残らず、その痕跡と壁溝でかろうじて平面形態が確認できる。長軸をほぼ南北にとる西周壁長6.44m、東周壁長5.96m、東西幅4.80mのやや西に開いた隅丸長方形のプランをもつ。周壁下には幅70～100cmのベット状遺構を設けるが、東西両周壁中央部分の170～180cmが途切れ、南北でコの字状に向き合った状態になる。ベット



29図　0003竪穴住居出土遺物実測図１（縮尺1：3）



30図　0003竪穴住居出土遺物実測図２（縮尺1：3、1：1）

状遺構から床面までの深さは残りの良い部分で10cm程度にしかすぎない。ベット状遺構の東南および西北隅部分が一段高くなる。壁溝は周壁東南隅から始まり、北側ベット状遺構南端部まで続く。幅は15cm前後、深さはベット状遺構面から5cm、南周壁検出面から15cm程度である。北周壁下に壁溝は認められない。ベット状遺構との境にあたる床面の東北隅と東南隅の２ヶ所に幅20cm前後、深さ1～4cmの浅いＬ字状の側溝がある。床面はベット状遺構により十字形となる。南北長4.05m、ベット状遺構がある部分の東西幅2.60m、それがない部分の東西幅4.65mをはかる。床面は固く締まる。床面中央には径70cm、深さ5cmの浅い円形の炉（0594）があり、覆土の黄褐色土には炭が混じる。その炉を挟み南

北に主柱穴の２ピットがある。北柱穴（0595）は径40cm、深さ23cm、南柱穴は（0595）58×50cmの東西に長い楕円形で、深さは27cmである。また東周壁中央下のベット状遺構が途切れた部分に南北長90cm、東西幅75cmの不整楕円形の屋内土坑（0596）がある。坑内には段が付き、深さ26cmで楕円形の底面となる。覆土は灰褐色土である。床面の西南隅と東西両側のベット状遺構の切れ目部分で焼土・炭化物の部分的な分布が見られた。

出土遺物（29・30図218～239・640）　床面北側３ヶ所で土師器がまとまって出土し、また北側ベット状遺構の西北部では玉が出土した。実測したのは640の玉以外はすべて土師器である。

29図の218～230は布留系の甕である。うち218～224は胴部が大きく張り、口縁端部を端正におさめるタイプで、大きさで３種類に分けられる。218は口径21.6cmをはかる大型甕で、口縁部は内湾しながら大きく傾く。端部は横のつまみナデで面を作り、内面には段が付く。219～221は口径19.4～18.4cmで、口縁部はわずかに内湾しつつも、直線的に外傾する。口縁端部の処理は218と同じであるが、220はナデが弱く内面の段が浅い。口縁部を欠くが230も頸部の大きさと胴部の張りからみると、この類であろう。222～224は口径15.8～15.5cmをはかる。口縁部の形態は220に似るが、頸部の横ナデが強く下部に稜ができ、口縁部そのものが短くなる。端部、胴部は先にあげたものと同じである。いずれも外面は縦、横あるいは両方向の刷毛目調整、内面はヘラ削りを肩部以下に行う。胎土には白色粒を多量に含むものが多く、また金雲母、赤色粒も混じる。222にはとくに赤色粒が多い。色調は218が黒褐色、219・224が赤褐色、223が黄灰色、他は淡褐色をおもに呈する。218・220・222・230の外面には煤が付着する。

225・226は胴部の張りが小さく、最大径を中位にもついわゆるナデ肩タイプの甕で、口縁端部は丸みをおびる。225は口径15.3cm、口縁部は内湾気味に外傾する。226は口径13.5cm、口縁端部は丸みをもった面を作るものの、内面に段はない。227は径、細部の処理で若干の違いがあるが、摩滅によるもので、226と同一個体の可能性が高いことからここに置いた。内面のヘラ削りは頸部からやや下がったところまで行う。外面は刷毛目調整で、肩部のそれは横ナデで消す。225・226ともに胎土には多量の白色粒と、若干の赤色粒を混え、225が淡灰褐色土、226が淡赤褐色を呈する。外面には煤の付着がみられる。

228は口縁部が直線的に外傾し、端部を丸くおさめる。胴部は丸く膨れる。口径12.8cmで、先の218タイプの小型のものとも言えるが、端部処理、調整、胎土は225のタイプと同じである。淡灰褐色を呈する。

229は外傾して端部を丸くおさめる口縁部と、下膨れの胴部をもつ。肩部には刷毛目調整後振幅の大きい一条の波状文を施す。口縁内面も刷毛目調整を行い、その後ナデ消す。胎土には白色粒と若干の赤色粒を混え、焼成良好、淡赤褐色を呈する。口径15.5cm。

30図231は山陰系の壺で、丸く外湾する頸部から口縁部が直線的に外傾する。端部は外に面を作る。胴部は下膨れの感じを与える。頸部内面と、外面頸部以下に刷毛目調整を行い、その上から肩部に229甕と同じような波状文を一条施す。口径19.8cm。

232・233は高杯杯部片。232は口径20.0cm、杯部高5.9cm。底が浅く、杯の開きは直線的で、端部は尖り気味となる。外面は刷毛目、内面はヘラ磨きで仕上げているが、全体に摩滅が激しく、詳細は窺えない。233は底が深く、段を作って口縁部が外反する。内外面とも横刷毛目の上に縦のヘラ磨きを行う。ともに胎土は精良で、赤褐色をおもに呈する。また黒斑が外面にみられる。

234は小型器台。ラッパ状に開く脚部と、浅い屈曲する皿状の台部もち、脚部には円形透かしを設ける。全体に摩滅し調整不明。微細な白色粒、金雲母を含んだ精良な胎土で、赤褐色を呈する。

235～238は短頸壺である。235は口径13.2cm、器高9.8cm。扁球形の胴部から口縁部が直線的に外傾する。口縁端部はつまみ上げて外に面を作り、内面には段ができる。胴内面は刷毛目、口縁内部と胴外面上半部はヘラ磨きを行うが、全体に摩滅著しく、詳細な調整は不明。微細な白色粒、金雲母を含んだ精良な胎土で、濃い赤褐色を呈する。スリップを施した可能性もある。236はいわゆる小型丸底壺（坩）で、口縁はやや内湾して小さく開き、端部は尖り気味となる。胴内面は刷毛目、他はヘラ磨きで仕上げる。微細な白色粒、赤色粒、金雲母を含んだ精良な胎土で、赤褐色を呈する。口径13.0cm、器高7.2cm。237は胴部が丸みをおび、口縁が内湾気味に外傾する。端部はわずかに外に引き出す。内面は横ナデで、部分的に刷毛目が残る。外面は横ナデで、底部にはヘラ削りの痕が見られる。白色粒、赤色粒、金雲母を含んだ胎土で、やや黄みがかった赤褐色を呈する。底部には煤が付着する。口径14.2cm、器高11.4cm。238は球形の胴部からくの字状に傾くもので、端部は丸くおさめる。口縁内部と胴外面には粗い刷毛目、他は横ナデかナデで仕上げる。多量の白色粒と赤色粒、他に金雲母を含んだ胎土で、赤褐色を呈する。底部には黒斑がある。口径13.6cm、器高11.5cm。235・236が精製、237・238が粗製と云え、その用途も異なっていたと考えられる。

239は単孔の甑である。口縁は直立気味で、端部は水平な面を作る。底部は尖り、その中央に径１cmの円孔を焼成前に設ける。内外面とも上位に刷毛目調整を行う。白色粒、赤色粒、金雲母を含んだ胎土で、暗赤褐色を呈する。外底には黒斑がある。口径21.1cm、器高13.1cm。

640はヒスイ製の丸玉である。上面径1.0cm、下面径0.9cm、厚さ0.65cm。断面は台形状で、図の下から上に穿孔する。穴の大きさは下面で0.6cm、上面で0.2cmである。濁った白色を呈する。

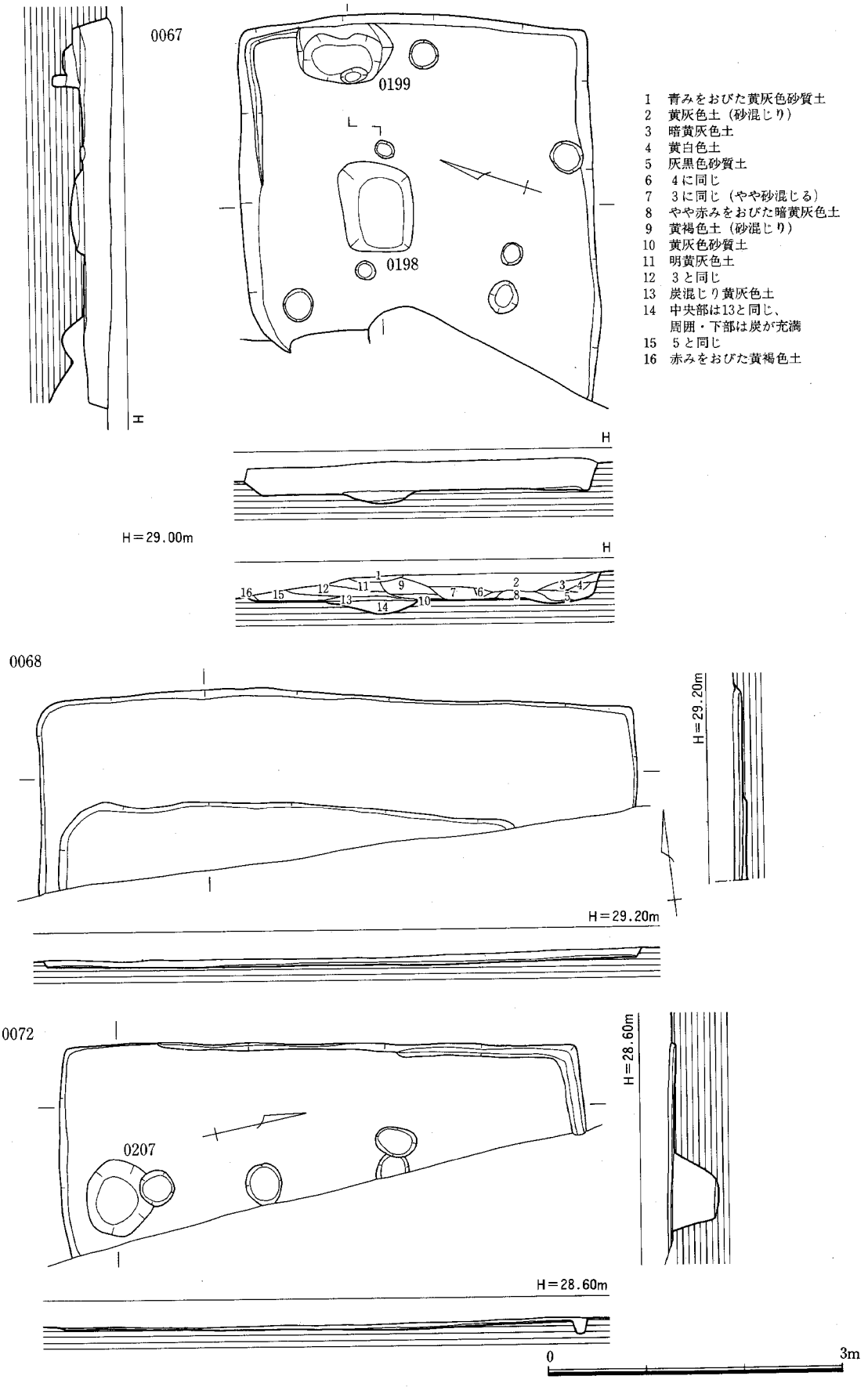
東南地区

0067竪穴住居（31図、図版9-2）

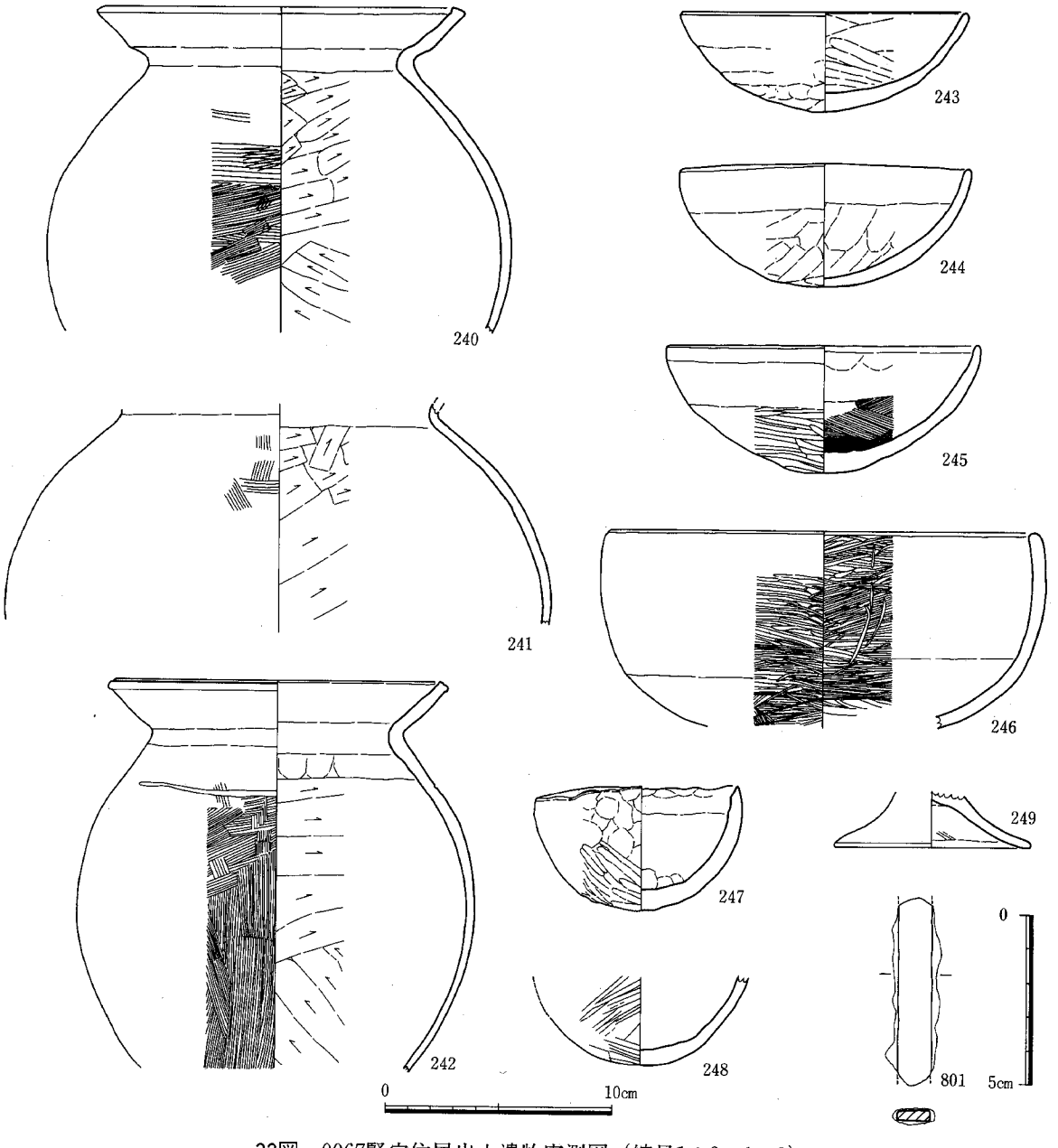
Ｉ－13区。西側を0051溝に切られた住居で、南北幅3.53m、東西残存長3.75mをはかる。周壁高は残りの良い東側部分で33cm。東北隅部分にだけ幅10cm弱、床面からの深さ5cm程度の側溝が認められる。固く締まった床面で、炉と小土坑と7ピットを確認した。炉（0198）は床面中央北側に位置し、東西長92cm、南北幅72cmの丸みをおびた長方形を呈する。覆土は炭化物に灰褐色土が混じり、周壁は炭化物が密着し固い。炉の両側には径15～20cm、深さ6～9cmのピットが取り付く。東周壁下やや北寄りに位置する小土坑（0199）は南北長95cm、東西幅60cmの楕円形で、深さ18cm、壁直下には小さな段がつく。床面のピットは炉両側のものを除き径20～23cm、深さは20cm前後のものが多い。平面的にどのような柱の配置をとるのかは判然としない。

この住居跡は現状では東西に長い長方形プランであるが、周壁高残りが悪く、また炉および足下掘り込みと称される小土坑の位置がやや北側に寄り気味であることから、北側部分に地山削り出しによるベット状遺構があった可能性が高い。

出土遺物（32図）　240～242は布留系の甕である。240・241は胴部が丸く張る。240の頸部は強い横ナデでくぼみ、口縁は外傾し、端部内面には段ができる。口径16.0cm。胴外面には刷毛目調整を行う。胴には煤が付着し、また口縁下と胴の一部に火熱による赤変と剥落があり、すべての調整を確認することはできない。241は摩滅が激しく、調整は不明瞭である。ともに胎土には多量の白色粒を含み、金雲母も混じる。240はそれに加え赤色粒も多い。240が暗褐色から褐色、241が黄白色から明黄褐色を呈する。242は胴の張りが小さい。口縁は外傾し、端部は外に引き出すようになる。口縁端面には浅い沈線がめぐる。外面肩には沈線を施すが、一周はせず、途切れる。沈線以下は横そして縦の刷毛目調整を行う。胎土には白色粒、赤色粒を多く含み、また金雲母も混じる。くすんだ黄褐色を呈する。口径



31図　0067・0068・0072竪穴住居実測図（縮尺1：60）

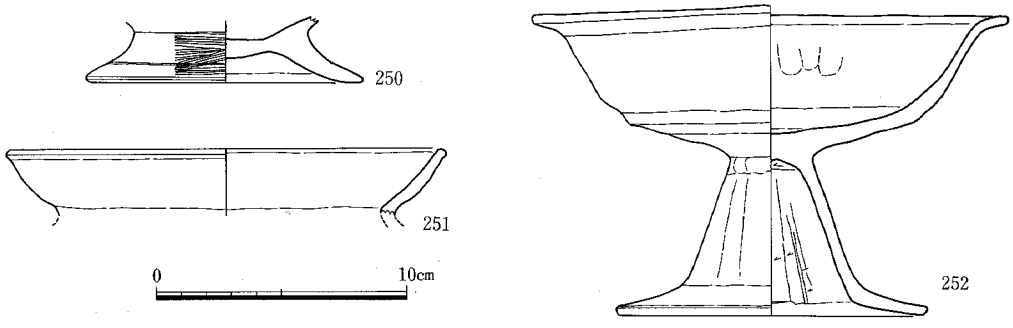


32図　0067竪穴住居出土遺物実測図（縮尺1：3、1：2）

15.1cm。240・242は床面からの出土である。

243～248は鉢である。243～245は底部が尖り気味で、そこから体部が開き、口縁が直立する。口縁端部は丸くおさめる。底部は削りの痕をヘラナデ、あるいは指ナデで調整するが、平滑さに欠ける。口縁内外面は横ナデ、内面は243がヘラ磨き、244が指押え、245が細かい刷毛目調整である。胎土には白色粒を多く含む他、金雲母が混じり、また243には赤色粒、244には黒色粒も入る。243・245が赤褐色、244が暗黄褐色を呈する。243・244には黒斑がみられる。244の口径12.6cm、器高4.4cm、245の口径12.8cm、器高5.5cm、246の口径13.7cm、器高5.7cmをはかる。

246は口径19.6cmの広口鉢で、体部は直立し、口縁端部は内傾気味となり、端部は丸くおさめる。口縁外面が横ナデ、他はヘラ磨きで仕上げる。白色粒、金雲母を含んだ胎土で、焼成良好、赤褐色を呈する。外面に黒斑がある。



33図　0068・0069竪穴住居出土遺物実測図（縮尺1：3）

247・248は手づくね風の小型丸底鉢である。247は口径9.1cm、器高5.5cm、半球形で、口縁端部は尖る。底部はヘラナデ、その上部には指押えが残る。248は外面がヘラナデ、内面は指ナデである。ともに微白色粒、金雲母を含んだ良質の胎土で、赤褐色から茶褐色を呈する。またどちらも底部に黒斑がある。

801は厚さ0.3cm、幅1.0cm程度の鉄器片である。錆で形態は明確にし難い。刃はついてなく、刀子あるいは鉋の柄部分かとも考えられる。

0068竪穴住居（31図、図版10-1）

J－13区。調査区外にかかり、北周壁部分を中心とした調査にとどまった。北周壁長6.07m、西北隅は丸みをおびる。周壁に沿って幅110cmのベット状遺構があり、東周壁下にも続きそうである。ベット状遺構の床面からの高さは2～5cm程度である。おそらく盛土で作った遺構であろう。検出面から床面までの深さは10cm程度で、覆土は暗黄褐色１層である。床面に柱穴などの遺構はない。位置関係からすれば調査区外で0072竪穴住居と切りあう。

出土遺物（33図250）　東北隅のベット状遺構の上から土師器が出土している。図示したのは台付鉢の台。高さ2.0cm、底径11.0cmの低い台で、外面はヘラ磨きで仕上げる。微細な白色粒、赤色粒、金雲母を含む精良な胎土を用い、赤褐色を呈する。

0069竪穴住居（34図、図版10-2）

K－13区。南側の大半が調査区外にかかるが、方位が北からやや東に傾く東西幅4.60mの方形状の平面の竪穴住居としてとらえることができる。検出面から床面までの深さ5～6cmと遺存状態は悪い。周壁下には幅75cmのベット状遺構がまわる。床面は東西幅2.60mをはかり、東北隅に径27cm、深さ12cmのピット（0559）、中央部分に径130cm、深さ57cmの土坑状遺構（0558）があり、ともに土師器を出土しており、この住居に伴う。位置関係からみれば、調査区外で0068竪穴住居と切り合うか、かなり近接したものとなる。

出土遺物（33図251・252）　251は布留系甕で、口縁は内湾気味に外傾し、端部は丸くおさめる。胎土には白色粒、赤色粒、金雲母含み、黄褐色を呈する。252は口径18.8cm、器高12.3cmの高杯。杯底部は浅く、口縁は外に引き出す。筒部は直線的に開き、屈曲して裾部が広がる。全体にナデ調整で仕上げる。白色粒、赤色粒、金雲母を含んだ胎土で、暗赤褐色を呈する。杯部外底に黒斑がある。

0070竪穴住居（34図、図版10-2）

K－13区。0069竪穴住居に南側の大半を切られ、また検出面から床面までの深さが２～４cmと遺存状態は悪い。北周壁長3.70m、ほぼ北向きの方形状の平面を呈するが、南側では最大幅4.05mとやや膨らむ。床面には柱穴などの遺構はない。

布留系甕、小型丸底壺（鉢）などが10点ほど出土しているが、実測したものはない。

0071竪穴住居（34図、図版11-1・2）

K－13区。東西長5.70m、南北幅4.05mの長方形プランをもち、方位が北からやや東に傾く。周壁下には幅20cm前後、床面からの深さ5～10cmの側溝を設けるが、東北隅だけは途切れる。検出面から床面までの深さは残りの良い部分で約40cm。床面には黒色土が薄く広がり、中央部ほどそれが濃くなる。床面中央やや東北寄りには東西長98cm、南北幅85cm、深さ3cmの浅い楕円形状土坑があり、そこには焼土が見られまた黒色土の最も濃い部分であることから炉と考えられる。南周壁下には東西長120cm、南北幅85cm、深さ15cmの屋内土坑がある。床面には他に径30～40cmの２ピットと、南北長100cm、東西幅85cmの不整形土坑があるが、いずれも深さ5cm内外と浅く、主柱穴の確認はできない。

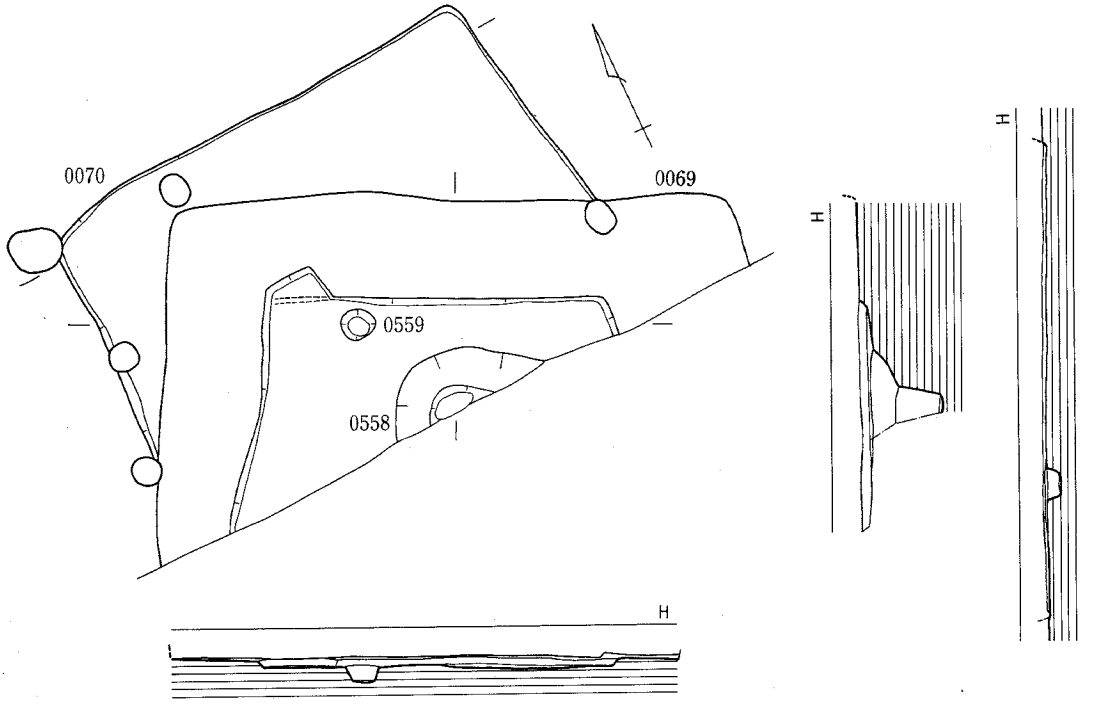
この住居からは多量の土師器が出土している。土層の堆積状態から観察すると、土師器は４層に集中しており、それもその上面に多いことがわかる。これは本来的にこの住居に伴うものではなく、廃棄後一部埋もれて凹地になっていた住居跡に放棄されたものであろう。４層も中央部ほど黒色が濃い状態を示している。また床面及び４層下からもまとまった土師器が出ている。４層を上層、その下の覆土を下層、床面から直接取り上げたものを床面出土土器とした。

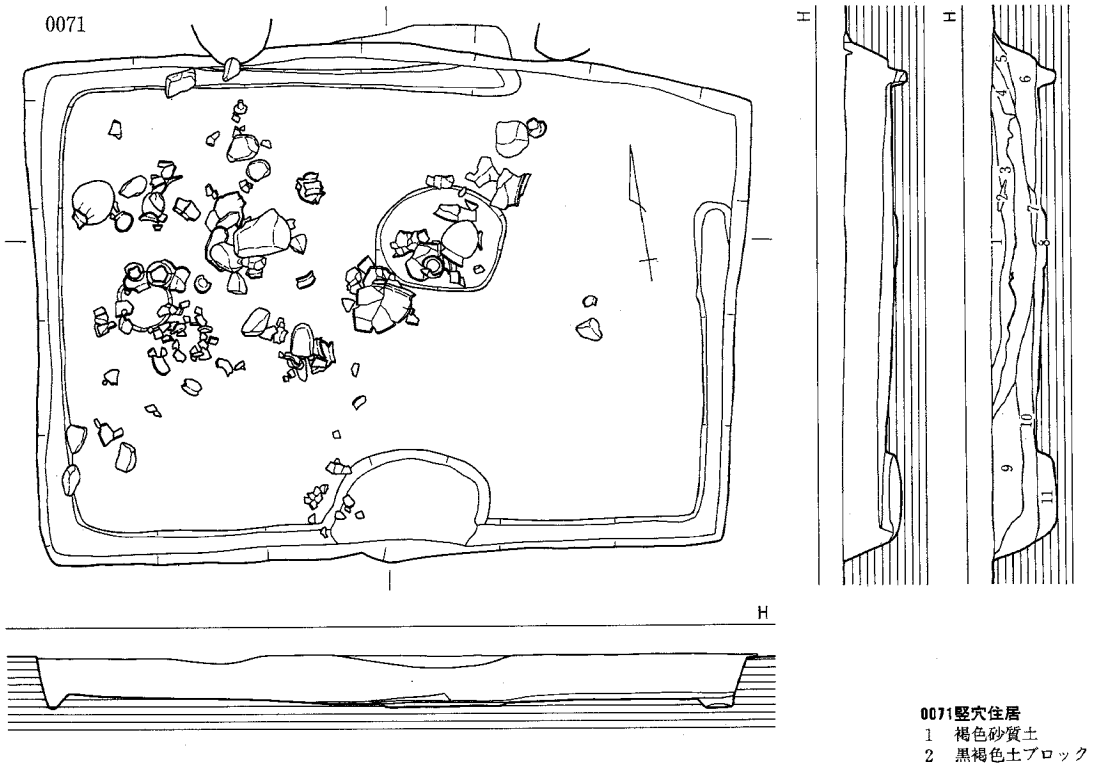
出土遺物（35～40図）　253～265は布留系の甕である。うち35図253～257は胴部が丸く張るタイプで、口縁は直線的に外傾する。端部は面を作り、内面に浅い段がつく。256だけは口縁が内湾気味で、端部上面がわずかにくぼむ。257は接合しないが、同一個体の胴部片である。いずれも内面はヘラ削り、外面は刷毛目調整。253は肩部にはシャープな刷毛目調整後複数の沈線をめぐらす。254は内面のヘラ削りが頸部に達する。255の胴下半外面にはタタキが残る。いずれも胎土に多量の白色粒を含み、赤色粒、金雲母も混じる。253には赤色粒の混じりも多い。253が赤褐色、254・255・257が黄褐色、256が灰褐色を呈する。またいずれの外面にも黒斑があり、さらに胴部には煤が付着する。256は火熱による胴器表の剝離が著しい。256の口径15.9cm、器高20.4cm。

258～262は胴部の張りが小さく、最大径を中位にもつタイプである。口径は15.0～18.2cm。口縁は直線的に外傾するが、先の253などに比べ開きが小さい。口縁端部は丸みをおびた面を作り、259・260の内面には段がつく。胴内面のヘラ削りは頸部のやや下から行い、その外面は刷毛目調整で、肩部は横ナデで消す。262は口縁内面にも刷毛目調整を行う。258～260の肩部にはヘラ先による点文を施す。しかしいずれも残存部を見る限り連続するものではなく、258は３点、259は１点、260は２点が確認できるにとどまる。いずれも胎土に多量の白色粒を含み、赤色粒、金雲母も混じる。262は赤色粒が白色粒より多く、黒色粒も混じる。258・262が赤褐色、他はおもに黄褐色を呈する。261以外の外面には黒斑があり、また胴部に煤が付着するものが多い。

263は口径12.0cm、胴部の張った甕である。口縁は内湾気味に外傾し、端部は外に引き出す。胴内面は上位がヘラ削り、下位はナデで仕上げる。外面は刷毛目調整で、肩部は横ナデする。小型の253タイプか。胎土に多量の白色粒を含み、赤色粒、金雲母も混じる。暗黄褐色。外面には煤が、内面には炭化物が付着する。

264は扁球形の胴部から口縁が外傾し、端部を尖り気味におめる、口径12.8cm、器高9.2cmの小型甕である。胴内面ヘラ削り、外面刷毛目調整を行う。胎土には多量の白色粒、赤色粒を含み、黒色粒、





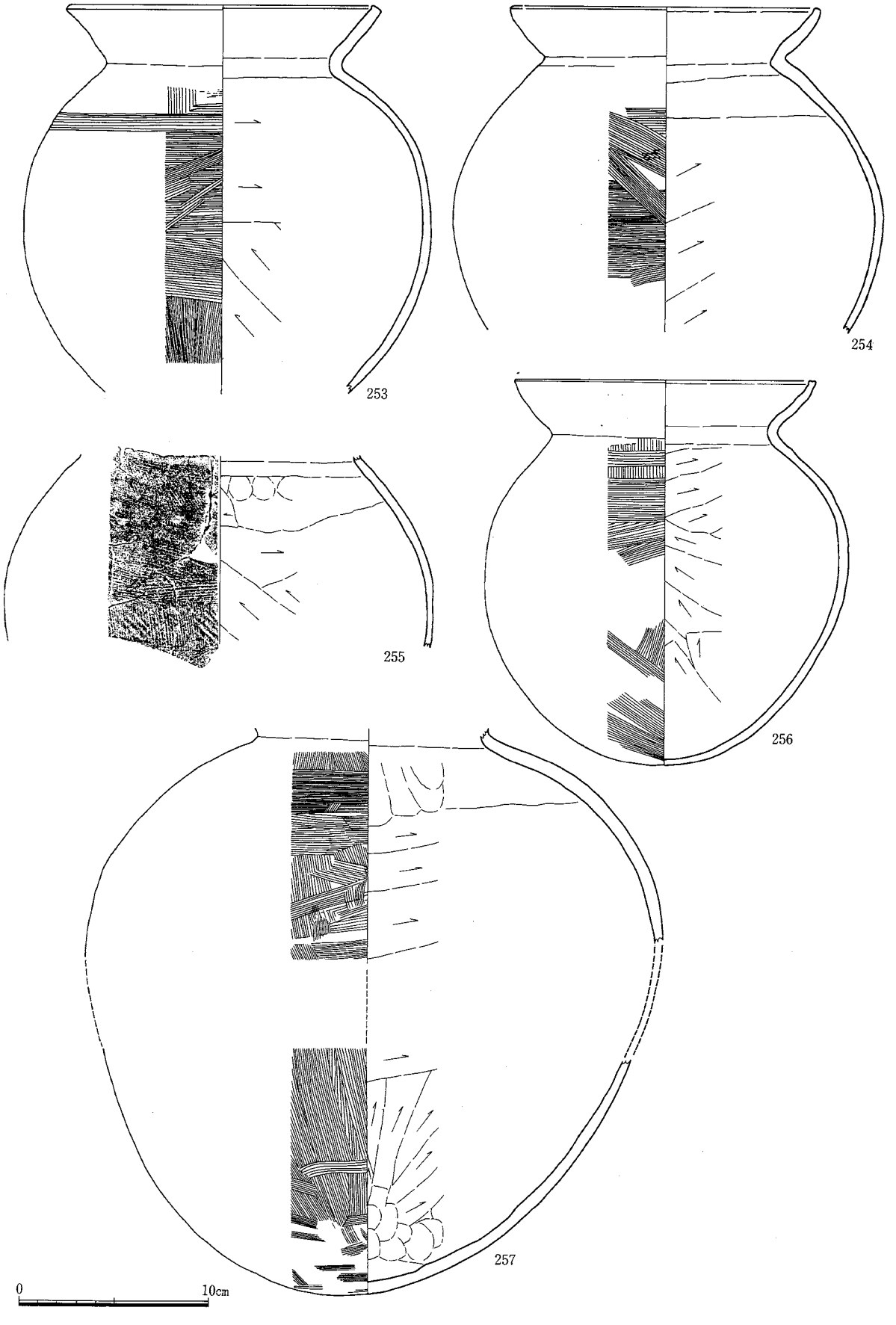
0071竪穴住居

1　褐色砂質土
2　黒褐色土ブロック
3　暗黄褐色砂質土
4　黒褐色～黒色土
5　黄褐色砂質土
6　黄褐色土
7　暗黄灰色土
8　黒色土
9　5と同じ
10　6と同じ
11　明黄褐色土

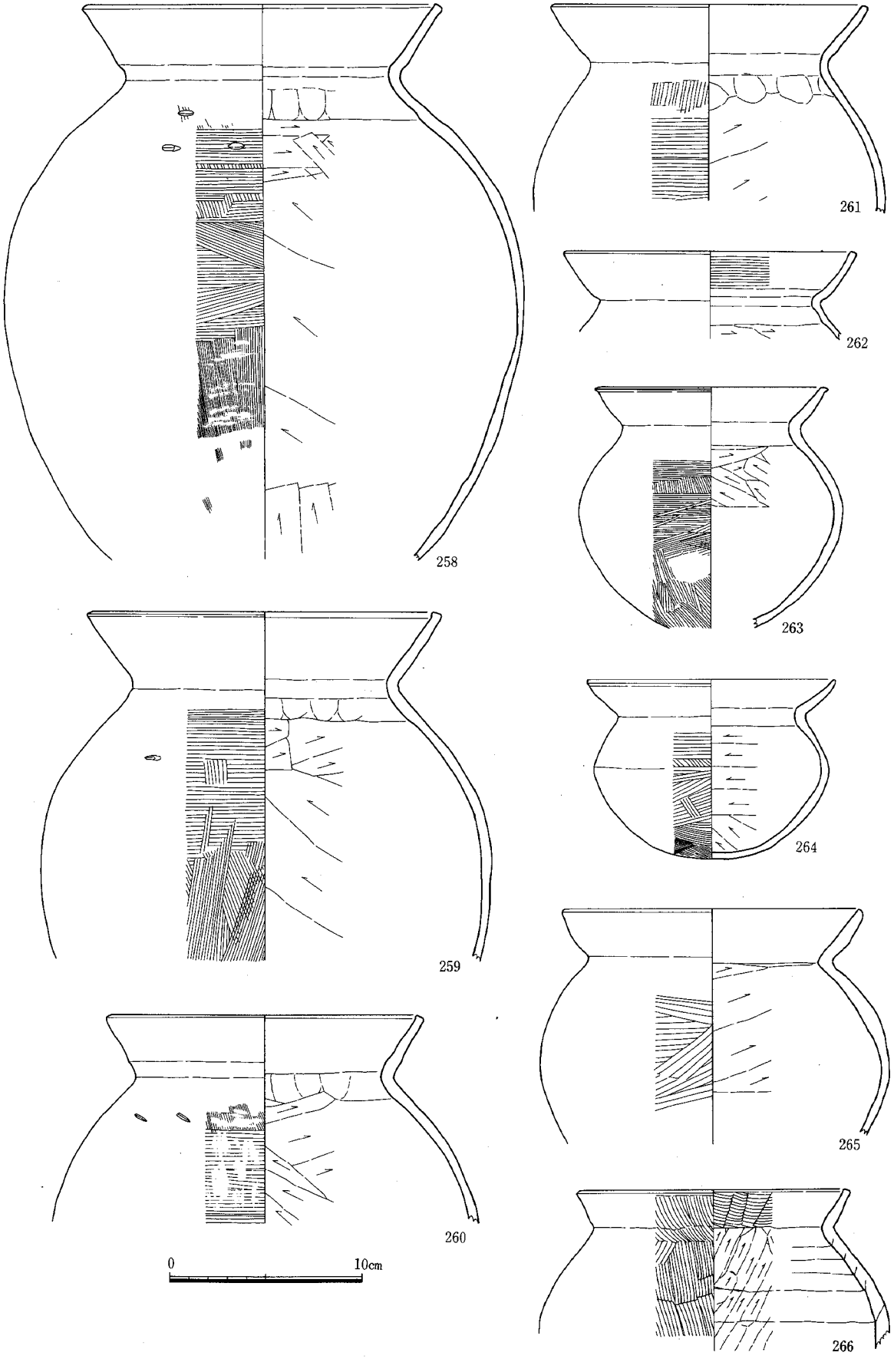
H＝29.20m

0　3m

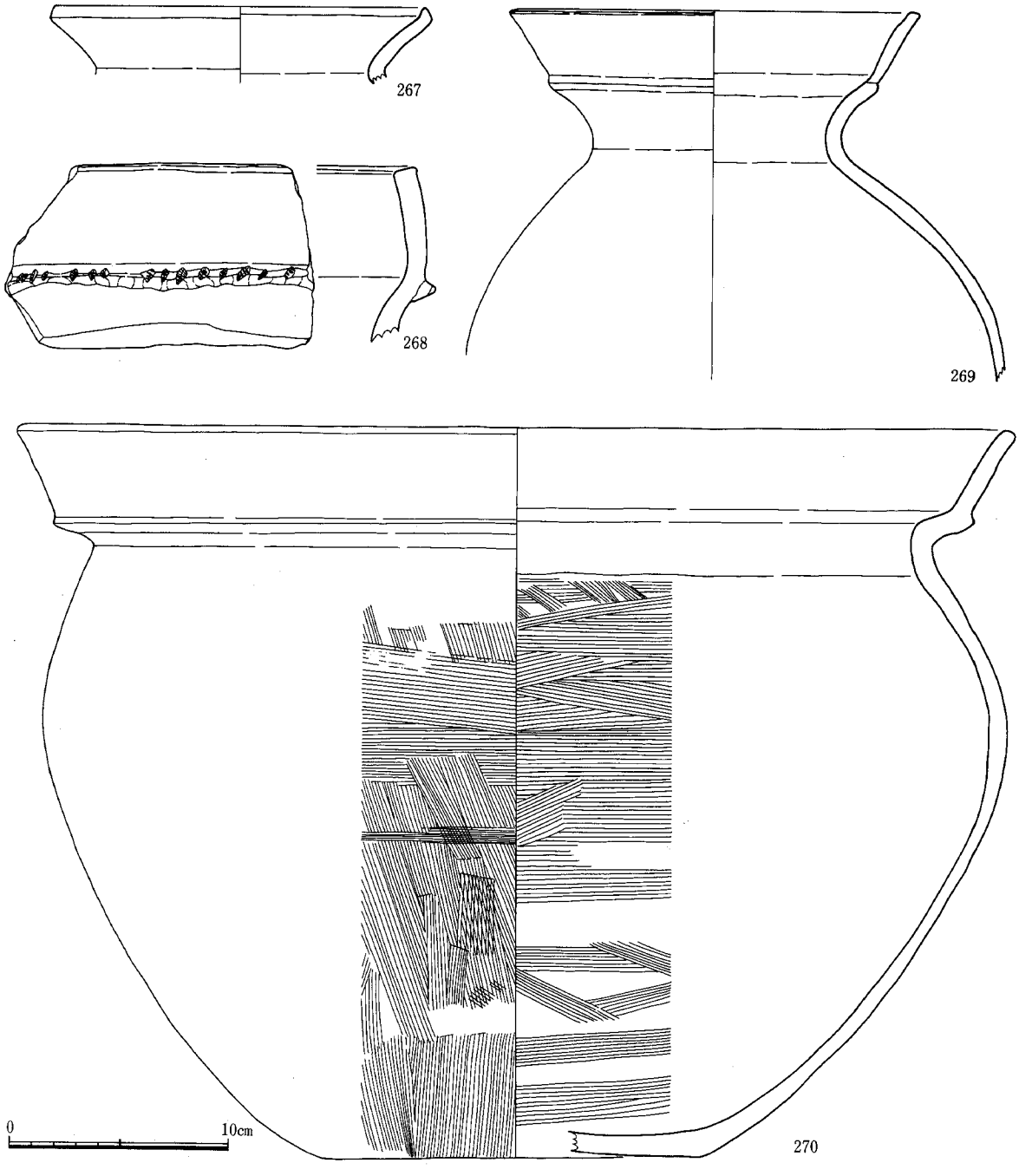
'34図　0069・0070・0071竪穴住居実測図（縮尺1：60）



35図　0071竪穴住居出土遺物実測図１（縮尺1：3）



36図　0071竪穴住居出土遺物実測図２（縮尺1：3）

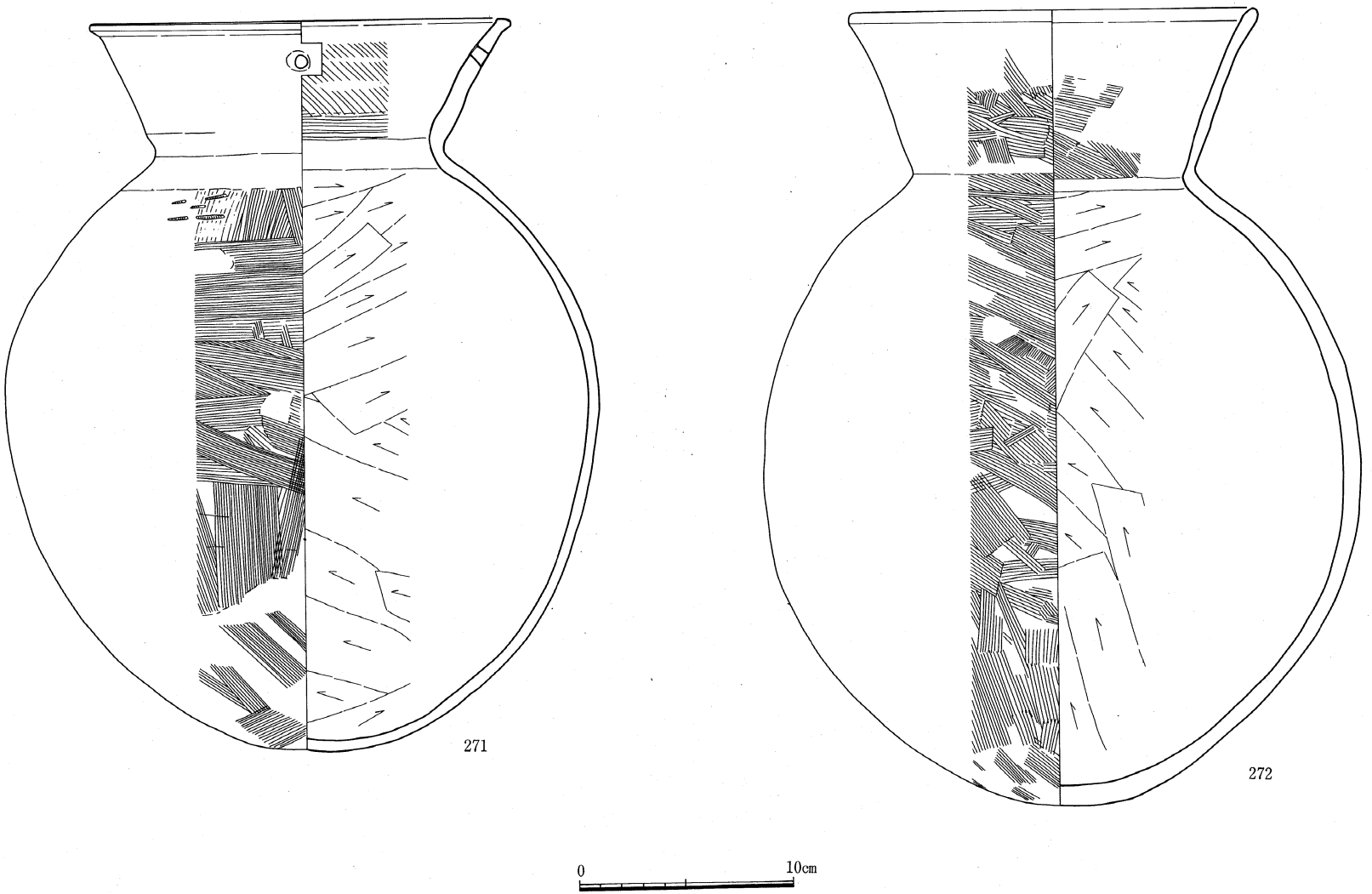


37図　0071竪穴住居出土遺物実測図３（縮尺1：3）

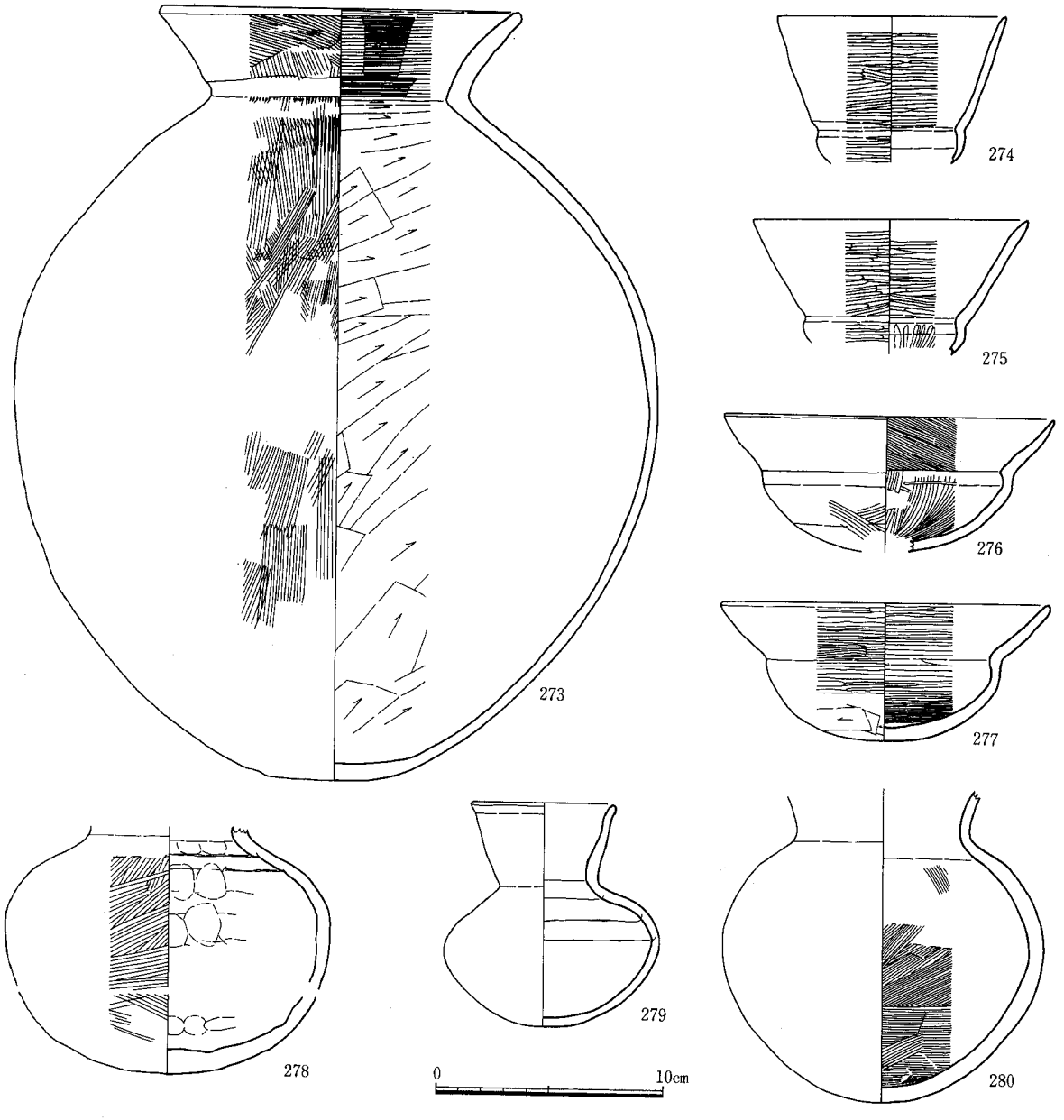
金雲母も混じる。黄褐色で、外面には煤が付着する。265は口径15.6cmの甕で、胴部は張り、口縁は直線的に外傾する。胴内面は頸部までヘラ削りを行う。外面は粗い刷毛目調整。器壁が厚く、重量感があり、布留系甕としてはやや異質である。

266は短く外反する口縁をもつ口径14.1cmの甕である。胴内面はヘラナデで、接合痕が残る。他は刷毛目調整で仕上げる。胎土には白色粒を多く含み、赤色粒、金雲母も少量混じる。赤褐色をおもに呈する。外面には煤が付着し、火熱による器表の剝落も見られる。

37図267は甕もしくは短頸壺。外反する口縁の端部をつまみ上げる。器表が摩滅し調整は不明。胎土には白色粒を多く含み、黒色粒、金雲母も混じる。焼成あまく、赤褐色を呈する。



38図　0071竪穴住居出土遺物実測図４（縮尺1：3）

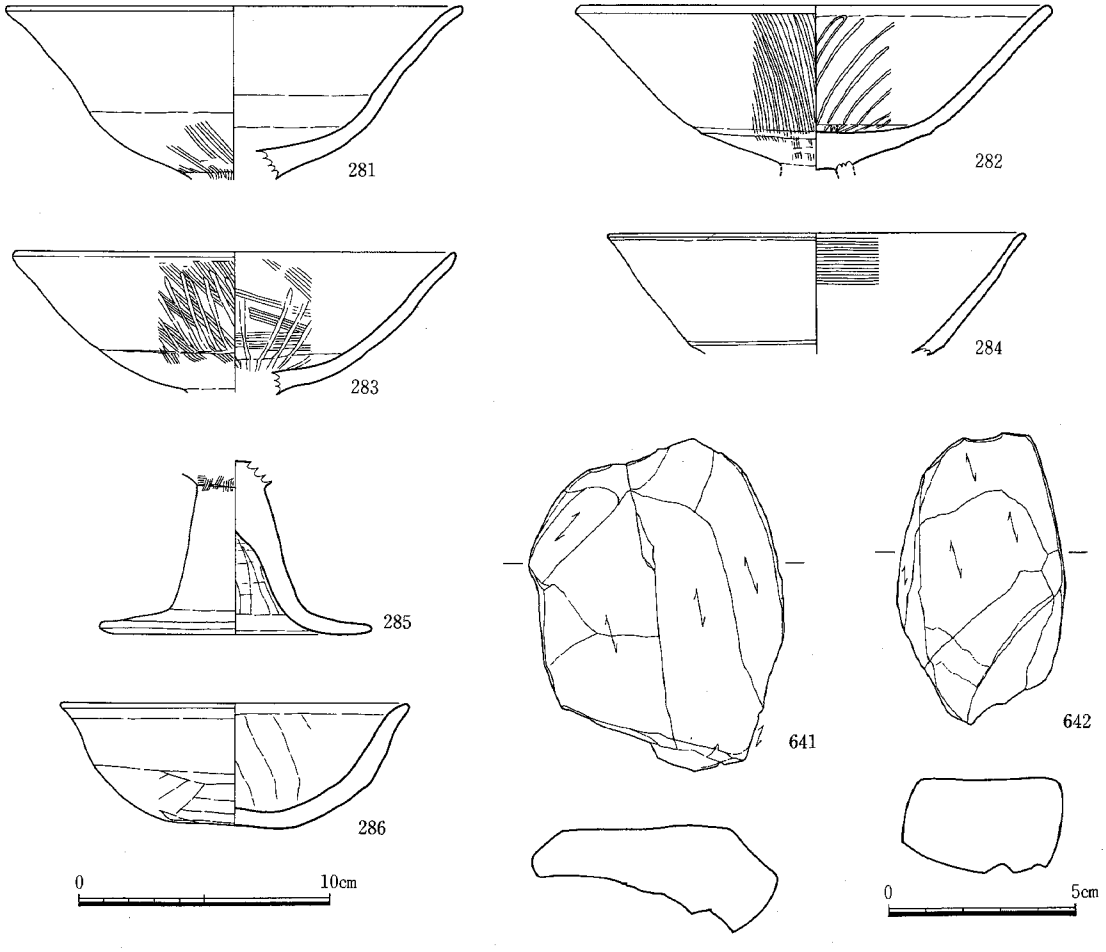


39図　0071竪穴住居出土遺物実測図５（縮尺1：3）

268～270は複合口縁をもつ壺である。268は厚みのある大型壺で、口縁下には一条の二枚貝腹縁による刻目突帯をめぐらす。刷毛目が残るが、全体に摩滅している。胎土には白色粒を多く含み、黒色粒、金雲母も混じる。赤みをおびた明黄褐色を呈する。

269は頸部が丸みをもって外反し、その端から口縁が外傾する。口径18.5cm。内外面とも摩滅著しく、調整不明。胎土には白色粒、赤色粒を多く含み、黒色粒も混じる。淡赤褐色で、胴外面には黒斑がある。

270は壺あるいは平底鉢ともいえよう。口径45.4cm、器高33.3cmの大型品で、底部は上げ底となる。胴は上位で張り、頸部が反転し、その端から口縁が外傾する。端部は丸くおさめる。胴は内外面とも刷毛目調整を行う。底部は打ち欠いたものである。胎土には白色粒を多く含み、金雲母も混じる。黄褐色で、胴内面に黒斑がある。また内面の口縁から胴上位にかけて器表の剝落が激しい。



40図　0071竪穴住居出土遺物実測図６（縮尺1：3、1：2）

38図271・272、39図273は卵形の胴部から口縁が外傾するいわゆる単口縁壺である。271・272は口縁が長く、端部は271が外に引き出し、272は丸くおさめる。273の口縁は短く外反し、端部は丸くおさめる。いずれも胴内面に篦削りを行い、とくに273は頸部まで削る。口縁内外面と胴外面は刷毛目調整を行う。ただ、271の口縁外面は横ナデで仕上げる。また肩部の一ヶ所には櫛状工具による五つの点文を施す。胎土には白色粒を多く含み、赤色粒、金雲母も混じる。271にはさらに黒色粒も混じる。271が黄褐色、272・273がおもに赤褐色を呈する。271・273の胴外面には黒斑があり、また272・273のそれには煤が付着する。271の口径19.5cm、器高34.0cm、272の口径19.0cm、器高37.0cm、273の口径16.0cm、器高33.9cmをはかる。

274～277は小型丸底壺（坩）である。274・275は長頸で、口径は274が10.0cm、275が12.0cmとその開きが異なるが、端部はともに尖り気味となる。276・277は短頸、広口で、口縁は内湾気味に外傾し、端部は276が尖り、277が丸みをもつ。ともに口径14.4cm、器高6.0cmとほぼ同じ法量をもつ。276は内面が細かい刷毛目、外面は横ナデ調整（一部刷毛目が残る）を行い、胎土は粗く、灰黒色で一部赤褐色を呈する。他の３点はヘラ磨きで仕上げ（277の底部にはヘラ削りが残る）、微細な白色粒、赤色粒、金雲母を含んだ精良な胎土で、赤褐色をおもに呈する。274・275の口縁には黒斑がある。

278～280は小型壺で、器形は各々異なる。278は扁球形の胴部をもつ。内面は指押え、外面は荒いタッチの刷毛目調整を行う。胎土には白色粒を多く含み、金雲母も混じる。外面暗赤褐色、内面灰黒色を呈する。279は口径6.4cm、器高9.8cmの小型長頸壺。胴部は扁球形、口縁端部は丸くおさめる。内外面

ともナデ調整で仕上げる。白色粒と金雲母を含んだ胎土で、外面は暗赤褐色と黒褐色、内面は暗茶褐色を呈する。280は球形の胴部から口縁が外反する壺である。胴内面には細かい刷毛目調整をする。外面は摩滅して調整不明。胎土には白色粒を多く含み、金雲母も混じる。濃い赤褐色を呈する。

40図281～285は高杯である。281～284は杯部片で、281は底が深く、やや内湾気味に口縁が開く。他は底が浅く、直線的に外傾する。器面調整は各々異なり、281は底部外面に一部刷毛目を残すものの、全体に強い横ナデで仕上げる。282は内面が横ナデの後ヘラ磨き、外面が細い刷毛目、283は内外面とも細い刷毛目の後ヘラ磨き、また284は器面の摩滅が著しいが、横ナデで仕上げているようである。胎土は281がやや粗く、白色粒、赤色粒、金雲母を含む。色調は黄褐色。他は比較的精良な胎土で、微細な白色粒、赤色粒、金雲母を含み、282には加えて黒色粒が混じる。いずれも赤褐色を呈する。285は脚部で、上部は中実となる。裾端部は若干跳ね上がる。杯部との接合部に刷毛目、脚内面に絞り痕が見られる他は横ナデで仕上げる。胎土には白色粒、赤色粒、金雲母を多く含む。赤褐色をおもに呈する。裾端部には黒斑がある。

286は口径13.8cm、器高4.9cmの鉢である。口縁端部は丸くおさめる。外底はヘラナデ、他は指ナデで仕上げるが、全体に器壁が厚い。胎土には白色粒を多く含み、赤色粒、金雲母も混じる。赤褐色をおもに呈する。

641・642は粘板岩製の砥石で、ほとんどの面を砥面として利用している。641では端が欠けてできた面も新たに砥面として使用している。642は完形である。

以上0071竪穴住居出土遺物について触れたが、出土層位は253～255・259・261・263～267・275・276・283～285が床面、256・258・262が下層、257・268～273・278～280・282・286が上層から番号を付けて取り上げたものである。260・274・277・641・642は層が確認できない。上層に壺類の多いのが特徴的である。

0072竪穴住居（31図、図版12-1）

Ｉ－14区。調査区外にかかり、住居の西側一部の検出にとどまった。西周壁長4.30m、壁高は3～4cmときわめて残りが悪い。北周壁下から西周壁中央下まで幅5～10cm、深さ7cmほどの側溝がある。床面は炭化物に覆われ、そこで５ピットを確認した。南側に位置する0207が深さ53cmでしっかりしている外は、3～5cmの浅い窪み状のもので、柱穴とは考えにくい。位置関係からすれば調査区外で0068竪穴住居と切りあう。

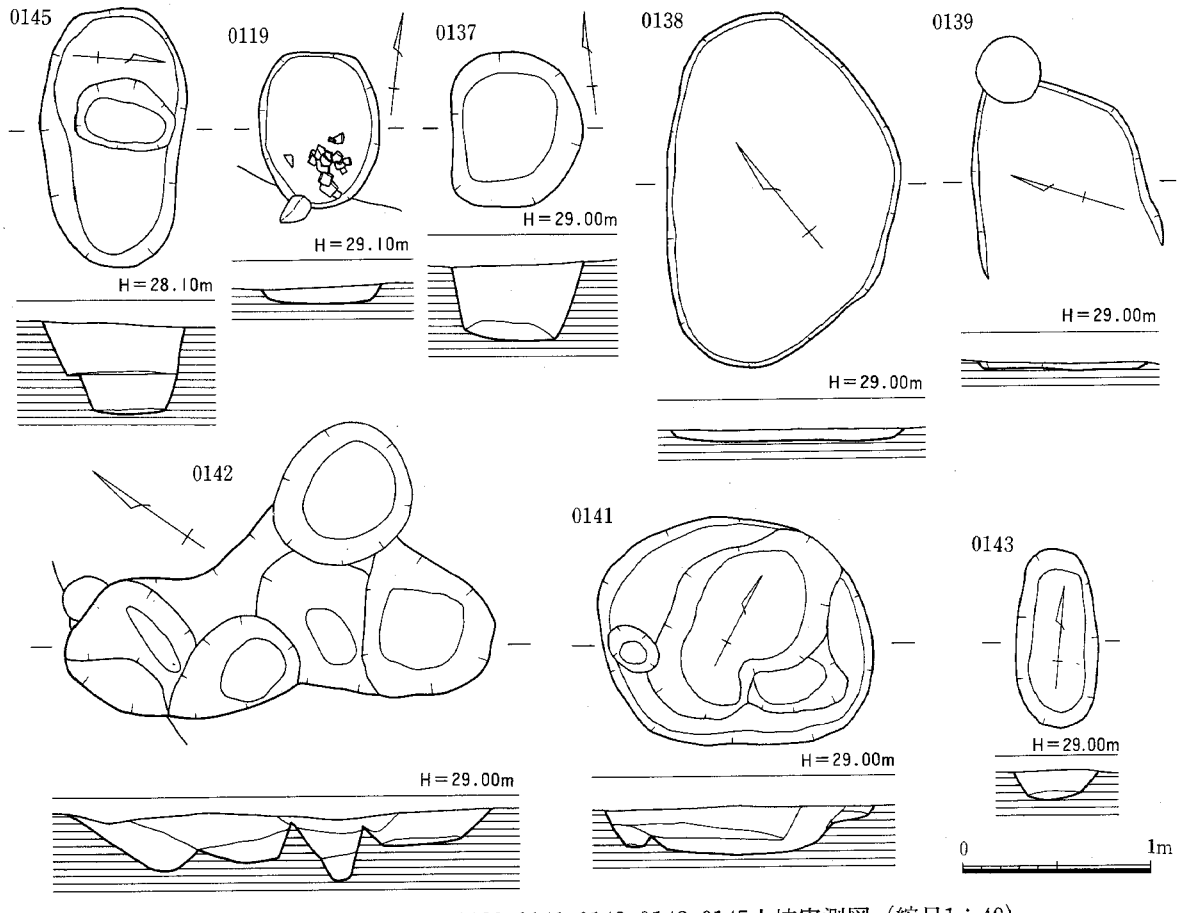
布留系甕、タタキをもつ在地系甕など少量が細片で出土しただけで、実測した遺物はない。

４－４－２　土坑

0145土坑が北地区の住居に近接する他は、すべて東南地区の住居に近接するものである。北地区のそれは削平された可能もある。性格がはっきりするものはない。以下、0145土坑をまず観察し、その後で東南地区の土坑を0119から番号順に見ていく。

0145土坑（41図）

Ｇ－１区。ほぼ東西に長軸をとる長さ1.37m、幅0.75mの楕円形土坑である。底面までの深さは29cmで、底面やや西よりに深さ20cmほどの楕円形状のピットがある。覆土は暗褐色砂質土で、出土遺物はない。



41図　0119・0137・0138・0139・0141・0142・0143・0145土坑実測図（縮尺1：40）

0119土坑（41図）

K－13区。ほぼ南北に長軸をとる長さ0.82m、幅0.54m、深さ10cmの楕円形状小土坑である。覆土は暗褐色土で、黄灰色土ブロックが混じる。坑内南側部分では底面から5cmほど浮いて土師器の破片が出土した。0071竪穴住居を切る。

出土したのは土師器で、丸みをもって外反する甕の頸部から胴部にかけての1個体分と、他に直線的に外反する甕口縁などの破片である。実測は行っていない。

0137土坑（41図）

M－13区。長軸をほぼ南北にとる長さ0.82m、幅0.69m、深さ42cmの楕円形状の土坑である。

出土遺物（44図287）　口径16.3cmの布留系甕片。胴部は丸く張り、口縁端部はナデて面を作り、その内面には段が付く。胎土には白色粒、赤色粒、金雲母を含み、灰褐色を呈する。胴下半には煤が付着する。他に複合口縁壺片などがあるが、量は少ない。

0138土坑（41図）

M－13区。長さ1.86m、幅1.25mのやや東西に膨らんだ楕円形土坑である。深さは5～6cm。出土遺物は縄文土器の細片3点だけであるが、土色などの状況から古墳時代の土坑である。

0139土坑（41図）

L・M－12区。南北幅0.92m、深さ5cmたらずの長方形状土坑で、遺存状態が悪く西側壁は残存しない。

縄文晩期（172・178・180・187）、弥生前期の遺物とともに土師器甕、壺などの細片が出土した。

0141土坑（41図）

K・L－13区。長さ1.45m、幅1.30mの楕円形状の土坑で、長軸はほぼ東西にとる。内部は2段掘りになり、また別ピットが切り合う。検出面から最下底面までの深さは26cmをはかる。

出土遺物は土師器がほとんどで、布留系甕、高杯などの器形があるが、細片で実測に耐えない。他に小鉄滓1が出土している。

0142土坑（41図）

K－13区。完掘状態からすれば、複数のピットの切り合いとも考えられる。覆土には特に違いは認められなかった。南北長2.23m、最も深いところで37cmをはかる。

土師器高杯細片などとともに、小鉄滓が1点出土している。

0143土坑（41図）

K－12区。ほぼ南北に長軸をとる長さ0.95m、幅0.45mの楕円形小土坑である。深さは10～17cmで、底は南側に向かい低くなる。

土師器甕などの細片2点が出土したにとどまる。

4－4－3　溝

溝は検出地区によって、西北地区（0009・0101・0102・0103・0104）、東北地区（0054・0057・0058）、東南地区（0135・0136・0140・0156）に分けて記述する。遺物は土坑出土とあわせ44図にまとめた。

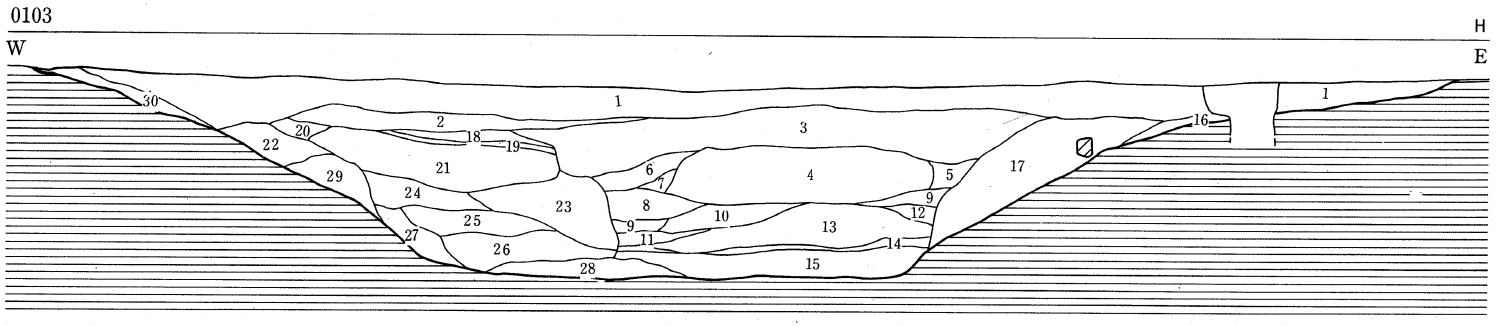
西北地区

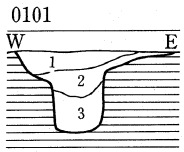
0009溝（42図）

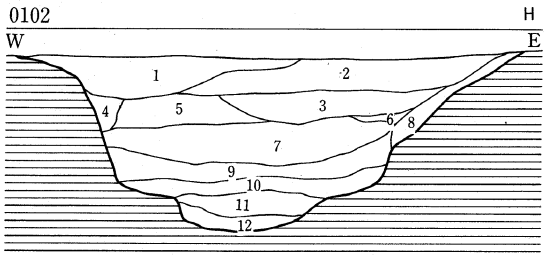
G－8調査区境から北西に直線的に延びる幅1.7～2.5mの溝である。北側にあたるG－6区は未掘のままにした。図示したのは中央部のF－7区の土層断面で、この部分での溝幅は1.93m、断面は逆三角形に近い。ただ西側肩に段が付く。深さは70cm前後である。覆土は砂・細質土砂が大半を占め、1～4層、5層、6～12層の三つに大別できる。最下層の6～12層は細砂・粗砂と暗灰褐色土の互層となる。3段階の流れの跡とその埋没過程を示すものであろうか。

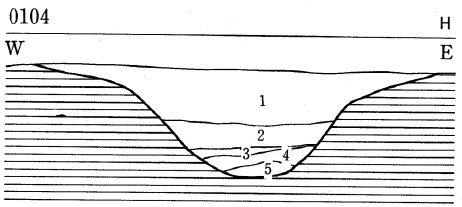
出土遺物（44図288）　口径13.0cm、受部径15.5cmの須恵器高杯片である。杯部立ち上がり部は短く内傾する。脚筒部は中空で、外面には縦方向の切込みを3カ所に設ける。杯下半部と筒部外面にカキ目、他は回転ナデで仕上げる。胎土には白色粒が多量に混じり、器表にも浮き出る。焼成はややあまく、内面は青灰色、外面は灰味をおびた茶褐色となる。2区で出土したが、1区にも破片がみられた。他に土師器があるが量は少ない。また縄文土器、鉄滓も出土している。

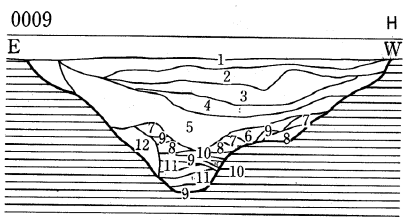
0101溝（42図、図版13-1）











H＝28.50m

0103溝
1　暗褐色粘質土
2　1よりやや淡い
3　灰みをおびた褐色粘質土
4　粗砂
5　3よりやや暗い
6　茶みをおびた褐色粘質土
7　6よりやや明るい
8　黄灰色砂（きめ細かい）
9　3に同じ
10　粗砂（4より粗い）
11　暗褐色砂質土（きめ細かい）
12　11に同じ
13　粗砂と小礫
14　暗褐色砂質土
15　粗砂と暗褐色砂質土
16　暗褐色土に粗砂混じる
17　暗褐色粘質土
18　粗砂
19　暗褐色砂質土
20　褐色砂質土
21　粗砂と小礫
22　黄みをおびた灰褐色砂質土
23　褐色粘質土
24　暗褐色粘質土
25　暗褐色土
26　青みをおびた灰褐色砂質土
27　茶みをおびた灰褐色砂質土
28　やや砂混じりの暗褐色粘質土
29　白みをおびた灰褐色砂質土
30　黄みをおびた暗褐色土

0101溝
1　暗褐色粘質土
2　1よりやや淡い
3　1に地山ブロック混じり

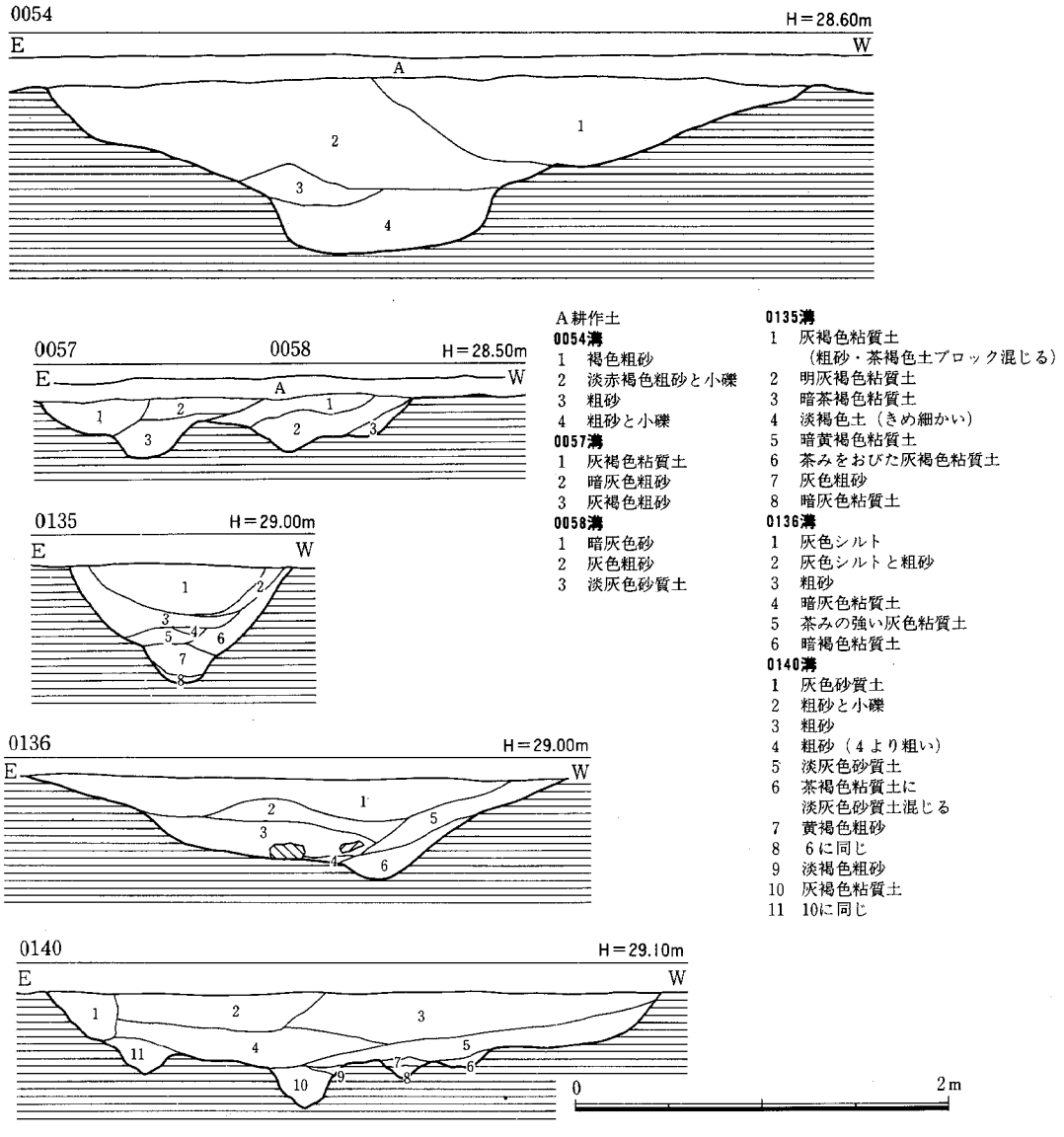
0102溝
1　暗褐色粘質土
2　白色粗砂と小礫
3　白色粗砂
4　淡褐色粘質土
5　2に同じ
6　暗褐色粘質土
7　白色粗砂
8　褐色粘質土
9　8よりやや砂質
10　粗砂と小礫
11　灰褐色砂質土
12　きめ細かい灰色砂

0104溝
1　灰みをおびた暗褐色粘質土
2　淡褐色砂質土
3　黒褐色粘質土
4　黄白色砂
5　黄白色砂と暗青灰色シルト

0009溝
1　灰色砂質土（鉄分含む）
2　灰色砂（鉄分含む）
3　暗青灰色細砂
4　灰褐色砂質土
5　暗灰褐色砂質土、灰白色微砂ブロック混じる
6　4と同じ
7　灰白色細砂
8　灰褐色粗砂
9　暗灰褐色土
10　白色粗砂
11　黄灰色粗砂
12　4と同じ
13　黄褐色土（鉄分含む）

0　2m

42図　0009・0101・0102・0103・0104溝土層断面実測図（縮尺1：40）



43図　0054・0057・0058・0135・0136・0140溝土層断面実測図（縮尺1：40）

D－7調査区境から北東方向やや蛇行気味に走る溝で、調査区北側にその痕跡がないことからすると、E－5区辺りで北に方向を変えるのかもしれない。南端近くに設けたトレンチでは、溝幅0.84m。深さ10cm前後までは肩の傾斜は緩やかで、以下は直になり、幅0.20m前後の平坦な底となる。検出面からの深さは43cm。覆土は粘質土の互層である。

古墳前期の土師器細片が若干出土した。他に縄文土器が多く出土した。実測した遺物はない。

0102溝（42図、図版13-2）

D－7調査区境から0101溝と1m前後の間隔で北東方向に平行に走る幅1.8～2.7mの溝である。溝幅は北に向かうにつれ狭くなる。調査区北側にその痕跡がないのは0101溝と同じ状況であろう。南端近くに設けたトレンチ北壁で幅2.704m。西肩が急な傾斜をもつのに対し、東肩は緩やかで段が付く。深さ75cmでいったん平坦になり、その中央の幅約0.8mがさらに深くなる。検出面から底までの深さは92cm、低面の凹凸は少ない。覆土は図示した以上に複雑なものであったが、大きく1層、2～6層、8～11層に分かれ、少なくとも3段階の流れの痕跡とその埋没状態を示すものと考えられる。この溝

の肩部辺りに縄文時代の遺物包含層があり、８・９トレンチを設けたのは先に記した通りである。

溝に伴う遺物は古墳時代前期の甕など若干の出土をみただけである。他にまとまった縄文土器がある。実測した出土遺物はない。

0103溝（42図、図版14-1）

C－７調査区境から北北東方向に走る幅7.5～10.5mの溝で、その幅は北側が広くなる。南端近くに設けた幅１mのトレンチ部分では、溝幅は7.55m、肩は緩やかに傾斜し、底は幅2.60mの平坦面を作る。断面は逆台形を呈する。深さは104cm。覆土は１・２層は溝埋没後の堆積土、他は厚い粗砂・砂質土と粘質土の互層で、３～15層と17～29層とに大別できる。少なくとも２段階の流れの痕跡とその埋没状態を示すものであろう。

古墳時代前期の土師器甕、高杯片若干とともに縄文土器（実測したのは185･186･197）などが出土した。

0104溝（42図、図版14-2）

B－７調査区境から東の0103溝と0.5～１mの間隔で北北東方向に平行に走る幅1.7～2.5mの溝である。その幅は北側が狭くなる。南端近くに設けたトレンチ北壁では、溝幅は2.17m、肩は当初緩やかに傾斜し、深さ10～15cmで急になり、丸みをおびた底となる。深さは58cm。覆土は砂・砂質土と粘質土の互層となる。出土遺物はない。

東北地区

0054溝（43図、図版12-2）

Ｉ－５調査区境から北西に走る幅３～４mの溝である。南端に幅１mのトレンチを設けたにとどまる。その部分での溝幅は4.10m。溝内の覆土はほとんど粗砂と礫で、２～４層が堆積した後、幅２mほどの新たな流れがそこに切り込み、１層をとなったものであろう。底までの深さ94cm、１層底までの深さ50cmをはかる。0052・0053溝に切られる。また調査区南側の0136溝と接続する可能性もある。

安山岩の石片１点が出土しただけである。

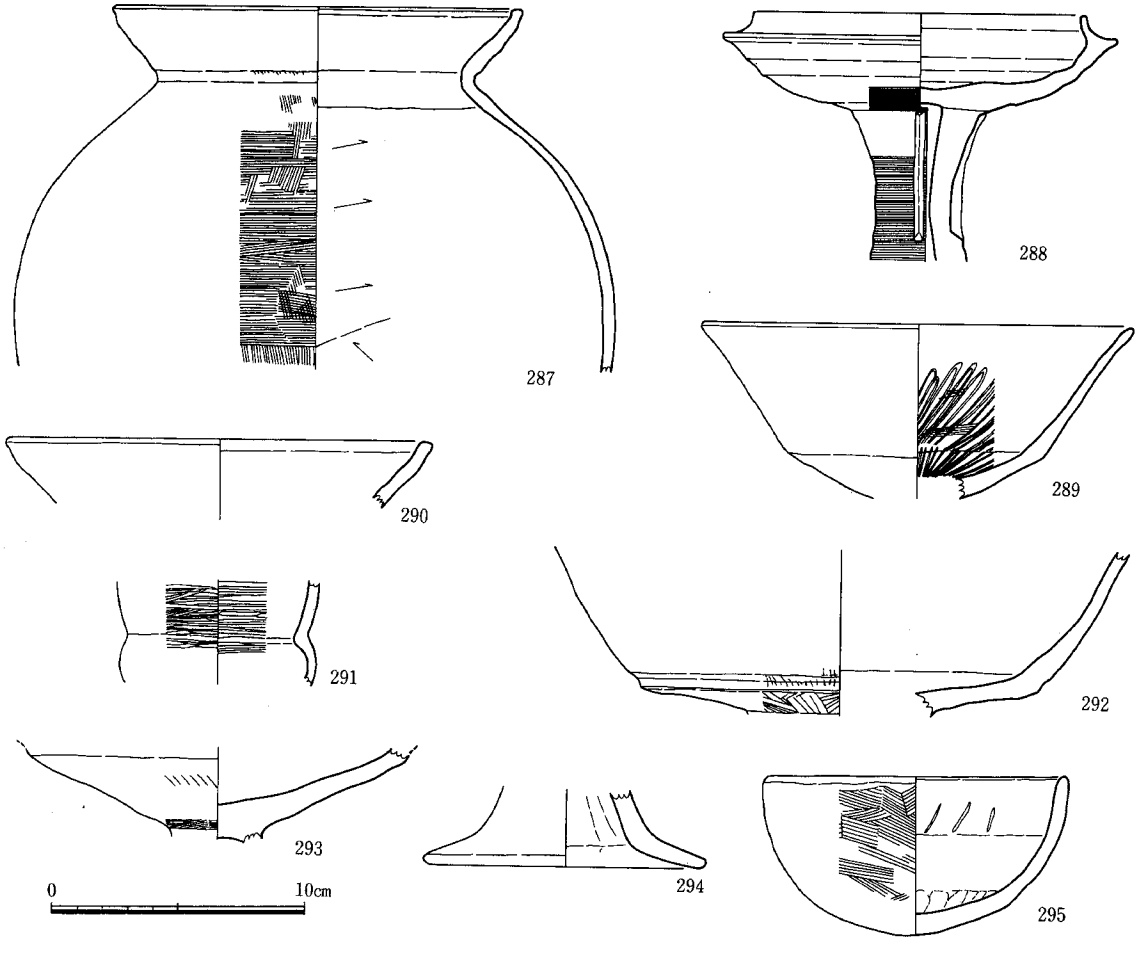
0057溝（43図）

K－５調査区境から北西に走る幅0.8～2.0mの溝で,幅は北に向かうにつれ広くなる。南端に幅１mのトレンチを設けたにとどまるが、その部分での溝幅は1.18m、肩の傾斜は緩く、底は中央がくぼみがちになる。深さは33cm。覆土は１層が粘質土、２・３層が粗砂となる。0058溝を切り、0059溝（中世）に切られる。

出土遺物（44図289）　復元口径17.0cmの土師器の高杯片である。杯部は底部から段をつけ直線的に開き、身は深い。内面は刷毛目の後暗文風のヘラ磨き、外面はナデで仕上げている。胎土は精良で、白色粒、赤色粒、金雲母を含む。焼成良好、くすんだ赤褐色を呈する。他に布留系甕、在地系甕、鉢などの破片がある。

0058溝（43図）

K－５調査区境から0057溝と平行するように北西に走る幅0.5～0.8mの溝であるが、北側は0057がその上面を完全に覆う。南端に幅１mのトレンチを設けたにとどまる。肩の傾斜は0057よりさらに緩



44図　0137土坑、0009・0057・0140溝出土遺物実測図（縮尺1：3）

く、底の凹凸も少ない。覆土はほとんど砂である。

布留系甕、在地系甕などが出土したが、細片のため実測したものはない。

東南地区

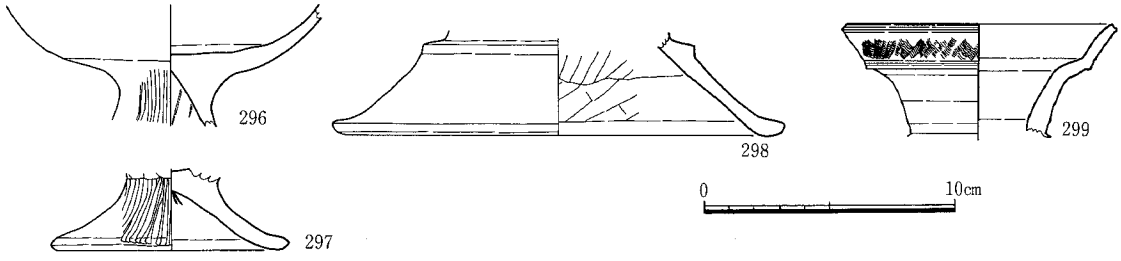
0135溝（43図）

M－13調査区境から北西に走る幅1.1～2.0mの溝である。南端近くに幅１mのトレンチを設けただけの調査にとどまる。その部分での溝幅は1.20m、深さ63cm、断面形は丸みをもつもののV字形に近い。覆土は１・２層、３～６層、７・８層の三つに大別できる。７層だけが粗砂となる。この溝を北側に延長すると、先の0057溝に接続する可能性がある。

古墳時代前期の土師器細片などが若干出土した。実測した遺物はない。

0136溝（43図）

M－13調査区境から0135溝の東側約３mを平行して北西に走る幅2.7～4.0mの溝である。南端近くに幅１mのトレンチを設けたにとどまり、その部分での溝幅は2.90m、深さ54cm。溝の肩の傾斜は緩やかで、底は平坦面を作り、そのやや東寄りが深くなる。覆土からみると１～４層と５・６層とに大別でき、２段階の流れの痕跡と埋没状態を示すものと考えられる。３層だけが粗砂である。この溝を北に辿ると、先の0054溝に接続する可能性がある。0104溝を切る。



45図　その他の出土遺物実測図（縮尺1：3）

古墳時代後期の土師器杯・壺、須恵器甕・杯片など若干とともに縄文土器（実測したのは127）などが出土している。

0140溝（43図）

L－13調査区境から北東方向に走る溝であるが、0136溝に切られる辺りから肩の線が不明瞭となる。北寄りに方向を変えた可能性もある。南端近くに幅１ｍのトレンチを設けたにとどまり、その部分での溝幅は3.30m、肩の傾斜は緩やかで、底も幅広い面を作る。ただ凹凸が著しい。底までの深さは40cm前後で、えぐれて深くなり62cmをはかる部分もある。覆土はほとんどが粗砂、小礫で占められ、２～４層と５～10層の二つに分けられる。２段階の流れの痕跡と埋没状態を示すものであろう。

出土遺物（44図290～295）　290は布留系甕。口縁部は内湾気味に外傾する。胎土には白色粒、金雲母を含み、おもに黄褐色を呈する。復元口径16.8cm。291は小型丸底壺。扁球形の胴部から口縁部が直線的に立つ。口縁部は内外面ともヘラ磨き、他はおもにナデ。精良な胎土で、黄褐色を呈する。

292～294は高杯。292は杯部が大きく深いタイプで、強い横ナデで仕上げる。胎土には白色粒、黒色粒、金雲母を含み、焼成は良好、赤褐色を呈する。293は、口縁上部が大きく開く。ナデで最終的に仕上げる。胎土は精良、焼成良好、濃い赤褐色を呈する。294は脚部片。裾端部は丸くおさめる。おもに横ナデ調整を行う。白色粒、赤色粒、金雲母の混じった胎土で、暗い赤褐色を呈する。295は鉢。半球形で、口縁端部は丸くおさめる。外面の一部に粗い刷毛目調整、他は指ナデで仕上げる。白色粒、赤色粒、金雲母を含んだ胎土で、淡い赤褐色を呈する。口径12.0cm、器高6.2cm。

0156溝（付図）

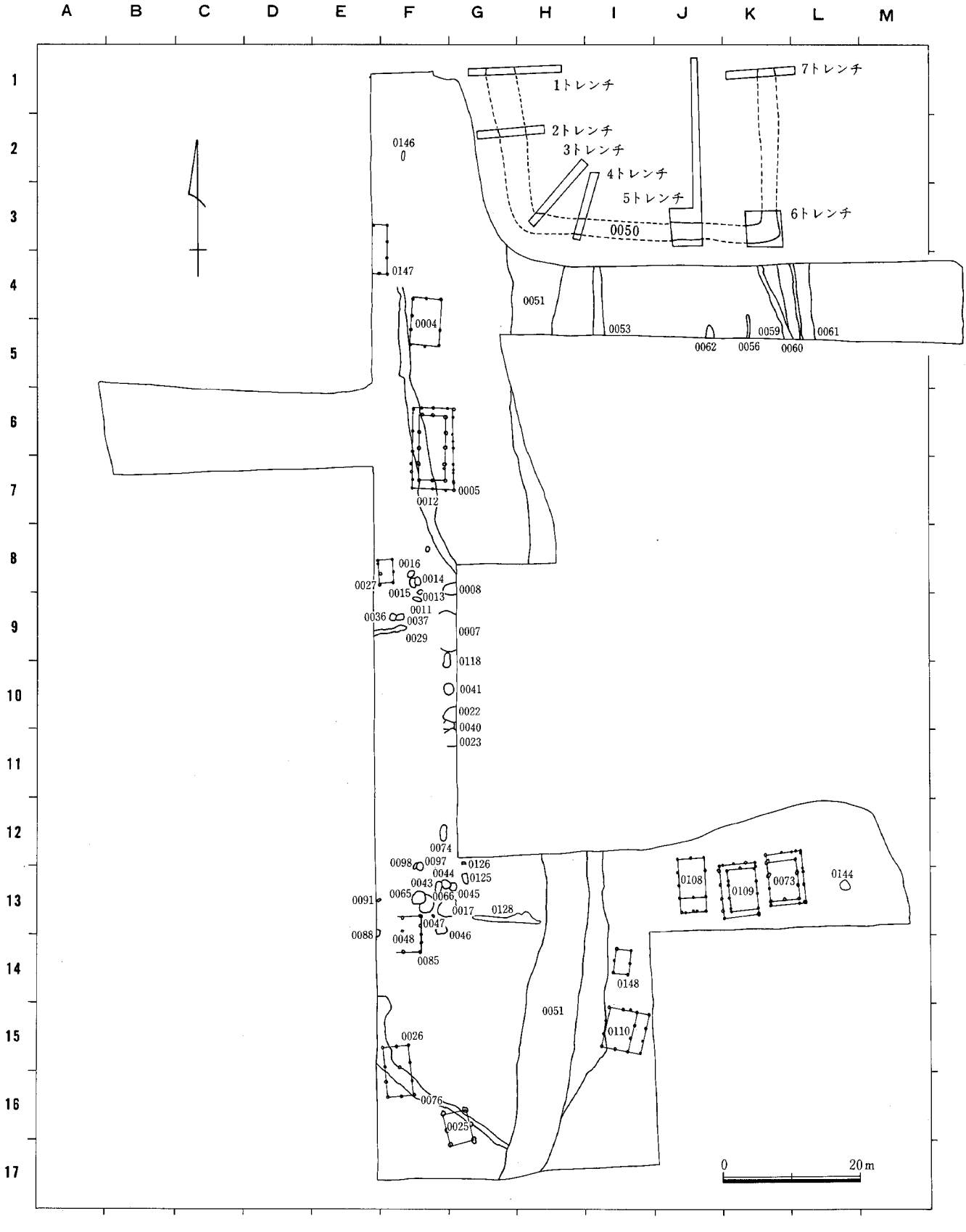
K－13調査区境から北北東に走る溝で、0140溝と重複するK・L－12付近で肩が不明瞭となる。南端部分のトレンチ調査にとどめ、そこでの溝幅0.56m、深さ12cm。断面はU字形で、覆土は砂質土。

縄文土器と須恵器片が出土しただけである。実測したものはない。

４－４－４　その他の出土遺物

土師器（45図296～298）　296・297は高杯。296は丸底の杯部で、脚は大きく開く。胎土には白色粒、赤色粒を多量に含み、金雲母も混じる。焼成良好、黄褐色を呈する。0567ピット出土。297は厚手の作りで、外面はヘラ研磨、内面はナデ調整を行う。胎土は精良で、微細な赤色粒や金雲母を含む。焼成良好、内外面とも赤色顔料を塗布する。0061から出土。298は鼓形器台片。裾部は跳ね上がる。胎土には白色粒、金雲母を含み、黄褐色を呈する。北地区検出面から出土。

須恵器（45図299）　壺あるいは甕で、口縁部外面下位には櫛状工具による波状文を施す。焼成良好、青灰色を呈する。口縁内面の段にはガラス化した自然釉が溜る。５トレンチから出土。



46図　中世遺構配置略図（縮尺1：800）

4－5　中世の遺構と遺物

中世の遺構は調査区にまんべんなく広がっており、掘立柱建物12棟、井戸３基、土坑29基、溝11条、環濠、それに祭祀を含む多数のピットを確認した(46図)。とくに北、中央、南、西南の４地区に掘立柱建物を中心とする濃い生活遺構が認められた。中央地区は近世の溝と重複したため掘立柱建物の確認はできなかったが、多数のピットの重複と、井戸、土坑などの遺構、また出土遺物の多さからすれば、まさに集落の中心であったと考えられる。調査区を南北に走る0051はトレンチ調査にとどめた。以下、遺構ごとに、地区をまとめて報告する。

4－5－1　掘立柱建物

確認した掘立柱建物は12棟で、位置的には北地区（0004・0005・0147)、中央地区（0027)、南地区（0025・0026・0085)、東南地区（0073・0108・0109・0110・0148）の３群に分かれる。もちろんこれがすべてではなく、ピットのあり方からみて西北地区、中央地区にまとめきれなかった掘立柱建物があるものと思われる。法量の記述にあたっては当時の１尺を30cmととらえ、これをもとに建物の規則性を求めた。以下番号は前後するが、地区ごとに北に位置する掘立柱建物から以下順にみていく。なお遺物については遺構番号順に51図にまとめた。

北地区

0147掘立柱建物（47図）

掘立柱建物としては今回の調査区では最も北側のE・F－３・４区に位置するが、西半部が発掘区外にかかる。桁行は720cm（24尺)、柱間は240cm（８尺）の等間である。梁行は北側の１間分の確認にとどまり、その柱間は210cm（７尺）をはかる。おそらく３間×２間の南北棟であろう。柱穴は北梁中間柱（0624）が径30cm、深さ12cm、東側柱は径25cm前後、深さ22～24cmである。またこの建物の東側にいくつかの柱筋が見られ、別建物あるいはこの建物に付随する施設の可能性もあるが、形としてまとめることはできなかった。

柱穴からの出土遺物はない。

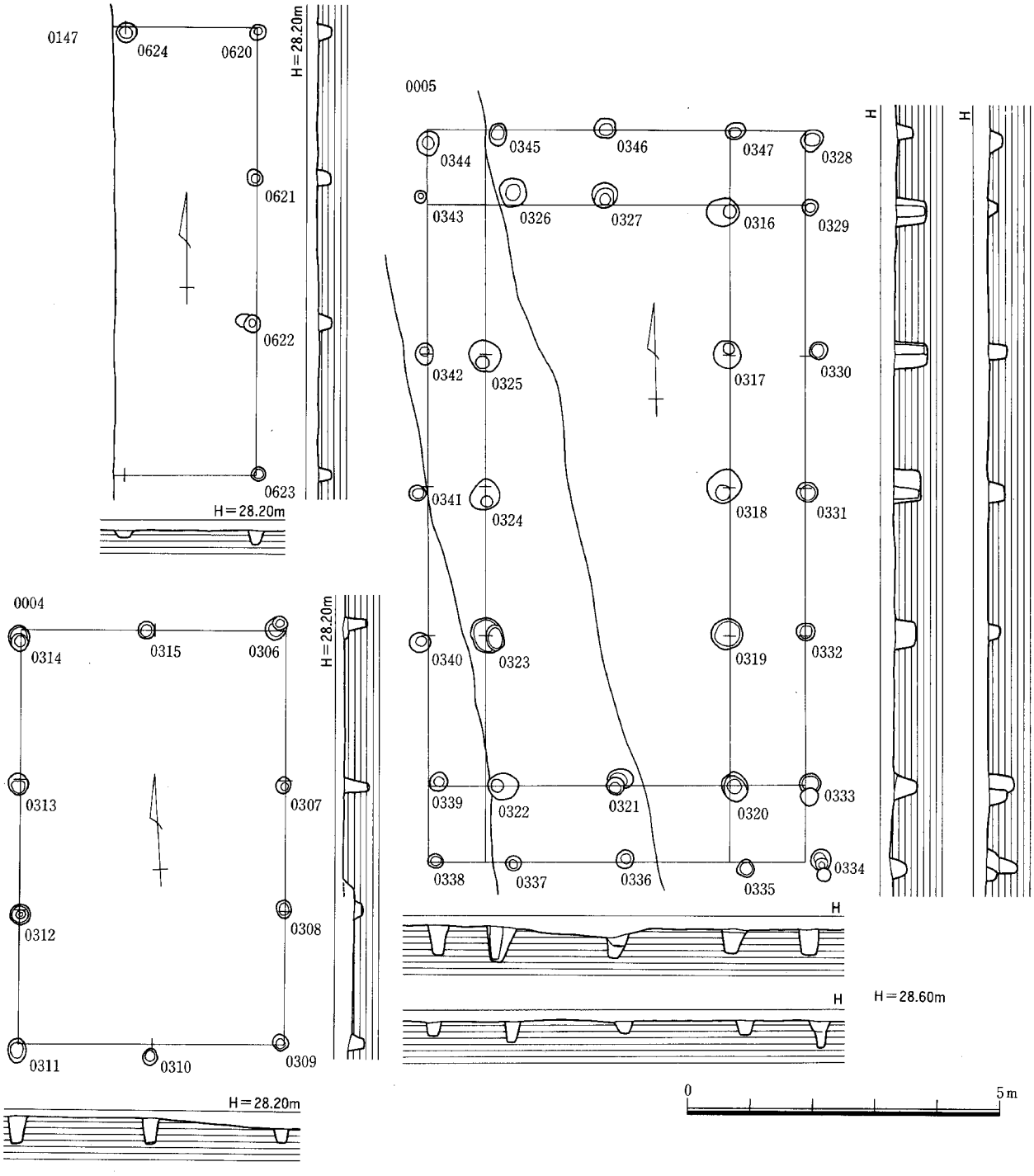
0004掘立柱建物（47図、図版15-1)

F－４・５区。建物方位をN－3.5°－Eにとる３間×２間の南北棟である。桁行は660cm（22尺)、柱間は北から240cm・210cm・210cm（８・７・７尺）と北側１間が１尺広い。梁行は420cm（14尺)、柱間は210cm（７尺）の等間。柱穴は径24～38cm、深さは31～44cmである。

出土遺物（51図300・301）　0308・0309・0314を除いた柱穴から遺物が出土した。図示したのはともに土師器皿である。300は口径9.7cm、器高1.1cm、底部はヘラ切りで、板状圧痕がある。0313から出土。301もヘラ切り、板状圧痕の底部片で、内底に「－」、外底に「×」の細いヘラ記号を持つ。0306から出土。他に黒色土器（A・B類)、土師質土鍋などが出土した。

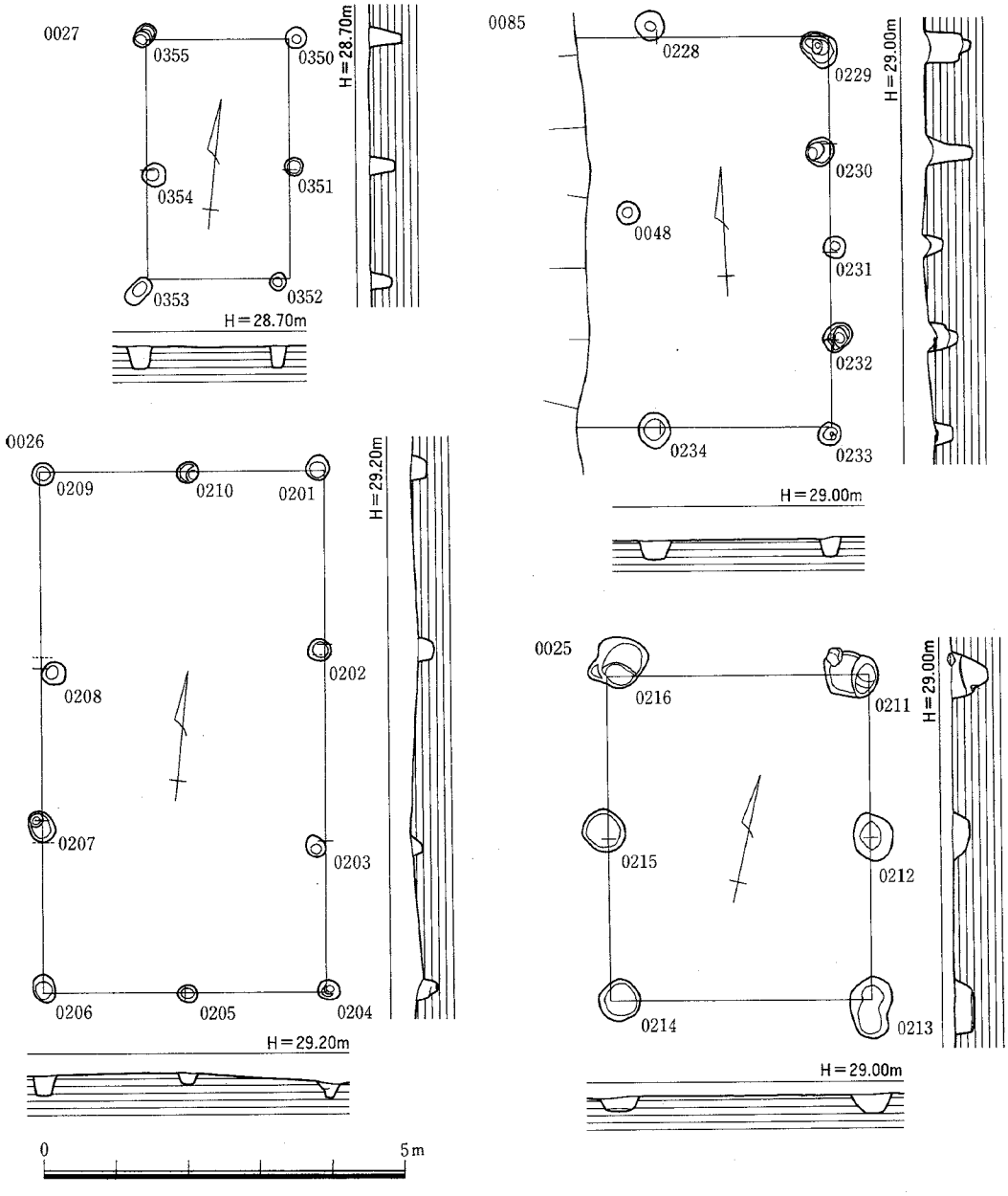
0005掘立柱建物（47図、図版15-2)

F・G－６・７区。建物方位をN－1.75°－Eにとる４間×２間四面庇付の南北棟である。桁行は930



47図　0004・0005・0147掘立柱建物実測図（縮尺1：100）

cm（31尺）、柱間は北から240cm・210cm・240cm・240cm（8・7・8・8尺）となる。梁行は390cm（13尺）、柱間は195cm（6.5尺）の等間である。一部の柱穴では柱痕跡が明らかであり、そのうち0316・0317、0317・0318、0324・0325の真々間をはかると225cm（7.5尺）となる。また0322・0324の2間分の真々距離は450cmで、1間分としてはやはり225cmとなる。しかし今見た柱間は一致しても、西北隅柱がずれるなど建物全体としては歪みが生じている。庇柱は西が側柱から90cm（3尺）の間を取り、他の3面は120cm（4尺）の間となる。側柱の柱穴は径40～60cmの円もしくは楕円形で、深さは33～61cmである。柱痕跡は径18～23cmで、0317では柱の下に扁平な石を置く。庇柱は径23～34cmの円形で、



48図　0025・0026・0027・0085掘立柱建物実測図（縮尺1：100）

深さも19～50cmと側柱に比べ小振りで浅い。柱穴の覆土は灰褐色土、0012溝に切り込む柱穴は砂を含む。柱痕跡は灰黒色土で、炭が混じる。また北梁中間柱（0327）には炭化物と焼土が充満していた。0321・0322などの側柱は二段掘りになっており、柱の抜き痕を示す可能性がある。

出土遺物（51図302・643）　14個の柱穴から遺物が出土したが、いずれも小・細片である。302は口径13.7cmの土師器杯片。器面は磨滅が著しい。0334から出土。643は滑石製石鍋の底部片である。内底縁から外底へ径0.8～1.0cmの円孔を斜めに穿つ。孔には鉄製品らしきものが詰まる。内面は丁寧な削りで光沢を帯びるのに対し、外面は削り痕をそのまま残し、また煤が全体に付着している。0346から出土。他に土師器杯、黒色土器A・B類などが見られる。

中央地区

0027掘立柱建物（48図）

E・F－8区。建物方位をN－6°－Wにとる2間×1間の南北棟である。桁行は330cm（11尺）、その柱間は北から180cm・150cm（6・5尺）、梁行は195cm（6.5尺）である。柱穴は径24～39cmの円形もしくは楕円形で、深さは29～57cmとばらつきがある。東南隅柱が中に入り込むなど柱筋に若干の歪みがある。発掘区外の西側に延びる梁間2間の東西棟である可能性もある。

出土遺物（51図304）　0352を除いた柱穴から遺物が出土した。304は0354から出土した土師器皿小片。口径14.8cm、器高2.9cm、底部は糸切りである。この他土師器小皿・皿、瓦器などの細小片が出土した。このうち確認できる土師器の底部はすべて糸切りである。

南地区

0085掘立柱建物（48図）

F－13・14区。4間×2間の南北棟と考えたが西側を0010溝に切られ、南北梁中間柱と東側柱しか残らない。桁行は540cm（18尺）で、柱間は北から150cm・150cm・120cm・120cm（5・5・4・4尺）となり、梁間は240cm（8尺）をはかる。建物方位はN－2.5°－E。柱穴は径30～47cmの円あるいは楕円形で、深さは30～74cm。0229柱穴は別のピットが切り合っている。0232・0233には焼土がみられた。この建物から北側にかけては多くのピットがあり、数棟の建物またはその付属施設があった可能性もある。この0085建物は他の建物に比べ柱間などに相違があるが、現場での確認を重視し建物として取り上げた。この建物の中には0048のピットがあり、完形の土師器皿が出土している。

出土遺物（51図645）　0230から出土した砥石である。幅6.8cm、厚さ1.6cmの扁平な長方体状で、残存部では表裏・両側面の4面を砥面として使用している。石材は一般に天草砥石と呼ばれるものである。他のすべての柱穴からも、土師器皿（糸切り）、土師質コネ鉢などの遺物が出土している。

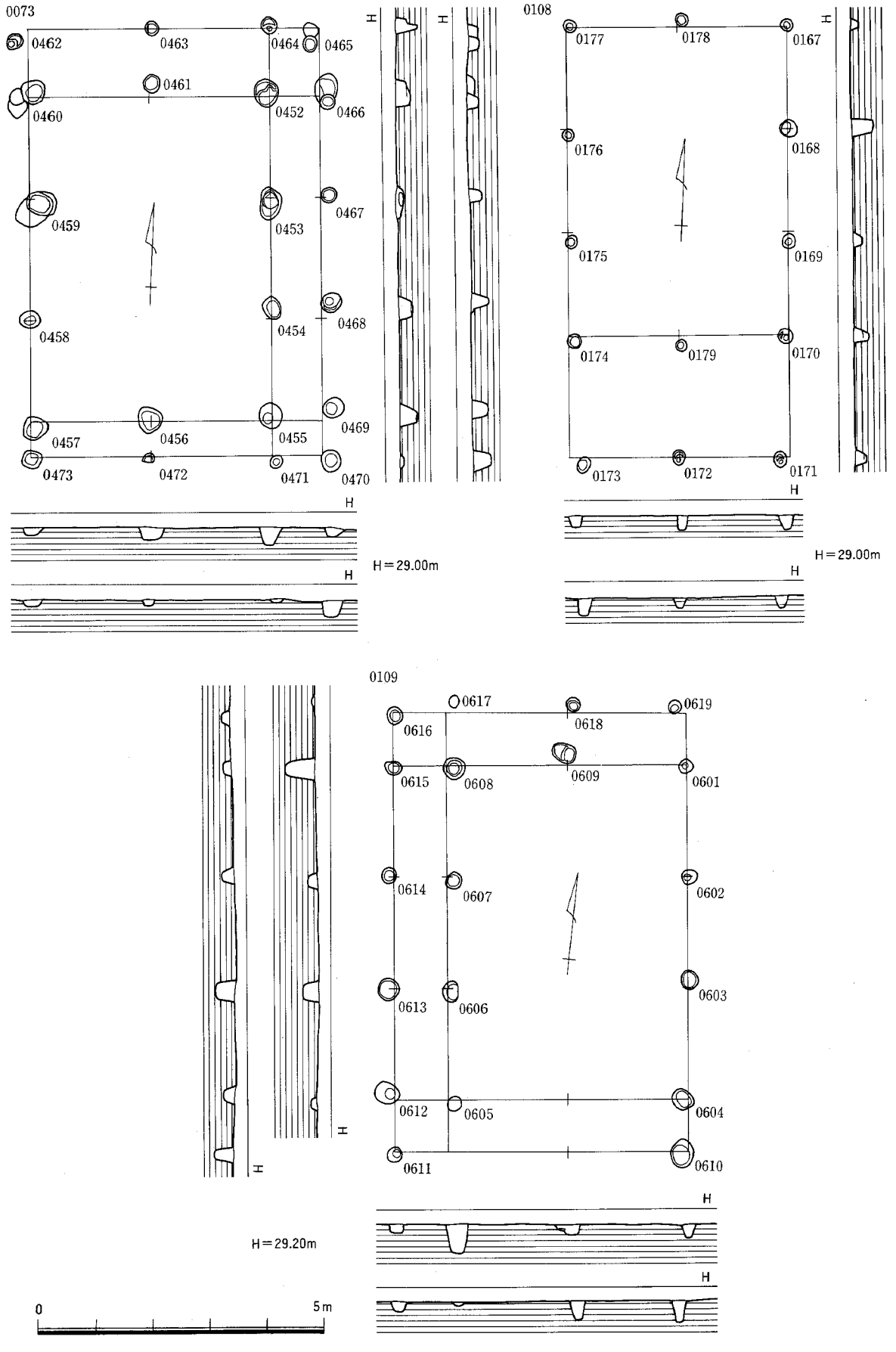
0026掘立柱建物（48図、図版16-1）

F－15・16区。建物方位をN－6°－Wにとる3間×2間の南北棟である。桁行は720cm（24尺）、その柱間は東西で異なり、東桁は北から240cm・270cm・210cm（8・9・7尺）、西桁が北から270cm・210cm・240cm（9・7・8尺）となる。若干のずれを見込めば、東西桁とも北から255cm・255cm・210cm（8.5・8.5・7尺）とすることもできる。梁行は390cm（13尺）、柱間は195cm（6.5尺）の等間である。柱穴は0206・0207が楕円形状で大きめである他は、径30cm前後、深さ20cm前後のものが大半を占める。

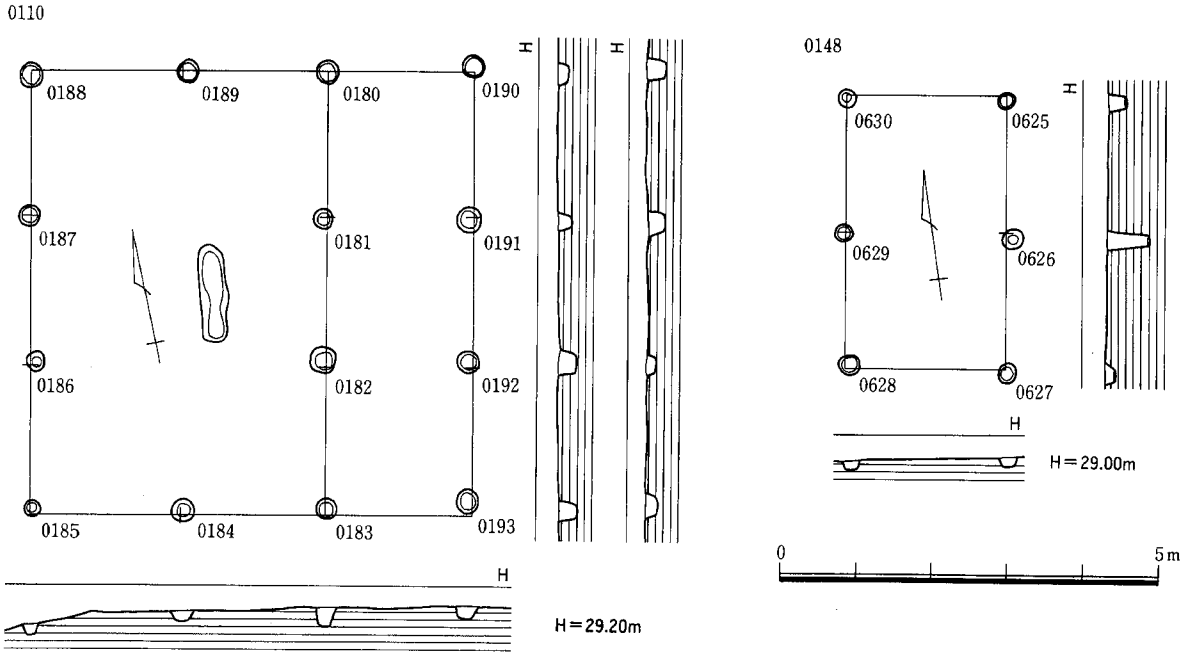
出土遺物（51図303・644）　0203～0208以外の柱穴から遺物が出土した。303は瓦器椀。小さな高台が付き、内外面ともヘラ磨きで仕上げる。ただ内面は磨滅が著しい。644は滑石製石鍋片。幅3.3cm、長さ9.0cmの縦耳をもつ類で、耳部分で4.0cm、それ以外の部分で、2.2cmの厚さがある。内面は削りで比較的滑らかに仕上げる。外面は数段にわたり短い縦方向の連続した削りが残り、さらに厚い煤が付着する。ともに0209から出土。この他に少量の土師器皿・杯などと鉄釘が出土した。土師器皿の底部切り離しは明確でない。

0025掘立柱建物（48図、図版16-2）

F・G－16区を中心に建てられた建物方位をN－12°－Wにとる2間×1間の南北棟である。桁行は450cm（15尺）、柱間は225cmの等間、梁行は360cm（12尺）をはかる。柱穴は径55cmを越え、この遺跡では大型の部類にはいる。深さは0211・0216が45～50cm、他は20～29cmである。0211・0213・0216が大きく不整な平面形で、また0211・0216が二段掘りとなることから、位置をほとんど変えないままで、建て替えが行われた可能性がある。



49図　0073・0108・0109掘立柱建物実測図（縮尺1：100）



50図　0110・0148掘立柱建物実測図（縮尺1：100）

出土遺物はいずれも細片で、土師器少量、白磁１点と若干の縄文土器がみられた。

東南地区

0108掘立柱建物（49図、図版17-2）

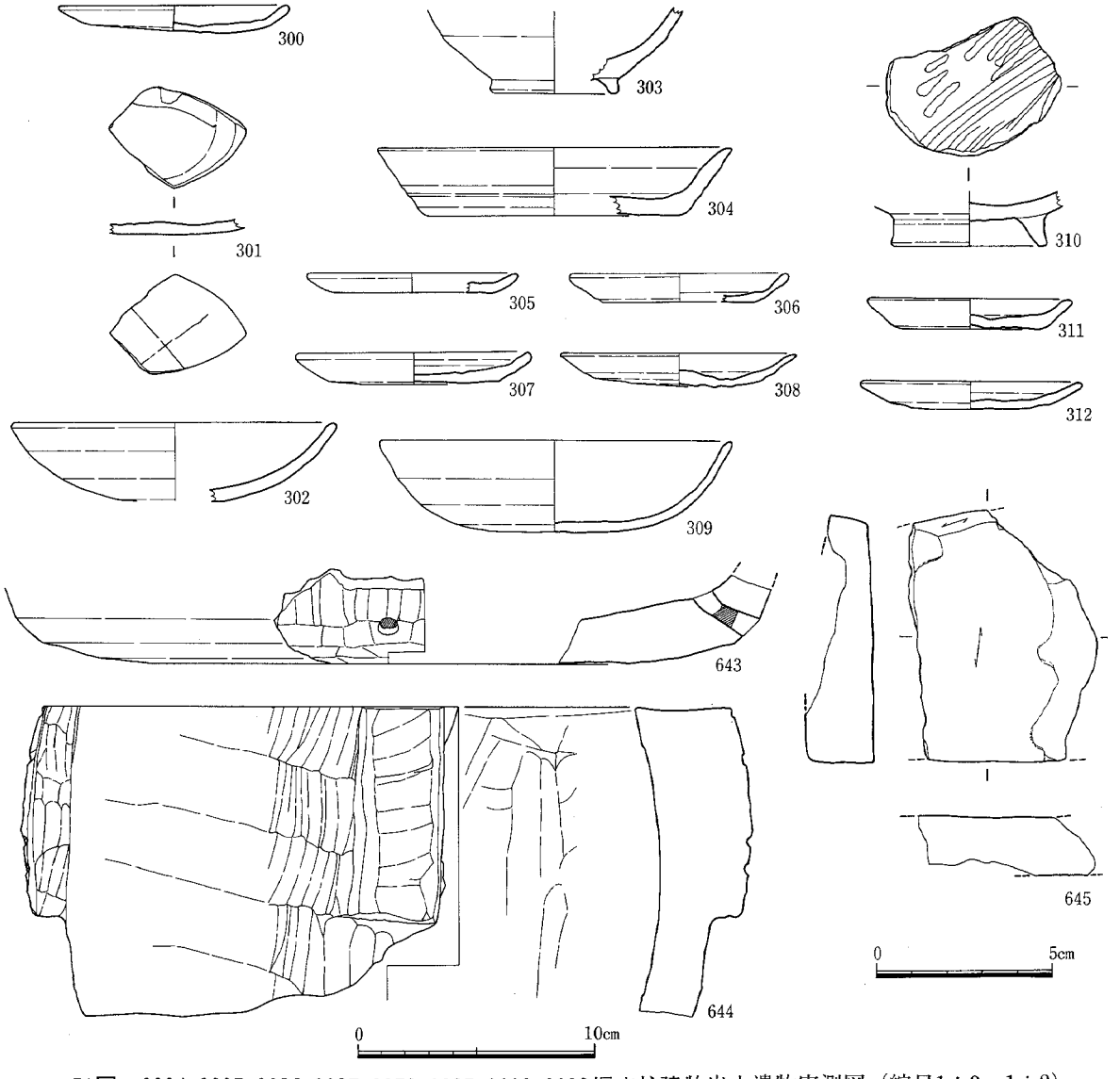
J－12・13区。建物方位をN－2.5°－Wにとる４間×２間の南北棟である。桁行は750cm(25尺)、柱間は北から180cm・180cm・180cm・210cm（６・６・６・７尺)。梁行は390cm(13尺）で、柱間は195cm（6.5尺）の等間。東西桁行の南側から１間目の中央に床束柱がある。柱穴は0179が径17cmと小さく、また0168が径31cmで最大で、他は径22～28cmである。深さは16～37cm。0168がやはり最も深い。桁行南側１間の柱間が他の柱間と異なり、また0171・0172の隅柱もやや建物内側に入ることから、床束とした0179を南梁中間柱と考え、３間×２間の南庇付建物としてとらえることも可能である。

出土遺物（51図310）　0168からだけ出土した。図示したのは黒色土器A類椀片。高台は高く張り、残存部内面はヘラ磨きを行う。他に杯（底部ヘラ切り）の底部片が、各々１点ある。

0073掘立柱建物（49図、図版17-1）

K・L－12・13区。建物方位をN－3°－Wにとる３間×２間三面庇付の南北棟である。桁行は570cm（19尺）で、柱間は北から180cm・210cm・180cm（６・７・６尺）となる。梁行は420cm（14尺)、その柱間は210cm（７尺）の等間である。北梁中間柱がやや外に出る。庇は西側を除く三面に付き、側柱から北面は120cm（４尺)、東面は90cm（３尺)、南面は60cm（２尺）とそれぞれ幅が異なる。このうち東北隅柱（0465）だけが内側に入り、柱筋が通らない。柱穴は円あるいは楕円形で、径23～55cmと大小あるが、身舎柱は北梁中間柱(0461)が小振りである以外は径40cm前後のものが多く、庇柱の径25～30cmに比べると大きい。深さは14～36cm、やはり庇柱が浅い傾向にある。0453の底近くには偏平な石を置く。

出土遺物（51図305～309）　0455・0464・0469・0471～0473以外の柱穴から出土した。細・小片が多く、図示できたのは一部にすぎない。305～308は土師器皿。口径8.8cm～9.9cm、器高0.9～1.4cm。



51図　0004・0005・0026・0027・0073・0085・0108・0109掘立柱建物出土遺物実測図（縮尺1：3、1：2）

底部はヘラ切りで、306・307には板状圧痕が残る。308は底部の巻き上げ痕が明瞭である。306は灯明皿として利用されたもので、口縁端から外面の一部に煤が付着する。309は土師器杯片。口径14.8cm、器高3.8cmをはかり、底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。306は0454、308は0459、305・307・309は0460から出土。

0109掘立柱建物（49図）

J・K－12・13区。南梁中間柱および南庇柱の一部を確認できなかったが、柱筋などから建物方位N－5°－Wの3間×2間、三面庇付の南北棟としてまとめることができる。桁行は585cm(19.5尺)、その柱間は195cm（6.5尺）の等間である。梁行は420cm（14尺）、柱間は210cm（7尺）の等間。庇は東側を除く三面に付き、身舎側柱からの幅は90cm（3尺）である。北側の柱筋が少し乱れる。柱穴は円形で、径23～35cm、深さ20cm前後のものが多い。

出土遺物（51図311・312）　0602・0609～0614から出土した。細・小片が多く、実測できたのは2点の土師器皿だけである。311は口径8.6cm、器高1.3cm、底部はヘラ切りで、器表に赤色のスリップを

施した可能性がある。0602から出土。312は口径9.4cm、器高1.0cm、底部はヘラ切りで、板状圧痕が残る。0609から出土。

0148掘立柱建物（50図）

Ⅰ－14区。建物方位をN－8.5°－Eにとる２間×１間の南北棟で、桁行は360cm(12尺)、柱間は180cm（６尺）の等間である。梁行210cm（７尺）をはかる。柱穴は20～30cmの円形で、深さは14～55cmであるが、桁行の中間側柱２本が隅柱に比べ深い。

0627から須恵器細片、0629から土師器細片と小鉄滓9点が出土した。

0110掘立柱建物（50図、図版18-1）

Ⅰ－15区。西側の0051大溝埋没後に築かれた建物方位をN－12.5°－Eにとる３間×２間、東庇付の南北棟である。桁行585cm（19.5尺）、梁行390cm（13尺）、庇は東側柱から195cm（6.5尺）外に設けられる。柱間は梁、桁、庇とも195cm（6.5尺）の等間である。柱穴は径20～30cm、深さは42cm。北側柱部分と庇柱に9～17cmの浅いものがみられ、西南隅柱が42cmと深い。身舎中央の溝はこの建物に伴うものではない。

遺物は0184・0192から土師器細片各１、0188から鉄器片が１点出土したにとどまる。

４－５－２　井戸

井戸は中央２基と、南で１基を検出したにとどまる。うち２基は石組井戸、１基は素掘りで、水溜部分に石組を用いていた。北から順に報告する。

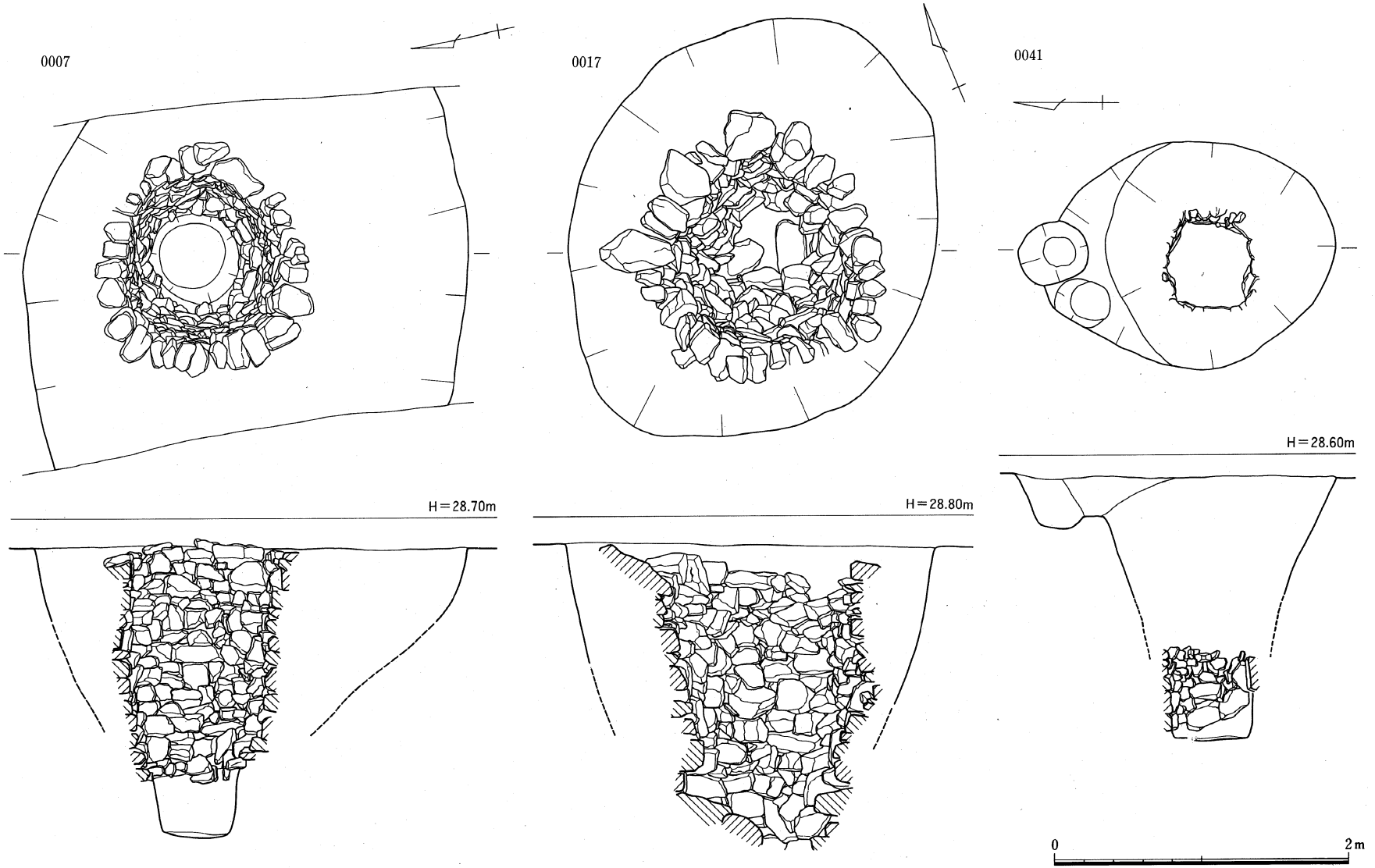
0007井戸（52図、図版18-2）

F･G－９区に位置する石組み井戸である。掘り方は東が調査区外、西が0006溝（江戸時代）に切られ全容は不明。南北幅は3.00m、検出時の状況からすれば、東西幅はこれより長く、楕円形状を呈すると想定できる。この掘り方の北側寄りに長さ、幅、厚さとも30cm以内の花崗岩の転石を組み合わせ、円形の井戸側を作る。石組みは検出面から深さ1.65mまでおよそ13～15段にわたって積み上げる。石組みは上部で径1.5m、下部で径0.6m。その下を0.45m掘り下げ水溜を作る。底面の径0.45m、検出面からの深さ2.04m。側として曲物などを置いたと考えられるが、その痕跡を認めることはできなかった。また井戸底からの湧水もなかった。

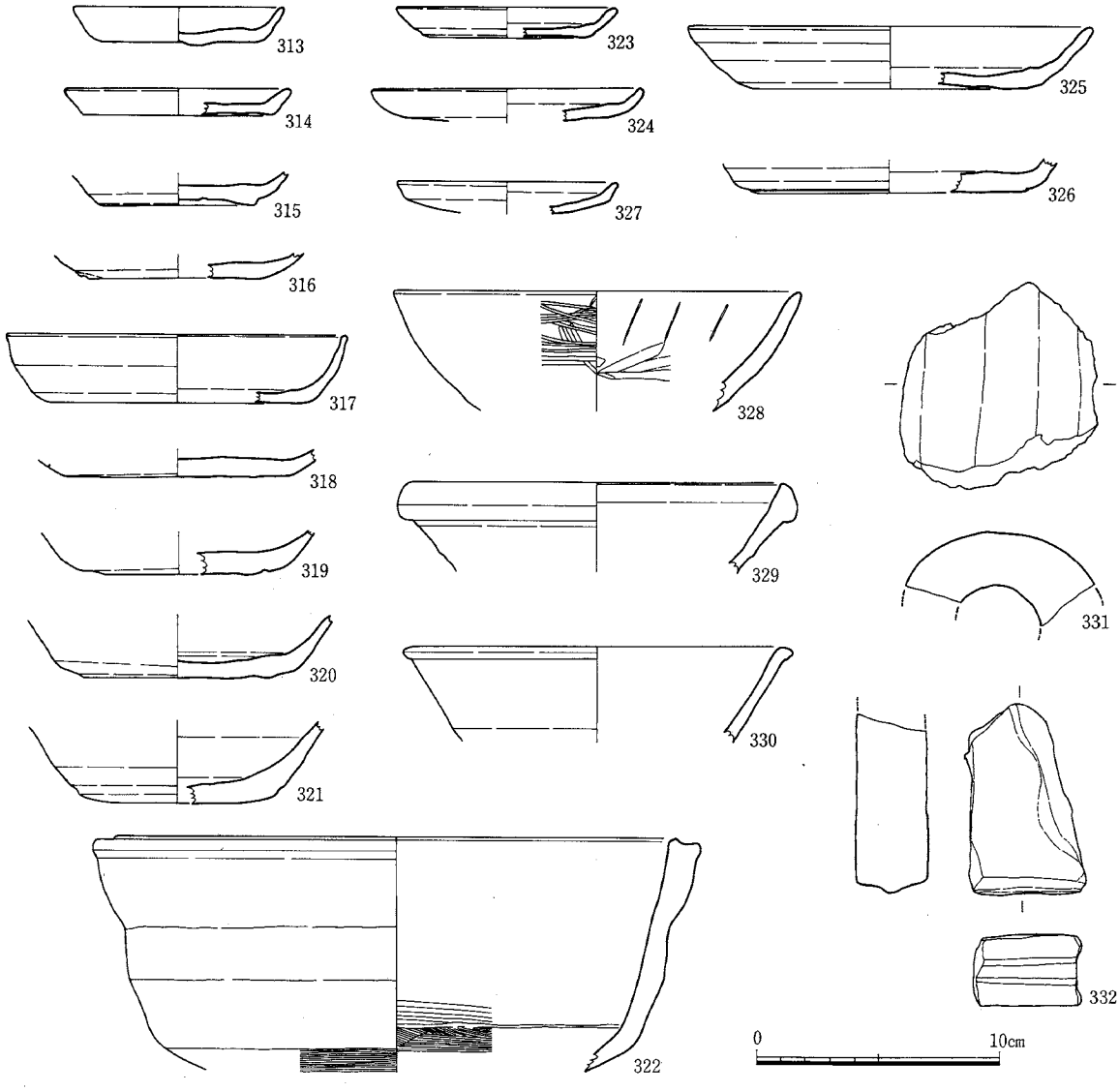
出土遺物（53図313～322）　313～320は土師器皿。313～316は口径8.6～9.2cm、器高1.1～1.5cmの小型の皿、317～320は大型の皿で、317が口径13.9cm、器高2.8cmをはかる。いずれも底部は糸切りで、299・298には板状圧痕が残る。321は以上の皿に比べ身が深く杯であろうか。底部は糸切り離し。322は復元口径24.8cmの土師質の土鍋。口縁は開き気味で、端部は肥厚して上部が中くぼみとなる。蓋の受け部となるものか。底部が内外面とも細い刷毛目、他は横ナデ調整で仕上げるが、外面には指押さえの凹凸が残る。また外面全体に煤が付着する。胎土は精良で、外面黒褐色、内面明黄褐色、内底は暗褐色となる。他に白磁、龍泉窯系青磁、須恵質コネ鉢などの破片、鉄釘、鉄滓がある。

0041井戸（52図、図版19-2）

F･G－10区に位置する素掘りの井戸である。上面は南北長2.00m、東西幅1.50mの楕円形で、北側



52図　0007・0017・0041井戸実測図（縮尺1：40）



53図　0007･0041井戸出土遺物実測図（縮尺1：3）

に浅い段を作り、下に掘り込む。深さ1.15mから底にいたる部分の壁面には、最大20cm大の石を乱雑に４～５段貼り付けるようにして水溜部分を作る。この石組みの一部の石は強く焼け煤が付着している。深さ1.78m、底面は粗砂層であったが、湧き水はなかった。

出土遺物（53図323～332）　323～326は土師器皿。323は口径9.0cm、器高1.3cm、324は口径11.1cm、器高1.3cmをはかる。325・326は大型のもので、325で口径16.5cm、器高2.5cmをはかる。底部は326が糸切り、他はヘラ切りで、323と325には板状圧痕が残る。実測していない破片を見ると上面出土はすべて、井戸側内出土も糸切り離しが多い。

327・328は瓦器。327は口径9.0cm、器高1.4cmの皿で、底部は糸切りの後ナデ調整を行う。焼成堅緻、濃灰色で、銀色の光沢を帯びるところもある。328は椀。内外面ともヘラ研磨を行い、内面にはヘラのこて痕が残る。口縁部と底部付近は黒色、そのあいだは黄灰色となる。焼きはあまい。

329・330は白磁小片。329は椀Ⅳ類、330は椀Ⅵ類で口縁端を外に引き出す。ともに緑味を帯びた灰色の釉で、表面は気泡がはじけたようになり滑らかさを欠く。

331はフイゴ羽口片。残存部は内径3.6cm、外径8cm強に復元できる。胎土には白色粒が多く混じり、焼き締まりが悪い。

332は瓦もしくは磚か。厚さ3cm前後の板状の土製品で、残存する一側面の中央には幅1.1cm、高さ0.4cmの突出部がある。胎土には砂粒が多く、焼成ややあまく、おもに黄褐色を呈する。全体に磨滅している。

他に鉄釘、小鉄滓、炉壁片、炭などが出土している。

0017井戸（52図、図版19-1）

F・G－13区に位置する石組み井戸である。南北長2.00m、東西幅2.45mの楕円形状掘り方のやや南寄りに長さ、幅、厚さとも40cm以内の花崗岩の転石を組み合わせ、上面で南北1.35m、東西1.20mの楕円形の井戸側を作る。石組みは検出面から深さ約２mまでおよそ12～13段にわたって積み上げるが、その付近から壁がはらんで危険なため調査をそれ以下は行わなかった。石組みは大きめの石を積み上げ、その隙間の小石を詰めた構造で、0007井戸より粗雑な感じを与える。

出土遺物には土師器皿・杯（底部がわかるものはすべて糸切り）、土師質コネ鉢、龍泉窯系青磁小椀、施釉陶器などの破片と鉄滓がある。実測は行ってない。

４－５－３　土坑

土坑は29基あり、中央地区と南地区に集中する。ここでは北地区（0142）、東北地区（0062）、東南地区（0144）の土坑をはじめに報告し、ついで中央地区（0008・0011・0013・0014・0015・0016・0022・0023・0033・0036・0037・0040・0118）、そして南地区（0043・0044・0045・0046・0065・0066・0074・0088・0091・0097・0098・0125・0126）の土坑を番号順に続ける。

北地区

0146土坑（54図）

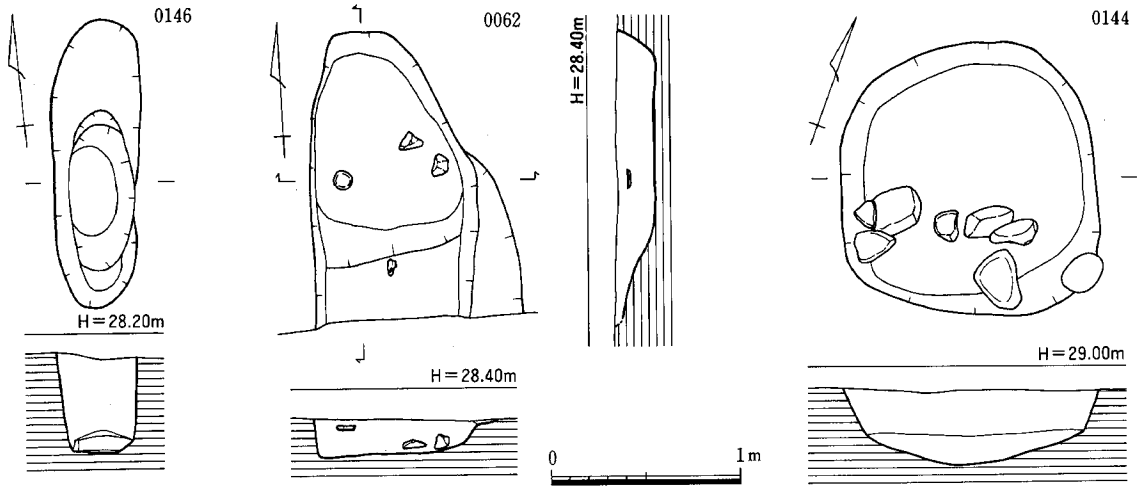
F－２区、0003竪穴住居の西に位置し、長軸をほぼ南北にとる長さ1.53m、幅0.46m、深さ52cmの楕円形土坑である。底面は土坑中央にすぼまり、47×35cmの楕円形となる。覆土は暗褐色砂質土で、出土遺物はない。

東北地区

0062土坑（54図、図版20-1）

J－５区に位置する。南側が調査区外にかかるがほぼ南北に長軸をとる楕円形の平面をもつものであろう。東西幅0.9m、東南側上面は若干崩れたようになる。底面は南側で深さ5～12cmのやや南に傾くテラスを作り、その北側が一段下がり、南北0.90m、東西最大幅0.88mの西に傾斜する丸みをおびた三角形を作る。検出面からの深さは20cmである。

出土遺物（57図344～351）　344～349は土師器皿。法量で３種に分けられる。344～346は口径8.0～8.6cm、器高1.1～1.6cm。347・348は口径9.6～10.3cm、器高1.8～2.1cm。349は大皿で口径16.6cm、器高2.9cmをはかる。大皿以外は底部が丸みをおびるものが多く、特に347・348はその傾向が著しい。底部は344が不明の他は、すべてヘラ切りで、345と348には板状圧痕が残る。色調に通有の赤褐色の他、灰黒色（344・347・348）がみられる。350は口径13.9cmの椀片である。全体に、摩滅している。351は土師器皿



54図　0062・0144・0146土坑実測図（縮尺1：40）

底部を円盤状に加工したもので、長径3.5cm、短径3.0cm、厚さ0.3cmをはかる。上面（内底）は指ナデ、下面（外底）はヘラ切りの上に板状圧痕が残る。他の土師器皿・杯片もほとんどが底部ヘラ切りで、板状圧痕が残るものが多い。陶器片、鉄釘も出土した。

東南地区

0144土坑（54図）

L－13区。南北長145cm、東西幅134cmの隅丸の方形状土坑である。深さ40cm、底は鍋底状となる。南側では礫が底面から5～10cm浮いて出土した。0136溝を切る。出土遺物はない。

中央地区

0008土坑（55図、図版20-2）

G－８区に位置する東西に長軸をとる楕円形土坑で、東側部分は調査区外にかかる。南北幅1.70m、東西は1.95mほど確認した。深さは20cm、底面は中央部分が深くなる。

出土遺物（57図333）　口径8.2cm、器高1.1cmの土師器皿。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。他に土師質土器、須恵質土器、白磁椀、朝鮮系陶器などの小・細片が出土している。

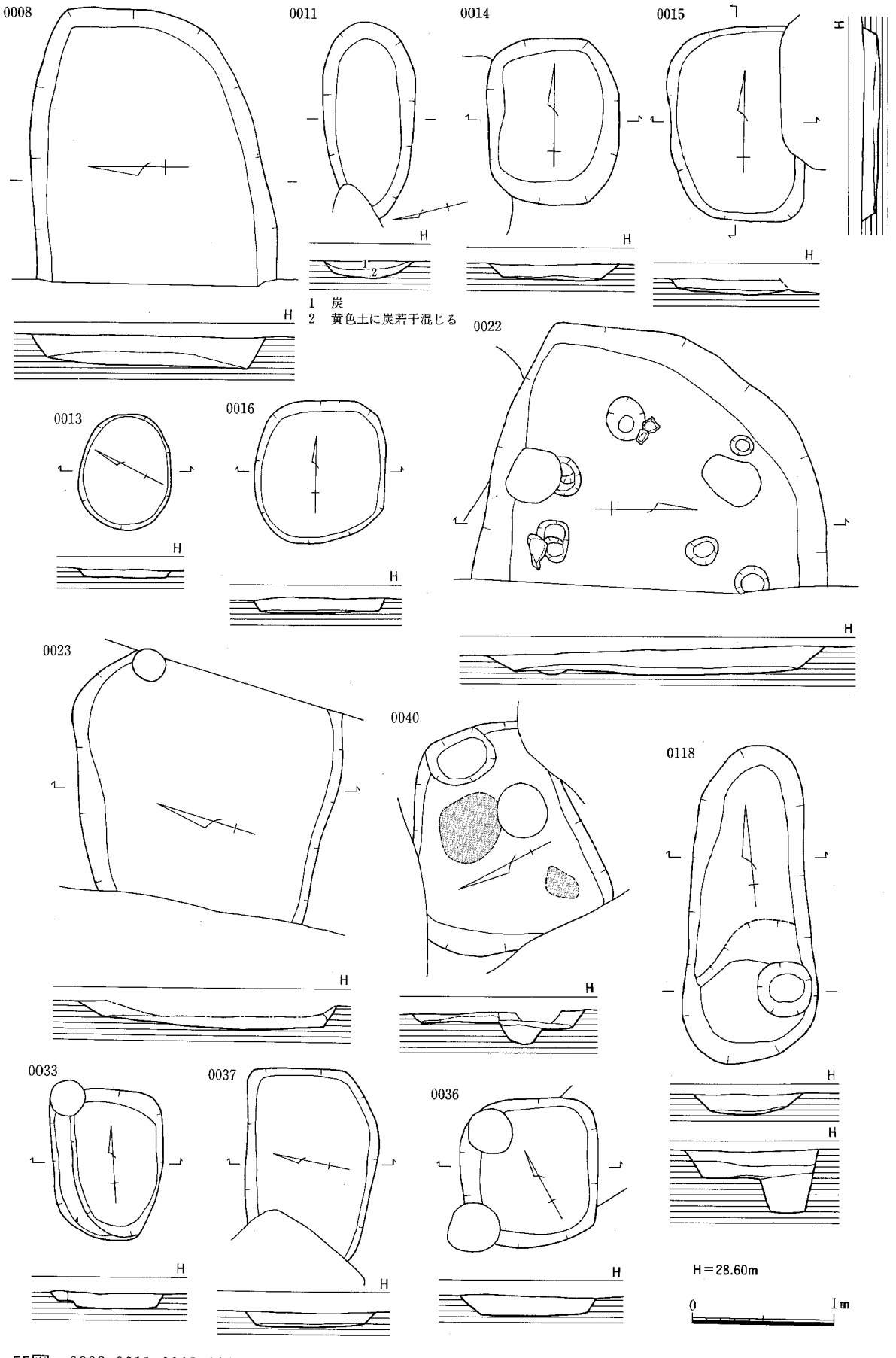
0011土坑（55図、図版21-1）

F－９区。東西に長軸をとる楕円形状の土坑で、0035溝状遺構に西端を切られる。長さ1.40m前後、幅0.65m、深さ15cm。検出時上面は炭で覆われており、その厚さは６cmをはかる。その下は炭が若干混じった黄色土となる。東壁部分には炭の密度がより濃い。しかし壁面には特に焼けた痕跡はみられない。

出土遺物は土師器皿（糸切り底）、瓦器椀などの細片にとどまる。実測は行っていない。

0013土坑（55図）

F－８区。東西に長軸をとる長さ0.81m、幅0.65m、深さ６cmの卵形の浅い土坑である。覆土は鉄分を含んだ赤褐色土。



55図　0008・0011・0013・0014・0015・0016・0022・0023・0033・0036・0037・0040・0118土坑実測図（縮尺1：40）

土師器の細片１点だけが出土した。

0014土坑（55図、図版21-2）

F－８区。南北長1.18m、東西幅0.94m、深さ11cmの浅い隅丸長方形の土坑である。長軸はほぼ南北である。覆土は灰褐色土に黄色土が混じる。0015土坑を切る。

出土遺物はいずれも細片で、土師器杯・皿（底部はヘラ・糸切り混在）、土師質土器、瓦器、天目椀などがある。実測は行っていない。

0015土坑（55図、図版21-2）

F－８区。0014土坑に東南隅部分を切られる。南北長1.40m、東西幅0.95m、深さ11cmの浅い長方形土坑で、隅は丸みをおびる。覆土は0014とほぼ同じで、若干黄色土が多く混じる。

土師器皿(底部糸切りあり)、瓦器椀などとともに、鉄刀子、鉄滓２点が出土した。実測は行っていない。

0016土坑（55図、図版21-2）

F－８区、0015のすぐ北に位置する南北1.01m、東西0.92mの隅が丸みをおびた近正方形で、深さは10cmと浅い。覆土は暗灰褐色土で、下部は黄色土となる。

土師器杯・皿（底部ヘラ・糸切り混在）などが出土しているが、細片で実測に耐えない

0022土坑（55図、図版22-1）

F･G－10区に位置する。東側が発掘区外にかかる。検出した部分からみれば東西に長い楕円形の土坑である。南北幅は2.51m、深さは20cm。覆土は炭化物の混じった灰褐色土である。ほぼ平坦な底面には径20cm前後のピットが６つ見られる。その規模や遺物から見ると工房的な遺構の可能性もある。0040土坑を切る。

土師器皿（底部糸切り）など、土師質コネ鉢、須恵質土器、龍泉窯系青磁椀（鎬蓮弁）、青白磁合子、同安窯系青磁などの破片とともに小鉄滓20点ほどが出土している。実測したものはない。

0023土坑（55図）

F・G－11区。西側が0006溝（江戸時代）に切られ、東側は発掘区外にかかる。東西に長軸をとり、東側が膨らみ気味の楕円形状の土坑であろう。南北最大幅は1.90m、深さは20cmである。

出土遺物（57図334･335）　334は口径8.7cm、器高1.8cmの土師器皿。底部は摩滅が著しいが、糸切りであろう。335は口径16.4cm、器高5.2cmの土師器椀片。小さな断面三角の高台がつく。横ナデ調整で仕上げる。他に土師器皿（底部ヘラ･糸切り混在。ヘラが少ない）、瓦器、須恵器、白磁、龍泉窯系青磁などの細片とともに鉄滓、炉壁片が出土している。

0033土坑（55図）

F－８区。南北に長軸をとる隅丸長方形の土坑である。長さ1.06m、幅0.8m。北側部分が南側に比べわずかに広い。西側壁深さ７cmの所に幅10cmのテラスを作り、さらに５cm下がって平坦な底面となる。覆土は黄色土混じりの灰黒色土一層である。

出土遺物（57図336）　口径15.0cmの瓦器杯片である。回転ナデ調整で仕上げ、焼成きわめて良好、

叩くと金属音を発する。他に土師器皿（底部ヘラ・糸切り混在。板状圧痕あり）、須恵質土器、白磁IV類椀、青白磁合子などの細片と小鉄滓１点が出土している。

0036土坑（55図）

F－９区に位置する南北長1.05m、南北幅0.97mのほぼ正方形の土坑である。隅は丸みを帯びる。深さは14cm、底面は平坦である。0037土坑を切る。

出土遺物（57図337・338）　ともに土師器皿片。337は口径9.7cm、器高1.0cm、底部は糸切り。338はそれよりわずかに大きく、口径11.2cm、器高1.4cm、底部は糸切りの上に板状圧痕が残る。他に土鍋、須恵質土器、白磁、龍泉窯系青磁椀などの細片と、小鉄滓２点が出土した。

0037土坑（55図）

F－９区。東西に長軸をとる長方形土坑で、西端は0036土坑に切られる。南北幅0.95m、深さは10cmをはかる。南北長は1.40～1.50mと推定できる。

出土遺物（57図339・646）　339は口径8.9cm、器高1.2cmの土師器皿。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。646は厚さ0.8cmの滑石製品。残存部から推し量ると楕円形になる。辺縁は斜めに加工する。他には土師器皿(大小あり)、瓦器椀などの細片が多く、須恵質土器、滑石製品の細片も若干ある。土師器皿の底部切り離しは糸がほとんどで、ヘラも少数見られる。また糸切り底で板状圧痕を残すものもある。

0040土坑（55図）

G－10区。0022土坑に北側を、0023土坑に南側を切られる。東西長1.65m、南北幅が中央で1.20mの西側が膨らんだ不整形土坑である。深さは12cm、平坦な底面の２カ所に焼土が見られた。

出土遺物（57図340）　口径15.9cm、器高2.8cmの土師器皿である。底部は糸切りの上に板状圧痕が残る。他の出土遺物はない。

0118土坑（55図）

G－９区。南北に長軸をとる長さ2.23m、幅0.95mの楕円形状の土坑である。北側は深さ15cmで幅0.60m前後の中央がややくぼみがちな底になる。南側はさらに一段円形状に深くなり、検出面からの深さは20cmとなる。実測した遺物はない。

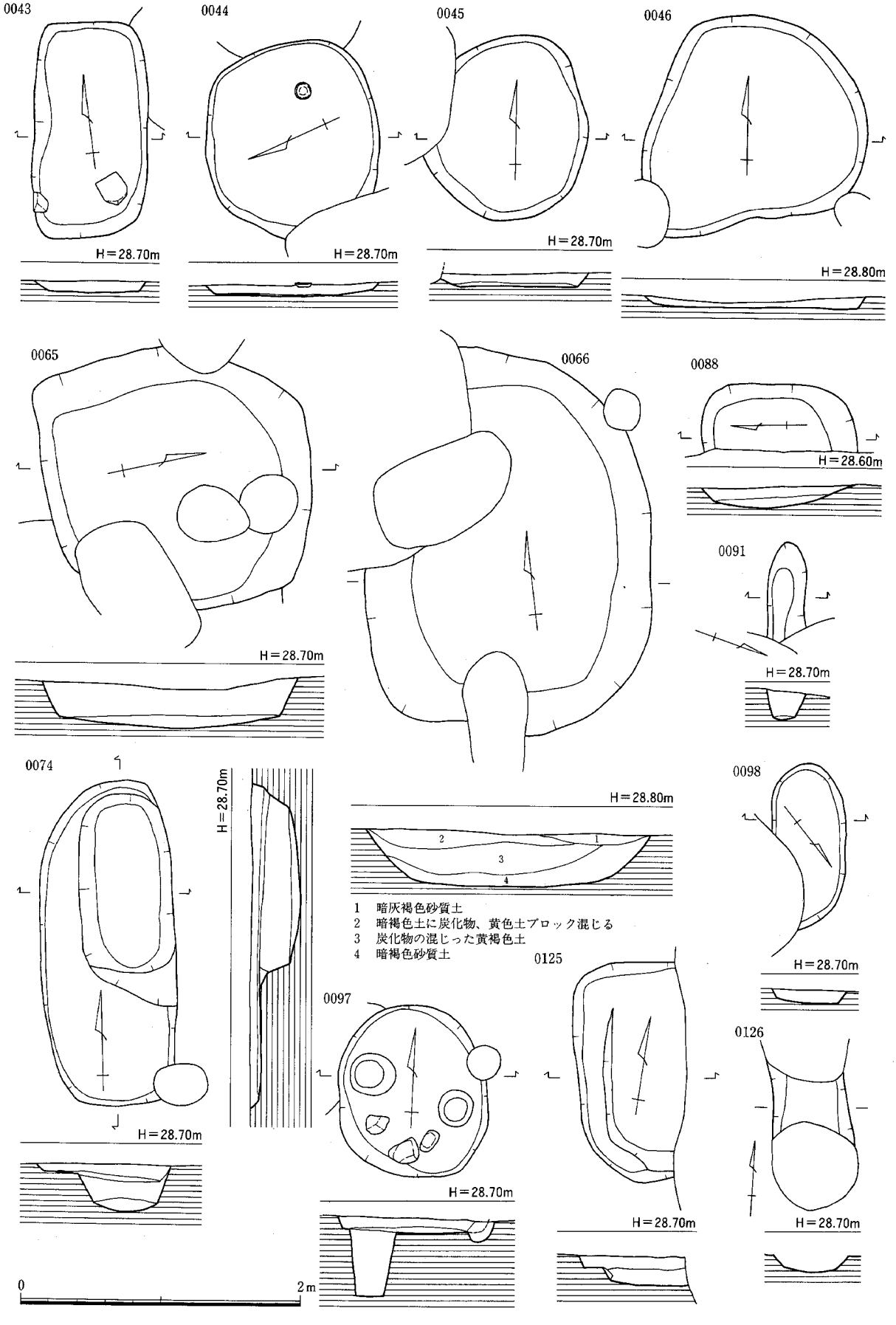
南地区

0043土坑（56図、図版22-2）

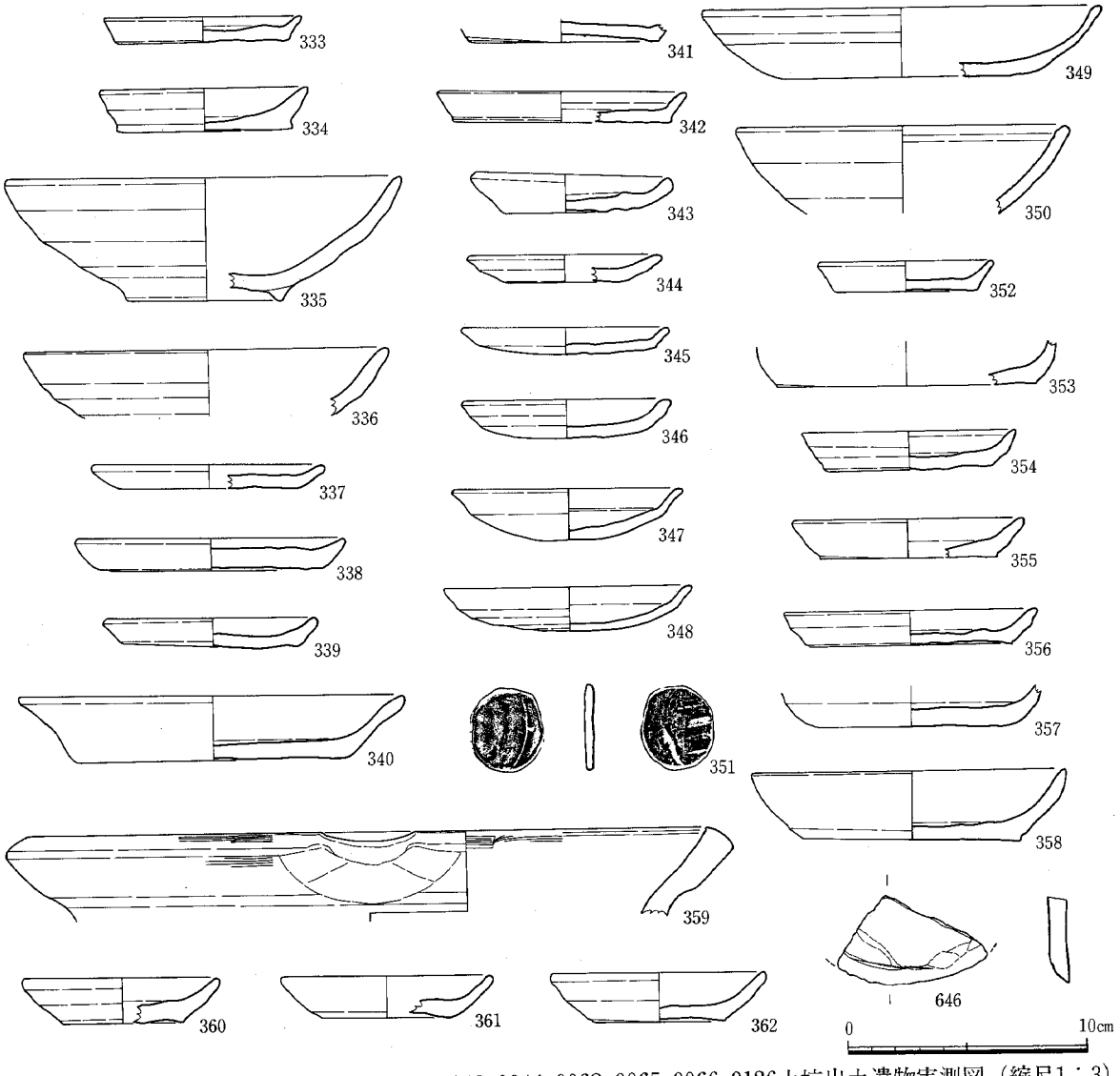
F－13区に位置する長さ1.55m、幅0.80m、深さ10cmの長方形土坑である。長軸はほぼ南北にとる。南側の両コーナー近くの底面には偏平な礫がある。覆土は灰褐色で、上部には黄灰色粘土が混じる。0044土坑を切る。

出土遺物(57図341・342)　ともに土師器皿片で、342は口径10.4cm、器高1.3cmをはかる。底部は341とともに糸切りで、341には板状圧痕が残る。342は西側壁中央部分から出土した。他に30余片の土師器が出土しており、確認できる底部はすべて糸切りである。縄文土器（160）もある。

0044土坑（56図、図版22-2）



56図　0043・0044・0045・0046・0065・0066・0074・0088・0091・0097・0098・0125・0126土坑実測図（縮尺1：40）



57図　0008・0023・0033・0036・0037・0040・0043・0044・0062・0065・0066・0126土坑出土遺物実測図（縮尺1：3）

F－13区に位置する。0043土坑に東側を切られ、西側で0045土坑を切る。近円形で、南北1.24m、東西1.45m前後、深さ10cmをはかる。底面は平坦である。覆土は灰褐色土。

出土遺物（57図343）　坑内東側で底面から浮いて出土した完形の土師器皿である。対称性を欠くが、口径8.4cm、器高1.4～1.8cmをはかる。底部は糸切り。口縁端部が厚い。図示できなかった土師器皿類も底部糸切りである。他に土鍋片、小鉄滓１点等が出土した。

0045土坑（56図、図版22-2）

G－13区に位置する長軸を南北にとる楕円形土坑で、西北側を0044土坑に切られる。南北長1.33m、東西幅は1.20m前後と推定できる。深さは10cm、底面は中央がくぼむ。覆土は黄みをおびた灰黒色砂質土一層である。

出土遺物は少なく土師器皿（底部糸切り）などの細片20余で、実測は行っていない。

0046土坑（56図）

F－13区に位置する東西1.60m、南北1.56mの不整形土坑である。深さは８cm、底面は北側にわずかに傾斜する。

出土遺物は土師器片１と若干の縄文土器片、黒曜石チップにとどまる。

0065土坑（56図、図版23-1）

F－13区に位置する。江戸時代の土坑やピットに切られるが、一辺2.00m前後の方形状土坑である。深さ36cm、底面は中央が深くなる。覆土は黄みをおびた灰褐色砂質土で、炭化物が若干混じる。東南側で0066土坑を切る。

出土遺物（57図352・353）　ともに土師器皿。352は口径7.4cm、器高1.3cm、底部は糸切りで、板状圧痕が残る。353は底部糸切りの大皿である。細片で実測できない土師器皿もあり、そのうち確認できる底部は糸切りである。他に土師質コネ鉢、土鍋、白磁、陶器などの小・細片および小鉄滓が２点出土している。

0066土坑（56図、図版23-1）

F－13区に位置する南北長2.67m、東西幅2.03mをはかる隅丸長方形の土坑である。長軸はほぼ南北である。深さは40cm、側壁は傾斜し、底面は平坦で鉄分の沈着が著しい。図示した土層断面の２・３層には炭化物が混じる。西北側を0065土坑に切られる。

出土遺物（57図354～359）　354～358は土師器皿である。うち358は口径13.2cm、器高2.9cm。他は口径8.9～11.0cm、器高1.4～1.6cmでひとまわり小さい。そのなかでも口径が10cmに満たない354・355と、10cmを越える356・357がある。底部は355が不明である他はすべて糸切りである。359は須恵質のコネ鉢片。口縁端部は肥厚し、片口を設ける。全体に摩滅が著しい。少量ある。実測できなかった土師器皿細片も底部は糸切りで、その一部には板状圧痕がみられる。他に須恵質擂鉢、白磁、青磁の細片と縄文土器（154・157）などが出土した。

0074土坑（56図、図版23-2）

F－12区に位置するほぼ南北に長軸をとる二段掘りの長方形土坑である。上面は長さ2.35m、幅0.95mをはかり、北側は角が取れる。深さ10cm程度でいったん平坦面を作り、その東北側に長さ1.30m、幅0.70mの隅丸長方形部分を掘り下げている。その南側部分は崩れたようにみえる。深さは32cm、底面は中央部分がくぼみがちになる。覆土は暗黄褐色土で、上部には黄色土ブロックが混じる。形態から土壙墓の可能性もある。出土遺物はない。

0088土坑（56図）

E－13区の調査区境にかかる土坑である。現状では南北幅1.10m、深さ18cmの隅丸の長方形もしくは方形としてとらえられる。出土遺物はないが、覆土の状況からこの時代に属する。

0091土坑（56図）

E－13区、調査区境近くに位置する。東西に長軸をとる幅0.25m、深さ18cmの溝状の土坑で、断面U字形を呈する。東は0090・0010溝（ともに近世）に切られる。覆土は砂質土である。

土師器皿（底部糸切り）などとともに縄文土器、石器が出土している。実測したものはない。

0097土坑（56図）

F－12･13区に位置する南北1.24m、東西1.07mの円形状土坑である。深さは12cm、底面はほぼ平坦である。底面のふたつのピット（東から0261、0262）は後出するものである。0098土坑を切る。

土師器皿（底部糸切り）、白磁椀（口禿）などが出土したが、細片で実測に耐えない。

0098土坑（56図）

F－12･13区に位置する東北－西南に長軸をとる長楕円形の土坑である。長さ1.20m、幅0.53m、深さ10cmをはかる。底面はやや西側に傾く。東北部分を0097土坑に切られる。

土師器皿（底部糸切り）細片が２点出土したにとどまる。実測はしていない。

0125土坑（56図）

G－13区に位置する。長軸が北からやや西に振れる長方形状土坑で、南北長1.58m、残存東西幅0.80mをはかり、隅は丸みをおびる。西側壁下では深さ10cmほどで北側に傾斜し、底面に続く幅15cmのテラスを作る。検出面からほぼ平坦な底面までの深さは22cm。

出土遺物には土師器皿(底部糸切り)、須恵質コネ鉢などの細片とともに、フイゴ羽口片、炉壁片がある。実測はしていない。

0126土坑（56図）

G－12区に位置する。南北をピットに切られ全容は不明。長軸を南北方向にとる東西幅0.54mの長方形状土坑と考えられる。残存部の深さは13cmで中央が深くなる。

出土遺物（57図360～362）　いずれも土師器皿である。口径8.1～8.9cm、器高1.8～2.1cmと口径の割には身が深い。底部は糸切りで、上げ底となる。361だけは糸切りの上に板状圧痕がある。他に土師器が50片余りが出土しており、確認できる底部はすべて糸切りである。他に鉄片１点などがある。

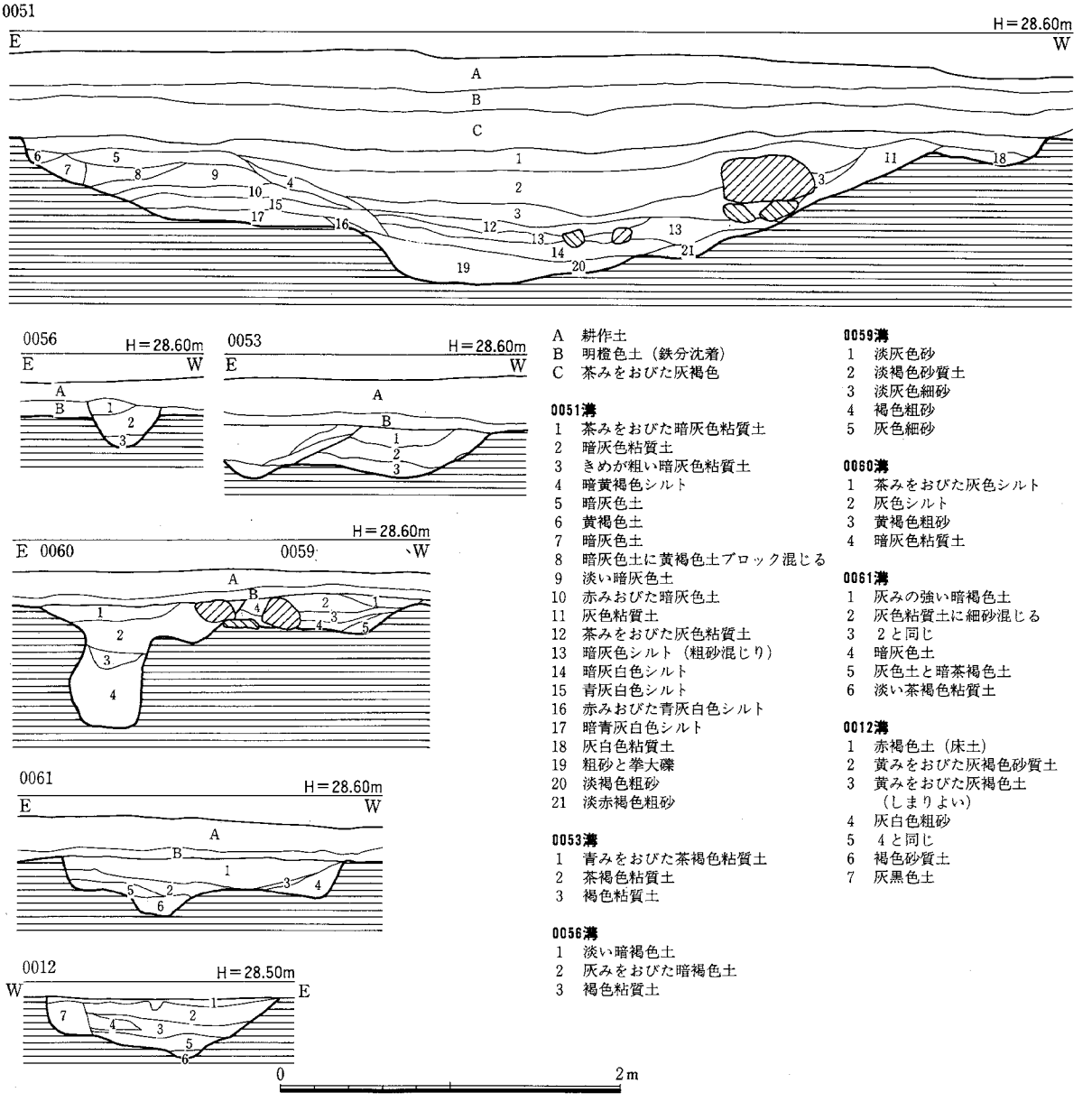
４－５－４　溝

検出した溝は11条である。南北方向に走るものが多く、0051以外は自然流路と考えられる。ほとんどがトレンチ調査である。まず0051からはじめ、東北地区（0053・0056・0059・0060・0061)、中央地区（0012、0039)、さらに南地区（0100、0128、0076）と北から順に報告する。

0051溝（58図）

調査区南端のG･H－17区から当初は北北東に、H－13からH－３へはほぼ真北に走る幅６～８mの溝で、これがさらに北に進み第２次調査３区のSD0060となる。その３区では溝の方向はN－５°－Wとやや西に振れる。H－13～14区では、東肩が崩れたように段をなしている。今回の調査では、田面の削りが結果的に及ばなかったため、南北に２本のトレンチを開けるにとどめた。

図示したのは北側のG・H－４区での溝断面である。この部分での溝幅は6.0m、肩の傾斜は緩く、底は平坦に近い。深さは80cm。細かい溝内土層は図の通りであるが、下から１礫と粗砂層（19～21層)、２細砂～シルト層（12～17層)、３地山ブロック混じりの粘質土（4～11層)、４粗砂混じりの粘質土(1～3層)に大別でる。新旧の溝の流れとその埋没状況を示すものであろう。なお溝上面を覆うC層は、溝埋没後のくぼみに中世以後堆積したものである。



A　耕作土
B　明橙色土（鉄分沈着）
C　茶みをおびた灰褐色

0051溝
1　茶みをおびた暗灰色粘質土
2　暗灰色粘質土
3　きめが粗い暗灰色粘質土
4　暗黄褐色シルト
5　暗灰色土
6　黄褐色土
7　暗灰色土
8　暗灰色土に黄褐色土ブロック混じる
9　淡い暗灰色土
10　赤みおびた暗灰色土
11　灰色粘質土
12　茶みをおびた灰色粘質土
13　暗灰色シルト（粗砂混じり）
14　暗灰白色シルト
15　青灰白色シルト
16　赤みおびた青灰白色シルト
17　暗青灰白色シルト
18　灰白色粘質土
19　粗砂と拳大礫
20　淡褐色粗砂
21　淡赤褐色粗砂

0053溝
1　青みをおびた茶褐色粘質土
2　茶褐色粘質土
3　褐色粘質土

0056溝
1　淡い暗褐色土
2　灰みをおびた暗褐色土
3　褐色粘質土

0059溝
1　淡灰色砂
2　淡褐色砂質土
3　淡灰色細砂
4　褐色粗砂
5　灰色細砂

0060溝
1　茶みをおびた灰色シルト
2　灰色シルト
3　黄褐色粗砂
4　暗灰色粘質土

0061溝
1　灰みの強い暗褐色土
2　灰色粘質土に細砂混じる
3　2と同じ
4　暗灰色土
5　灰色土と暗茶褐色土
6　淡い茶褐色粘質土

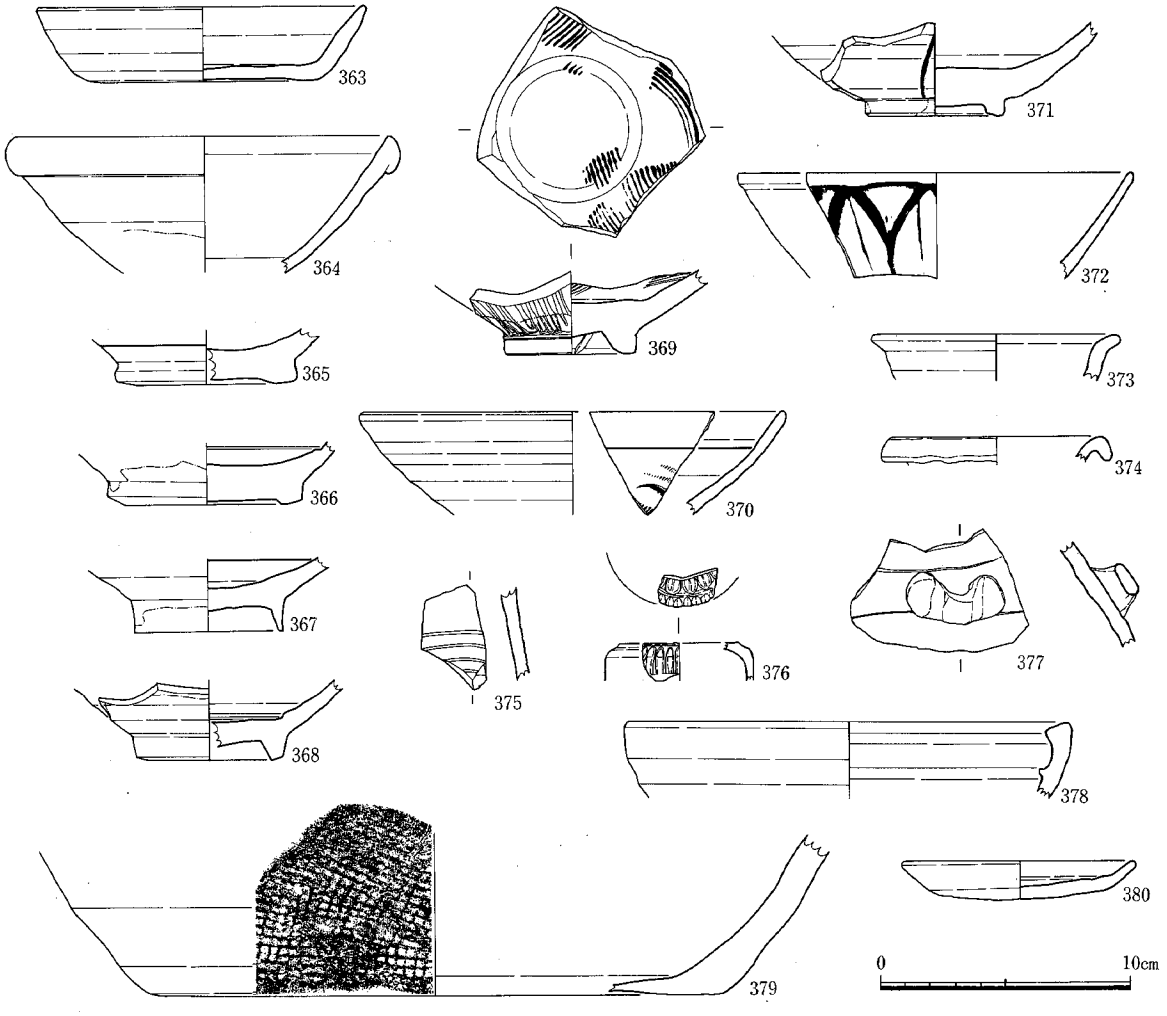
0012溝
1　赤褐色土（床土）
2　黄みをおびた灰褐色砂質土
3　黄みをおびた灰褐色土（しまりよい）
4　灰白色粗砂
5　4と同じ
6　褐色砂質土
7　灰黒色土

58図　0012・0051・0053・0056・0059・0060・0061溝土層断面実測図（縮尺1：40）

この溝と切り合う遺構は少なく、主なものは後に触れる0050環濠だけである。ただH－15・16区の西肩周辺に鉄滓や炉壁が表面に集中するところがあり、製鉄関係遺構の存在が予想される。

出土遺物（59図363～379）　363は土師器皿。口径13.0cm、器高2.9cm、底部は糸切りで、目の狭い板状圧痕が残る。体部から底部への稜部分と口縁端内側に煤が付着する。実測しなかった他の土師器皿・杯の細片も分かるものはすべて底部糸切りである。

379は土師質の甕底部片である。外面は格子目タタキ、内面は横ナデ調整。胎土には多量の白色粒、赤色粒が混じり、また金雲母も少量含む。焼成あまく、外面灰黒色、内面黄みを帯びた灰色を呈する。朝鮮系の可能性もある。



59図　0051・0076溝出土遺物実測図（縮尺1：3）

364～368・373～376は白磁。364～366は椀IV類。釉は364が淡緑色、365が灰白色、366がくすんだ黄白色である。364と366の内底には沈線ががめぐる。367は椀V類。内底には沈線がめぐり、釉は灰白色。368は内底の釉を輪状に掻き取った椀。釉は淡緑色。373は小椀か。釉は濃い灰緑色。374は口縁部を折り返す壺。釉は灰緑色で、表面には氷裂が入る。375は長頸壺の頸部片で、外面には4条の沈線がめぐる。緑みをおびた透明な釉で、内面は露胎となる。376は合子。上面と側面に蓮弁文を浮き彫りにする。黄みをおびた緑色の釉がかかる。

369～372は青磁。369は同安窯系青磁椀。釉は黄みをおびた緑色で、外面胴下半部と高台部分以外にかかる。370も同じだが、369に比べ薄手の作りで、内面口縁下には沈線がめぐる。371は龍泉窯系青磁椀I類。灰みをおびた濃い緑色の釉。外面には縦の区画線を施す。372は鎬蓮弁をもつ椀。青みをおびた緑色の釉である。焼きがあまい。

377は褐釉陶器の四耳壺もしくは水注の肩部片。扁平な耳を横に貼り付け、その上下に沈線を施す。内面は無釉。378は瓦質のコネ鉢。口縁内面に突帯を設けるもので、胎土には多量の白色粒を含む。茶褐色を呈する。輸入品。

他に須恵質コネ鉢、小鉄滓などがある。

東北地区

0053溝（58図）

Ｉ－５調査区境からほぼ真北に走る幅1.5mの溝で、北側は溝幅が狭くなる。南端部分にトレンチを設けるにとどめたが、その部分では東側を0052溝（近世）に切られ全体は窺えない。深さ30cmで、西肩の傾斜は緩く、底は平坦に近い。覆土は３層で、大きくは粘質土１層ととらえられる。0054溝（古墳時代）を切る。調査区南側にこの溝と接続するものはない。

土師器皿（底部糸切り）・椀、土師質土鍋、須恵質捏鉢、白磁IV・VI類、陶器、鉄釘などが出土している。実測したものはない。

0056溝（58図）

Ｋ－５調査区境からやや東に張るようにして北へ3.5m延びて終る幅0.45mの小溝である。南端部分にトレンチを設けるにとどめたが、その部分での溝幅0.42m、深さ28cmで、断面形はＵ字状である。土層を見ると床土を切ったようになっているが、溝内覆土は主に褐色土で、近世溝の灰色土とは異なる。

土師器皿(底部糸切り)、土師質土鍋、白磁IV類、陶器などが少量が出土している。実測したものはない。

0059溝（58図）

Ｋ－５調査区境からほぼ北西に延びる幅0.6～1.2mの溝である。南端部分にトレンチを設けるにとどめたが、その部分では東側を0060溝（中世）に切られ全体は窺えない。深さは20cm前後で、西肩の傾斜は緩く、底は平坦に近いが凹凸が著しい。覆土は下部で粗砂と細砂の互層となる。また礫の混じりも多い。次にみる0060・0061溝とともに自然流路で、調査区をはずれた東南側から流れて来るものであろう。

土師器皿（底部糸切り）とともに白磁、龍泉窯系青磁などが少量が出土している。実測したものはない。

0060溝（58図）

Ｋ－５調査区境から0059溝のすぐ東側を北北西に走る幅1.4～2.0mの溝である。南端部分にトレンチを設けるにとどめたが、その部分での溝幅は1.50m、西肩の傾斜は緩いのに対し、東肩は急で、底も東側に片寄って深くなる。また底面の凹凸や側面のえぐれが見られる。深さは90cm。覆土は３層の粗砂を挟み上部はシルト、下部は粘質土となる。

土師器皿（底部ヘラ・糸切り混在)、土師質土鍋、白磁IV類、褐釉陶器などが出土している。実測したものはない。

0061溝（58図）

Ｌ－５調査区境から西側の0060溝と平行して北北西に走る幅1.6～2.0mの溝である。南端部分にトレンチを設けるにとどめたが、その部分での溝幅は1.65m。0060と異なり深さは22～40cmと浅く、また肩の傾斜も緩い。しかし底は凹凸が著しい。覆土は２層に細砂が混じる他は砂層は見られない。

土師器皿などの細片、白磁IV類、龍泉窯系青磁、褐釉陶器などが出土している。実測したものはない。

中央地区

0012溝（58図）

G－8調査区境から北北西に約40m続く幅1.2～2.7mの溝である。北端は削られ、F－4区で消滅する。図示したのはF－8区での溝断面で、肩の傾斜は緩く、底は平坦に近い。深さは35cm。覆土は底近くの4・5層が砂となる。0005掘立柱建物に切られる。

土師器皿・杯(底部糸切りあり)、土師質土器、白磁皿片、龍泉窯系青磁片が出土したが、実測は行っていない。ほかに縄文土器、石鏃（634・638)、古墳時代土師器などがある。

0039溝（付図）

E－9区調査区境から東向きに走る幅0.66～0.80mの溝で、約4.85mで立ち上がる。深さ10cm。断面形はU字形を呈する。0038土坑（近世）に切られる他、中世ピットにも切られる。

土師器皿（ヘラ・糸切り混在、ヘラが多い。板状圧痕あり)、瓦器、須恵質土器、白磁IV類椀などの破片が出土したが、実測したものはない。

南地区

0100溝（付図）

F－12区、0099溝の西肩に位置する長さ0.78m、幅0.30m、深さ16cmの小溝状遺構である。覆土は砂質土。

土師器皿、縄文土器細片が1点づつ出土したにとどまる。

0128溝（付図）

G・H－13区を東西に走る長さ約10m、幅は0.65～1.80mの溝である。最も膨らんだ東端部分は別遺構と重なり合う可能性が高い。削りにかからないためトレンチ調査にとどめた。その部分での溝幅は0.90m、深さ14cm。北肩に段が付き、溝底は南側に寄る。覆土は砂質土。

土師器皿（底部糸切り）など3点と縄文土器1点が出土したにとどまる。実測したものはない。

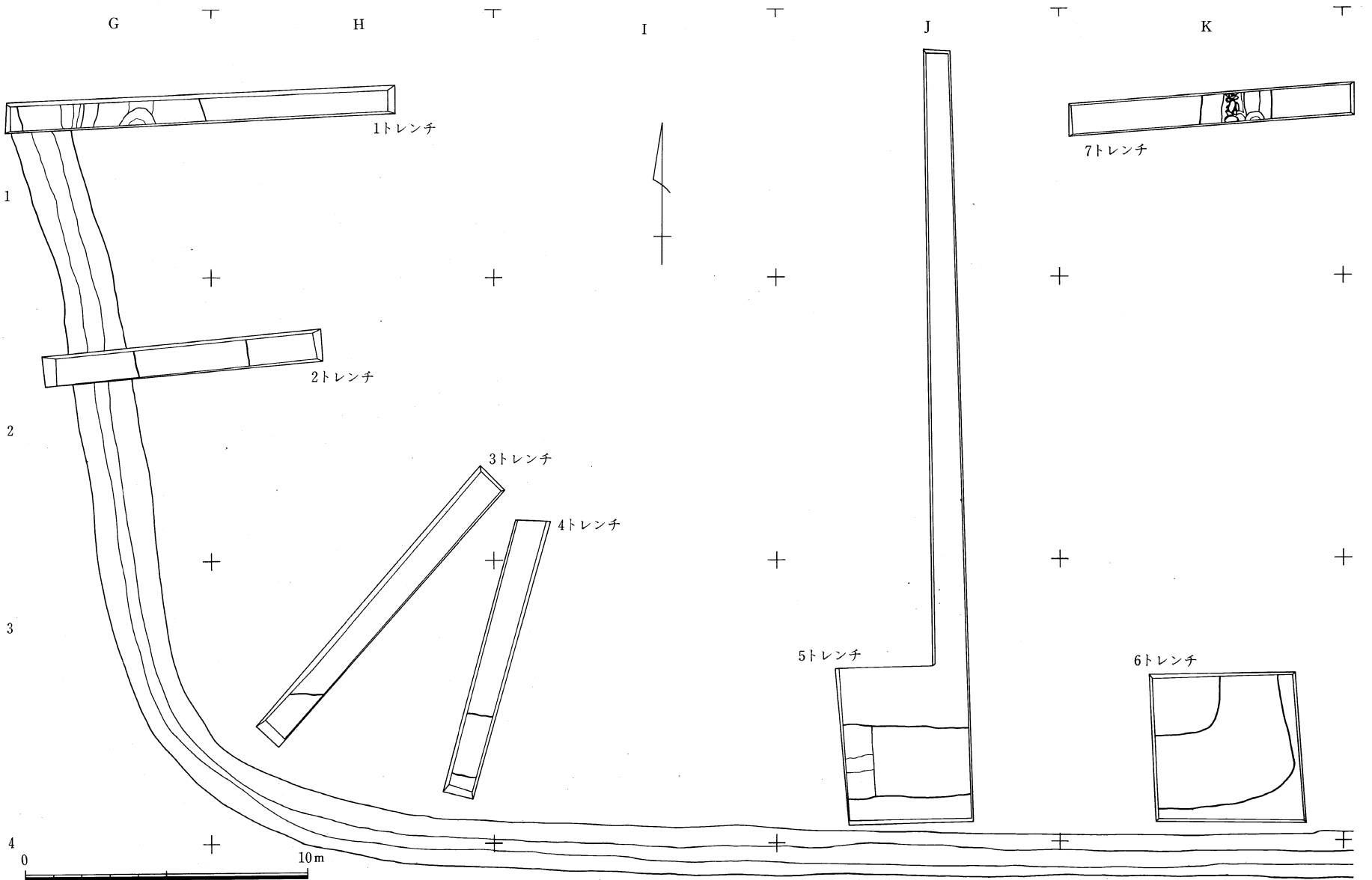
0076溝（付図）

G－17区の0051溝の西肩から始まり(0051に切られる)、蛇行しつつE－14調査区境まで、西北に向かう溝である。東南部分で幅0.75m、深さ4cmと狭くまた浅いが、F－16区で北肩に段がついて底が南に片寄り、幅2.10m、深さ30cmと大きくなる。さらに西北の幅が確認できる部分では、幅2.40m、深さ40cmほどになる。覆土は褐色土。0025・0026掘立柱建物に切られる。

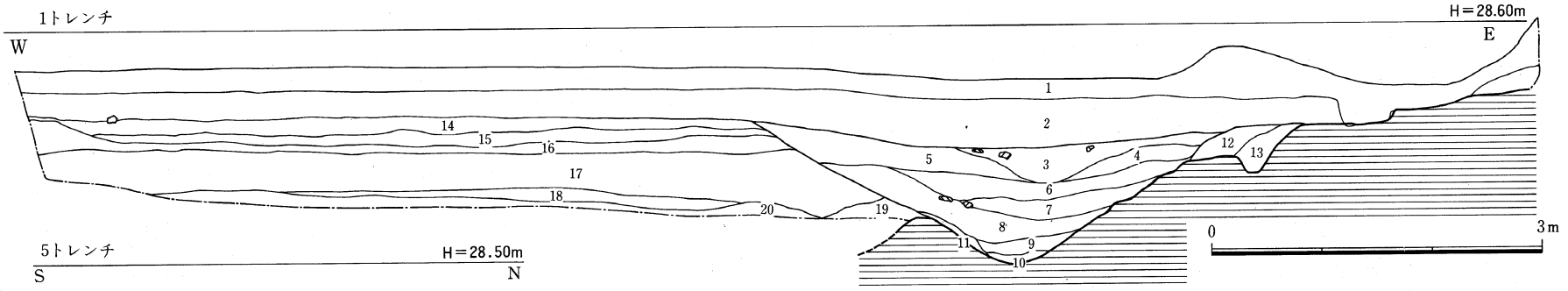
出土遺物(59図380)　図示したのは土師器皿。口径9.6cm、器高1.6cm。底部はヘラ切り。他の土師皿もすべてヘラ切りである。黒色土器、陶器片なども出土している。

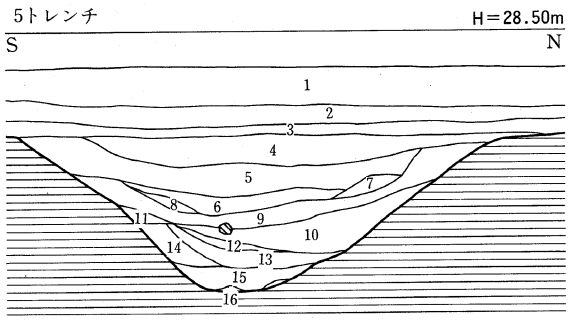
4－5－5　環濠

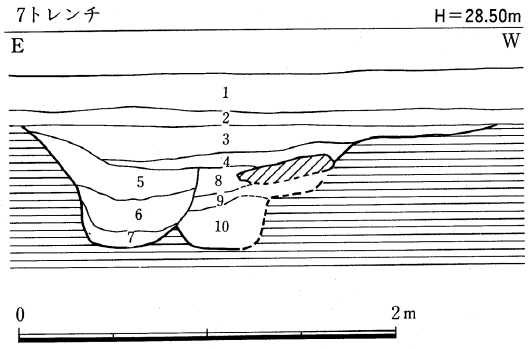
第2次調査の際、4－2区で南調査区境から北進し、逆L字状に東に折れ曲がって立ち上がるV字溝（SD0102）と、その立ち上がりとの間に陸橋を設け南に走る溝（SD0104）の一部を確認した。この二つの溝に囲まれた長方形の区画の中に、掘立柱建物や井戸、土坑などがみられたため、南側への広がりは不明瞭ながら、環濠をめぐらす居館跡と考えた。



60図　0050環濠トレンチ配置図（縮尺1：200）







1トレンチ0050溝

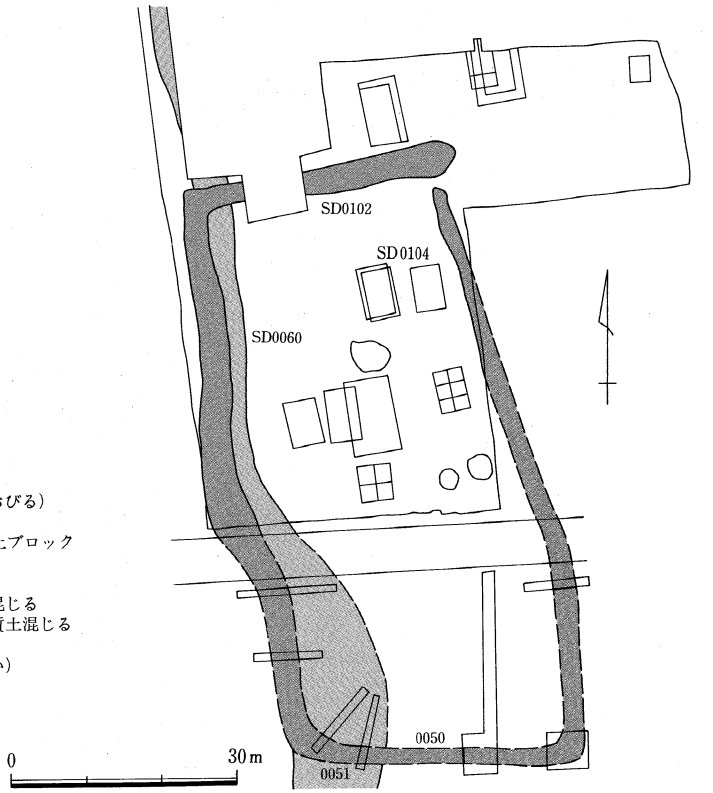
1　耕作土
2　灰褐色粘質土（粗砂混じり）
3　灰褐色粘質土と黄褐色土ブロック
4　3より暗くブロック少ない
5　暗灰色土
6　灰色粘質土と黄褐色土ブロック
7　茶みをおびた褐色粘質土
8　暗灰色粘質土（粘性強く炭混じる）
9　8よりやや淡い
10　8に礫混じる
11　灰色砂質土
12　灰色土と黄褐色土ブロック
13　暗灰色粘質土
14　褐色粘質土
15　淡灰褐色粘質土
16　暗黄褐色シルト
17　暗褐色粘質土（炭混じる）
18　17より淡い
19　17に黄褐色土ブロック混じる
20　灰白色細砂（人頭大礫～粗砂多い）

5トレンチ0050溝

1　耕作土
2　床土（鉄分の沈着）
3　青灰色土
4　茶みをおびた灰色土
5　暗灰色粘質土
6　5より淡い
7　淡茶褐色シルト
8　茶褐色シルト
9　青灰色シルト
10　暗灰色粘質土
11　灰色土と地山ブロック
12　11に同じ
13　暗青灰色粘質土
14　茶みをおびた暗青灰色粘質土
15　灰みをおびた暗褐色粘質土（粘性強い）
16　黄白色細砂

7トレンチ0050溝

1　耕作土
2　床土
3　灰褐色粘質土（茶みおびる）
4　暗灰色粘質土と
　径2～5㎝の黄褐色土ブロック
5　4に茶み
6　黒褐色粘質土
7　6に淡黄褐色シルト混じる
8　白色砂に一部灰色粘質土混じる
9　白色砂と灰色粘質土
10　灰色粘質土（粘性強い）



61図　0050環濠トレンチ土層断面実測図（縮尺1：60、1：40）および環壕全体図（縮尺1：1000）

今次の調査で、4－2区の約30m南のG～M－4区の遺構確認を行い、この部分まで環濠が延びないことが判明した。環濠の南端はこの調査区の北側部分にあるのは確実であり、直接調査の対象とはなっていなかったこの部分に7本のトレンチを設定し、環濠の規模などを確定することとした。7本のトレンチのうち、2・3・4・6トレンチは検出面まで、5・7トレンチは環濠部分のみ、1トレンチだけは全体を掘り下げた(60図)。

その結果第2次調査のSD0102とSD0104がつながり、溝が長方形の区画をなすことが明らかになった。なお今回の調査ではこの7本のトレンチで確認された環濠を0050と呼ぶ。環濠断面は1、5トレンチではV字状を呈するが、7トレンチでは二つの浅い溝の切り合いにも見え、また内側(西側)には礫が続く。SD0104が浅く、人頭大の礫が多量に入っていた状況と似る(61図、図版24-1・2)。

この環濠をもつ居館跡については調査者の一人である長家伸がすでに報告を行っており(長家伸「清末遺跡群第2次調査小結」『入部III』福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集, 1992)、これを以下転載する。

「平成3年度の調査（第3次調査）に伴い4－1区の南側田面を試掘した結果SD0104とSD102が（0050で）つながり溝が四周することが判明した。現道路部分から東へひずんでいる。これはSD0060（0051溝）の蛇行に平行しておりこれに規制されていると思われる。館址規模は内法で南北75m、東西35mを測る。SD0102と0104は形態が異なっており、東南コーナー（6トレンチ）で接合していると思われる。北・西・南の3方は断面V字形を呈し最低層には粘質土の堆積が認められ滞水状態をうかがうことができる。また埋土中に地山ブロックが含まれており土塁の存在が考えられ、東側のSD0104には埋土中に人頭大の礫が大量に入り込んでいて東側については石垣がそれぞれの溝の内側に構築されていたのであろうか。溝で区画された内部には調査区南側に集中して多くのピットが検出されたが（中略）建物としては8棟を抽出したにすぎない。」

今次のトレンチは環濠南側の確認調査にとどまり、居館の構造などについては先の第2次調査以上の事は確認できなかった。

以下、0050環濠そのもの出土遺物と、それ以外のトレンチ出土遺物に分けて観察を行う。

0050環濠出土遺物(62図381～389)　381～385は土師器皿。381～383は口径6.4～7.6cm、器高1.7～1.8cm。底部は糸切り。385は口径11.5cm、器高2.8cm。底部は糸切りで、焼き歪みが著しい。

386は龍泉窯系青磁盤片。内底には円圏の中に印花文を施す。高台内側は蛇の目風に釉を掻き取り、その中央が一段くぼむ。濃いオリーブ色の釉である。

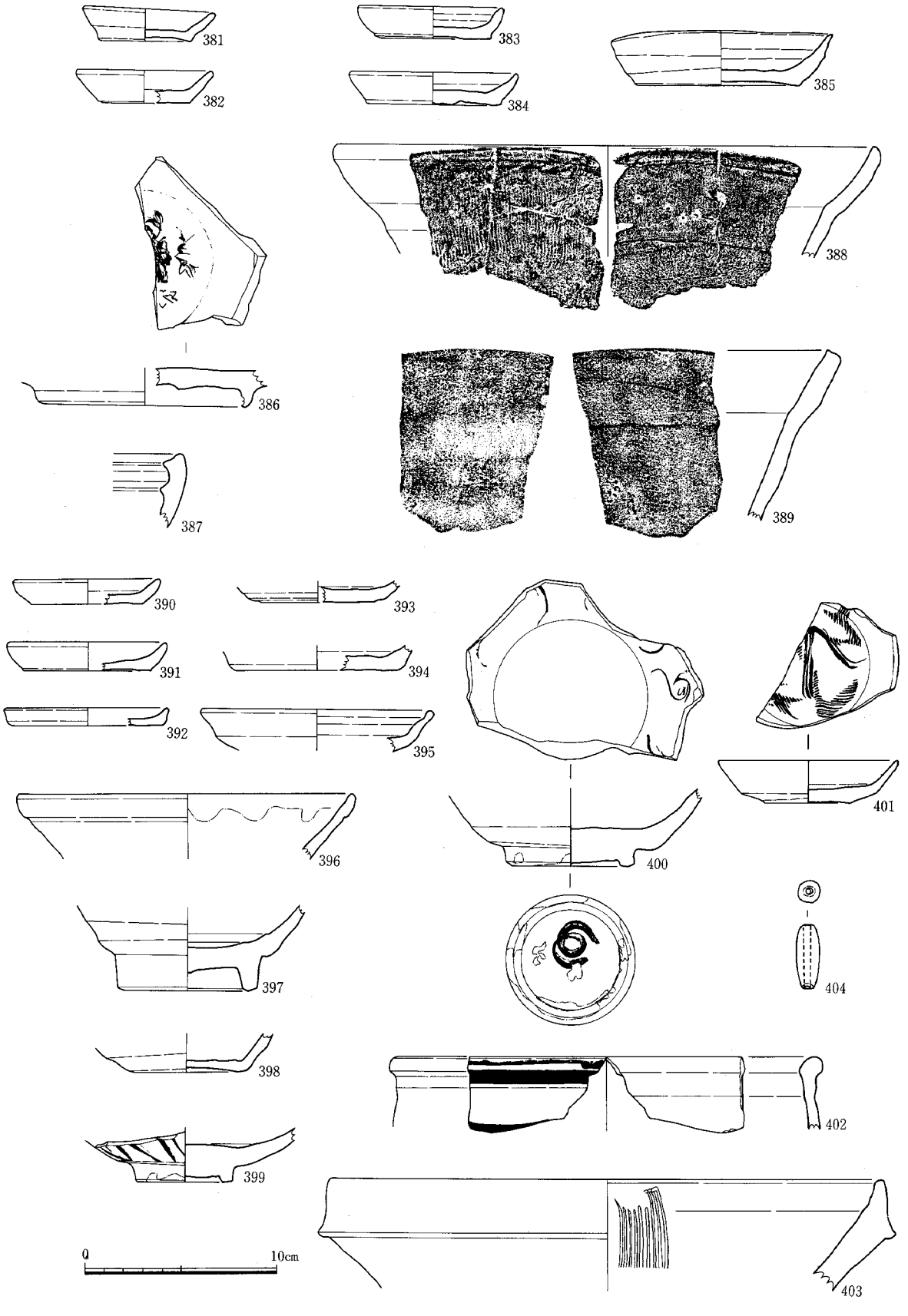
387は瓦質の捏鉢。内面には二段の突出部がめぐる。砂粒を大量に含んだ胎土で、暗灰褐色を呈する。輸入品。

388・389は土師質のコネ鉢。体部から口縁が外傾する。細い刷毛目で仕上げる。内外面とも煤が付着する。

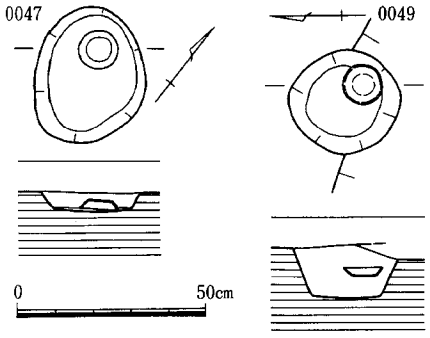
1・4・7トレンチ出土遺物（62図390～404）　トレンチ出土遺物のうち、中世の遺物に限って図示した。

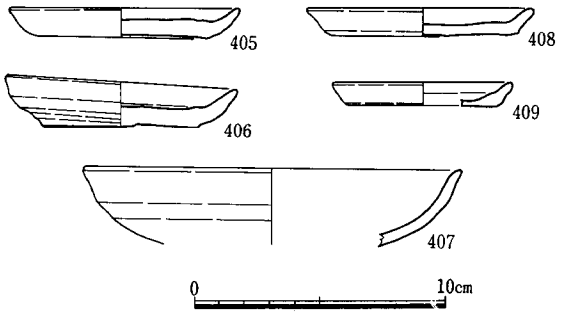
390～394は土師器皿。口径7.4～8.5cm、器高1.3～1.5cm。底部は糸切り。

395は青磁皿である。口縁は丸く、見込みには段がつく。内底にはヘラによる文様の一部がみられる。また重ね焼きの跡も内底に残る。釉は緑がかった水色で、残存部すべてにかかる。形態、胎、焼き方からみて東南アジア系の青磁の可能性がある。



62図　0050環濠および１・４・７トレンチ出土遺物実測図（縮尺1：3）





63図　0047・0049祭祀ピット実測図（縮尺1：20）　64図　0047・0048・0049祭祀ピット出土遺物実測図(縮尺1：3)

396～398は白磁。396はⅣ類椀で、釉は灰緑色。397はⅥ類椀底部。内底の釉は輪状に掻き取る。釉は緑みをおびた暗灰色。398は皿。見込みには沈線がめぐり、底部も含め全体に灰みをおびた青緑色の釉がまわる。

399・400は龍泉窯系青磁椀。400の高台内には墨書がある。釉は399が青みをおびた緑色、400はそれに茶色がかる。

401は同安窯系青磁皿。内底に櫛描による文様を施す。釉は青みをおびた緑色である。

402は鉄絵陶器盤。灰緑色の釉に、赤茶の鉄絵の帯が口縁などにはいる。胎土には黒色粒や白色粒を多く含む。輸入品。

403は須恵質のスリ鉢。口縁端は尖り気味になる。9本一組の筋目を縦に入れる。胎土には砂粒が多い。暗青灰色を呈するが口縁下には帯状の淡褐色部分がみられる。

404は長さ3.3cm、最大径1.2cmの土錘。淡赤褐色を呈する。

4－5－6　祭祀ピット

0047ピット（63図、図版25-1）

0085掘立柱建物北隅柱の東約1・5mに位置する西北－東南に主軸をとる楕円形ピットで、長さ36cm、幅29cm、深さ4cmをはかる。この浅いピットの北側部分から完形の土師器皿が裏返しの状態で出土した。

出土遺物（64図405）　口径9.1cm、器高1.1cmの土師器皿である。底部は糸切りで、板状圧痕がある。口縁部が焼き歪む。

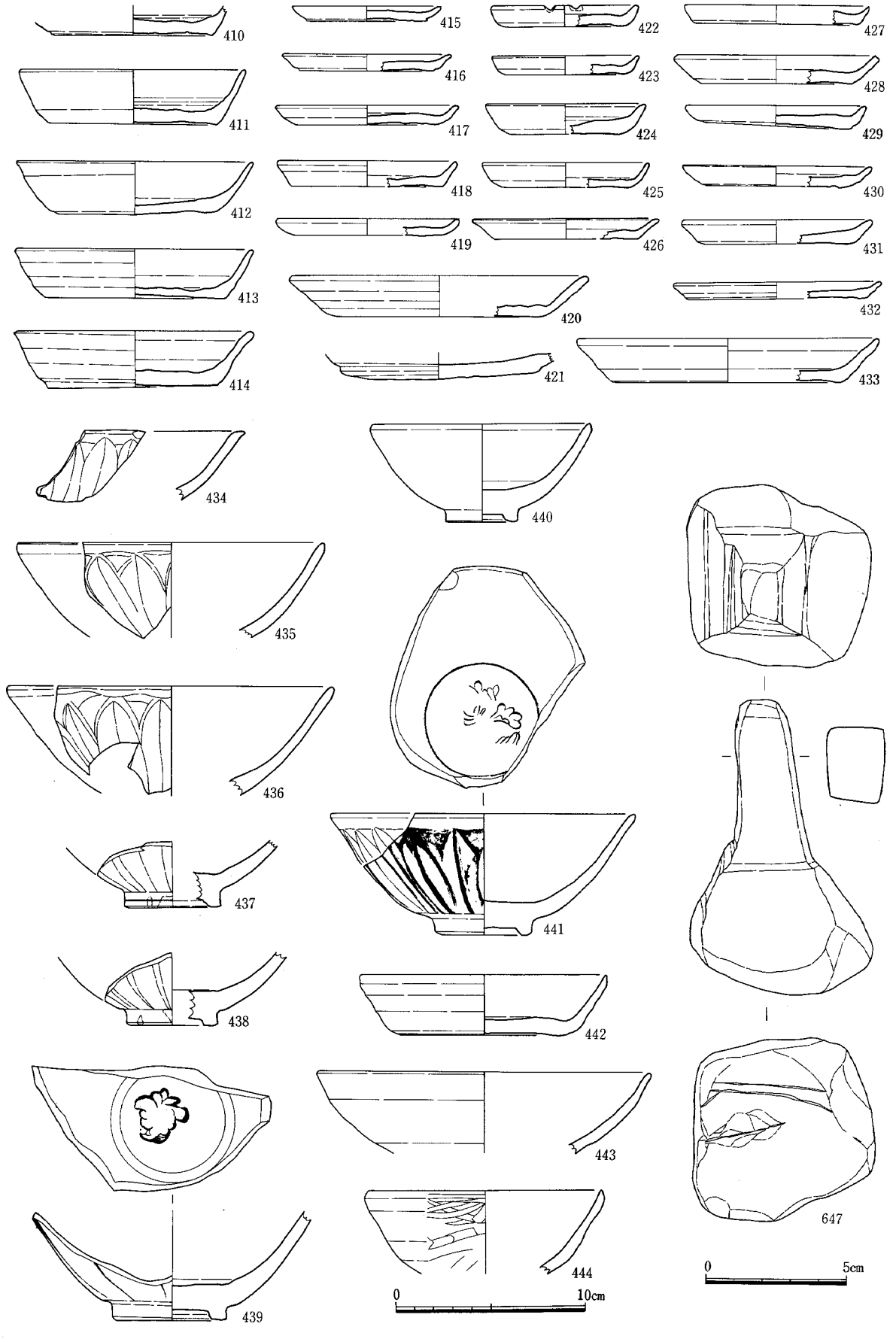
0048ピット

0085掘立柱建物内に位置する径30～32cm、深さ10cmの浅い円形ピットである。完形の土師器皿と杯片が出土したが、掘り下げ時にすでに取り上げ、出土状態は不明。

出土遺物（64図406・407）　406は口径9.1cm、器高2.1cmの土師器皿である。底部は糸切りで、器体は歪みをみせる。407は口径15.0cmの土師器杯片。残存部はナデ調整で仕上げる。混入したものか。

0049ピット（63図、図版25-2）

0026掘立柱建物内に位置する東西27cm、南北30cmの楕円形ピットで、深さは25cm。東南隅の深さ10cmの所に完形の土師器皿が正置で出土した。



65図　0157・0374・0380・0381・0387・0391・0393・0404・0405・0406・0411・0433・0480・0561ピット出土遺物実測図（縮尺1：3、1：2）

出土遺物（64図408・409）　ともに土師器皿で408は口径9.0cm、器高1.1cmをはかる。底部は糸切りで板状圧痕が残る。409は復元口径7.2cm、器高0.9cmの小片で、混入品であろう。底部はヘラ切りである。

4－5－7　ピット出土遺物

図示はしなかったが、まとまった遺物を出土するピットがあった。先にみた祭祀ピットの類もあるかもしれないが、完形の単体のものはなく、破損したものがまとめて廃棄されている状態に近い。これらのピットはE・F－9区に集中する傾向がある。また単体の破損品は、ピットの覆土に偶然入ったものであろう。

0157ピット出土遺物（65図410～414）　F－9区でまとまって出土した遺物であるが、明確な遺構は解らず、おそらくピット底に置かれたものと考え、ここで扱う。いずれも土師器皿で、口径11.9～12.5cm、器高2.8～3.0cmをはかる。底部は糸切りで、413以外に板状圧痕がある。

0374ピット出土遺物（65図427・428）　E－9区。径27cm、深さ43cmのピットである。図示したのは土師器皿で、口径10.0～10.9cm、器高1.0～1.5cmをはかる。底部は糸切り。

0380ピット出土遺物（65図420）　E－9区。径35cm、深さ39cmのピットである。420は口径15.8cm、器高2.2cmの土師器皿である。底部はヘラ切り。

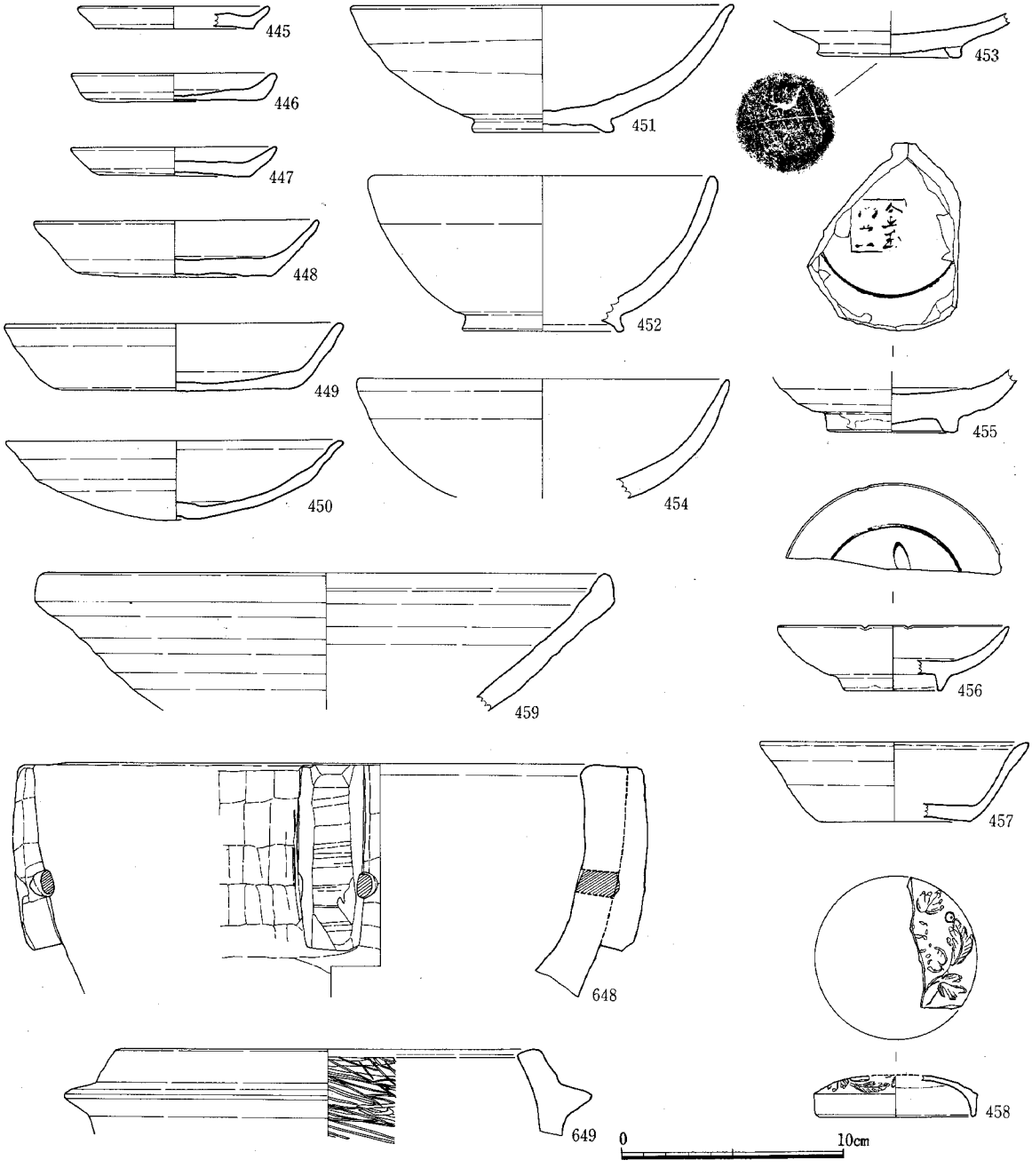
0381ピット出土遺物（65図421）　E－9区。径32cm、深さ40cmのピットである。421は土師器皿の底部で体部との境には段がつく。底部は糸切りで、板状圧痕がある。重量感のある皿である。

0387ピット出土遺物（65図415～419）　F－9区。径45cm、深さ23cmのピットで、底には扁平な石を置く。図示したのはすべて土師器皿である。415が口径7.9cm、器高0.8cm、他は口径8.5～9.7cm、器高0.9～1.4cmとやや大ぶりである。底部は糸切りで、416・418に板状圧痕がある。418の外底は灰黒色を呈する。

0391ピット出土遺物（65図422～426）　F－9区。径38cm、深さ42cmのピットである。図示したのはすべて土師器皿である。口径7.8～8.8cm、器高1.0～1.6cmの厚めの皿と、426の口径9.6cm、器高1.1cmの皿に分かれる。底部は糸切りで、424～426に板状圧痕がある。

0393ピット出土遺物（65図429～432）　F－9区。径35cm、深さ23cmのピットである。図示したのはすべて土師器皿である。429～431は口径8.5～10.3cm、器高1.1～1.3cmの厚めの皿、432は口径11.0cm、器高0.9cmの薄手の皿である。底部は糸切りで、すべてに板状圧痕がある。

0404ピット出土遺物（65図647）　F－9区。径48cm、深さ34cmのピットである。647は全長10.5cmの砥石で、石材はいわゆる天草砥石である。上部は断面長方形の砥面を作り、下部は四面が広がるように膨らみ、やや凹凸のある下面を作る。一部欠けるが、確認できるすべての面を砥面として使用して



66図　その他の出土遺物実測図（縮尺1：3）

いる。あたかも土器製作の当て具のような形態を呈する。

0405ピット出土遺物(65図434～440)　F－9区。径35cm、深さ54cmのピットで、0039溝を切る。ピット内から龍泉窯系青磁椀の破片だけが出土した。434～436は外面に鎬連弁を施す。釉は434が茶みをおびた緑色、435が濃い緑色、436が緑がかった水色。437は釉の色からすると436の底部の可能性もある。438は灰みをおびた緑色。439は見込みに印花文を施す。釉は明るい灰褐色。440は口径11.2cm、器高5.1cmの小椀。釉は濃い緑色である。

0406ピット出土遺物（65図433）　F－9区。径28cm、深さ31cmのピットである。433は口径16.0cm、

器高2.3cmの土師器大皿である。底部は糸切り。

0411ピット出土遺物（65図441）　F－9区。長さ30cm、幅35cm、深さ24cmの楕円形ピットである。441は見込みに印花文を施す鎬連弁の龍泉窯系青磁椀である。釉は暗い緑色。

0433ピット出土遺物（65図442）　F－9区。径30cm、深さ24cmのピットである。出土したのは土師器皿で、口径13.0cm、器高3.2cm。底部は糸切りで、灰黒色がかる。

0480ピット出土遺物（65図443）　F－10区。径35cm、深さ3cmのピットである。出土したのは瓦器椀で、口径17.6cm。外面横ナデ、内面ヘラ磨きか。摩滅が激しい。

0561ピット出土遺物（65図444）　L－12区。0136溝を切る径30cm、深さ30cmのピットである。出土したのは土師器椀で、口径12.6cm。内外面とも丁寧なヘラ磨きで、焼成も良好である。

4－5－8　その他の出土遺物

土師器（66図445～450）　445～449は土師器皿。口径8.6～9.2cm、器高1.0～1.3cm。底部は糸切りで、446・447には板状圧痕がある。449は口径15.0cm、器高3.0cmとひとまわり大きい。底部はヘラ切りで、板状圧痕が残る。

450は口径14.9cm、器高3.5cmの杯。底部はヘラ切り。口縁には油煙痕が残る。

瓦器（66図451・452）　椀で、低い断面三角の高台が付く。器面調整はナデ。451の口径17.1cm、器高5.7cm。

黒色土器（66図453）　B類椀である。内底は一方向のヘラ磨き。丸みをおびた高台内には「十」のヘラ記号がある。

青磁（66図454～456）　龍泉窯系青磁である。454・455は椀で、455の内底には「金玉満堂」の方格のスタンプを押す。456は高台付の皿で、口縁は輪花となる。内底には文様がある。454は青みをおびた緑色、455は灰みの強い緑色、456は454より明るい釉色を呈する。

白磁（66図457）　口禿の平皿である。見込みには圏線をもつ。釉は青みがかった白色である。

褐釉陶器（66図458）　合子の蓋である。上面には細線の花文を型押しする。

須恵質土器（66図459）　コネ鉢である。横ナデ調整で仕上げる。胎土には微砂粒が多く、青灰～暗青灰色を呈する。

石鍋（66図648・649）　648は縦耳、649は鍔をもつ石鍋で、648は耳の付け根に内部から通じる孔がある。648は縦方向の削り、649は横方向の細かい削りで器面を仕上げている。ともに煤が付着する。

4－6　近世以降の遺構

F－9～14区を中心に、矩形や鉤手状に走る溝を確認した。精査するとこれらの溝は、南北両地区を区画する溝と、さらにこの区画した両溝をおもに東側で囲った溝であることが分かった。さらに南側ではこれらの溝の外に、逆L字状に地山を削った段落ち部分がみられた。溝の覆土からは陶磁器類などの生活用具の出土が多いため、おそらく溝で区画された内側には屋敷があったのではないかと推定した。残念なことにそれは西側の調査区外にあたり、直接的な根拠を得ることはできなかった。ここではこれらの溝及び他の関係する遺構について取り上げる。遺物については時間的な制約から図示するに至らなかった（図版26・27）。

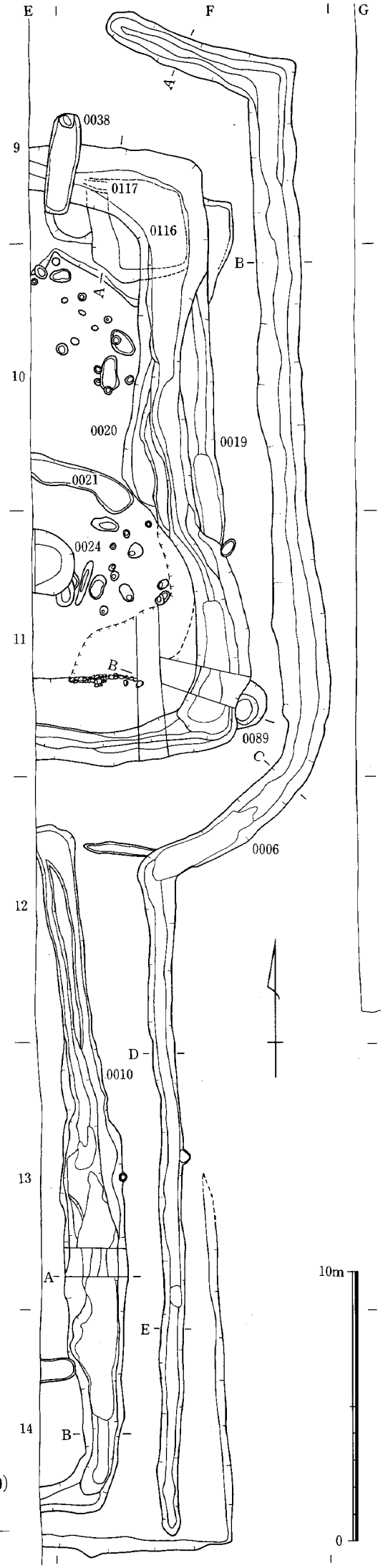
なおこれ以外にも、おもに南北方向に走る短い溝状遺構や土坑を、調査区ほぼ全体にわたって確認した。これらの遺構の覆土は砂、あるいは砂質土で、底面や壁面に滞水を示す凹凸が著しい。古墳時代や中世の遺物も混じる、覆土や切り合い状況から、時期差はあるものの近世以降の水田に関連した遺構と考えられる。これらについては付図の全体図で示し、また表にその規模などを記すにとどめた。

溝

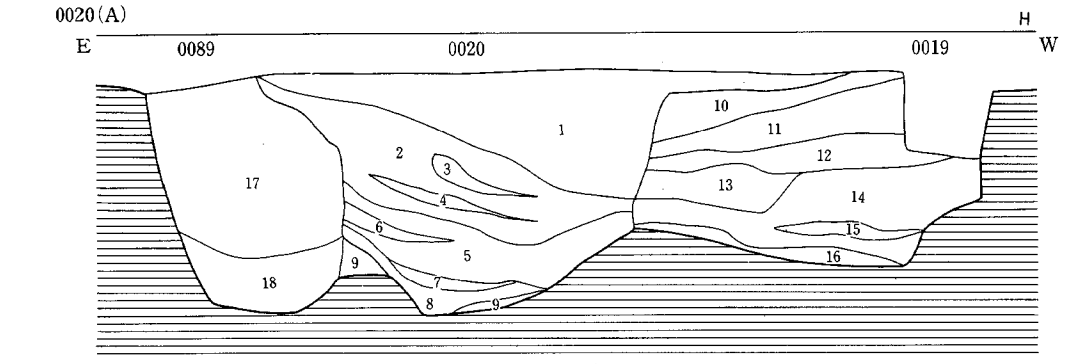
番号は前後するが、北側の区画溝（切り合いがあり、0019が古く、0020が新しい）、南側の区画溝（0010）、二つの区画溝を東側で囲む溝（0006）の順で述べ、最後に区画の中に見られる溝（0021）について記述する。

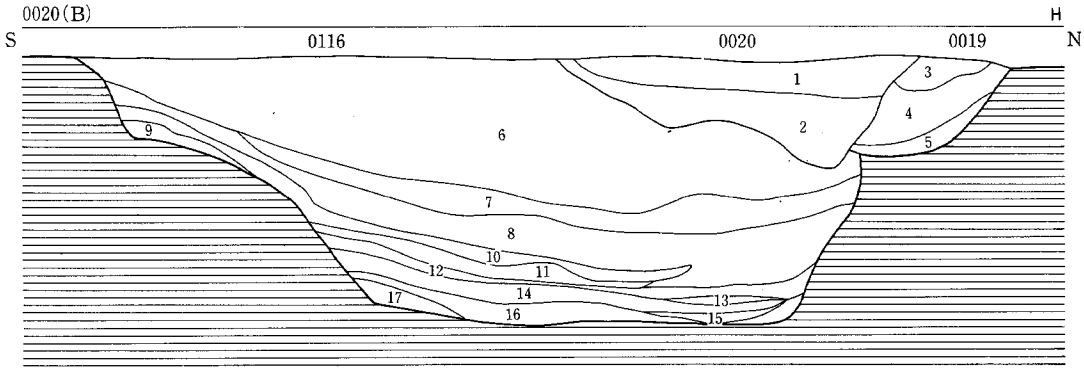
0020溝

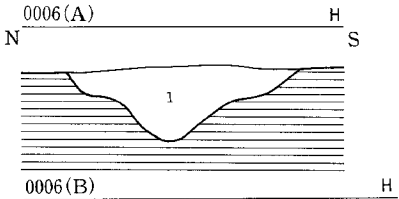
北側の区画溝で、後に記す0019溝の西南方向の作り替えである。E－9区西調査区境から東へ約6m走り、そこでほぼ直角に南に折れ、約10mの所で西側に最も入り込み、そこから東南隅に向い膨らみ、丸みをもって西に折れる。南北幅は溝の外側で22.50m、内側で19.50mをはかる。溝幅は東北隅で約3m、他は2m前後、深さは北辺から東辺にかけてと南辺では60cm前後、西南隅だけがえぐれたように120cmと深くなる。この東南隅の溝中には礫が層をなしており、深さはこの礫と

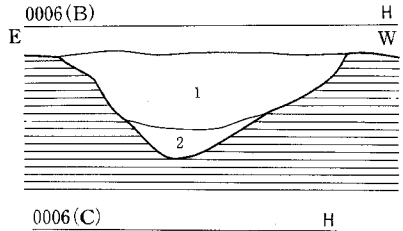


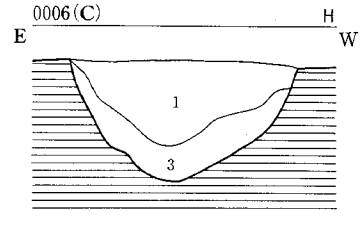
67図　江戸時代遺構配置略図（縮尺1:200）

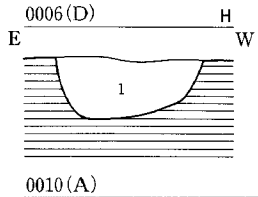


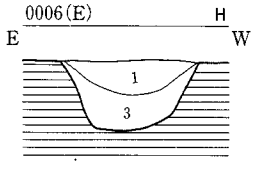


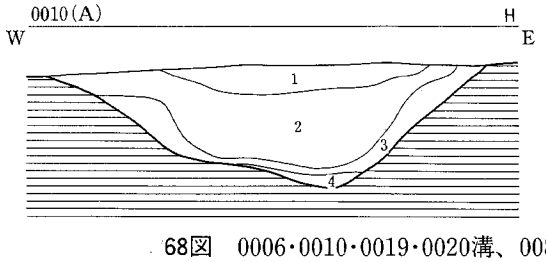


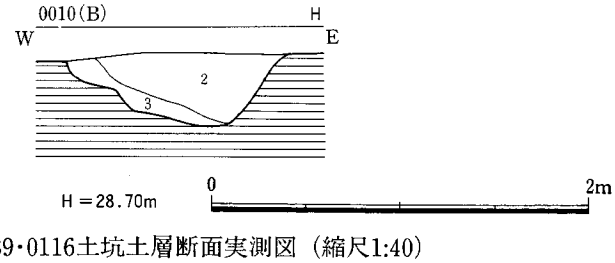












0019・0020・0089土層

1　灰褐色砂質土（5～20cm大の礫多量に混じる）
2　黒褐色砂質土（5cm大の礫比較的多く混じる）
3　淡灰褐色砂質土
4　黄褐色砂質土
5　暗褐色土（5～10cm大の礫少量混じる）
6　黒褐色砂質土
7　褐色砂（炭化物混じる）
8　暗褐色砂
9　淡褐色砂
10　褐色砂質土
11　灰褐色砂質土（3cm大の礫多く混じる）
12　茶褐色砂質土
13　暗褐色砂質土
14　暗褐色砂質土（炭化物と5～10cm大の礫混じる）
15　茶褐色砂
16　15と同じ
17　褐色砂質土（5cm大の礫・炭化物少量混じる）
18　暗褐色砂質土（炭化物少量混じる）

0019・0020・0116土層

1　淡褐色砂質土（10cm大以下の礫比較的多く混じる）
2　暗褐色砂質土
3　褐色砂質土（3cm大以下の礫少量混じる）
4　1と同じ
5　淡黒褐色砂質土（3cm大以下の礫含む）
6　黄褐色砂質土＋灰褐色砂質土
7　灰黒色砂質土（20cm大の礫多く混じる）
8　灰褐色砂質土（20cm大の礫比較的多く混じる）
9　7と同じ
10　茶褐色砂
11　茶褐色砂＋灰黒色砂（酸化鉄を含む）
12　10と同じ
13　黒褐色砂
14　灰褐色砂（礫が5cm少量混じる）
15　13と同じ
16　11と同じ
17　13と同じ
18　茶褐色粗砂

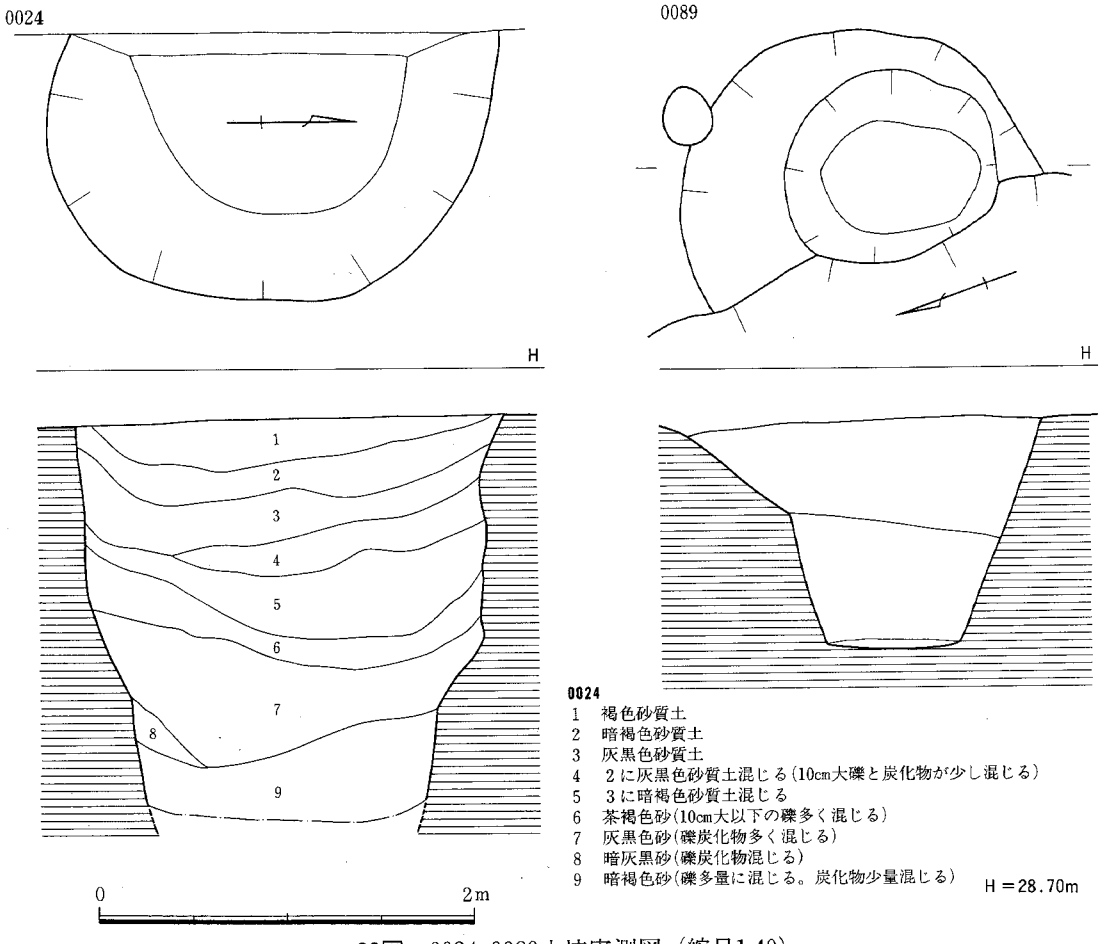
0006土層

1　灰褐色砂質土（5～20cm大の礫多量に混じる）
2　褐色砂質土＋灰褐色砂質土
3　暗褐色砂質土（3cm大の礫少量混じる）

0010土層

1　淡褐色砂質土
2　灰褐色砂質土（3～20cm大の礫多量に混じる）
3　暗褐色砂質土
4　暗茶褐色砂質土（若干粘質ぎみ）

68図　0006・0010・0019・0020溝、0089・0116土坑土層断面実測図（縮尺1:40）



69図　0024・0089土坑実測図（縮尺1:40）

の関係によるものかもしれない。

溝東辺の西に入り込んだ中央部分以外は0019と重複し、東北隅ではそれに加え0116土坑と、東南隅ではまた0089土坑と切り合い関係をもっている。68図にその切り合い状況を示した。最上段のA断面図が東南隅の切り合い関係を示したもので、0089土坑を東側で、また西側では0019溝を切っている。この部分での溝幅は２m前後、深さは125cm、溝の中位以下には礫が充満していた。この礫の下の層には炭化物が含まれていた。その下のB断面図は溝北辺の切り合い関係で、北側で0019を切り、さらに0116土坑を切った状況がわかる。この部分での溝幅は1.90m、深さ60cm、溝底は北側（外側）が深くなる。溝東辺の切り合いのない部分での溝幅2.30m、深さは34cm。西側（内側）の肩は緩く段がつき、底は東側（外側）に寄る。

この溝に区画された部分のうち、東西幅４～５mが確認できるが、そこでは0021溝、0024土坑とまとまりのないピットを確認したにとどまった。なお北辺は0038の浅い長方形土坑に切られる。

出土遺物には有田、伊万里、唐津、高取などの陶磁器類などが多量にある。

0019溝

0020溝に先行する区画溝である。位置は0020とほぼ同じであるが、北辺から東辺では0020の北側から東側、すなわち外側に出、南辺では北側（内側）に入る。つまり、0020はこの区画溝からやや西南寄りに位置を変えて作られたものである。北辺での深さ54cm。東辺は直線的で、その中央部は他の遺構との重複がない。そこでの溝幅１m前後、深さは33cm。断面はU字形に近い。東辺の南部分の溝中

には礫が堆積している。東南隅は0020同様105cmと深くなり、幅も２m前後となるものと推定される。南辺溝の内側には径20cm程度の石組列が約３m続く。また東南隅の溝内側には浅い段落ちがある。区画の南北幅の規模は、新しい0020のそれと大きな隔たりはないと考えられる。

出土遺物には有田、伊万里、高取などの陶磁器類と土師質土器などが多量にある。

0010溝

0020溝の南辺から南に2.50m離れて北辺をつくる区画溝である。北側の区画溝と比べ西側に約５m入る。したがってこの溝の調査は東辺とその南北隅部分にとどまり、区画の内側は東西幅１mほどしか確認できず、明確な遺構を検出することはできなかった。

東北隅は丸みをおび、東辺は直線的であるが、中央から南側が西にやや膨らむ。東南隅は比較的直角に西に折れる。南辺の南0.80mには、地山を削った段落ちが平行に西へ続く。この南の方形区画の南北幅は溝の外側で25.50m、内側で23.50mをはかる。この部分だけを見れば北側の区画より一回り規模が大きいことになる。

東辺の北側で溝は幅0.4m前後、深さ17cmの２本の溝となるが、これは溝上部が削平され、底部の東西の深みがそのまま検出面に現れたものと考えられる。中央部では溝幅2.40m、深さ60cm。断面は逆三角形状となり、その土層をみても２本の溝の切り合いとは認められない。中央部から南側にかけての溝中には礫の堆積が多い。

出土遺物には有田などの陶磁器とともに石臼がある。

0006溝

これまで見てきた南北両区画溝の、北から東の外側を囲むように設けられた溝である。この溝は0019北辺から北に約４m離れたところから始まり、約６m東南方向に進み、そこで直角に折れ、東北隅を作る。そこから直線的に南に走り、0020区画溝の東南隅に形を合わせるように丸みをもって西側に約６m入る。そこは0010の東北隅の東2.5mのところにあたり、今度はその0010東辺と平行するべく南に折れて直進し、約25mで立ち上がる。溝の南北幅56.5m、総延長は63mである。この溝と0019東辺との間は２m弱、0006東辺との間は北側はさきに述べたように2.50m、南側で1.50mとなる。

溝の規模は北辺で幅1.20m、深さ40cm、北側区画東辺の東側中央部分で幅1.50m、深さ54cm、その南側は幅1.20m、深さ64cmとなる。いずれも断面は逆三角形に近い。これに対し南側区画東辺の東側中央部分では幅0.76m、深さ32cm、その南側で幅0.72m、深さ36cmと幅が狭くなり、また断面形も鍋底状となり深さもなくなる。先に触れたが、この溝の南端付近の外側には、逆Ｌ字状に地山を削った段落ち部分があり、この溝の南端と南側区画を囲むように西に続いている。

出土遺物には有田、伊万里、唐津など多量の陶磁器類がある。

0021溝

Ｅ－10区、北側区画内にあるわずかに南を向く東西溝である。溝幅１m前後、深さ９cmの浅い溝で、0020溝東辺の手前で立ち上がりが不明瞭なまま終る。覆土は砂質土。

近世陶磁器類の小片が10点ほど出土したにとどまる。

土坑

関係する土坑は0024、0089、0116の３基だけである。

0024土坑（69図、図版27-2）

Ｅ－11区、北側区画の南側に位置する。西側は調査区外にかかるが、径2.35mの円形土坑として確認できる。円筒形状に掘り抜いており、深さ2.15mまで掘り下げたが、それ以上は崩壊の恐れがあるため調査を中止した。覆土は砂もしくは砂質土で、ほぼ水平な堆積状況を示している。６層以下には炭化物が混じる。井戸の可能性も高いが、確証を得ることはできなかった。

出土遺物には有田などの陶磁器類がみられる。

0089土坑（69図）

Ｆ－11区。0019溝に切られる径1.95m、深さ125cmの円形土坑である。上部は緩やかな傾斜で、深さ50cmあたりで段を作り、壁面が直に近くなる。底は南北0.85m、東西0.60mの楕円形である。覆土は68図に示した。

出土したのは陶器片と縄文土器、土師器など少量である。

0116土坑

Ｆ－９区。南北4.50m、東西3.50mの長方形土坑である。深さは140cm。南側の肩は段をなし、他はほぼ直に底面に至る。土層断面は68図に示した。砂質土で礫を多く含む。またこの底には土層図ではっきりしないが、北よりに溝状の遺構（0117）があり、西と南方向に延びている。この遺構に伴うものであろうか。

土坑内からは多量の近世以降の陶磁器類、石臼などが出土した。

4－7　清末遺跡群第3次調査まとめ

清末遺跡群第3次調査の内容は、以上の各章で記した通りである。時代的には縄文から江戸におよぶが、遺跡の主体となるのは古墳時代前期と鎌倉時代を中心とした中世である。この年度の圃場整備地内の発掘は、東入部遺跡群第2次調査に時間と労力を取られ、清末遺跡の調査は年度末近い時期に行わざるを得なく、現在みても不十分な点が多々ある。また、その整理作業も今年度になって手がけたもので、近世の遺物を図化できなかったことなど反省すべき点が多い。十分に深化できないが、ここではその成果の一端をまとめてみたい。

縄文時代

縄文時代の調査は偶発的なもので、発掘そのものも8・9トレンチ（グリット）の小範囲にとどまった。しかし出土遺物はコンテナ5箱におよび、土器、石器とも比較的単純時期におさまるのではないかと考えられた。

土器には精製と粗製があり、条痕を施した粗製のものが大半を占めた。精製土器には羽状文をもつ浅鉢や、口縁部を肥厚させ面を作り、そこに沈線文を入れる深鉢など先行する様相もみられる。しかし多くは口縁が大きく開く浅鉢、口縁が直立あるいは外反気味になり口縁帯を作る深鉢や浅鉢である。凹線文、凹点文とともに沈線文が多用され、先に述べた口縁の開く浅鉢には口縁内側に1条、胴屈曲部上に2条の沈線文を施す。また胴部沈線文間に凹点文をいれる例も多い。凹線文はおもに深鉢の口縁帯にみられ、凹点文を併用するものもある。器形を問わず波状口縁が多い。

条痕を施す粗製土器は深鉢が大半を占め、器形的には口縁が胴部から直接開くものが、屈曲して開くものより多い。条痕は二枚貝の腹縁を用いた鋭いものから、板状の幅広いものまで施文方法を含め多種にわたる。無文のものには深鉢と浅鉢がある。

以上の特徴からすれば、これらの縄文土器は後期後葉の時期、宮内克己が細分した三万田III式土器（宮内克己「三万田式土器の研究」古文化談叢第8集・1981）の範疇に含まれると考えられる。三万田式土器は、宮内も細分にあって資料を多用した清末遺跡群の北約1㎞の四箇遺跡でまとって出土しており（『四箇周辺遺跡調査報告書（2）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集 1978、『四箇遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第172集 1987など）、今回の資料はそれを補足するものである。

この他、明確な遺構は認められなかったが、晩期末の遺物が比較的まとまって出土している。今次の調査地点と旧河川を隔てて隣接する東入部遺跡第2次調査6区では、この時期の甕棺墓地を検出しており、農耕生成時期にこの周辺でも生活の営みがあったことがうかがわれる。

古墳時代

この時代でおもに確認したのは、前期の竪穴住居跡で、北地区（北群）と東南地区（南群）の両地区で群をなしていた。この両群それぞれについて形態、時期などをまとめ、周辺の古墳時代集落との比較を行いたい。

北群

北群は3基（0001・0002・0003）で、0002を除いた2基がほぼ同様の形態を示す。南北に長軸を取るプランで、屋内には炉を挟み2主柱穴設け、四面にはベット状遺構を取り付ける。東側中央でベッ

ト状遺構は途切れ、そこに屋内土坑を配している。0003はその反対の西側でもベット状遺構が途切れ、床面は「亜」字状になる。ベット状遺構も含んだ0003の床面積は30㎡で、今回の調査で最も大きい。0002は長方形プランで、主柱穴、炉、ベット状遺構は確認できない。

0001・0003ではまとまった土師器が出土し、そのほとんどが外来系のもので占められていた。とくに布留系土器が目につくが、0001では鼓形器台、0003では複合口縁壺など山陰系の土器も認められる。鉢に若干古い形態も見受けられるが、0002の出土土器も含め、おおむね柳田康雄の編年による土師器IIb式（柳田康雄「土師器の編年２九州」『古墳時代の研究６』1991など）に相当すると考えられる。住居の空間的な配置からみても、この北群は同一時期に営まれていた可能性が高い。この周辺は水田化の際の削平が激しく、床面の浅い住居は消滅した可能性がある。また調査区の状況から、住居が広がりを見せるとすれば、西側である。

南群

南群は北群の東南約100mに位置し、６基の竪穴住居（0067～0072）を確認した。しかし全体が分かるのは0071だけで、0067が西側を削られ、他の４基はすべて調査区外にかかり、その一端を検出したにとどまった。0067と0071は長方形のプランで、床面に炉、また壁際に屋内土坑を設けるが、主柱穴は確認できない。確実なベット状遺構をもつ住居は0068と0069だけであった。

この群では互いの住居が接近し、0069と0070は切り合い関係をもつ。また0068と0072は調査区外で確実に切り合い、0068と0069も切り合わないにしろ、ほとんど接するばかりの状態で共存は無理である。

住居の時期的な変遷を出土遺物で特定できればよいが、切り合いや近接関係がある住居でのそれは少ない。0069の高杯は南群の出土土器では明らかに新しいが、住居はそのものはベット状遺構を設け、有田遺跡群（山崎龍雄「第125次調査小結」『有田・小田部第18集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第340集、1993）の例などをみても、時期的には前期の中におさまると考えられる。他の調査区外にかかる住居は、0072がタタキのある在地甕などが混じるものの、柳田の土師器IIb式におさまるものであろう。

一方、切り合いがなく全体がうかがえる0067と0071では土師器の出土が多かった。0067は布留系甕とともに鉢があり、小型の通有のものとそれより一回り大きい平底に近い鉢が混じる。床面出土の布留系甕は土師器IIb式に相当する。

0071の出土遺物は、住居廃棄時に床面に遺棄されたものと（床面）、その後一定時期を経て住居が埋没した段階で廃棄されたもの（上層）がある。床面出土の土師器には布留系甕、小型丸底壺（坩）、高杯などの器種があり、布留系甕には胴部が丸く張るタイプとなで肩タイプがみられる。前者には胴部下半にタタキを残す甕もある。また小型甕や、布留系甕としては整形の異なる甕も出土している。小型丸底壺には長頸と短頸があり、胴部はともに浅い。高杯には杯部の深いものとそうでないものがある。これら床面出土の土器もやはり土師器IIｂ式に含まれるが、長頸の小型丸底壺など新しい要素も出現している。これに対し上層では小型丸底壺以外の器種がみられ、単口縁壺、平底鉢、布留系甕など大型品で完形に近いものが多い。これらの土師器はその特徴から床面の出土の土師器に後れるとは考えにくく、先にあげた大型の器種はかえって古い形態さえ示している。大型品の器形の変化が小さく、また廃棄住居の埋没が早く、長い時期をおかず上層遺物が投棄されたとするなら理由がつかないこともない。しかしその場合、完形土器が多いことも含め、これらの遺物が果たして単なる廃棄行為によるものであったのか問題は残る。

以上のように南群の住居は、古墳時代前期でも幅をもつ。遺物、切り合い関係、相互の位置関係か

ら、少なくとも三段階、おそらくはそれ以上の建て替えによる住居景観の変遷が想定できる。その造営開始時期は北群とあまり変わることはないとみられる。南への住居の広がりは、試掘調査の結果からみる限りさほど大きいものとは考えられない。

周辺の前期集落

今次の調査では南北両群とも、出土土師器は0069を除き柳田編年のIIb式に相当し、住居の存続期間は比較的短期で、また各群の構成数も数基程度であったと考えられる。同時期の竪穴住居は、これまでの入部圃場整備地内の発掘調査で100基近くが確認され、早良平野南部の集落の在り方を提示している。

竪穴住居が集中するのは岩本遺跡群の西側中央の低位段丘上で、1次調査(『入部II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第268集、1991)では10基以上、2次調査(『入部IV』福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集、1993)では16基に加え土坑15基などが検出された。2次調査のうち報告された15基の竪穴住居は、規模には大小あるが、長方形プランで、屋内には2本の主柱穴と炉、ベット状遺構、壁際の土坑を設けるタイプが多い。1基だけ方形プラン、4主柱穴、四面ベット状遺構の住居もあるが、これも含め時期的には古墳時代初頭から前半に位置づけられている。先の柳田編年でいえば土師器IIa式からIIb式に主体を置くものである。1次調査の住居もその形態から大きな時期的な隔たりはないと考えられ、径約120mの範囲にあわせて30基以上からなる集落が営まれていたことが分かる。2次調査の切り合い状況や遺物からみると、少なくとも三時期の変遷があり、単純に考えれば、一時期10基程度となるが、もちろん推測の域をでるものではない。

しかし、この岩本遺跡の住居数は他遺跡群の各地点の数に比べ最も多い。住居群の分布は、岩本遺跡からみると東北方向の重留遺跡に約300mの間隔で、また西から西北方向の東入部遺跡、清末遺跡に50～150mの間隔で散在する。東入部遺跡1次調査4区(未報告)では11基の住居を確認したが、時期差を考えると他の遺跡も含め4～5基以下が、一時期の集落を構成するものと推測できる。清末遺跡2次調査1区では1基の住居だけ、また6区では小型の住居3基の群を検出している(『入部III』福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集、1992)。事業地内で現在確認されている前期の住居の南限は、岩本遺跡の西南約300mの東入部遺跡2次調査10区(未報告)である。

有田遺跡群では古墳時代の集落は4～5基の単位で構成され、その集落間は80～100mの距離をもち、また同一地区での集落の継続が著しいとされる(井澤洋一「35次調査小結」『有田・小田部第9集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第173集、1988)。この入部地区では岩本遺跡を拠点とするようにその周囲に小規模の住居群が散在する。中期の拠点の集落は重留遺跡(『入部II』)に移動し、他の遺跡では1～2基程度の住居群が、一部は前期と同じ地点で、一部は西南の安通遺跡(『入部IV』)まで新たに広がる。後期には住居は集落としてまとまり、南は東入部遺跡3次調査37区(未報告)にまでみられるようになる。しかし古墳時代を通じて住居が確認されているのは現在のところ平野部の低位段丘上だけある。同じ早良平野とはいえ、有田遺跡とは状況が異なる。平野内での位置関係、またその立地と開田状況に左右されたものであろう。

中世

今次の調査ではおもに掘立柱建物を中心とする集落と、2次調査で検出した居館の南側部分の環濠を確認した。

掘立柱建物は4群に分けて説明を加えたが、それぞれを他の遺構も含めその時期などについて検討する。北地区では掘立柱建物3棟を検出し、うち0005は2×4間の四面庇付建物で今次の調査では最

も規模が大きい。遺物には土師器、黒色土器の細片があり、またこの建物が切る0012溝では底部糸切り皿と龍泉窯系青磁が出土していることから12世紀中頃に比定できる。その北に位置する側柱だけの2×3間の建物は、ヘラ切り土師器皿と黒色土器などを出土し、0005より先行する時期の可能性もある。中央地区でまとめることのできた建物は0027の1棟だけであったが、他に多数のピットがあり、また井戸、土坑などの遺構が集中していた。遺物の出土も多く、ここが集落の中心の一つであることを窺わせる。時期的には12世紀後半～13世紀で、一部の土坑は12世紀中頃まで遡る。南地区も遺構が集中し、掘立柱建物は3棟確認した。井戸・土坑も含めおよそ12世紀後半～13世紀である。東南地区では5棟の掘立柱建物と1基の土坑を検出した。建物から出土したのは土師器、黒色土器など限定され、土師器の底部はヘラ切りだけであった。建物の配置からみても、単一時期と考えてよく、12世紀前半に相当する。

以上と2次調査の成果（長家伸「清末遺跡群第2次調査まとめ」『入部III』福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集、1992）と考え合わせ、集落の変遷を辿ると、まず12世紀前半に東南地区で集落が営まれる。2次調査4区で大型建物群が作られる12世紀中頃には、東南地区の集落は消え、北地区に新たな掘立柱建物群が、また中央地区には用途を明確にしがたいが土坑も設けられている。12世紀後半に入ると集落は中央・南地区に集中し、井戸なども兼ね備えるようになる。集落の東側には0051の大溝が掘削され、2次調査区（SD0060）へと北進する。集落はこの大溝が埋没する前になくなり、14世紀の初頭には環濠を備えた居館が出現する。その周囲には集落は認められなくなる。

中世における土地開発と集落の関係は重要な歴史的課題である。早良平野南部では11世紀代に平野部への集落の進出が始まり、12世紀前半には現在残る地割に沿った大溝が掘削され、それとともに点在していた集落が地区ごとに集約される状況が知られている。大溝は14世紀までには埋没し、清末遺跡では環濠をめぐらせた居館の出現をみる。

これまで調査された圃場整備地内のほとんど全域で、中世の集落、生産跡、墓地などの中身の濃い分布をみている。また字名と中世の遺構と関わりが深いことも調査の過程で分かってきた。これらの調査の資料を、早急に整理し、報告することが先の課題に対する役割の一端をなすものと考える。誠意努力したい。

番号	位置	遺構種類	時代	図版	挿図	出土遺物	備考
0001	G-3	竪穴住居	古墳	8-1	26	206～215	
0002	F-4	竪穴住居	古墳	8-2	26	216、217	
0003	F-2	竪穴住居	古墳	9-1	28	218～239、640	
0004	F-4	掘立柱建物	中世	15-1	47	300、301	柱穴　0306～0315
0005	F-6	掘立柱建物	中世	15-2	47	302、643	柱穴　0316～0347
0006	F-9	溝	江戸		68	447、449、455～458、637	
0007	F-9	井戸	中世	18-2	52	313～322	
0008	F-8	土坑	中世	20-2	55	333	
0009	E-6	溝	古墳		42	177、288、450	
0010	E-12	溝	江戸		68		
0011	F-9	土坑	中世	21-1	55		
0012	F-4	溝	中世		58	635、638	
0013	F-8	土坑	中世		55		
0014	F-8	土坑	中世	21-2	55		
0015	F-8	土坑	中世	21-2	55		
0016	F-8	土坑	中世	21-2	55		
0017	F-13	井戸	中世	19-1	52		
0018	F-12	埋甕	縄文	7-1	6	001	
0019	F-10	溝	江戸	26-2	68		
0020	F-9	溝	江戸	26-2	68	200	
0021	E-10	溝	江戸				
0022	F-10	土坑	中世	22-1	55	634	
0023	F-11	土坑	中世		55	334、335	
0024	E-11	土坑	江戸	27-2	69		井戸か？
0025	F-16	掘立柱建物	中世	16-2	48		柱穴　0211～0216
0026	F-15	掘立柱建物	中世	16-1	48	303、644	柱穴　0201～0210
0027	E-8	掘立柱建物	中世		48	304	柱穴　0350～0355
0028	E-8	溝状遺構	近世				南北溝　長1.50、幅0.35、深0.14m
0029	F-8	溝状遺構	近世				南北溝　長2.34、幅0.33、深0.10m
0030	F-8	溝状遺構	近世				南北溝　長0.70、幅0.25、深0.14m
0031	F-8	溝状遺構	近世				楕円形状　長0.66、幅0.40、深0.20m
0032	F-8	土坑	近世				楕円形状　長0.95、幅0.72、深0.10m
0033	F-8	土坑	中世		55	336	
0034	F-9	土坑	近世				楕円形状　長0.74、幅0.65、深0.9m
0035	F-9	溝状遺構	近世				東西溝　長1.20、幅0.40、深0.30m
0036	F-9	土坑	中世		55	337、338	
0037	F-9	土坑	中世		55	339、646	
0038	E-9	土坑	近世				南北溝　長3.77、幅1.15、深0.20m
0039	E-9	溝	中世				
0040	G-10	土坑	中世		55	340	
0041	F-10	井戸	中世	19-2	52	323～332	
0042	F-8	溝状遺構	近世			451	東西溝　長2.55、幅0.42、深0.21m
0043	F-13	土坑	中世	22-2	56	160、341、342	
0044	F-13	土坑	中世	22-2	56	343	
0045	G-13	土坑	中世	22-2	56		
0046	F-13	土坑	中世		56		
0047	F-13	祭祀ピット	中世	25-1	63	405	
0048	F-13	祭祀ピット	中世			406、407	
0049	F-15	祭祀ピット	中世	25-2	63	408、409	
0050	G-1	環濠	中世	24	60･61	381～389	
0051	H-4	溝	中世		58	363～379	
0052	I-4	溝状遺構	近世				南北溝　長4.80、幅6.00、深0.20m
0053	I-4	溝	中世		58		

3表　清末遺跡群第3次調査遺構一覧1

番号	位置	遺構種類	時代	図版	挿図	出土遺物	備考
0054	I-4	溝	古墳	12-2	43		
0055	J-4	溝状遺構	近世				南北溝　長7.30、幅0.60、深0.24m
0056	K-5	溝	中世		58		
0057	K-4	溝	古墳		43	289	
0058	K-4	溝	古墳		43		
0059	K-4	溝	中世		58		
0060	K-5	溝	中世		58		
0061	L-4	溝	中世			297	
0062	J-5	土坑	中世	20-1	54	344～351	
0063	F-13	土坑	近世				楕円形　長1.06、幅0.63、深0.55m
0064	F-13	土坑	近世				楕円形　長1.05、幅0.40、深0.29m
0065	F-13	土坑	中世	23-1	56	352、353、639	
0066	F-13	土坑	中世	23-1	56	154、157、354～359、629	
0067	I-13	竪穴住居	古墳	9-2	31	175、176、190、240～248、249、801	
0068	J-13	竪穴住居	古墳	10-1	31	250	
0069	K-13	竪穴住居	古墳	10-2	34	140、182、183、194、251、252	
0070	K-13	竪穴住居	古墳	10-2	34		
0071	K-13	竪穴住居	古墳	11-2	34	253～286、641、642	
0072	I-14	竪穴住居	古墳	12-1	31		
0073	K-12	掘立柱建物	中世	17-1	49	305～309	柱穴　0452～0473
0074	F-12	土坑	中世	23-2	56		
0075	F-13	土坑	近世				楕円形　長1.20、幅0.70、深0.33m
0076	F-15	溝	中世			380、626、633	
0077	F-15	溝状遺構	近世				南北溝　長1.90、幅0.40、深0.06m
0078	F-15	溝状遺構	近世				南北溝　長3.55、幅0.45、深0.12m
0079	F-15	溝状遺構	近世				南北溝　長2.50、幅0.50、深0.20m
0080	F-15	溝状遺構	近世				南北溝　長1.73、幅0.41、深0.33m
0081	F-15	溝状遺構	近世				南北溝　長0.95、幅0.45、深0.21m
0082	F-15	溝状遺構	近世				南北溝　長2.48、幅0.56、深0.49m
0083	F-15	溝状遺構	近世				南北溝　長2.46、幅0.44、深0.21m
0084	F-15	土坑	近世				楕円形　長1.05、幅0.72、深0.17m
0085	F-13	掘立柱建物	中世		48	645	柱穴　0228～0234
0086	F-13	溝状遺構	近世				南北溝　長2.00、幅0.20、深0.10m
0087	E-14	土坑	近世				楕円形　長1.25、幅0.50、深0.05m
0088	E-13	土坑	中世		56		
0089	F-11	土坑	江戸	27-1	69		
0090	E-13	溝状遺構	近世				南北溝　幅0.40～0.50、深0.10m
0091	E-13	溝	中世		56	636	
0092	E-13	土坑	近世				楕円形　長0.70、幅0.5、深0.20m
0093	F-13	土坑	近世				楕円形　長0.74、幅0.40、深0.35m
0094	F-12	溝状遺構	近世				南北溝　長6.40、幅1.15、深0.20m
0095	F-12	溝状遺構	近世				南北溝　長1.83、幅0.48、深0.32m
0096	F-12	溝状遺構	近世				南北溝　長1.63、幅0.65、深0.19m
0097	F-12	土坑	中世		56		
0098	F-12	土坑	中世		56		
0099	F-12	溝状遺構	近世				南北溝　長3.20、幅1.15、深0.44m
0100	F-12	溝	中世				
0101	D-6	溝	古墳	13-1	42		
0102	D-6	溝	古墳	13-2	42		
0103	C-6	溝	古墳	14-1	42	166、167、185、186、197	
0104	B-6	溝	古墳	14-2	42		
0105	E-6	溝状遺構	近世				南北溝　長5.50、幅0.60、深0.08m
0106	J-4	溝状遺構	近世				南北溝　長3.80、幅0.07、深0.09m

4表　清末遺跡群第3次調査遺構一覧2

番号	位置	遺構種類	時代	図版	挿図	出土遺物	備考
0107	K-4	溝状遺構	近世				南北溝　長0.45、幅0.06、深0.09m
0108	J-12	掘立柱建物	中世	17-2	49	310	柱穴　0167～0179
0109	J-12	掘立柱建物	中世		49	311、312	柱穴　0601～0619
0110	I-15	掘立柱建物	中世	18-1	50		柱穴　0180～0193
0111	F-11	溝状遺構	近世			452	東西溝　長2.32、幅0.49、深0.11m
0112		欠番					
0113	F-10	溝状遺構	近世				東北―西南　長2.50、幅0.35、深0.03m
0114	F-10	溝状遺構	近世				南北溝　長2.18、幅0.35、深0.06m
0115	F-10	土坑	近世				楕円形　長1.23、幅0.68、深0.37m
0116	F-9	土坑	江戸		68		
0117	E-9	溝	江戸				
0118	F-9	土坑	中世		55		
0119	K-13	土坑	古墳		41		
0120	G-7	溝状遺構	近世				南北溝　長5.15、幅0.75、深0.22m
0121	G-7	溝状遺構	近世				南北溝　長8.25、幅0.45、深0.13m
0122	G-7	溝状遺構	近世				南北溝　長2.50、幅0.35、深0.28m
0123	G-7	溝状遺構	近世				南北溝　長1.50、幅0.35、深0.09m
0124	G-13	溝状遺構	近世				南北溝　長2.80、幅0.60、深0.44m
0125	G-13	土坑	中世		56		
0126	G-12	土坑	中世		56	360～362	
0127	G-13	溝状遺構	近世			628	長3.07、幅0.55、深0.54m
0128	G-13	溝	中世				
0129	F-12	溝状遺構	近世				南北溝　長1.08、幅0.39、深0.28m
0130	F-14	溝状遺構	近世				南北溝　長2.26、幅0.55、深0.16m
0131	G-13	溝状遺構	近世				東西溝　長1.45、幅0.30、深0.42m
0132		欠番					
0133	G-17	段落ち					
0134	G-16	埋甕	縄文		6	002	
0135	L-12	溝	古墳		43		
0136	L-12	溝	古墳		43	198	
0137	M-13	土坑	古墳		41	287	
0138	M-13	土坑	古墳		41		
0139	L-12	土坑	古墳		41	172、178、180、187	
0140	L-13	溝	古墳		43	173、204、290～295、625、627	
0141	K-13	土坑	古墳		41		
0142	K-13	土坑	古墳		41		
0143	K-12	土坑	古墳		41		
0144	L-13	土坑	中世		54		
0145	G-1	土坑	古墳		41		
0146	F-2	土坑	中世		54		
0147	E-3	掘立柱建物	中世		47		柱穴　0620～0624
0148	I-14	掘立柱建物	中世		50		柱穴　0625～0630
0149		欠番					
0150	G-7	溝状遺構	近世				南北溝　長1.90、幅0.60、深0.36m
0151	G-7	溝状遺構	近世				南北溝　長2.45、幅0.40～0.55、深0.36m
0152	G-7	溝状遺構	近世				南北溝　長1.80、幅0.50、深0.38m
0153	G-7	溝状遺構	近世				南北溝　長3.10、幅0.57、深0.22m
0154	G-7	溝状遺構	近世				南北溝　長4.90、幅0.52、深0.23m
0155	G-7	溝状遺構	近世				南北溝　長4.40、幅0.45、深0.24m
0156	K-13	溝	古墳				
0157	F-9	ピットか？	中世			410～414	

5表　清末遺跡群第3次調査遺構一覧3

番号	位置	遺構種類	径(cm)	深さ(cm)	出土遺物
0167	J-12	0108掘立柱穴	23	23	
0168	J-12	〃	31	37	(310)
0169	J-12	〃	25	16	
0170	J-13	〃	25	26	
0171	J-13	〃	25	21	
0172	J-13	〃	25	20	
0173	J-13	〃	28	32	
0174	J-13	〃	25	20	
0175	J-12	〃	22	28	
0176	J-12	〃	22	27	
0177	J-12	〃	22	18	
0178	J-12	〃	23	20	
0179	J-13	〃	17	25	
0180	I-14	0110掘立柱穴	30	10	
0181	I-14	〃	26	15	
0182	I-15	〃	38	23	
0183	I-15	〃	26	22	
0184	I-15	〃	30	21	
0185	I-15	〃	20	13	
0186	I-14	〃	25	11	
0187	I-14	〃	28	15	
0188	I-14	〃	32	19	
0189	I-14	〃	30	13	
0190	J-15	〃	30	23	
0191	J-15	〃	32	24	
0192	J-15	〃	30	11	
0193	J-15	〃	30	7	
0194	I-13	0072竪穴ピット	40	5	
0195	I-14	〃　壁溝	幅14	7	
0196	I-14	〃　〃	幅7	3	
0197	J-14	〃　ピット	40×30	31	
0198	I-13	0067竪穴炉	92×72	12	
0199	I-13	〃　土坑	95×60	19	249
0200	I-13	〃　ピット	28	15	
0201	F-15	0026掘立柱穴	34×29	19	
0202	F-15	〃	31	19	
0203	F-16	〃	30	16	
0204	F-16	〃	30	26	
0205	F-16	〃	26	17	
0206	F-16	〃	35	28	
0207	F-16	〃	45	21	
0208	F-15	〃	32	26	
0209	F-15	〃	31	20	644(303)
0210	F-15	〃	32	30	
0211	G-16	0025掘立柱穴	75×63	50	
0212	G-16	〃	65×53	25	
0213	G-16	〃	80×58	29	
0214	F-17	〃	5	29	
0215	F-16	〃	55	20	
0216	G-16	〃	68	45	
0217	F-16	ピット	25×15	9	
0218	F-16	〃	20	15	
0219	F-16	〃	30	20	
0220	F-16	〃	20×15	20	
0221	F-16	〃	35	21	
0222	F-16	〃	27×25	38	
0223	F-16	〃	25	27	
0224	F-15	〃	30	29	

番号	位置	遺構種類	径(cm)	深さ(cm)	出土遺物
0225	F-15	ピット	34	17	
0226	F-15	〃	40	不明	
0227	F-15	〃	26	10	
0228	F-13	0085掘立柱穴	39	44	
0229	F-13	〃	45	70	
0230	F-13	〃	40	70	(645)
0231	F-14	〃	30	30	
0232	F-14	〃	42×34	50	
0233	F-14	〃	32	42	
0234	F-14	〃	47×40	45	
0235	F-14	ピット	20	43	
0236	F-14	〃	32	23	
0237	F-14	〃	26	18	
0238	F-14	〃	35	14	
0239	F-14	〃	25	29	
0240	F-14	〃	24	11	
0241	F-13	〃	22	11	
0242	F-13	〃	31	27	
0243	F-13	〃	66×61	12	
0244	F-13	〃	18	4	
0245	F-13	〃	36	6	
0246	F-13	〃	24	5	
0247	F-13	〃	30	11	
0248	F-13	〃	22	11	
0249	F-13	〃	28	35	
0250	F-13	〃	29	43	
0251	F-13	〃	29	26	
0252	F-13	〃	26	48	
0253	F-13	〃	27	63	
0254	F-13	〃	51	6	
0255	F-13	〃	60	18	
0256	F-13	〃	43	66	
0257	F-13	〃	53	52	
0258	F-13	〃	46	25	
0259	F-13	〃	46	50	
0260	F-13	〃	28	17	
0261	F-13	〃	24	13	
0262	F-12	〃	33	46	
0263	F-13	〃	27×22	14	
0264	F-13	〃	39	46	
0265	F-13	〃	32	42	
0266	F-12	〃	54×31	17	
0267	F-12	〃	31	30	
0268	F-12	〃	21	19	
0269	F-12	〃	20	18	
0270	F-12	〃	48×34	48	
0271	F-12	〃	29	20	
0272	F-12	〃	28×22	49	
0273	F-12	〃	30	36	
0274	F-12	〃	32	8	
0275	F-12	〃	27	25	
0276	F-13	〃	24	12	
0277	F-12	〃	42×36	46	
0278	F-13	〃	42	24	
0279	F-12	〃	37	38	
0280	F-12	〃	30	29	
0281	F-11	〃	18	14	
0282	F-11	〃	24	27	

6表　清末遺跡群第3次調査遺構一覧4

番号	位置	遺構種類	径(cm)	深さ(cm)	出土遺物
0283	F-11	ピット	40×34	20	
0284	F-11	〃	68×49	8	
0285	F-11	〃	52	36	
0286	F-11	〃	23	33	
0287	F-11	〃	22	20	
0288	F-10	〃	38	34	
0289	F-10	〃	48×44	52	
0290	F-10	〃	34	15	
0291	F-10	〃	30	21	
0292	F-10	〃	35×27	18	
0293	F-10	〃	37	93	
0294	F-10	〃	36	36	
0295	F-10	〃	26	6	
0296	F-10	〃	24	24	
0297	F-10	〃	33	10	
0298	G-11	〃	34	37	
0299	G-11	〃	27	25	
0300	欠番				
0301	G-3	0001竪穴柱穴	94×77	42	(206,207)
0302	G-4	〃	50	27	
0303	G-3	〃　炉	91×49	5	
0304	G-3	〃　土坑	92×64	30	(212,213,164)
0305	G-4	〃ピット	65	76	(208)
0306	F-4	0004掘立柱穴	37	37	(301)
0307	F-4	〃	34	42	
0308	F-5	〃	28	31	
0309	F-5	〃	24	35	
0310	F-5′	〃	24	36	
0311	F-5	〃	38×29	38	
0312	F-5	〃	30	34	
0313	F-4	〃	32	40	(300)
0314	F-4	〃	38	44	
0315	F-4	〃	27	33	
0316	F-6	0005掘立柱穴	55×45	53	
0317	F-6	〃	45	53	
0318	F-6	〃	60	45	
0319	F-7	〃	50	39	
0320	F-7	〃	45×37	38	
0321	F-7	〃	43	49	
0322	F-7	〃	45	56	
0323	F-7	〃	57×50	44	
0324	F-6	〃	54×45	61	
0325	F-6	〃	53×33	50	(155)
0326	F-6	〃	45×33	29	
0327	F-6	〃	40	42+	
0328	G-6	〃	34	27	
0329	G-6	〃	25	20	
0330	G-6	〃	26	34	
0331	G-6	〃	34	31	
0332	G-7	〃	27	22	
0333	G-7	〃	30	45	
0334	G-7	〃	30	43	(302)
0335	F-7	〃	28	22	
0336	F-7	〃	28	21	
0337	F-7	〃	24	32	
0338	F-7	〃	23	26	
0339	F-7	〃	28	44	
0340	F-7	〃	31	45	

番号	位置	遺構種類	径(cm)	深さ(cm)	出土遺物
0341	F-6	0005掘立柱穴	25	23	
0342	F-6	〃	30	50	
0343	F-6	〃	14	40	
0344	F-6	〃	35	41	
0345	F-6	〃	31	19	
0346	F-6	〃	32	26	(643)
0347	F-6	〃	30	32	
0348	F-13	ピット	26	27	
0349	F-13	〃	38	37	
0350	F-8	0027掘立柱穴	28	46	
0351	F-8	〃	39	34	
0352	F-8	〃	24	29	
0353	E-8	〃	46×27	31	
0354	E-8	〃	32	57	(304)
0355	E-8	〃	34	46	
0356	F-8	ピット	21	36	
0357	F-8	〃	31	35	
0358	F-8	〃	29×22	26	
0359	F-8	〃	24	28	
0360	F-8	〃	26×22	28	
0361	F-8	〃	23	13	
0362	F-8	〃	36×28	21	
0363	F-8	〃	36	28	
0364	F-8	〃	27	35	
0365	F-8	〃	46×34	29	
0366	F-8	〃	46×31	13	
0367	F-8	〃	31	48	
0368	G-8	〃	26	45	
0369	F-8	〃	29	26	
0370	F-8	〃	25	37	
0371	F-8	〃	32	19	
0372	F-8	〃	36×24	32	
0373	F-8	〃	22	13	
0374	E-9	〃	27	43	427,428
0375	F-9	〃	31	22	
0376	E-9	〃	34	26	
0377	F-9	〃	64×51	31	
0378	F-9	〃	44×33	60	
0379	E-9	〃	33	50	
0380	E-9	〃	37	39	420
0381	E-9	〃	33	28	421
0382	E-9	〃	30	12	
0383	E-9	〃	41×26	16	
0384	E-9	〃	28	35	
0385	E-9	〃	34×26	27	
0386	E-9	〃	37×31	32	
0387	F-9	〃	46×37	17	415～419
0388	E-9	〃	52×41	16	
0389	F-9	〃	34	13	
0390	F-9	〃	23	21	
0391	F-9	〃	37	42	422～426
0392	F-9	〃	34	14	
0393	F-9	〃	36	24	429～432
0394	F-9	〃	38	34	
0395	F-9	〃	32	36	
0396	F-9	〃	23	35	
0397	F-9	〃	17	23	
0398	F-9	〃	27	30	

7表　清末遺跡群第3次調査遺構一覧5

番号	位置	遺構種類	径(cm)	深さ(cm)	出土遺物
0399	F-9	ピット	25	24	
0400	F-9	〃	40	34	
0401	F-9	〃	30	33	
0402	F-9	〃	30	27	
0403	F-9	〃	45	28	
0404	F-9	〃	48	31	647
0405	F-9	〃	35	42	434～440
0406	F-9	〃	28	31	433
0407	F-9	〃	45	33	
0408	F-9	〃	38	31	
0409	F-9	〃	55	36	
0410	F-9	〃	25	25	
0411	F-9	〃	46	31	441
0412	F-9	〃	53	30	
0413	F-9	〃	27	31	
0414	F-9	〃	45	40	
0415	F-9	〃	30	22	
0416	F-9	〃	40	36	
0417	F-9	〃	40	29	
0418	F-9	〃	30	29	
0419	F-9	〃	30	29	
0420	F-9	〃	45	36	
0421	F-9	〃	45	41	
0422	F-9	〃	50	34	
0423	F-9	〃	40	14	
0424	F-9	〃	27	34	
0425	F-9	〃	25	30	
0426	F-9	〃	35	25	
0427	F-9	〃	20	33	
0428	F-9	〃	45	58	
0429	F-9	〃	25	15	
0430	F-9	〃	25	23	
0431	F-9	〃	25	31	
0432	F-9	〃	35	34	
0433	F-9	〃	30	23	442
0434	F-9	〃	25	20	
0435	F-9	〃	25	35	
0436	F-9	〃	30	23	
0437	F-9	〃	25	22	
0438	G-9	〃	30	28	
0439	G-9	〃	25	28	
0440	F-9	〃	30	34	
0441	G-11	〃	25	27	
0442	G-10	〃	40	19	
0443	F-10	〃	30	41	
0444	G-10	〃	45	19	
0445	F-10	〃	50	50	
0446	G-10	〃	30	30	
0447	F-10	〃	30	50	
0448	F-10	〃	30	18	
0449	G-10	〃	40	73	
0450	F-10	〃	45	27	
0451	F-10	〃	40	23	
0452	K-12	0073掘立柱穴	45	30	
0453	L-13	〃	55×37	10	
0454	L-13	〃	40×30	28	(306)
0455	L-13	〃	43	34	
0456	K-13	〃	45	29	

番号	位置	遺構種類	径(cm)	深さ(cm)	出土遺物
0454	K-13	0073掘立柱穴	40	36	
0458	K-13	〃	35×27	25	
0459	K-13	〃	48×40	24	(308)
0460	K-12	〃	45	34	(305,307,309)
0461	K-12	〃	30	25	
0462	K-12	〃	26	25	
0463	K-12	〃	23	14	
0464	K-12	〃	27	43	
0465	L-12	〃	30	23	
0466	L-12	〃	25	26	
0467	L-13	〃	25	26	
0468	L-13	〃	31	34	
0469	L-13	〃	35	30	
0470	L-13	〃	37×32	36	
0471	L-13	〃	25	15	
0472	K-13	〃	25	16	
0473	K-13	〃	31	16	
0474	K-13	ピット	50	31	
0475	K-13	〃	40	26	
0476	K-13	〃	26	12	
0477		欠番			
0478	F-9	ピット	34×28	18	
0479	F-10	〃	29×24	49	
0480	F-10	〃	37	16	443
0481	F-10	〃	43×31	47	
0482	F-10	〃	37×26	30	
0483	F-9	〃	24	10	
0484	F-9	〃	40	38	
0485	F-9	〃	43×24	25	
0486	F-9	〃	27	35	
0487	F-9	〃	28	40	
0488	F-10	〃	26	16	
0489	F-7	〃	55×45	16	
0490	F-7	〃	40	23	
0491	F-6	〃	42×40	42	
0492	F-6	〃	23	22	
0493	F-6	〃	26	25	
0494	F-6	〃	38×28	44	
0495	G-6	〃	48	26	
0496	G-6	〃	26	23	
0497	F-5	〃	28	50	
0498	F-4	0002竪穴ピット	34	33	(216,217)
0499	F-4	〃	52×21	8	
0500		欠番			
0501	F-4	ピット	28	25	
0502	F-4	〃	24	24	
0503	F-3	〃	22	10	
0504	F-3	〃	26	13	
0505	F-3	〃	20	8	
0506	F-3	〃	16	8	
0507	G-3	〃	25	4	
0508	G-12	〃	65×60	60	
0509	G-13	〃	65×60	4	
0510	G-13	〃	45	3	
0511	G-14	〃	60×80	5	(189)
0512	G-14	〃	90×80	6	
0513	G-14	〃	45×25	22	
0514	F-12	〃	28	15	

8表　清末遺跡群第3次調査遺構一覧6

番号	位置	遺構種類	径(cm)	深さ(cm)	出土遺物
0515	F-12	ピット	35	26	
0516	F-13	〃	30	28	
0517	F-13	〃	25	23	
0518	G-13	〃	35	4	
0519	G-13	〃	20	19	
0520	G-13	〃	20	13	
0521	G-13	〃	25	6	
0522	G-13	〃	30	9	
0523		欠番			
0524	F-14	ピット	24	18	
0525	F-14	〃	45	6	
0526	F-14	〃	30	18	
0527	F-14	〃	30	15	
0528	G-14	〃	24	20	
0529	G-14	〃	25	9	
0530	G-15	〃	24	8	
0531	G-15	〃	25	11	
0532	G-17	〃	15	11	
0533	G-13	〃	40	28	
0534	K-13	0071竪穴土坑	120×85	18	(274)
0535		欠番			
0536		〃			
0537	K-13	ピット	25	41	
0538		欠番			
0539	K-13	ピット	30	24	
0540		欠番			
0541	K-13	ピット	36	15	
0542	L-12	〃	28	18	
0543	L-12	〃	25	33	
0544	L-12	〃	40×30	12	
0545		欠番			
0546	K-13	ピット	30	32	
0547		欠番			
0548	K-13	ピット	30	29	
0549	K-13	〃	28	23	
0550	K-13	〃	30	46	
0551	K-13	〃	24	27	
0552	K-13	〃	16×20	27	
0553	K-13	〃	38	52	
0554		欠番			
0555	K-13	ピット	35×26	36	
0556	K-13	〃	29	20	
0557	K-13	〃	21	18	
0558	K-13	0070竪穴土坑	130	57	
0559	K-13	〃　ピット	27	12	(162,191,193)
0560	L-12	ピット	21	15	
0561	L-12	〃	30	30	444
0562	L-12	〃	27	25	
0563	L-13	〃	50×42	14	
0564	L-12	〃	23	25	
0565	L-12	〃	45	24	
0566		欠番			
0567	L-12	ピット	35×26	38	296
0568	L-12	〃	45	23	
0569	L-12	〃	27	22	
0570	L-13	〃	45	5	
0571	L-13	〃	36×27	29	
0572	L-13	〃	35	25	

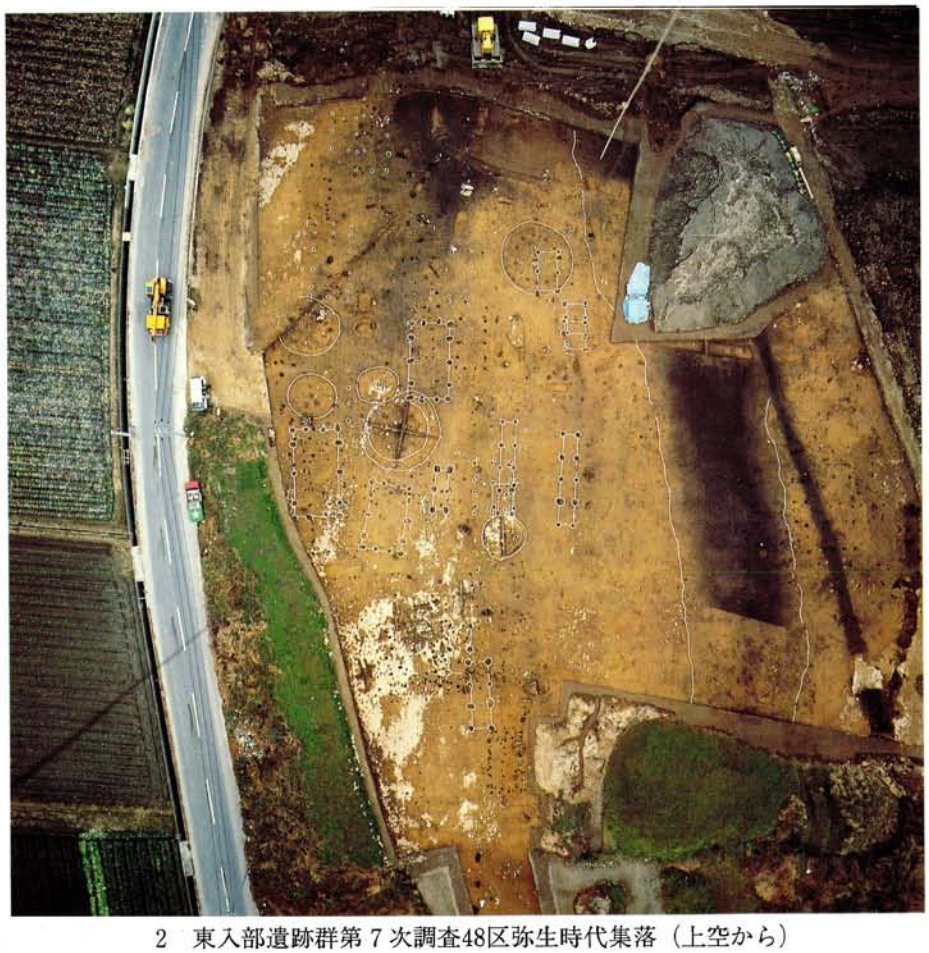
番号	位置	遺構種類	径(cm)	深さ(cm)	出土遺物
0573	L-13	ピット	27	7	
0574	L-13	〃	35	25	
0575	L-13	〃	38	32	
0576	L-13	〃	25	21	
0577	L-13	〃	20	41	
0578	L-13	〃	22	47	
0579	L-13	〃	60×47	16	
0580	L-13	〃	30	20	
0581	M-13	〃	26	33	
0582	M-13	〃	60	5	
0583	M-13	〃	32	37	
0584	M-12	〃	24	25	
0585		欠番			
0586		〃			
0587		〃			
0588		〃			
0589		〃			
0590		〃			
0591		〃			
0592	L-13	ピット？	14	不明	
0593	F-2	0003竪穴炉	70	5	
0594	F-2	〃　柱穴	50×40	23	
0595	F-2	〃　柱穴	60×50	23	
0596	G-2	〃　土坑	90×80	36	(233)
0597	D-6	ピット	90×60	21	
0598	D-6	〃	40	17	
0599	E-6	〃	20	3	
0600		欠番			
0601	K-13	0109掘立柱穴	25	25	
0602	K-13	〃	30	25	(311)
0603	K-13	〃	30	5	
0604	K-13	〃	40×30	17	
0605	K-13	〃	30×25	10	
0606	K-13	〃	35×30	25	
0607	K-13	〃	25	17	
0608	J-13	〃	40	50	
0609	K-13	〃	45×30	20	(312)
0610	K-13	〃	50×40	15	
0611	J-13	〃	25	32	
0612	J-13	〃	45×35	22	
0613	J-13	〃	40	32	
0614	J-13	〃	30	20	
0615	J-13	〃	30×25	16	
0616	J-13	〃	30	14	
0617	K-12	〃	15	7	
0618	K-12	〃	25×20	32	
0619	K-12	〃	25	37	
0620	F-3	0147掘立柱穴	30	23	
0621	F-3	〃	30	22	
0622	F-4	〃	25×20	24	
0623	F-4	〃	25	21	
0624	E-3	〃	30	11	
0625	I-14	0148掘立柱穴	20	10	
0626	I-14	〃	30	42	
0627	I-14	〃	25	13	
0628	I-14	〃	25	16	
0629	I-14	〃	20	31	
0630	I-14	〃	25	17	

9表　清末遺跡群第3次調査遺構一覧7

図　　版

調査中の清末遺跡から西の飯盛山を望む

１　入部圃場整備事業地と早良平野（南上空から）



２　東入部遺跡群第７次調査48区弥生時代集落（上空から）

図版 2

1　東入部遺跡群第 3 次調査42区古墳時代集落（上空から）

2　東入部遺跡群第 7 次調査45区古墳時代・中世集落（南上空から）

1　清末遺跡群第 3 次調査　全景（北から）

2　清末遺跡群第 3 次調査　全景（南から）

図版 4

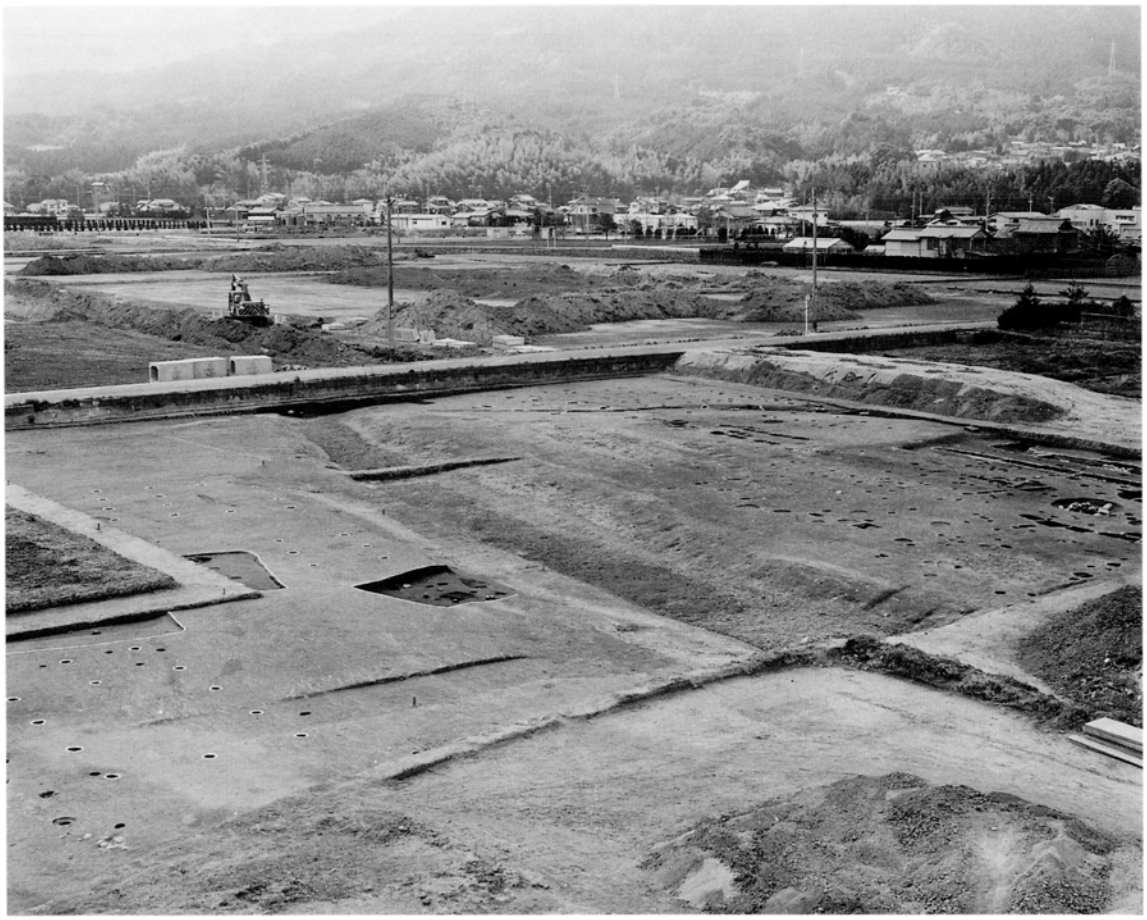
1　清末遺跡群第３次調査　北地区（北から）

2　清末遺跡群第３次調査　東北地区（西から）

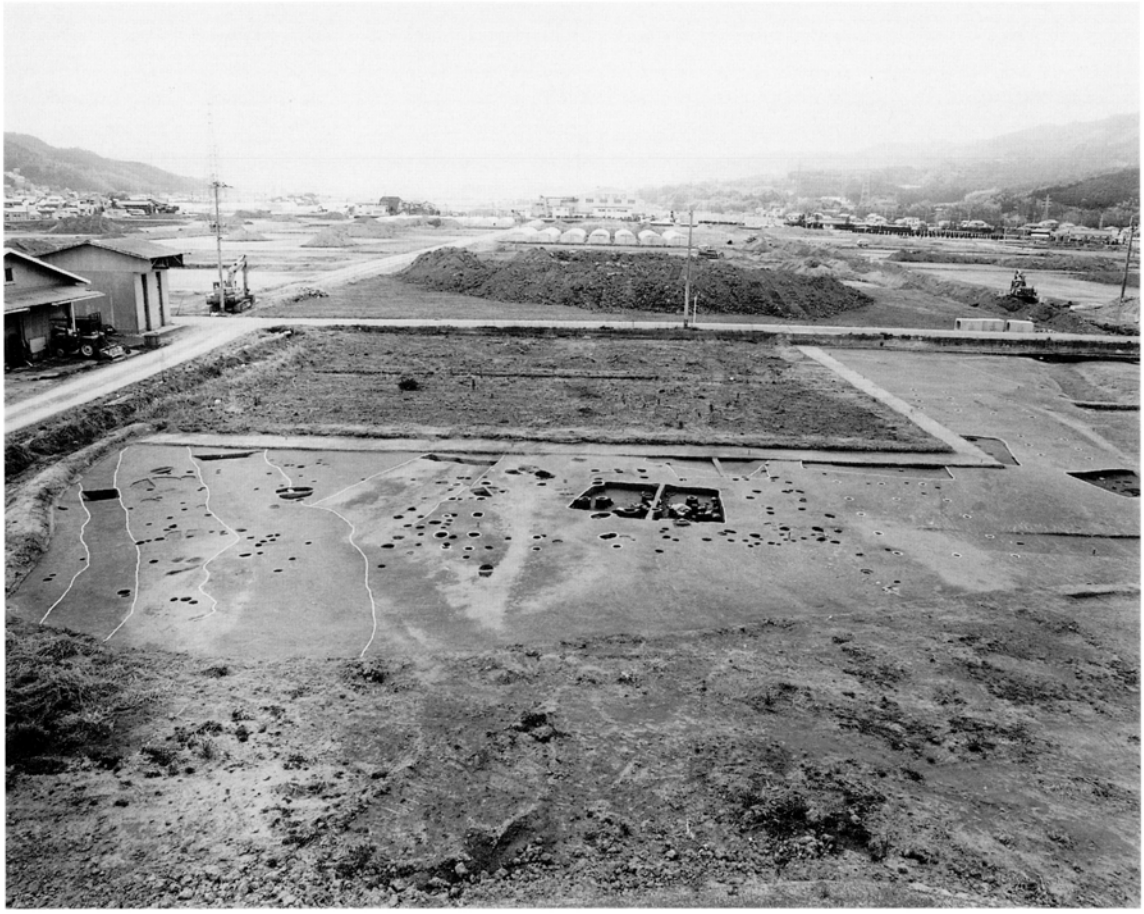
1　清末遺跡群第３次調査　西北地区（東から）

2　清末遺跡群第３次調査　中央地区（東南から）

図版 6



1　清末遺跡群第３次調査　南地区（北東から）

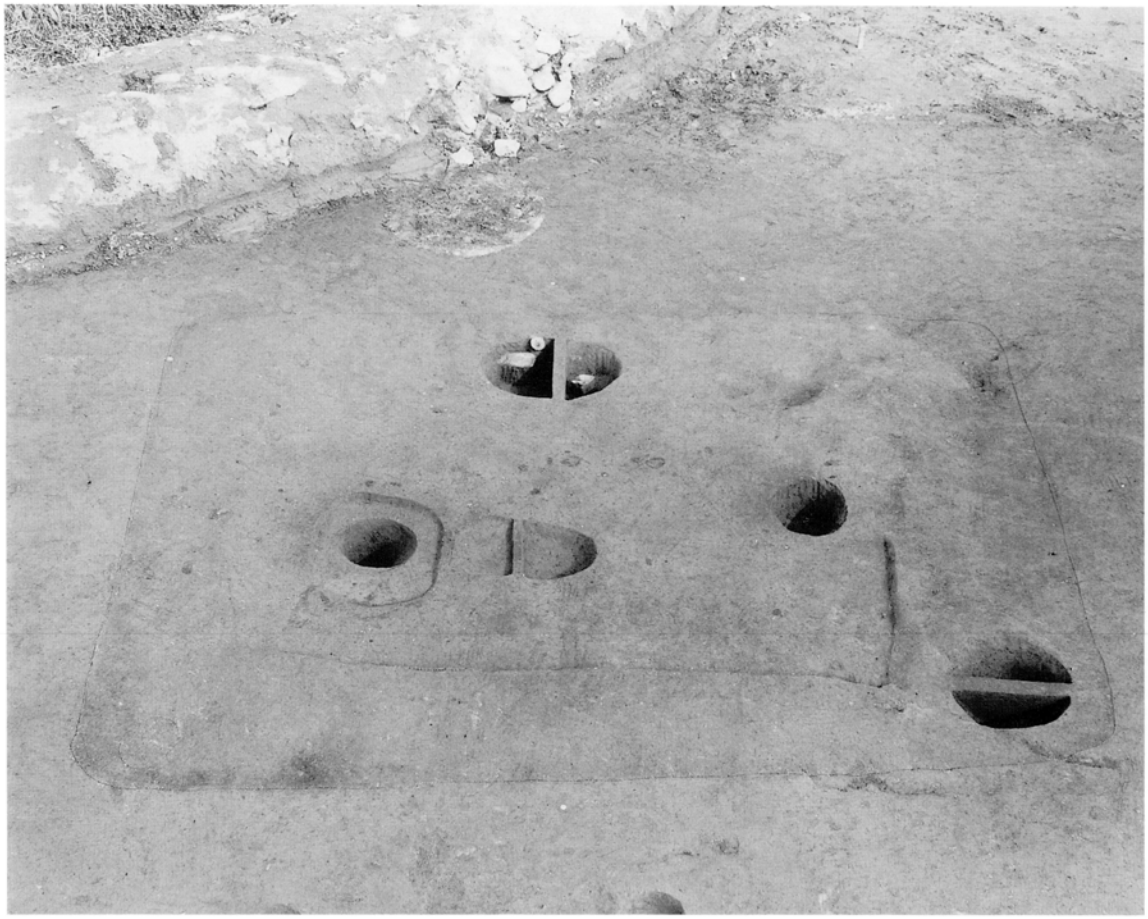


2　清末遺跡群第３次調査　東南地区（北から）

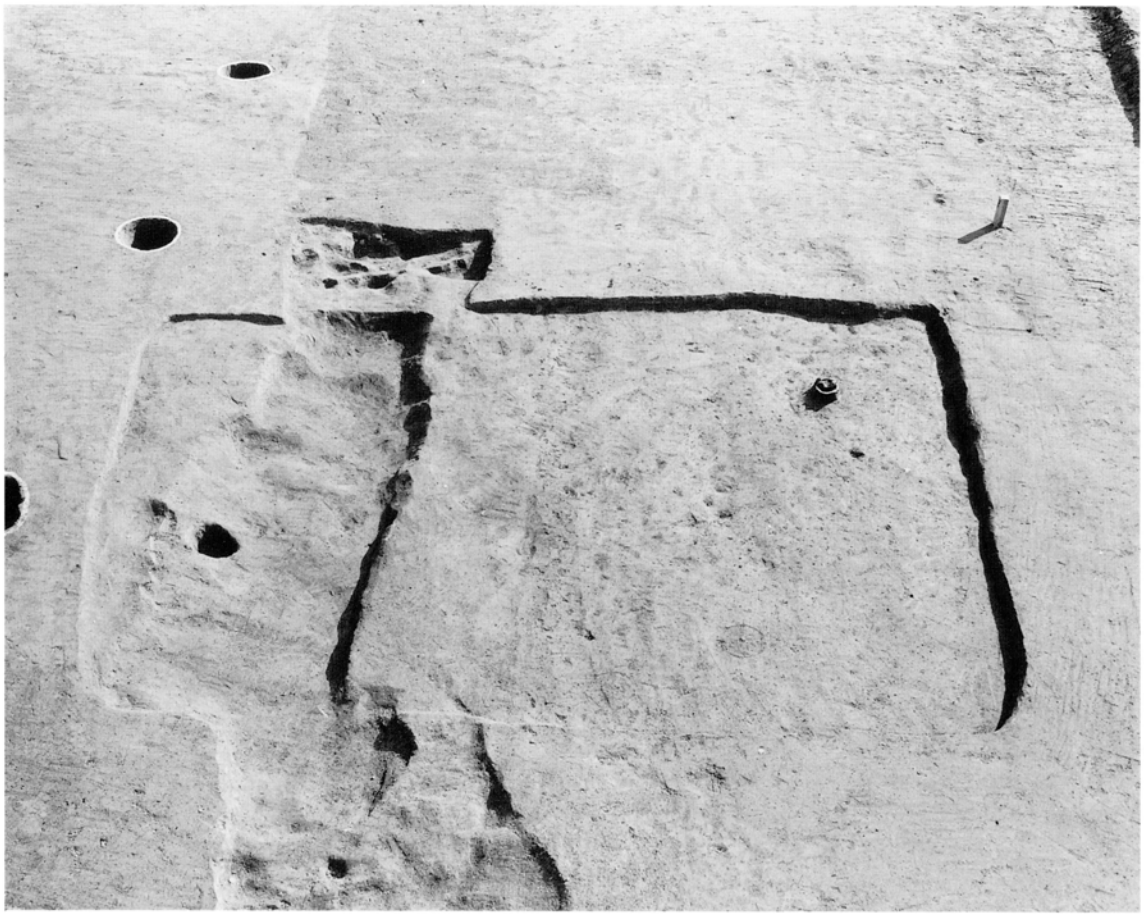
1　清末遺跡群第３次調査　0018埋甕（西から）

2　清末遺跡群第３次調査　８トレンチ遺物出土状況（北から）

図版 8



1　清末遺跡群第 3 次調査　0001竪穴住居（西から）



2　清末遺跡群第 3 次調査　0002竪穴住居（北から）

1　清末遺跡群第 3 次調査　0003竪穴住居（西から）

2　清末遺跡群第 3 次調査　0067竪穴住居（西から）

1　清末遺跡群第３次調査　0068竪穴住居（北から）

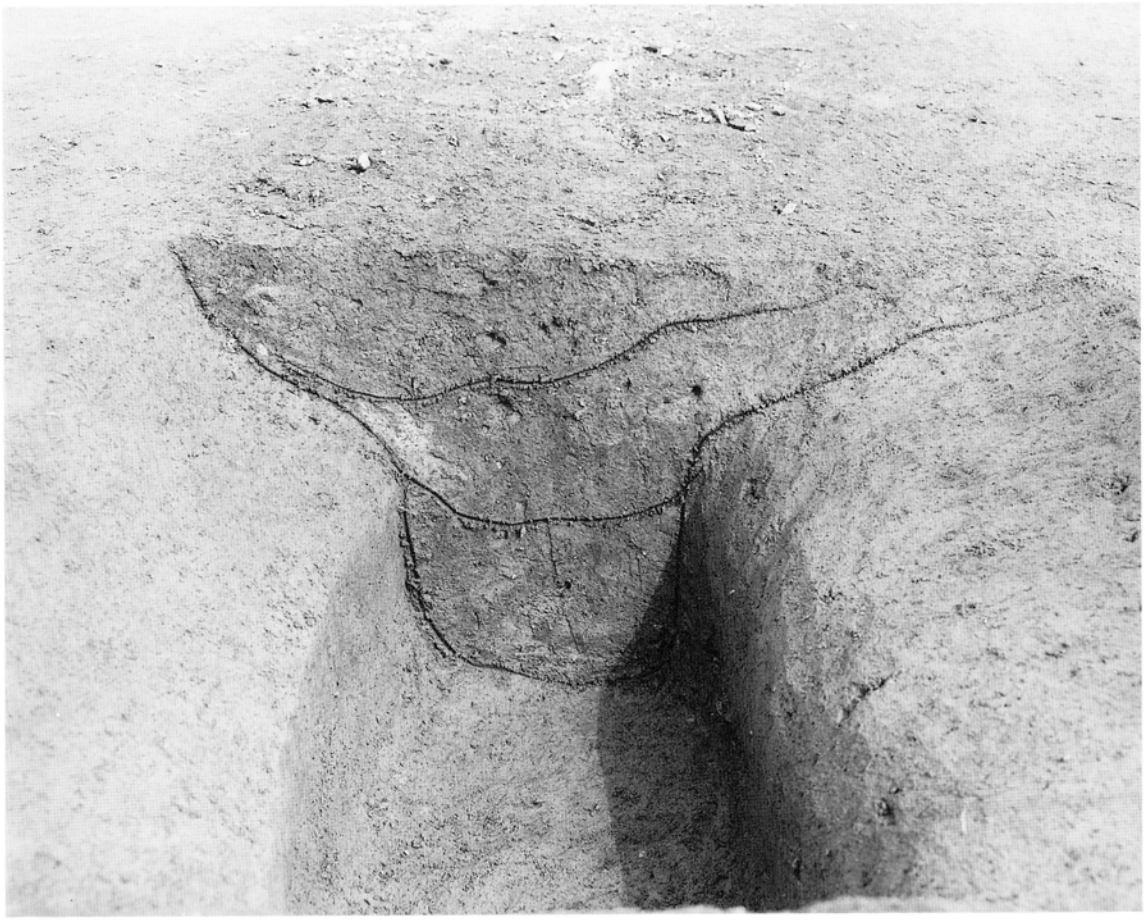
2　清末遺跡群第３次調査　0069・0070竪穴住居（西北から）

1　清末遺跡群第３次調査　0071竪穴住居遺物出土状況（西から）

2　清末遺跡群第３次調査　0071竪穴住居（北から）

1　清末遺跡群第３次調査　0072竪穴住居（南から）

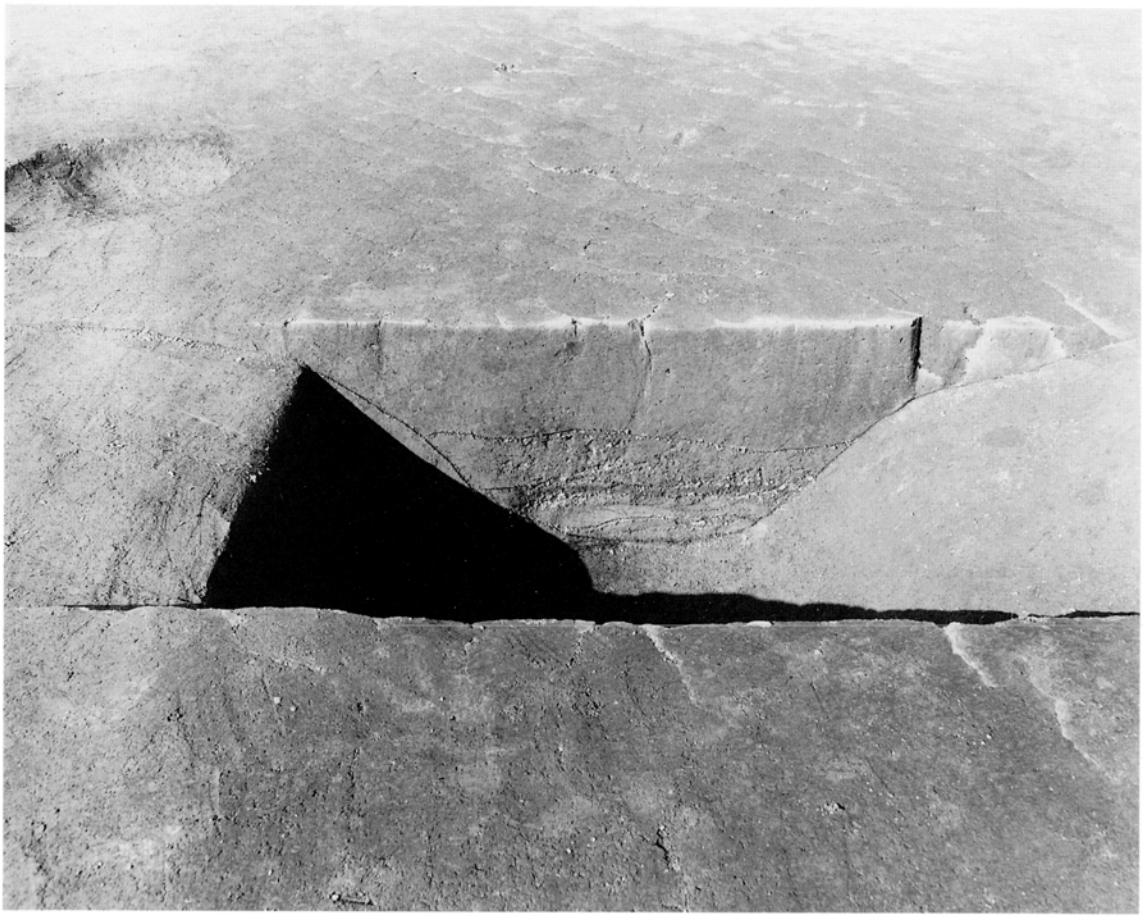
2　清末遺跡群第３次調査　0054溝土層断面（北から）



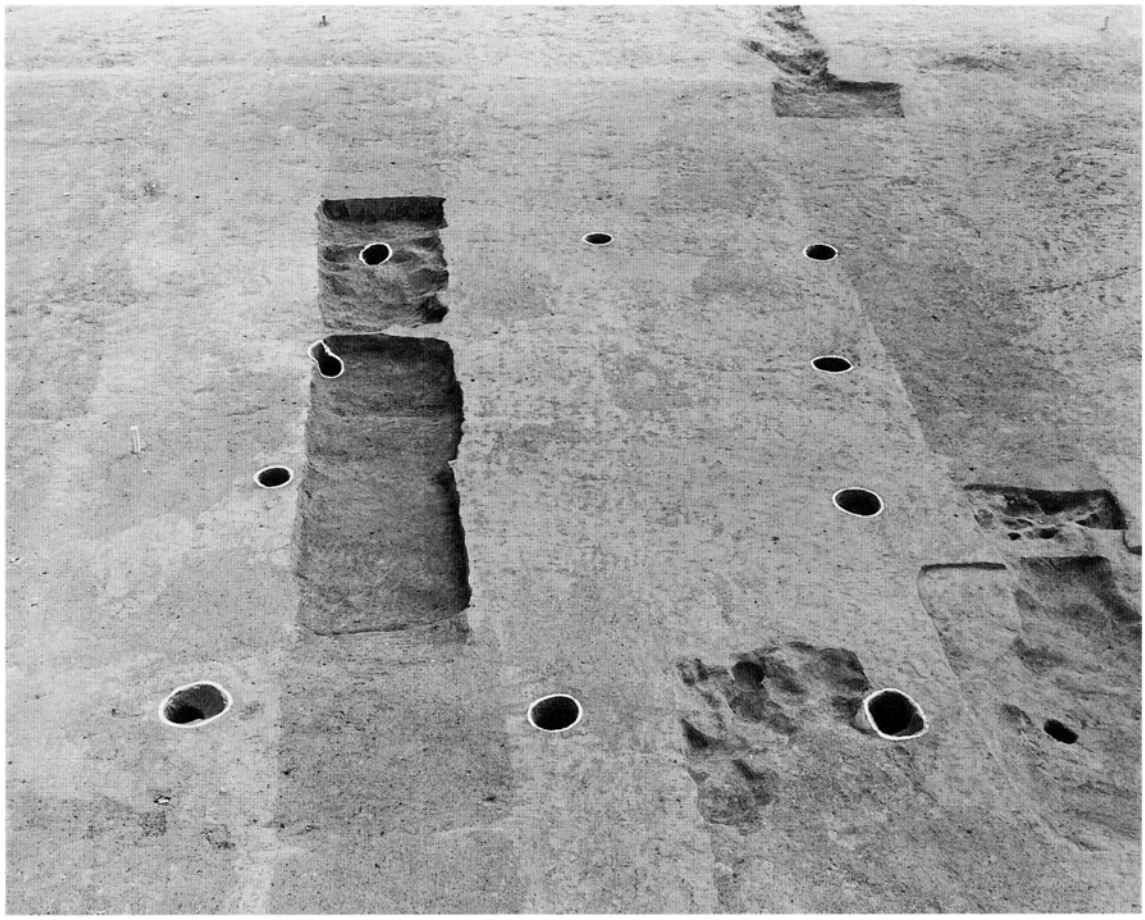
1　清末遺跡群第３次調査　0101溝土層断面（南から）

2　清末遺跡群第３次調査　0102溝土層断面（南から）

1　清末遺跡群第３次調査　0103溝土層断面（南から）

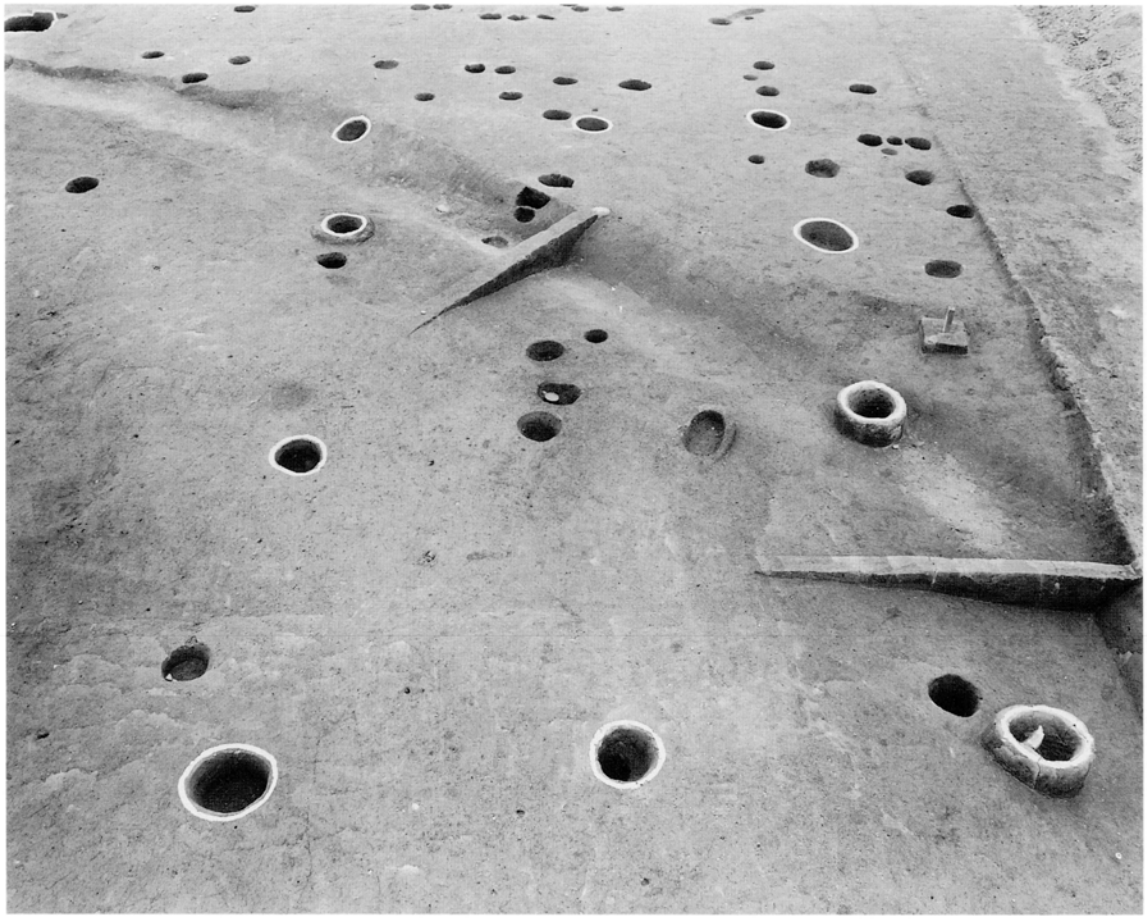


2　清末遺跡群第３次調査　0104溝土層断面（南から）



1　清末遺跡群第３次調査　0004掘立柱建物（北から）

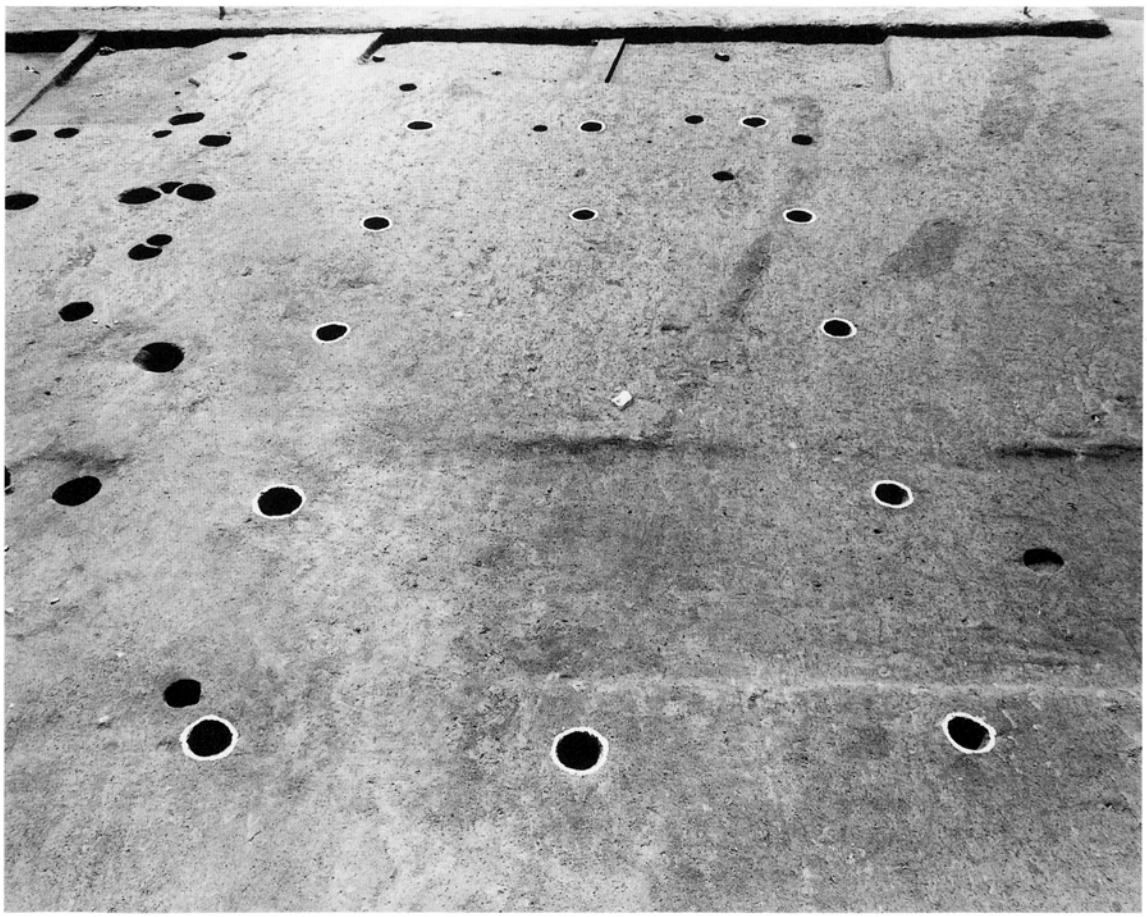
2　清末遺跡群第３次調査　0005掘立柱建物（南から）



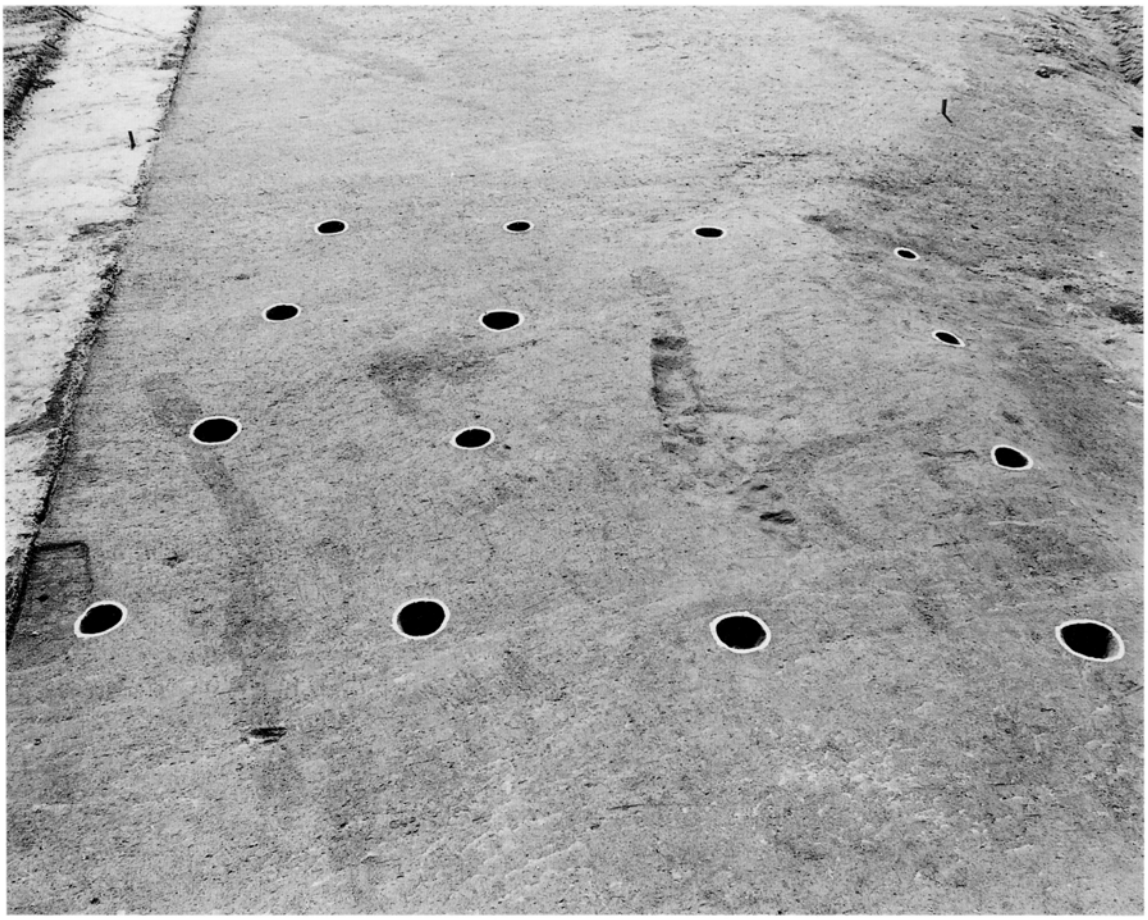
1　清末遺跡群第３次調査　0026掘立柱建物（北から）

2　清末遺跡群第３次調査　0025掘立柱建物（北から）

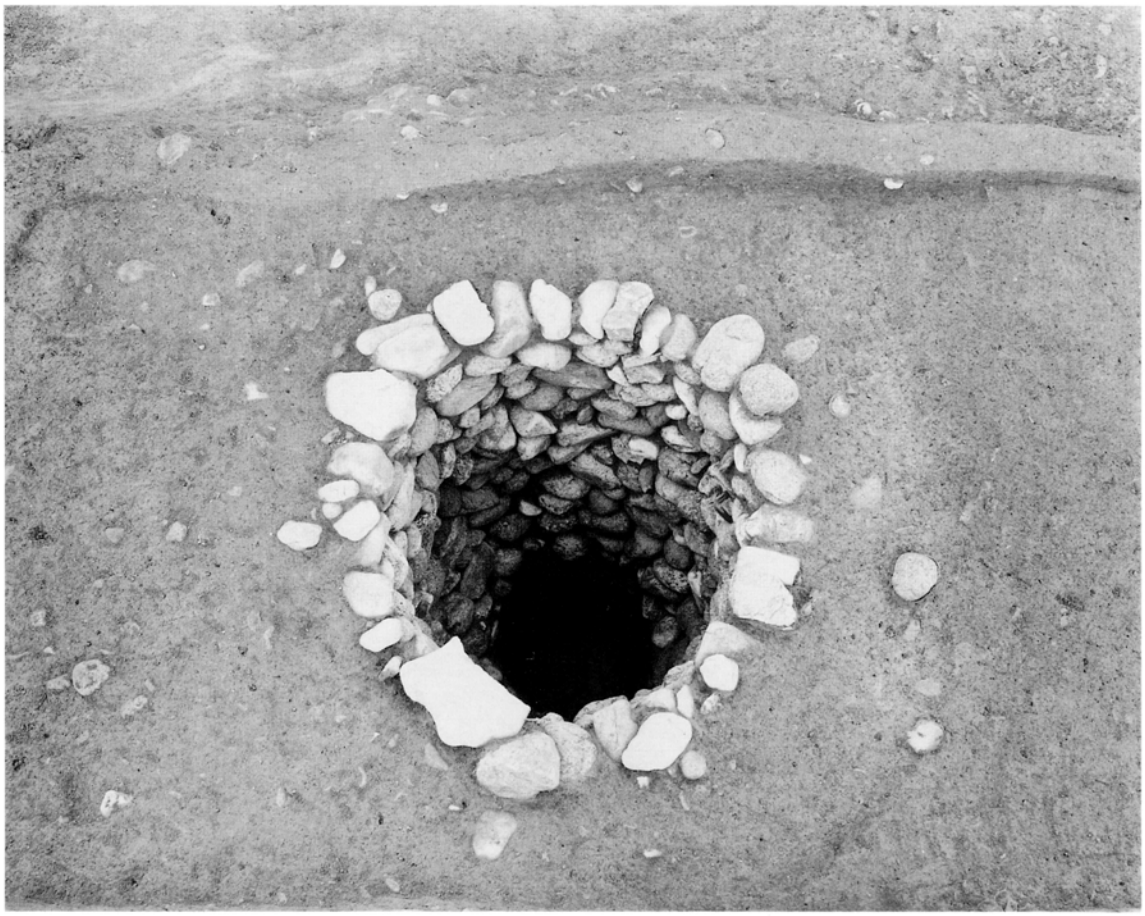
1　清末遺跡群第３次調査　0073掘立柱建物（北から）



2　清末遺跡群第３次調査　0108掘立柱建物（北から）



1　清末遺跡群第３次調査　0110掘立柱建物（北から）



2　清末遺跡群第３次調査　0007井戸（西から）

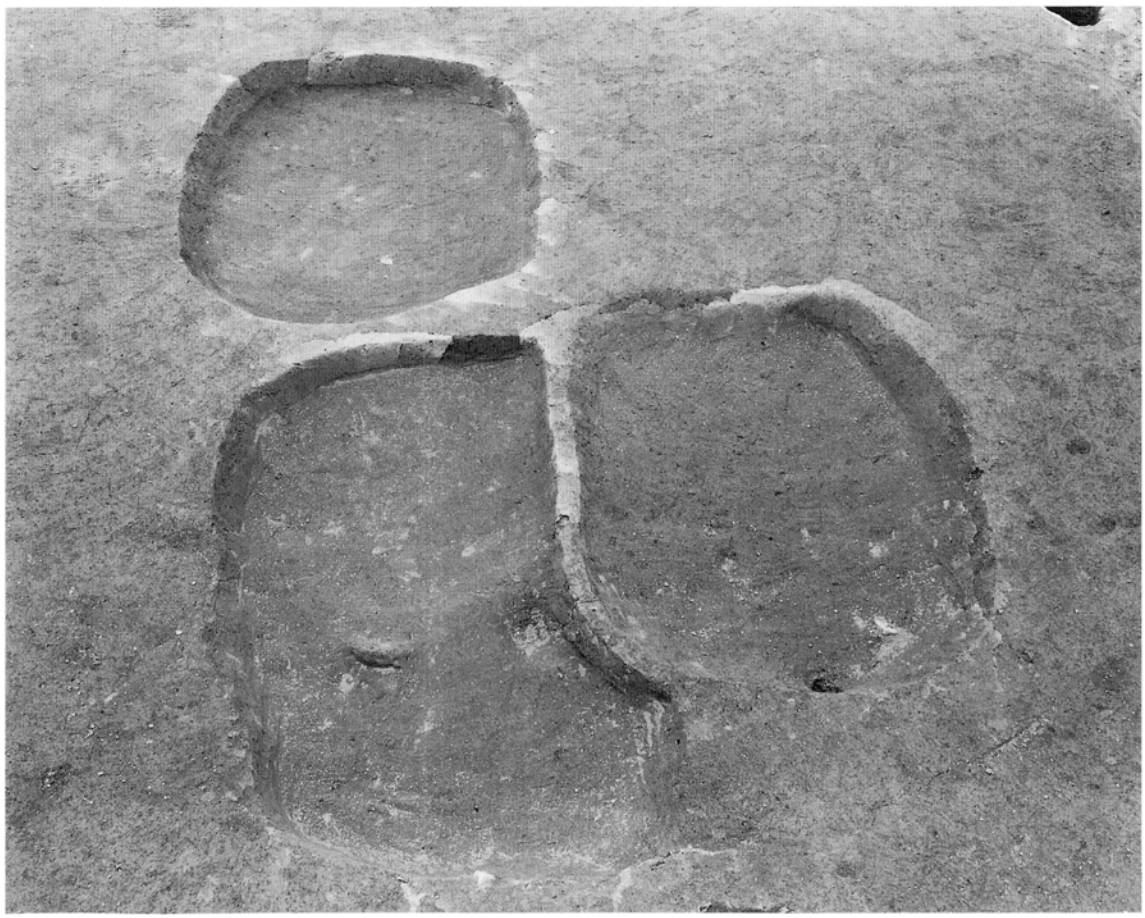
1　清末遺跡群第３次調査　0017井戸（南から）

2　清末遺跡群第３次調査　0041井戸（東から）

1　清末遺跡群第３次調査　0062土坑（南から）

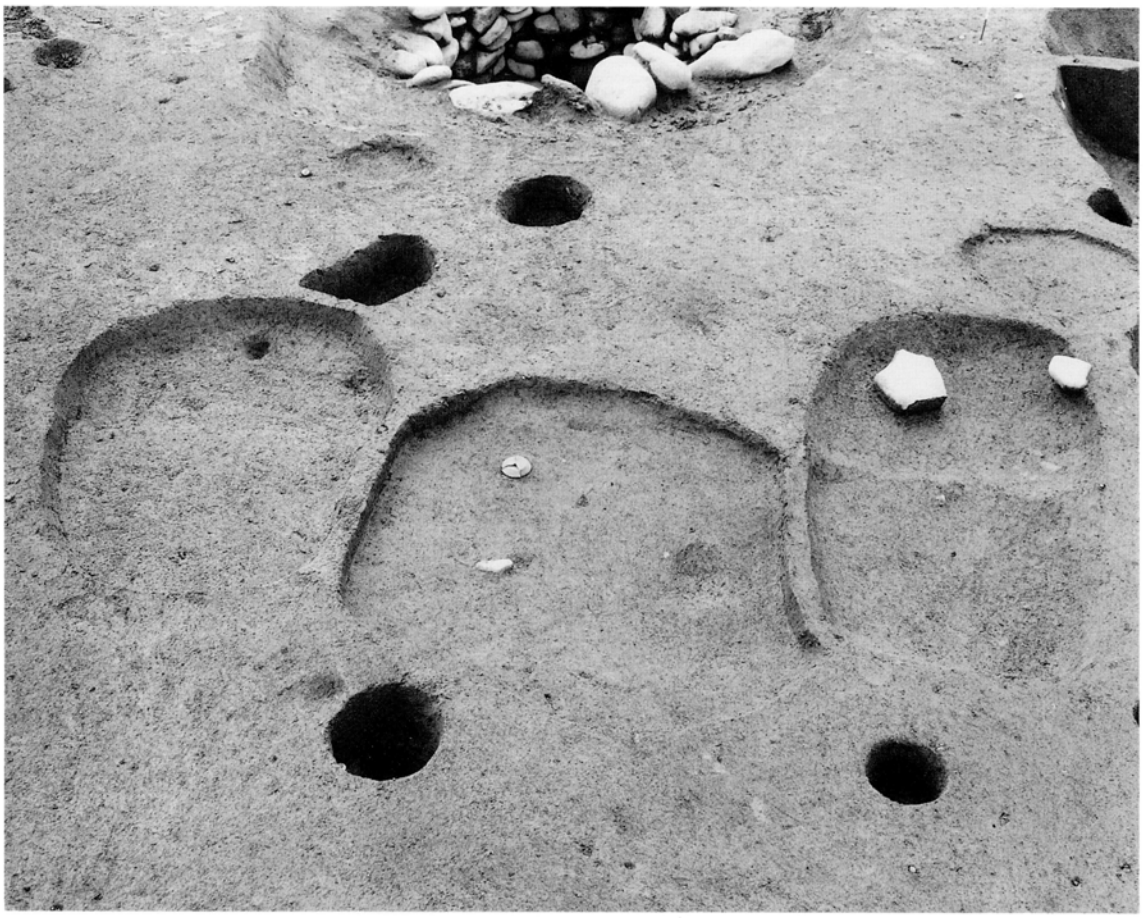
2　清末遺跡群第３次調査　0008土坑（西から）

1　清末遺跡群第３次調査　0011土坑（西から）



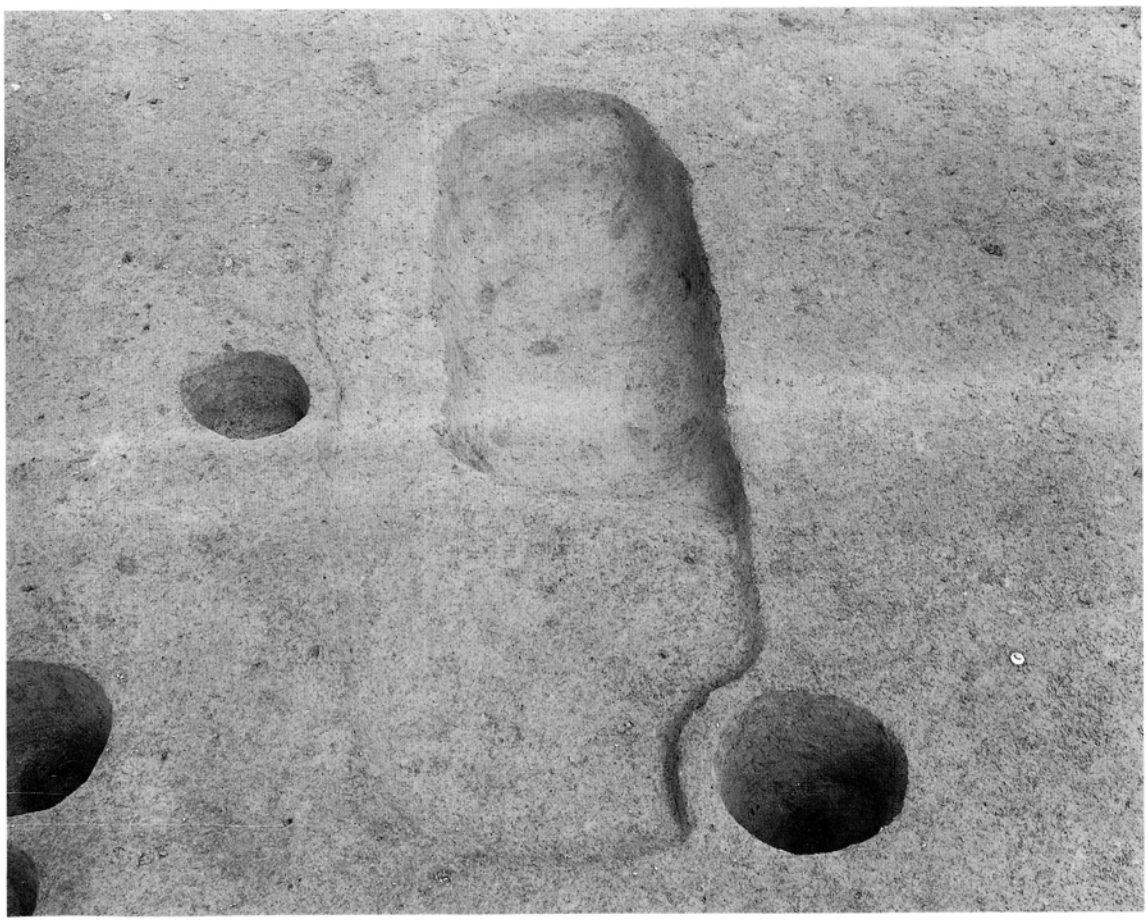
2　清末遺跡群第３次調査　0014・0015・0016土坑（南から）

1　清末遺跡群第３次調査　0022土坑（西から）

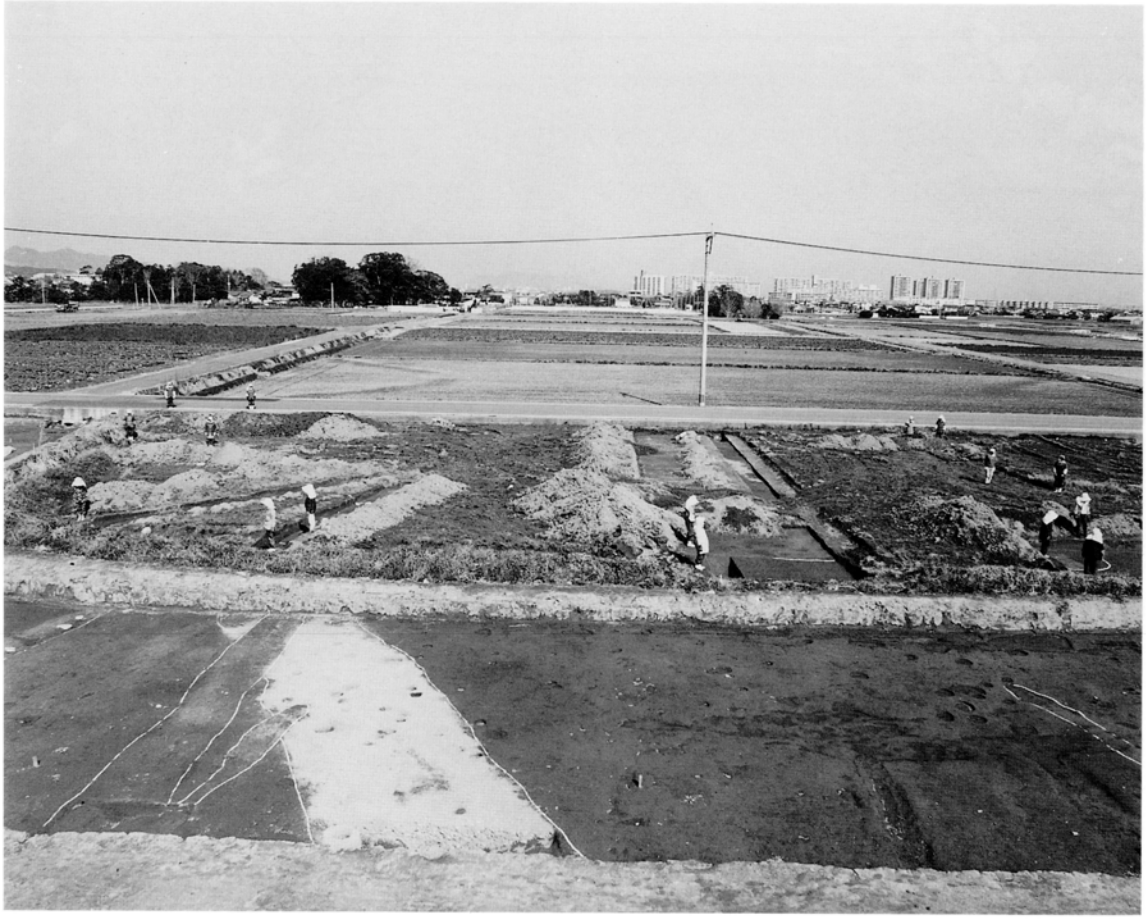


2　清末遺跡群第３次調査　0043・0044・0045 土坑（北から）

1　清末遺跡群第３次調査　0065・0066土坑（南から）



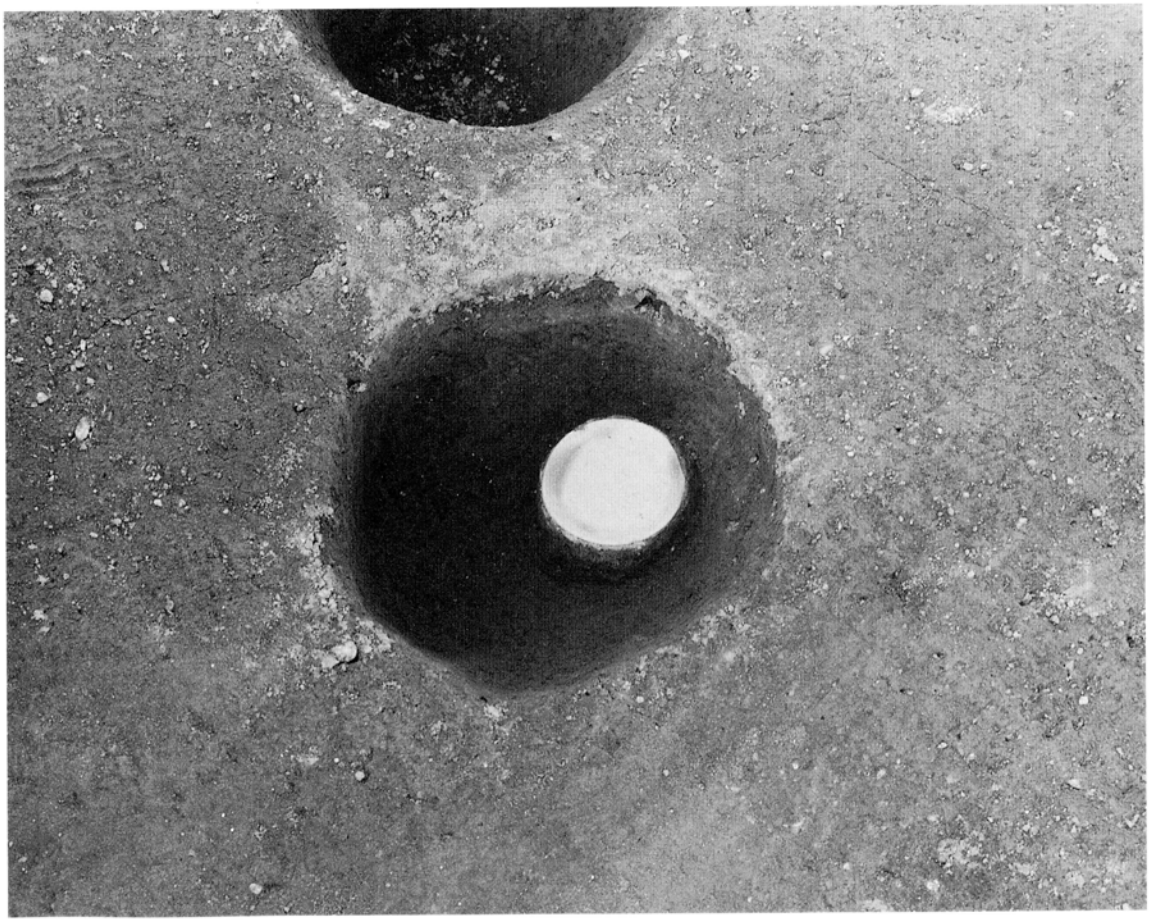
2　清末遺跡群第３次調査　0074土坑（南から）



1　清末遺跡群第３次調査　0050環濠（南から）

2　清末遺跡群第３次調査　0050環濠５トレンチ土層断面（東から）

1　清末遺跡群第３次調査　0047祭祀ピット（南から）

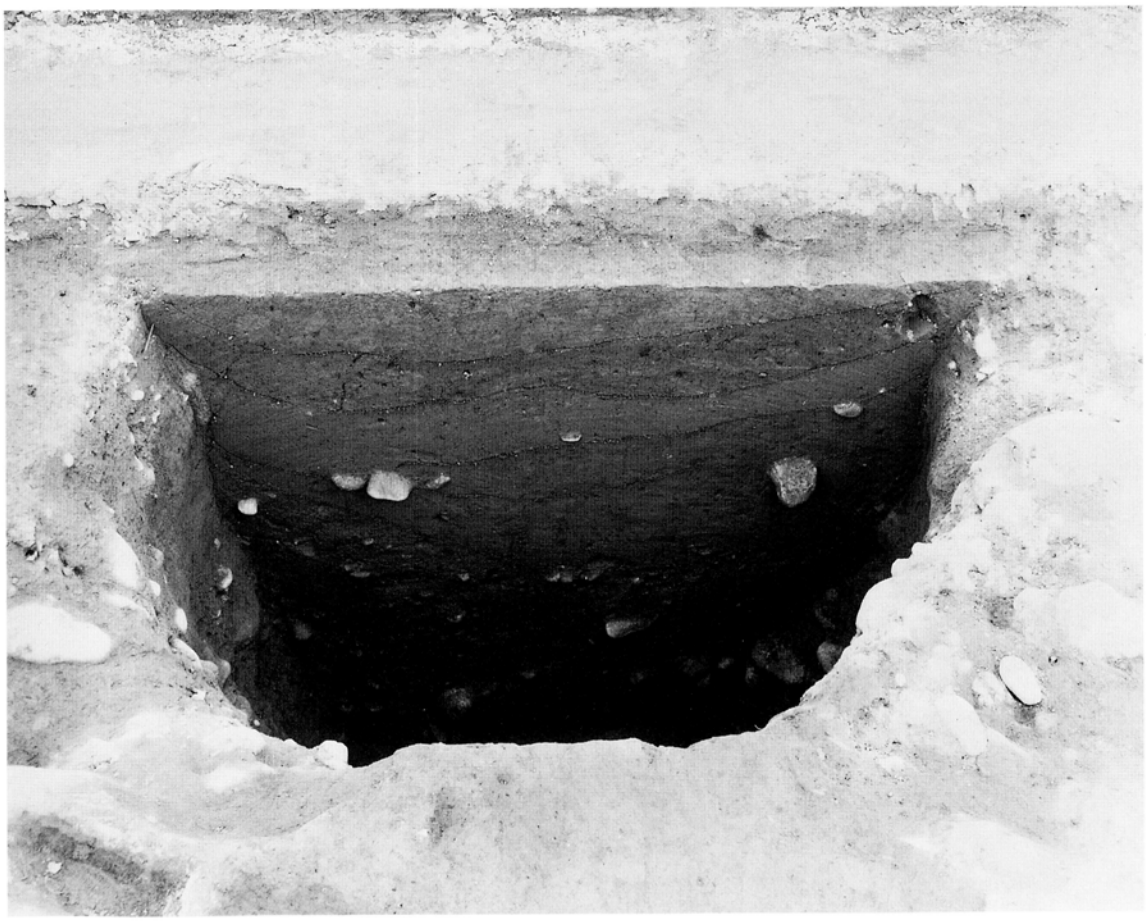


2　清末遺跡群第３次調査　0049祭祀ピット（西から）

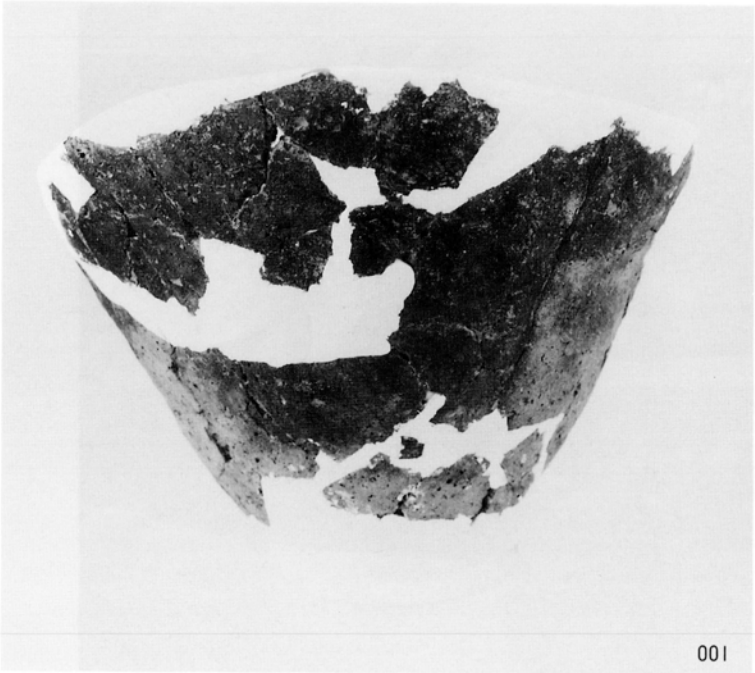
1　清末遺跡群第３次調査　中央地区江戸時代遺構（北から）

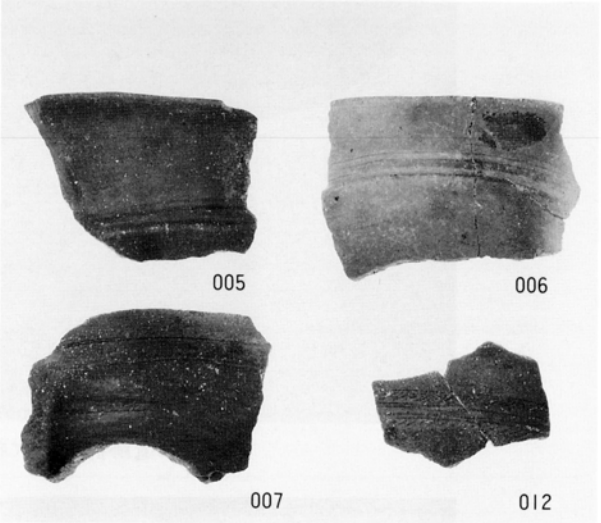
2　清末遺跡群第３次調査　0019・0020溝南辺（西から）

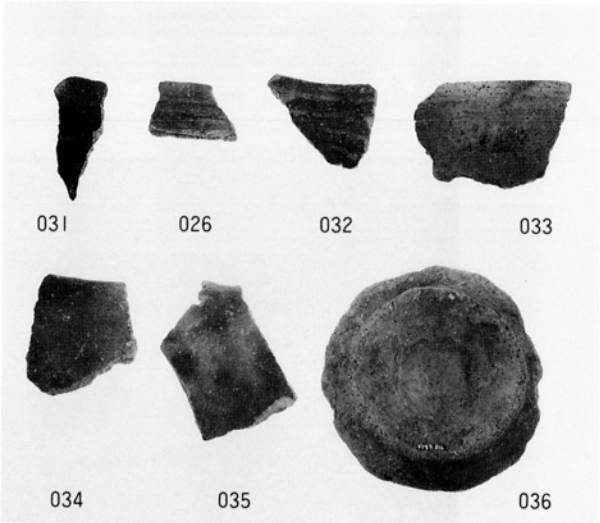
1　清末遺跡群第３次調査　0019・0020・0089土層断面（北から）

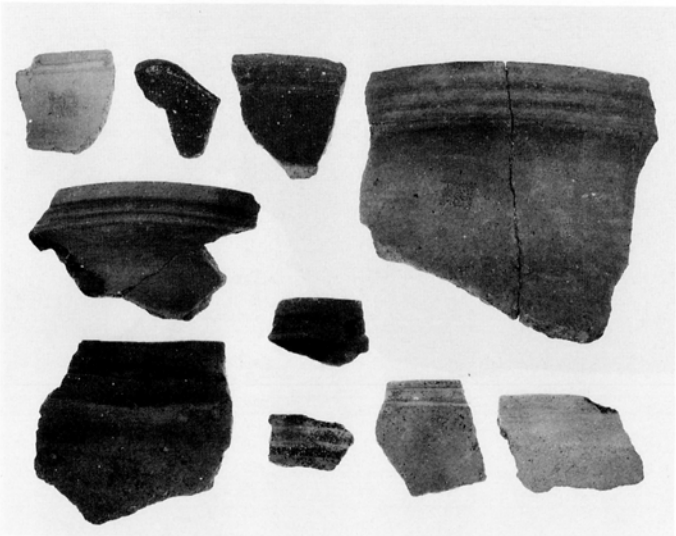


2　清末遺跡群第３次調査　0024土層断面（東から）



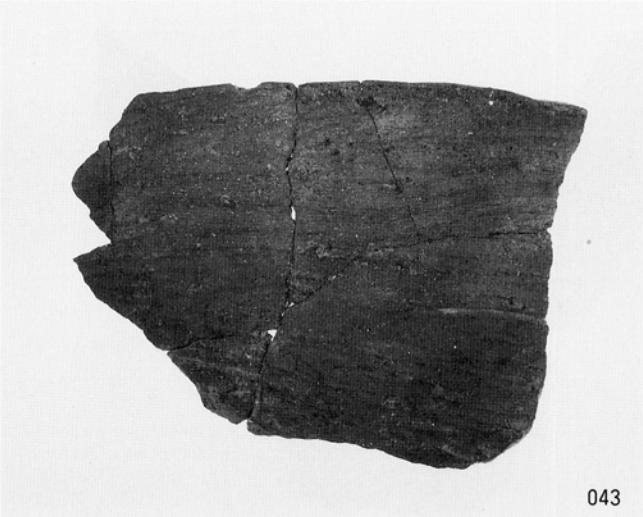


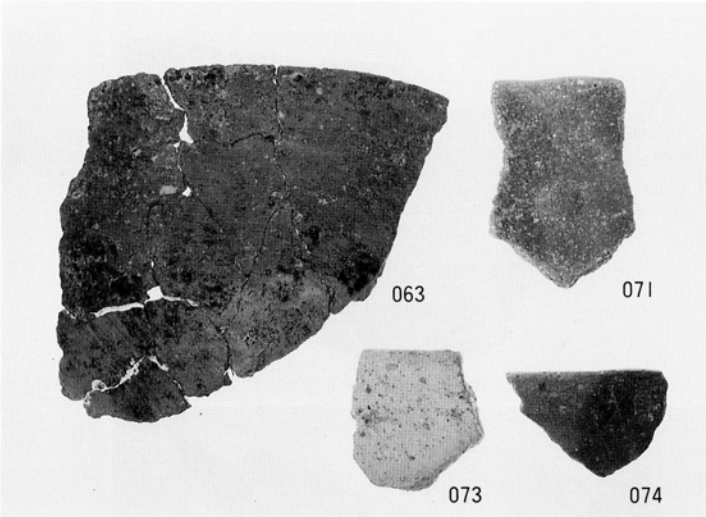


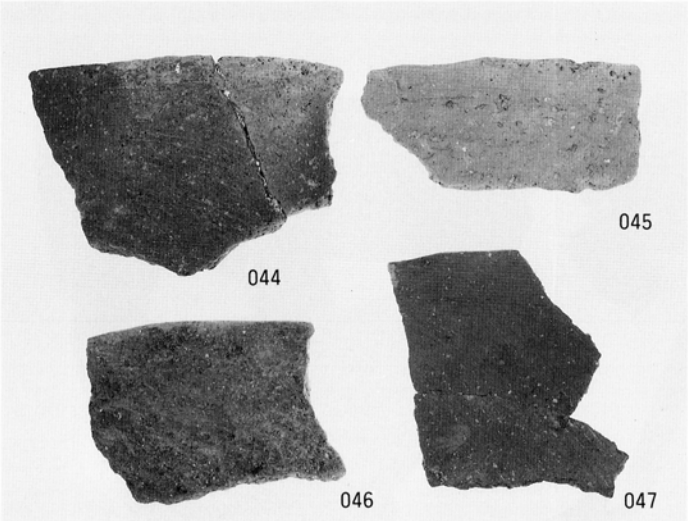


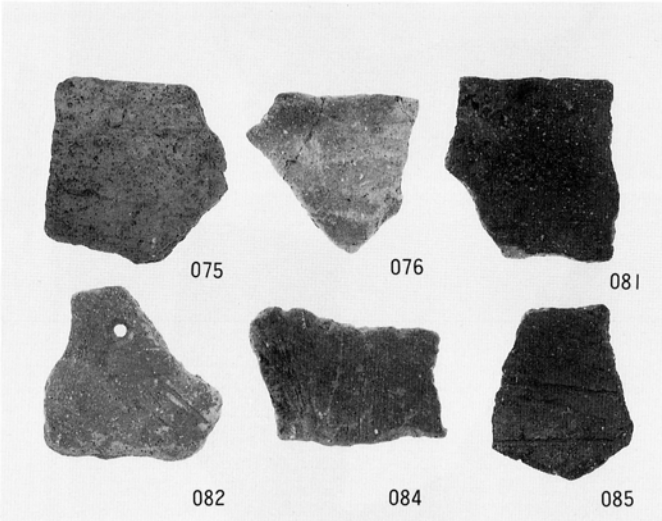
◀ 017 016 018 023
022
024
021 028 025 030

清末遺跡群第３次調査　出土遺物１

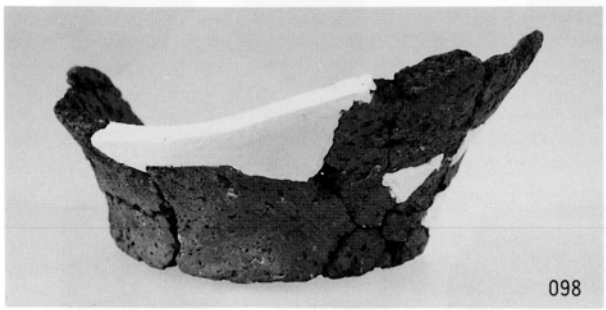


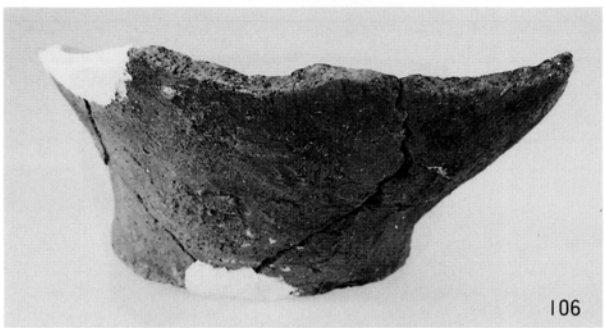


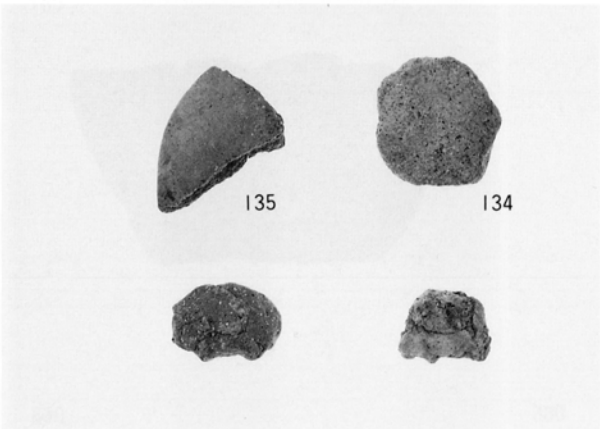


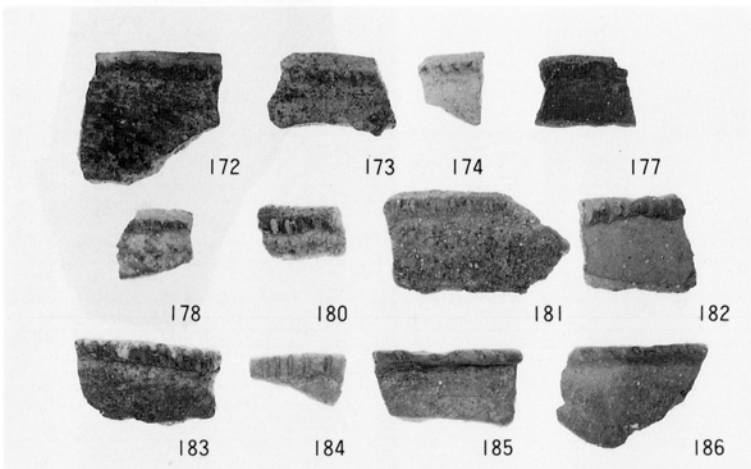


清末遺跡群第３次調査　出土遺物２

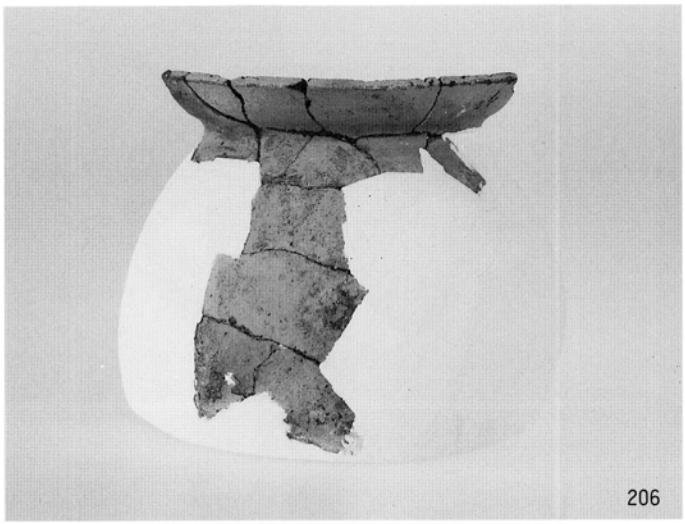


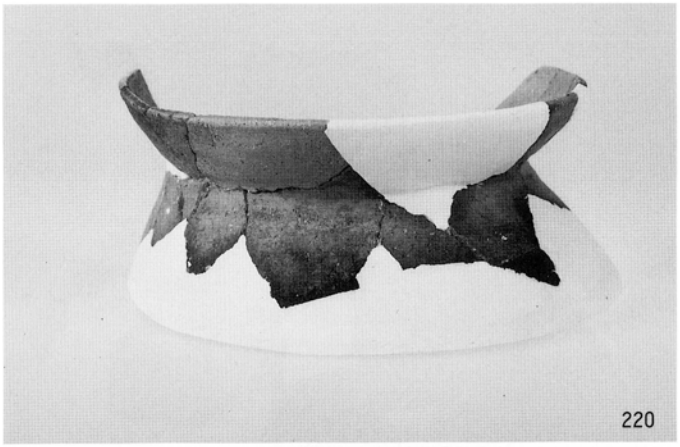


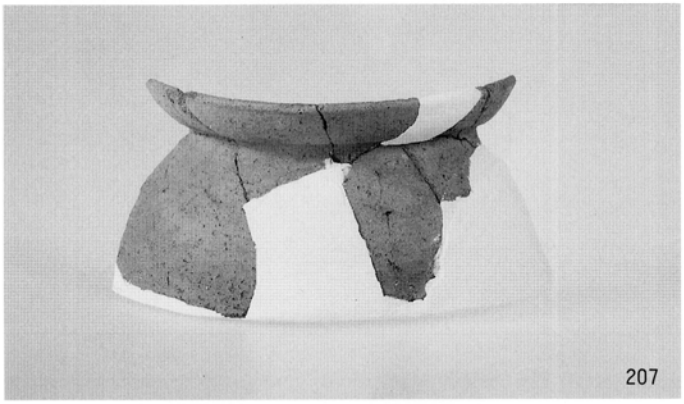


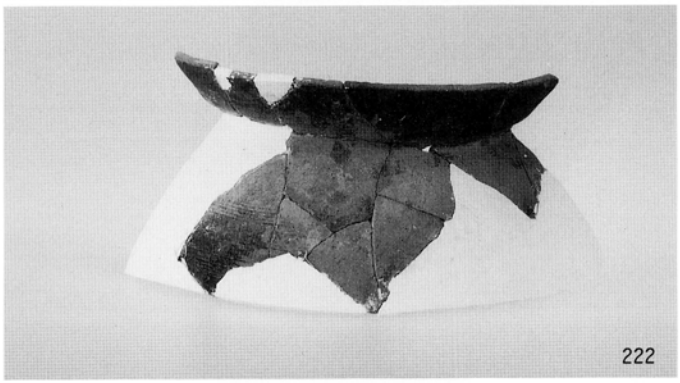


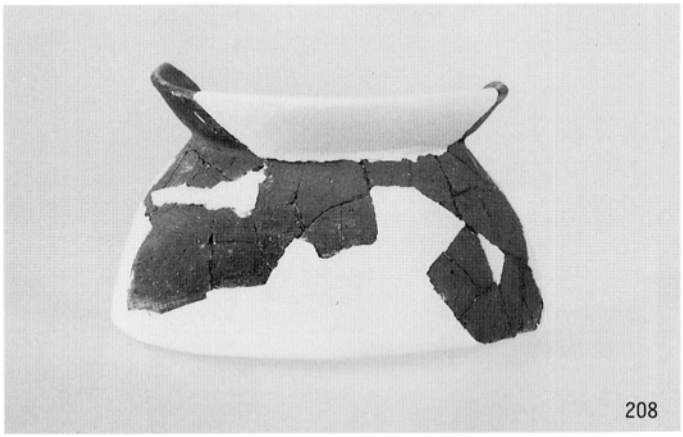
清末遺跡群第３次調査　出土遺物３

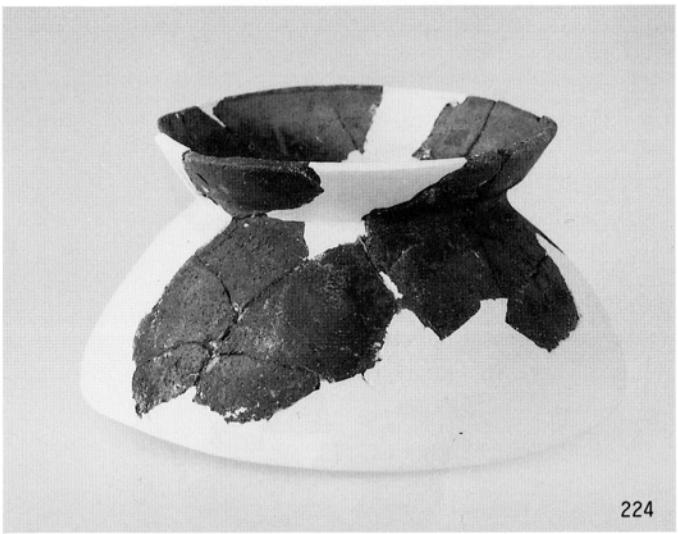


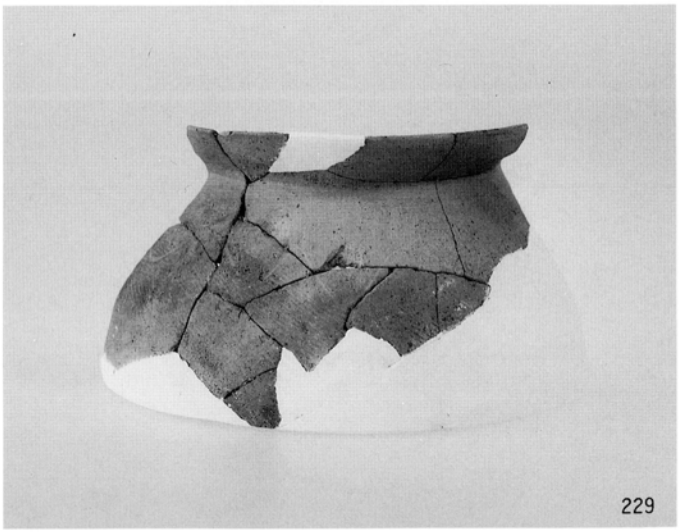








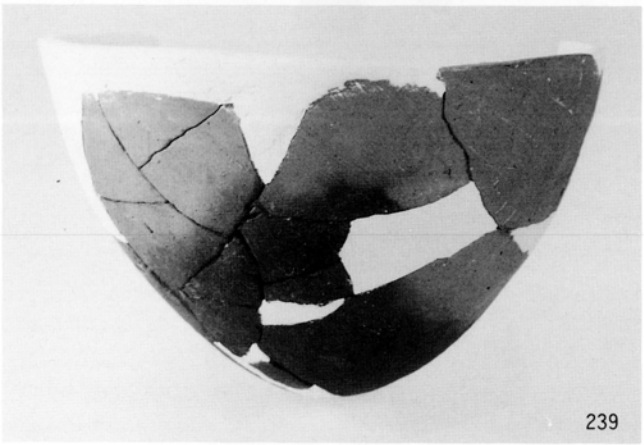




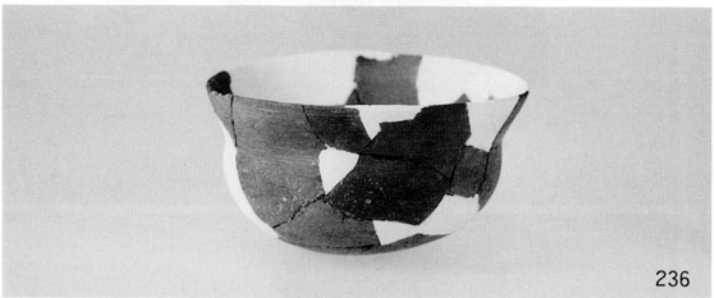
清末遺跡群第３次調査　出土遺物４

231

238

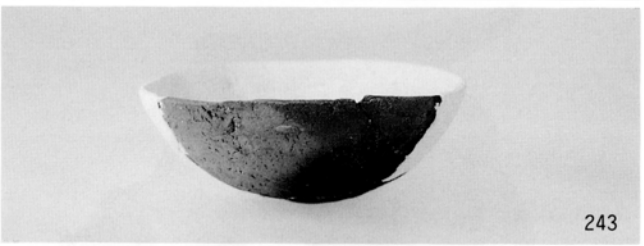

239

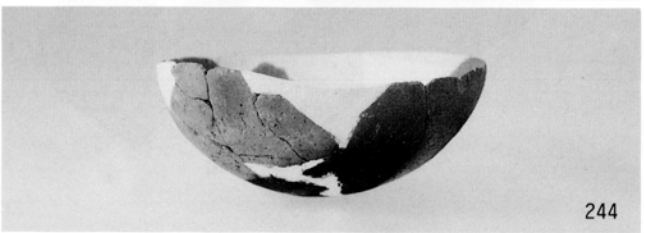
235


236

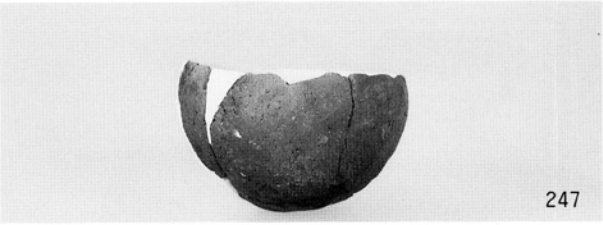
237

242


243


244

清末遺跡群第３次調査　出土遺物５


247

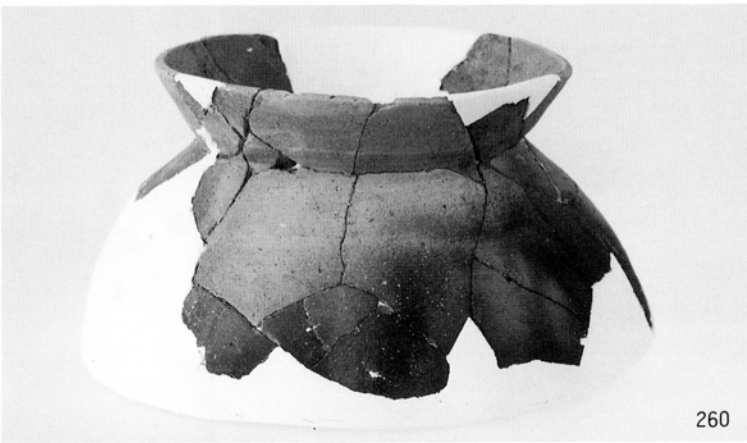
252

253

256

254

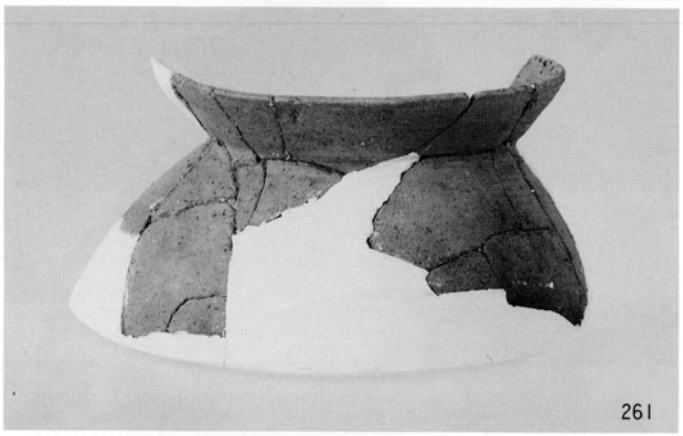
258

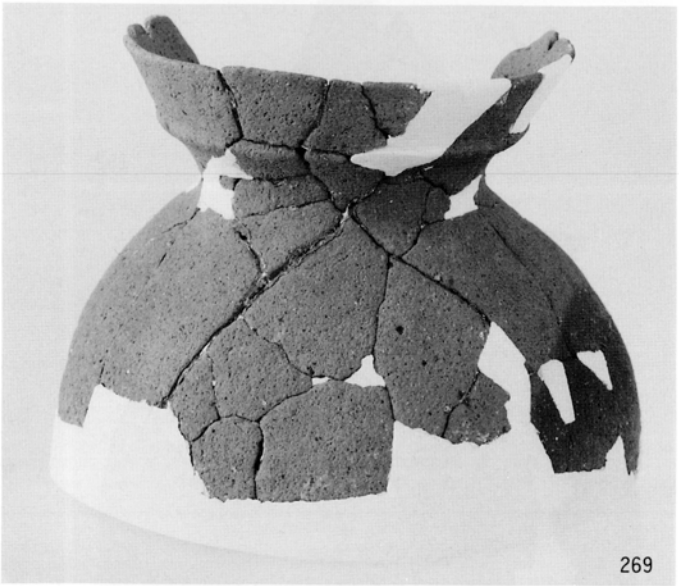

260

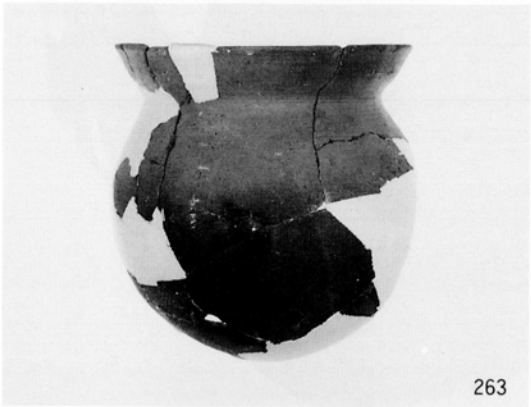
清末遺跡群第３次調査　出土遺物６

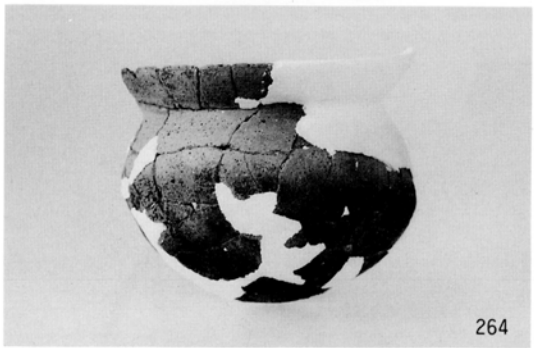
259

265


261

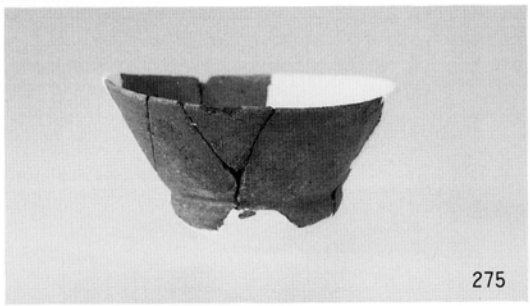

269

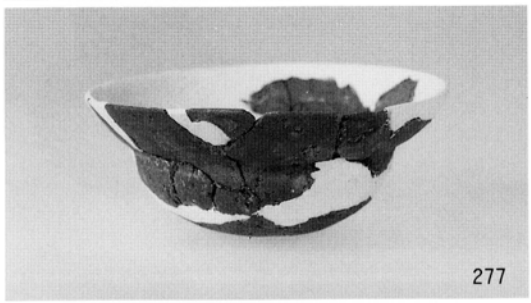

263

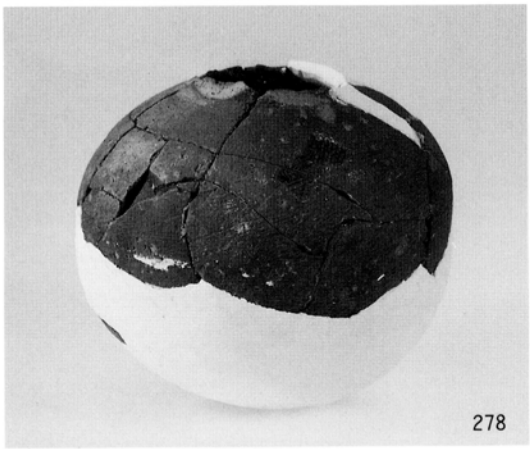

264

271

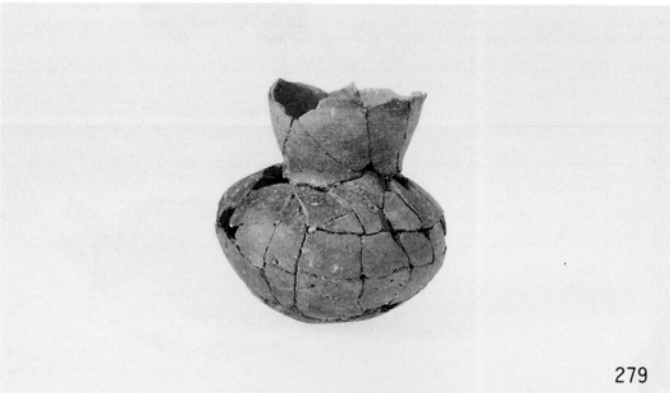
清末遺跡群第３次調査　出土遺物７



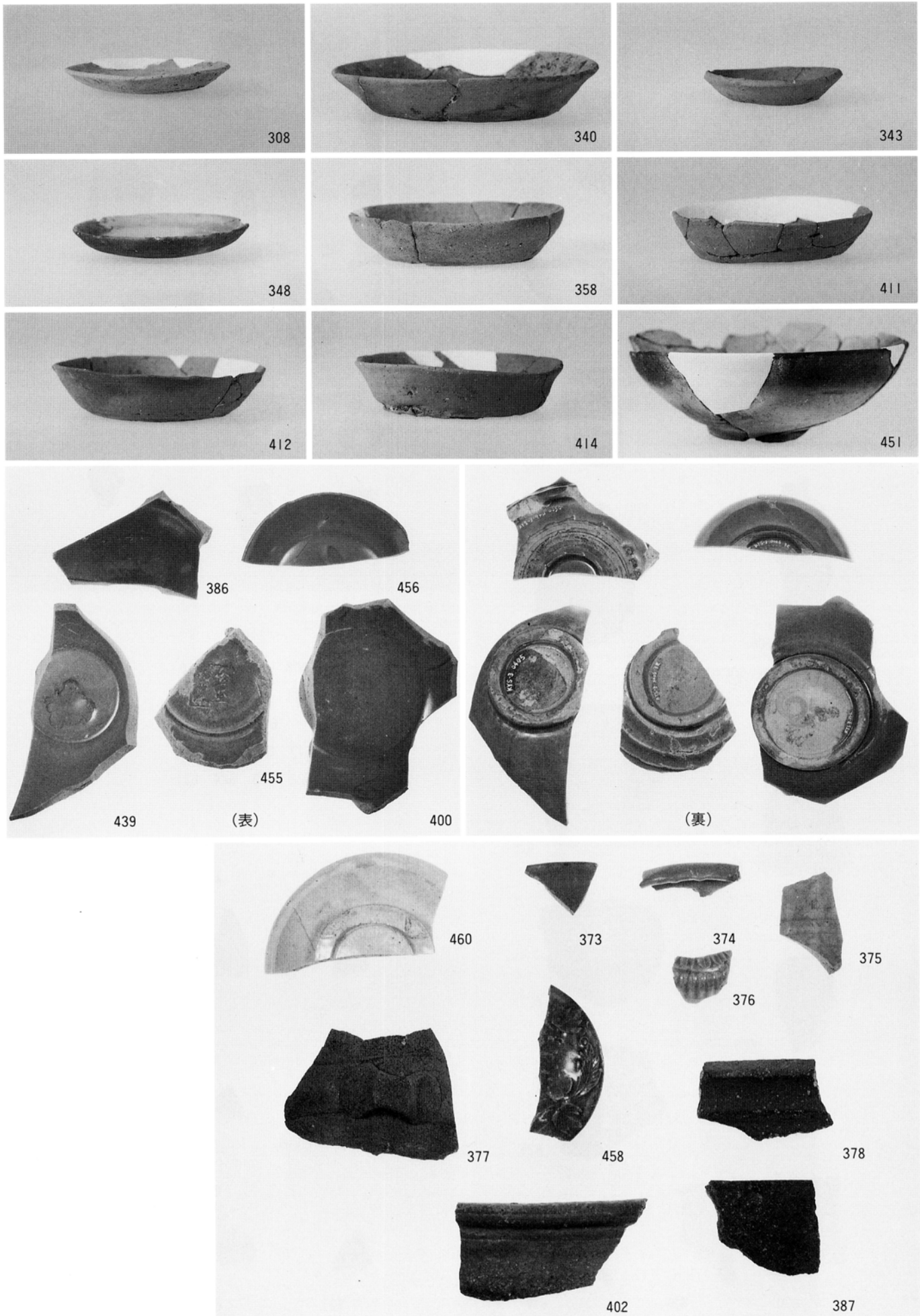




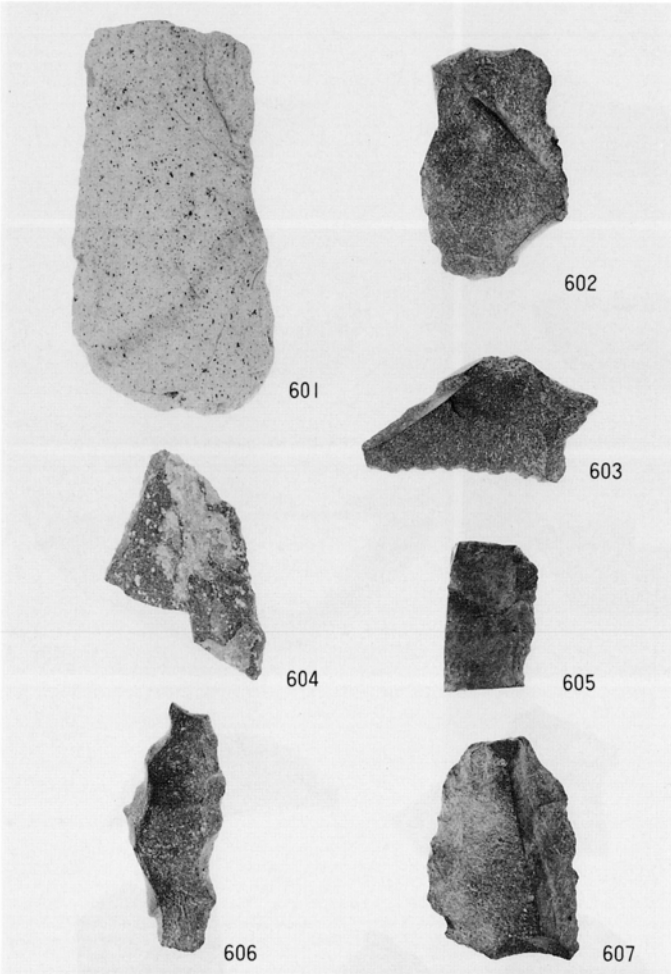
清末遺跡群第３次調査　出土遺物８

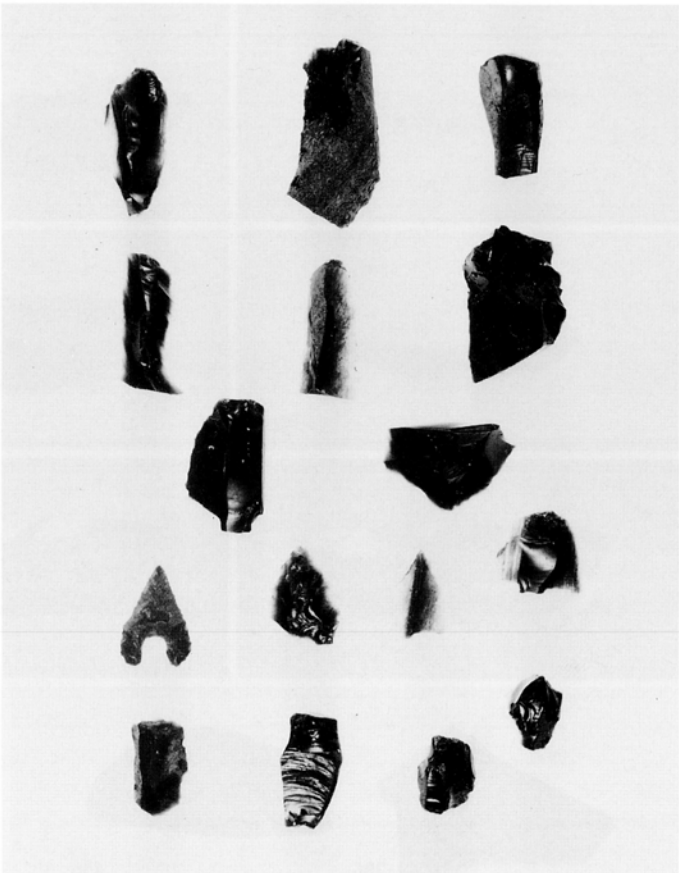


清末遺跡群第３次調査　出土遺物９



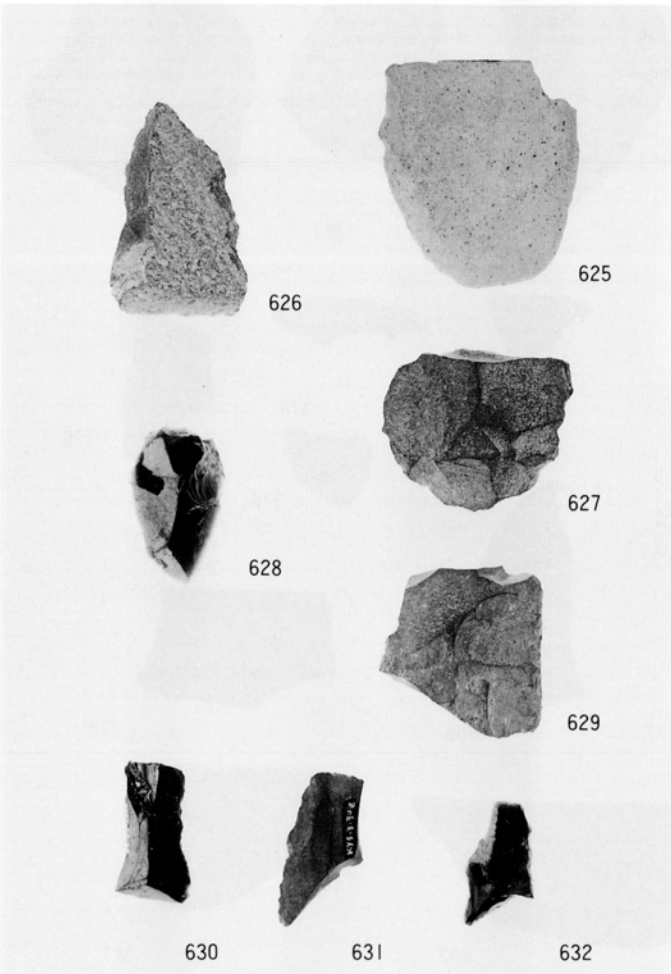
清末遺跡群第３次調査　出土遺物10

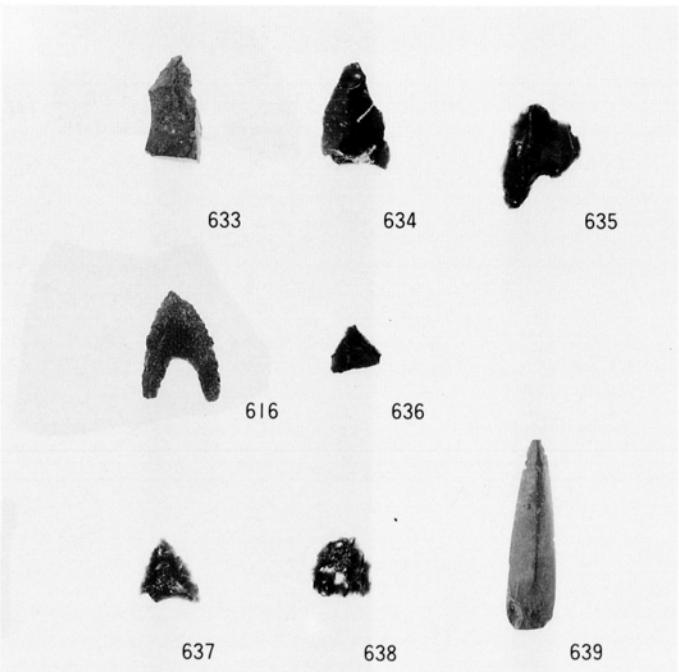




▲

608 609 610
611 612 613
614 615
617 618 619 620
622 623 624 621





清末遺跡群第３次調査　出土遺物11

福岡市埋蔵文化財調査報告書第424集

入　部　V

1995. 3. 31

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1

印刷　祥文社印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南4丁目15—17